我が国における戦前のアメリカンフットボール活動の記録

服部　慎吾

この記録は、戦前の日本のアメリカンフットボールに関し、立教大学でプレーヤーとして活躍され、戦後、日本アメリカンフットボール協会の理事長を勤められた故服部慎吾氏（1913～1995）がまとめられたものである。1975 年頃に著作されたと推定される。

日本アメリカンフットボール協会

アメリカンフットボールが日本に来る前の日本國内の状況

アメリカンフットボールは吾國では昭和 9 年 11 月 29 日に初めて行われた。然しアメリカンフットボールが初めて日本で行われた昭和 9 年以前に、日本國内においては、アメリカンフットボールを受け入れる様相は充分にあつたと云える。

日本においてアメリカンフットボールと云うものが米國において非常に盛んなスポーツであると云うことは、古くから知られて居た。それは新聞や雑誌で紹介されて居たのである。それも一番深く日本人の意識に残つて居たことは、毎年幾十人と云ふプレイヤーがこの競技のために死亡すると云ふことであつた。その当時はアメリカンフットボールとは日本では云はないで、「アメリカン・ラグビー」と云ふ名で知られて居たのである。

即ち大正の末期から昭和の初期迄は、日本においてはアメリカンフットボールは「アメリカン・ラグビー」であつて、そのプレーは非常に勇猛で乱暴極りないスポーツで米國では毎年数十人から百人近い若人がこの競技の為に死亡する。そして危険防止の為に頭には甲をかぶる位の事しか一般には知られて居なかつた。そしてボールがラグビーのボールと同じ型であり、そのボールを持つて走る。そしてそれを停めるにはタックルをする。等々を見て総合すればまあ大体ラグビーと似て居るであろうと云ふ判断で「アメリカン・ラグビー」と勝手に名付けた。

事実、新聞、雑誌等にも「アメリカンフットボール」と書くものと「アメリカン・ラグビー」と書くものが混然として居た。然しアメリカンフットボールがまだ日本に無い頃の日本人には「アメリカン・ラグビー」の方がおぼろ気ながら実体を知る事が出来たかも知れない。実際その頃はサッカーをフットボールと云つて居た。それでアメリカンフットボールと云へばアメリカで

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

やつて居るサッカーとでも思ふかも知れない。

日本におけるサッカーの厂史は古い。明治の末頃から始められた。この点はラグビー・フットボールも同じであり、サッカーをアソシエーション・フットボールと云ひラグビーをラグビー・フットボールと云つて居た。これを略してア式蹴球、ラ式蹴球と呼称して居た。そのサッカーが大正の初期に当時の高等師範学校の体育の正課として採用され高等師範学校の学生の間で盛んに行はれるようになつた。その高等師範学生の卒業生が日本全國各地の中等学校の教師として赴任したことにより、全國の中等学校でサッカーが盛んに行われるようになつた。その為にサッカーは当時の日本においても一般の人に割合と知られて居た。

それに引きかえて、ラグビーはサッカーと厂史は余り変らないが都会的でプレイヤーも大学が主であり、その大学も東京・大阪・京都と云ふ都会の大学であつた。大学の中でもラグビー部の無い大学も多かつたのでサッカーの様に高等師範学校でも盛んでなかつた為、全國的に広がらなかつた。

それには、サッカーに比較して競技がハードであつたことやルールが難しいこと、或は怪我が多いと云ふ種々の条件があつたこともサッカーに比べてポピュラーにならなかつた要因ではあつたのだろう。

それで当時はフットボールと云へば、一般の人はサッカーと思つて居た。その為にもアメリカンフットボールと云ふ名はサッカーを聯想するので、アメリカン・ラグビーとわざわざ云つたものであろう。その当時でも新聞社や雑誌社に入つて来る外電には、アメリカン・ラグビーと云ふ電文ではなく必ずやアメリカンフットボールと入電して来た筈である。

日本でも古くから吞界の三大学生スポーツゲームとして日本の早慶野球戦、英國のケンブリッジ対オックスフォード両大学のボートレース、それに米國のエール大学対ハーバード大学のアメリカンフットボールゲームは有名であつたからアメリカンフットボールと云ふ名称はあつたのだが、それをあえてアメリカン・ラグビーと云つて居たのは前述のようにボールの型、タックル等にラグビーと共通した点がある為サッカーと明確な区割をつけるためにつけられて居たものであろう。

以上の様に日本にアメリカンフットボールが輸入される相当以前から、アメリカンフットボールはアメリカン・ラグビーとしての名前は相当知られて居たことは事実であるが、それが実際にはどんな競技かを知つて居る者は少なかつた。大体においてラグビーフットボールからの聯想で想像はして居たろうが、明確にアメリカンフットボールを理解して居た人は殆ど皆無であつただろう。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

それが昭和4年頃から映画によつてだんだんと解つて来た。昭和3年頃から、映画は無声映画時代からトーキーの時代に代わつて来た。そして米國からトーキーの映画が数多く入つて来て日本全國で上映され出した。その当時どう云ふことか映画には青春物が多く、米口の大学生活のストーリーを描いた映画が沢山あつた。米口の青春物と云えば、特に大学生をストーリーにしたものと云えば、必ずと云つて良い位アメリカンフットボールの場面が入つて居た。事実その当時米國においても、一時、年間多数の死者を出し國会でも米國の有能な青年をこのスポーツの為に失うことについて大変な問題になり、それを契機にルールを改正したり、防具の改良を行つたりした為、一時は衰退の方向にあつたフットボールが隆盛を取り戻し、学生スポーツの花として見事に再開した頃でもあつたので、映画でも青春もの、特に学生ものとなればフットボールのシーンは欠くことの出来ないものであつたのだろう。今、その頃を思い浮べながら記憶に残つて居るアメリカンフットボールのシーンの出て来た映画を年代順に思い出して見ると

昭和4年　秋
◆青春ジヤズ大学（College Love）ユニヴァーサル

日本名で青春ジヤズ大学と云ふとおよそフットボールとは無関係のようだが、ストーリーは大学のフットボールのプレーヤーの友情を描いたもので、画面にはフットボールのゲームのシーンが沢山出て来る。そしてラストはゲーム中最後の1分にその友情によつてタッチ・ダウンをして試合を逆転させて優勝をすると云ふストーリーであつた。

昭和5年　秋
◆スポーツ王國（So This is College）M.G.M

これも学生々活もので試合の場面が多く出て来る。これ等の他にもまだ多くのフットボールのシーンの出る映画はあつたが、何れも有名な映画の「モロッコ」より以前のものである。

昭和7年　春
◆蹴球大学　（The Spirit of Notre DAME）ユニヴァサル

過去から現在まで多くのフットボールを主題にした映画は多くあつたが、これ程本格的に、そしてダイナミックにフットボールを描写した映画は、余りない程素晴らしいフットボール映画で、私は現在でも見たい映画である。その当時のこの映画の広告には次のように書いてあつた。

「ユニヴァサル超特作」全発声運動映画　リュウ・エアーズ氏主演　ウィリアム・ベエクウエル氏ファーレル・マクダアナルド氏助演　ラッセル・マつク氏監督

ノオトルデェム大学フットボールチームの精鋭特別出演「秋紺碧の風を衝いて廿五嗎、飛ぶ熱球を逐ふ18の健児があぐる眞紅の意気、これは近代アメリカの唯一の誇り、精

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

悍無比のフットボオルの眞随を伝へたる傑作。その最強のチーム、ノオトルデェム大学精神に捧げられたる典型的の運動映画である。全編火を吐く白熱の試合の聯続、ラヴ・シーンを持たない男性映画。時好し、カナダ軍の来襲によつて来るべきスポーツダムの王者たるラグビィの興奮をまずこのアメリカン・フットボールに求めて時代に先駆せられよ！」

と以上のような文面であつた。この年にカナダからラグビーのチームが日本に遠征して来たので、後半の文句を加入して人気をあおつたのであろう。これによつてもフットボールとラグビーは似て居ることを思はせるし又フットボールではまだ名前が一般的でないのでラグビーを引合に出したものと思われる。

この広告文面においても“熱球を逐ふ十八の健児”とあるがこの十八はどう云ふ意味かわからない。この文を作つた人もフットボールを知らないので画面を見て両軍で 18 人位居るので無責任にも十八の健児と書いたのではなかろうか。

この映画はその原名の通りノートルディエム大学のフットボールのプレイヤーの物語りである。ノートルディエム大学は古い大学であると同時にフットボールも創成期から盛んであり、又、強い大学ではあつたが 1920 年頃から強力なチームになつて来て全米にその名が知れて来た。特に監督にヌート・ラクニーを招聘してからはノートルデェム・システィムとかラクニー・システィムと云はれる戦法が成功して全米に何回か覇を唱えるに到つた。このラクニーシスティムと云ふのは、プレイにパスとかパントを多く用いて 4 回の攻撃の内 3 回失敗しても 1 回で 10 ヤード以上ボールを前進させれば勝てると云ふ論法である。従つて試合はロングパスだとかオープンにランをするとか、又はロングキックをするとかで非常に派出であり、又スピーデイでもあつた。これに比較されたのが当時南カリフォルニヤ大学のコーチのハワード・ジヨンズである。ジヨンズはカリフォルニアの人間は東部に人間と比較して体格が大きく力があるので 4 回の攻撃で 10 ヤード、即ち 1 回の攻撃に 3 ヤード位づつボールを前進させるような戦法を採用した。従つてプレイは中央突破やインサイドタックル、オフタックルのプレイが多く地味ではあつたがこの戦法を採用して雄名を馳せた。

そのノートルディム大学の全盛時代にこの映画がノートルディム大学の実名を題名につけて日本でこそ、その当時はフットボールを知つて居る人が少いために「蹴球大学」と題名をつけたが原名は「ノートルディエム大学の精神」と云ふ題名で製作された。

内容はスタープレイヤー2 人の功名爭いから同僚が怪我をして、それをキッカケに 2 人が仲直りしてチームを優勝させると云ふ物語りであるが、映画の中にはノートルディム大学対ノースウエスタン大学の試合や対アーミーの試合等多くのゲームの実戦が出て来た。又特別出演としてドン・ミラー（ライン）、ジム・クロウレイ（ハーフ・バック）、エルマー・レイドン（フルバック）、ハリー・スチュルドレエル（クオーターバック）等のオール・アメリカン級のノートルディム大学の卒業生等が参加して居り、ノートルディム大学自体としても只單なる劇映画と云ふより大変な力を入れて居たようであつた。その為映画自体も他のフットボールの映画より内容的にも大変優れて居た。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

只残念なことにはこの映画のフットボールのシーンの撮影の指導の為、東部から飛行機でハリウッドに飛んだノートルディム大学のコーチのヌート・ラクニーは飛行機が悪天候の為にロッキー山に衝突して死亡したことであつた。一代の名コーチのラクニーはこの映画のために死亡し、又、この映画の中に生きたとも云えるだろう。

昭和７年　春

◆タッチダウン　（Touchdown）パラマウント社

この映画も前記の「蹴球大学」を追いかけるようにして輸入上映された映画であり「蹴球大学」が選手を中心にしたものであるのに対してこの映画はコーチの物語りであつた。これは実在の大学名は使用されて居なくて仮空の大学名で、その点純然たるフィクション映画であつたが画面には多くの試合場面があつて華々しいものであつた。

昭和７年　秋

◆御冗談でしヨ　（HORSE FEATHERS）パラマウント社

この映画は当時の喜劇王として知られたマルクス四兄弟が主演したドタバタ喜劇ではあつた。従つてその内に出て来るフットボールの場面のフォーメーションも奇想天外であつた。この様にフットボールが喜劇に使はれた例は沢山あつた。

昭和７年　暮

◆七万人の目撃者　（70,000WITNESSES）パラマウント社

この映画は一種の探偵映画である。ある大学のスタープレイヤーが試合中ランナーとなつて敵のゴール寸前で倒れて死亡した。その原因は毒物による他殺であり、その殺人犯人を捜索すると云ふフットボールの試合を舞台にした一寸珍らしい推理映画であつた。

しかしこの映画にもアメリカの大学の応援団だとか、又、大きなスタディアムとの内で華々しい試合風景等見事であつた。

昭和８年　秋

◆響け応援歌　（College Humor）パラマウント社

この映画はミッドウエスト大学のフットボールチームのプレイヤーの恋愛と友情を描いたもので主演者にはビング・クロスビーが出て居るので当然音楽映画とも云えるかもしれない。その他の主演者は「タッチ・ダウン」の主演者と同じで当時の名コンビのリチャード・アーレンとジアック・オーキーがプレイヤーとして主演して居た。

そしてビング・クロスビーはミッドウエスト大学の教授として演じて居た。即ち歌あり、恋ありフットボールあり又友情ありと云つた完全な青春娯楽映画であつたが、ミッドウエスト大学とか又ネブラスカ大学とか実在の大学の名前を堂々と使用し、又その試合風景を多く画いて居たのは面白い。

昭和９年　暮

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

◆カレッジリズム　　パラマウント社

これも青春カレッジ映画でその題名の如くフットボールとその応援のチヤー・ガールの恋愛と音楽との一つのミュージカル物であつた。主演にはカレッジ物には欠かすことの出来ない三枚目のジアック・オーキーが出演するこれも娯楽物で、フットボールの試合の場面も面白いがグラウンド一杯に繰り広げられた応援団の踊りに中心があつたようだ。

まだこの他にもフットボールを中心にしたり或はフットボールの試合を一部に取り入れた映画は多くあつたが記憶に残つて居る主な映画は以上の様なものであつた。

これでも解るとおり日本にフットボールが上陸する前数年の間に多くのフットボール映画が日本で上映されて居た。それは米國においても大学のフットボールがもつとも盛大になつて居たことを明示するものであると云えるだろう。それは前にも述べたように一時ラフなプレイが多く、その為に沢山のプレイヤーが死亡した為、米全國民から非難を受け一時衰退気味であつたのが、ルールの改正と用具の改良、それにパワーのみにたよるプレイからより科学的にスピーディにゲームを展開するフォーメーションが多く出て来た為に再び隆盛になつて来たのであろう。

事実 1910 年代においては、相当ラフなフォーメーションがあつた。その一例に、その当時のクォーターバックはランナーとなるよりはシグナルを出すことを第一任務として居たので、体格の大きさよりはむしろ頭脳の方に重点を置いて居たので、小柄なプレイヤーが多かつた。それでその小柄なクォーターバックのパンツのベルトの背中の所に取手をつけて、後 2～3 ヤードで新しいダウンを取れる時とか、或は又、あと 2～3 ヤードでタッチ・ダウンになる時にはそのクォーターバックに球を持たせて、体格の大きい力の強いハーフ・バックとフル・バックでそのクォーターバックの取り手をつかんでライン越に敵の陣地にほり投げて地域を獲得したこともあつた。このような乱暴なプレイが多かつたので死者や負傷者が続出したのである。

前述の映画「カレッジリズム」のフットボールの試合の場合でも、敵のゴール前に来てどうしても点が取れないので、最後のダウンでフル・バックの肩の上にハーフ・バックが立つて乗り、そのハーフ・バックの肩の上に小柄なクォーターバックが立つて乗る、即ち人間の三階建になりそのクォーターバックが球を持つて敵のゴールに近づく、敵がタックルをすれば、その人の柱は倒れて敵のゴールの内にボールを持つたクォーターバックは落ちてタッチ・ダウンとなると云ふ様なフォーメーションを演じて居た。

実際にこの様なプレイがあつたかどうかは疑問であるが相当奇想天外なプレイがあつたことは事実のようである。前に述べたクォーター・バックを敵陣に放り投げる等も危険極りないものである。それでルールを改正し現在のようにランナーを手或は体で以つて前進を助ける行為は反則になつたのであろう。

我が國にフットボールが上陸して以後もフットボールの映画は上映された。昭和 11 年にはユニヴァーサル社の「オフサイド」、昭和 12 年春にはパラマウント社の「ローズ・ボウル」、この映画はフランシス・オーレル原作の「ノートルダムのオーライリ」より脚色された映画で青春カ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

レッジ映画でローズ・ボウル・ゲームに出場するプレイヤーの恋愛と友情の物語りであつた。そしてこの中で応援歌として歌はれるメロディーは立教大学のカレッジ・ソングの「セント・ポールの歌」と同じであつたのは面白かつた。

更に昭和13年春にはR・K・O社の「ビッグ・ゲーム」があつた。この映画も大学のフットボール・ゲームの物語りではあつたがそれには賭博がからんで居り、スタープレイヤーが賭博ギャングに誘拐監禁され試合の第4クオーターにやつと間に合つて最後にタッチ・ダウンを挙げて勝つと云うすじで、最後のゲームは矢張りローズ・ボウルゲームを舞台にして居た。この映画にはオール・アメリカンに選抜されたジム・モスクリップ、ジエイ・バーウェンジヤー、キングコング・クライン、ボビイ・ウィルソン、ロバート・ハミルトン、ウィリアム・シェークスピア、フランク・アルスチザ、ゴーマー・ジヨンズ等が特別出演してフットボール・ゲームのシーンを盛り立てて居た。

まだこの他にもフットボールの映画は多く上映されて一般にはアメリカンフットボールの概要はおぼろ気ながらつかんで居たのであろう。然し実際のゲームには接して居なかつたので映画の上での派出なプレイしか見て居ないので実体は知ることは出来なかつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

一方、又、新聞雑誌にも時たまフットボールの記事が載ることはあつたが野球やラグビー、サッカー、陸上、水泳等のように我國ではまだ行はれて居ないので記事が出るのも本当にまれではあつたが、米國を代表するスポーツであり、又、亜界三大学生スポーツの一つのエール大学対ハーヴァードのフットボールゲームは有名であるので、年に二回か三回は小さな記事として出る程度であつた。そしてその記事も記事としての重要さよりも埋め草的取扱いでビッグゲームのスタンドの写真とか或は練習風景とか、又、一部の女子学生のフットボールとかで試合そのものを書いたものよりは興味半分的な記事が多かつた。又、外電としてシーズンの終りにそのシーズン中に死亡した者の数を発表する位のものであつた。

しかし、さすがに朝日新聞社で発行して居た「アサヒ・スポーツ」には色々と眞自面に取り上げて記事を書いて居た。アサヒ・スポーツは戦前から発行されて居り、その記事は何れもそのスポーツの権威者が執筆して居り、内容についても大変権威があつた。戦時中、昭和 19 年頃一時休刊したが、戦後又復刊したが戦後続出した大衆受けのするスポーツ新聞に押された為か昭和 25 年頃廃刊してしまつた。惜しいスポーツ誌であつた。このアサヒ・スポーツは、日本のスポーツ界の発展に大変寄与したことは確実である。

そのアサヒ・スポーツの昭和 5 年 12 月 15 日号に朝日新聞社特派員の中尾済氏が「欧米スポーツ界行脚」と云ふ続物を書いて居る。その中でヨーロッパを廻つてアメリカに渡り、セントルイス・カーヂナルスとフィラデルフィア・アスレティックスとのワールドシリーズの観戦記を載せて居たが、その第 7 信の中で

> 「10 月から 11 月にかけてのアメリカの寵児はフットボールである。昨日（10 月 25 日の土曜日）の朝の新聞に「本日の蹴球戦」と題して予告されて居た試合だけでも 200 を超してゐた。そして今朝の新聞にはスタンフォード対南加州大学の 8 万 8 千人を筆頭にニューヨーク大学対フォーダムの 7 万 8 千 5 百人、プリンストン対ネーヴィーの 4 万 5 千人等集まつた観衆の数を通算すると昨日のビッグゲームだけで 50 万人に上るだらうといふやうな記事を掲げてゐる。これに反してシーズンを終つた野球の記事は殆ど一字もない。本月 8 日の亜界選手権野球試合の第 6 回戦を大詰として、舞台は完全に一転したのだ・・・」

と書いて居り、アメリカのスポーツのシーズン制が如何にはつきりと区別されて居るかと云ふことと、フットボールがアメリカでは如何に盛んなスポーツであるかと云ふことを昭和 5 年秋の事を報告して居る。

なおこの頁の中のコラムに「布哇生れの日本人糸賀氏は今シーズンより米國カンサス大学の蹴球選手（アメリカン・ラグビー）として活躍してゐる。」と云ふ記事がある。ハワイの二世であろう。蹴球選手と書いてカッコしてアメリカン・ラグビーと書いたのも面白い。

昭和 6 年 1 月 15 日号のアサヒ・スポーツの記事の中にアメリカンフットボールについて書いて居る。その題は「蹴球と奇禍」である。

> 「去年 1930 年の蹴球シーズンだけにアメリカン・フットボールは 13 名の死者を出した。そのうちハイスクールの生徒 8 名、大学生 4 名、クラブ選手 1 名といふ割合ださうだが、こ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

れで1906年以来の25年間に出した犠牲者総数は235名といふ夥しい数に達するといふことである。なかでも1925年の死者20名といふのが、いままでの最高のレコードだが、このときには流石のアメリカ人も大分驚いたと見え全米に蹴球禁止運動さへ起こつて一頃大騒ぎをやつたことがある。これだけ夥しい死傷者を出すハード・ゲームだから、蹴球選手といへば吃度生命保険会社などで敬遠され、もし契約が成立つても必ずや特別課税されてるだらうと思つたら、なかなかどうしてアメリカの統計によると蹴球選手の死傷者数など問題ぢやなく狩猟死傷率の方がずつと高率を示してゐるといふことである。各年度の死亡者数を挙げると

1906－11	1917－12
1907－11	1921－12
1908－13	1923－18
1909－12	1925－20
1911－11	1926－ 9
1912－13	1927－17
1913－ 5	1928－18
1914－13	1929－12
1915－13	1930－13 」

フットボールの死者数より狩猟の死亡者の方が多いと比較したのも面白いし、保険会社を引合に出して居るのも面白い。確かに1925年の死者20名の時は全米で大変な騒ぎになり口会でまで取り上げられたが大統領の「将来の米國を背負ふ青年がこのようなアクシデントに負けていじけるようではいけない」

と云ふことで用具・規則の改正を急がせた結果、今日の隆盛があつたのである。

それ以前昭和5年4月1日号のアサヒスポーツの「スポーツ通信」欄には蹴球界の名物男と題して次の様な記事があつた。

「米口蹴球界の名物男、エール大学の名ハーフたるアルビー・ブース君は「メキシコのはじけ豆」と卓名される144封度の小柄であるが、彼が全米に威名を走せた今シーズンの出来事は、強敵アーレーとの一戦であつた。彼はハーフタイムから出場したのであつたがその時まで13対0の頽勢を彼一人の3タッチ・ダウンで21対13の勝利に導いたのであつた。

彼は競技中、決して靴下をはかないので有名である。彼はニューヘブン産で、父親は一介の労働者である。3人の子供の次男で、兄はウィリアム君といつて同じくエール大学に学び三年前に卒業したが、在学中は野球の選手で外野手をやつてゐた。

ブース君は至つて小柄だが、その筋骨は筋金の如く、又竹の如しと称されてゐる。彼に対して新聞記者が「君の一番長かつたランはどれ位かね」と質問すると、彼は一寸首をかしげたが直ぐ思ひ出したやうに答へた。「73碼です」」

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

以上であるが、何故これが蹴球界の名物男かと一寸疑問に感ずるが小男であると云ふことと靴下をはかないことかもしれないが、この様な記事が何故載つたのか不可解であるが、これも通信社から送られたものであると云うことと、フットボールの事を載せようと云うことではなかろうか。

又、昭和6年1月1日号のアサヒ・スポーツには次の様な記事がある。

「入場料を失業救済

全米蹴球フアンの人気を集めた陸軍士官学校対海軍兵学校蹴球試合は、いよいよ本日同地のヤンキースタヂアムで行はれ、予想通り大接戦となつたが最後に士官学校のハーフバック、ステッカーが57ヤードのダッシュに成功して6－0のスコアーで士官学校の勝となつた。観集7万に上り、その入場料60万ドルは失業救済基金に寄附した。(総合ニューヨーク12月13日発)」

この頃は世界的不況であり、経済パニックの起つた時期で日本でも「大学は出たけれど」と云うような映画迄出来た位である。アメリカでも不況で失業者が多く出たのである。その救済基金にアーミーとネービーの試合の入場料を寄附したと云う記事であるが、それにしても60万ドルとは大金であり入場者7万人とすると1人平均8ドル50セント位になり相当高い入場料である。因にルンペン等と云う云葉が日本にも流行し出したのは此の頃である。

昭和6年1月15日号同誌に「日支蹴球」との見出しで次の記事がある。

「旧臘14日サンフランシスコのケザル競技場で行はれた在米日本人対中華のアメリカン蹴球試合は三対零で日本側が敗れたが、当日の觀集7,000、同地のKPOから戦況放送まであつて非常な人気を煽つたさうである。」

又写真の説明に去る12月13日挙行のサンフランシスコ東洋人アメリカンフットボール選手権試合に3対0で中華民口の為敗れたが、過去3年間選手権を持つてゐた日本昭和チーム。とあり日附は違つてはゐるが、同じ試合のことで在米日本人チームとあるが、これは殆ど日系二世であり、又、中國系二世の試合でアメリカにあつて東洋人選手権試合をするのは面白いし又それをラジオで実況放送するのも又アメリカらしい。

前述の中尾済氏の「欧米スポーツ界行脚」の第8信には次のように書いてゐる。

「前の通信にも書いた通り､10月から12月にかけてのアメリカは蹴球のアメリカである。單に試合が多く行はれるといふばかりでなく、都も郡も押しなべて蹴球気分に浸つてゐるといつていい。

雨が降らぬ日の公園の隅や、町角の空地には必ず幾組かの青少年の群がゐてボールを蹴つてゐる。中には一チームとか二チームとかの人数が揃つて練習してゐる場合も屢次見受るが、多くは3人か5人で、1人がパスする、1人がそれを受けて蹴る、1人が捕る、躍進する、タックルするといつたやうな簡單な動作を何回となく繰りかへしてゐる。丁度、日本の町々で

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

見る野球のキャッチボールのやうに、一寸した暇があると誘ひ合せてそれをやりに出かけるのらしい。まだいたいけな小学生が大きなヘルメットをかぶつて、頭ばかりのお玉杓子のやうな格好をして、得意で歩いてゐるのにもよく出くわす。それから玩具屋へ行けば、其処には無数のゴム人形の蹴球選手がをり、安価で軽い蹴球用のボールがあり、お菓子屋へ行けばチョコレートの蹴球選手がボールを抱へて並んでゐる。そしてシーズンの関係もあるのだらうが、アメリカは野球國だといふのに野球用具や野球人形の玩具とかお菓子とかは、殆ど皆無といつていいほど、何処へいつても目にかからない。

10月の24日だつたニューヨーク北郊のヴァン・コートランドでコロンビア・プリンストン両大学のデュアル・ミートと、ニューヨーク・シティ及びマンハツタンのカレッジとのトライアンギュラー・ミートと、同時に二つの断郊競走が行はれるといふ新聞記事を見たので、蹴球で鼻をつく思ひをしてゐる折柄ではあり、可なり期待して見に行つたが、そこに集つてゐた選手以外の人間は、審判員と、選手の附き添ひらしい学生、新聞社の写真班等を併せて、総計60人ばかりしか居らず、対校競技らしい熱は何処をさがしても見られなかつたに反し、同じ公園内の同じ広場でやつてゐた何処かのハイスクール・チームの蹴球練習には黒山のやうに人が集つてゐた。一も蹴球、二も蹴球。全くもつて蹴球ならでは夜も日もあけぬ冬のアメリカである。

おかげさまで私も短い滞米中に、蹴球だけは毎土曜日欠かさずに見ることが出来たが、外の競技は殆ど何も見る機会がなくて済んでしまつた。」

その後同氏はその2年後、即ち昭和7年第3回冬期オリンピックの開催される予定地ニューヨーク州のレーク・プラシッドを見る予定にして居た処、その前日のプリンストン対ネーヴィの蹴球を見に行つて、3時間余り身を切る様な寒風にさらされて風邪を引いて予定日を過ぎてしまい、レーク・プラシッド見学は出来なく、やむなく翌々年（昭和7年）第10回オリンピックの開催されるロスアンゼルスへと旅行して行くのである。

さすがの中尾氏も、秋の米口のフットボール一色にぬり盡されたスポーツ界には一寸あきれた様子であり、欧州から米口と色々のスポーツを視察に歩いて米口の陸上競技だとか水泳その他を見たいと思つて居たのが、秋の米口のスポーツはフットボールだけの為に一寸予想外であつた様子である。確かに米國はシーズン制が確立して居るので他のスポーツを見学しようとしても仲々思ふ様にはいかない事を知つた様子であるが、フットボール一色には辟易とした有様がよくうかゞえて面白い。

この号の別の頁のコラムに「運動競技偏重で弊害続出の米國」と題し以下のような記事がある。

「アメリカの大学における運動競技の偏重は色々の弊害が続出し、たとへば最近ウエスト・ポイントの陸軍大学でフットボール選手の入学につき不正行為があつたため、上院の問題にまでなつてゐる位だ。

同大学ではこれらの弊害にかんがみて総長トーマス・ゲーツ氏の英断で大改革が行はれた。従来運動部は大学の支配から離れてをり、独立の存在を維持して来たが、今回大学内に体育

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

部なるものが出来、大学が直接にこれを取締ることとなり給料も一般職員なみに準ずることになり今回の問題の的になつたフットボールにおいてはヘツド・コーチ年俸一万四千弗、補助コーチ一万弗であつたのが、大大的に減給されることとなつた。このほかフットボール選手に与へられてゐた各種の特権もすべて廃止され、試合数、試合期間に大制限が行はれた。

と云ふものである。陸軍士官学校の入学にどんな不正があつたかは知らないがその為にゲーム数やシーズンも大幅に制限されたと報じて居り、更にコーチ陣が減俸されたとあつては大変気の毒なことであるがこの当時からフットボールのコーチは高給取りであつたことが解る。即ち一般職員なみに大々的に減給されたと云うのであるから、一般職員よりは遥かに高級であつたことがうかがえる。同誌昭和6年3月1日号には前記中尾済氏の「欧米スポーツ界行脚」第9信にはサンフランシスコにおけるフットボール見物記が長々と出てゐる。

羅府の見物をそこそこに済ませ、途中ヨセミテ・ヴァレーに寄つて、11月20日サンフランシスコに着く。その翌21日にはセント・メリー蹴球チームの凱旋があり、22日には加州大学対スタンフォード大学の定期戦、27日のサンクス・ギヴィング・デーにはセント・メリーとオレゴンの定期戦と、ここでもフットボールがひとり幅を利かせてゐる。

セント・メリーはサンフランシスコの対岸オークランドにある小いカレッヂで、加州大学やスタンフォード大学からは、常に一枚下の弟扱ひにされてゐるが、同校の蹴球部は近年メキメキ強くなつて、兄貴面をする諸大学をして顔色なからしめてをる。その代り学校当局の蹴球部に対する力の入れ方も一と通りではないと見えて、昨年の新人メムバーには、ハイスクールでキヤプテンをしてゐた選手を20人も揃へてをり、今年も同様の新人を16人集めてゐるといふ。そして昨シーズンは全勝し、今シーズンは近年不振の加州大学に一敗して鼎の軽重を問はれたが、間もなく東部に遠征し、アメリカでは一、二を爭ふ強チーム、フォーダム大学を撃破して名誉を恢復すると同時に、昨年以上に比部加州の人気ものとなつたのである。

とセントメリー大学を紹介して更に

「フォーダムといへばノートルダムと共に、一般の人たちから「あれは学問を研究する大学ではなくて、フットボールの大学だ」と悪口をいはれてゐる位で、全米蹴球界に鳴り響いたチームである。それを西部の小カレッジ・チームが遥々遠征して破つたのだから、全國的にも相当のセンセーションを湧かしたらしいが、喜んだのはサンフランシスコ附近の加州児であつた。「我等のセント・メリーがフォーダムをやぶつた・・・選手一行は戦勝後首都ワシントンを訪れてフーバー大統領に謁見した・・・フーバーは夫人の郷里加州が生んだ若人等の光輝ある勝利として、特に一行の栄誉を祝福したさうだ」等々語り伝へ、聞き伝へて有頂天になつてゐるところへ一行が帰来し、21日の午後、桑港市庁の前で盛大な歓迎会が催されたのである。しかしその歓迎会は市庁前の広場に集まつた群集数万、市庁の歓迎の辞があつてのち、選手1人ずつを壇上に引き上げて紹介する、群集が喝采する、その紹介の騒音をラジオで放送する、と云つたやうな段取りで、お祭り騒ぎの好きなアメリカにしては思つた

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

よりも單純な物であつた。」

とセント・メリー大学の凱旋風景を書いて居る。これは日本においても甲子園の高校野球優勝チームを向へる都市とよく似て居る。続けて

「加州大学とスタンフォード大学の定期蹴球戰は今度が36回目である。東部におけるエールハーバードやプリンストン、コーネルと併称される太平洋岸随一の大試合で、今シーズンは両大学共に弱く、北方のワシントン及びワシントン・ステート、南方の南加州大学などから狭撃されて、どちらも気勢あがらず、従つてこの試合も例年ほどには人気がないと聞いてゐたが、矢張り厂史の力は恐ろしい、日本の野球フアンが早慶戰といふと猫も杓子も見たがるのと同じ心理で、試合の入場券は一ヶ月も二ヶ月も前に出拂つて了ひ少々のプレミアムをつけた位では容易に手に入らぬといふ有様であつた。

だが幸にして私は、東大の旧い短艇選手でいま桑港の邦字新聞「日米」に健筆を振つてゐる海老名君の好意により入場券を一枚分与して貰ふことが出来た。球場はバークレーにある加州大学の大戰記念スタディアムで、桑港湾を越えてそこへ行くのがまた一苦労であつたが、これも海老名君の友人で加州大学出身の藤井氏の車に乗せて貰ひ、文字通り居ながらにして球場に達するを得た。

私が滞米中に見た蹴球試合はニューヨークで2回、プリンストン、シカゴ、ロスアンゼルスで各1回、桑港で2回と都合7回であるが、そのうち観衆の多いことにおいて、応援の盛んなことにおいて、最も対校試合らしい気分を見せられたのはこの日であるから、以下少しばかり雑観を書いて見よう。」

とカリフォルニヤ大学とスタンフォード大学のフットボール・ゲームは両校現在は弱いが伝統の対抗戰の人気の高いことに驚いて書いて居る。

「加州大学のスタディアムは1923年に建設されたもので、中にトラックも何もなく全く蹴球専用の競技場である。スタンドの観覧者収容人員は8万人ださうであるが、試合開始の直前にはそれが悉く満員となつたのみならず、球場の上に枯草のスロープを曳く遥かの山上にも数千人の見物が群つてゐる。そしてこの日の入場料は1人につき5弗の均一で、山の上にゐる聯中はロハかと思つたら、これも登り口に学生委員が見張りをしてゐて1人1弗の金をとつてゐるのだといふ。一体にアメリカの蹴球の入場料は安くない。

私が見た試合だけを見ても、コロンビヤ対ウエスレヤーンの試合が2ドル均一、ミゾリー対ニューヨークが3ドルと1ドル半、プリンストン対ネービーが4ドル均一、シカゴ対プリンストンが同じく4ドル均一、ハワイ対南加州が3ドルと1ドル半、斉しく大学チームの試合でありながら、人気の厚薄によつて入場料に高低があるのもアメリカらしいところであるが、その最低級に属するものでも、大リーガーの野球の入場料（ウォールド・シリーズは別）より遥に高く、おまけに観覧席の設備にいたつては、野球が何れも屋根附きのスタンドに、個人別の折り返へし椅子を設けて、お客様本位に出来てゐるのに反し、蹴球は例外なしに無

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

蓋のコンクリート・スタンドにシートの番号が打つてあるだけ、見物人はてんでにクッションや毛布を持参におよんで、寒風に慓へながら、高い見物料に甘んじてゐる。一面から見ればプロフェッショナルとアマチュアとの差別の現れともいへやうし、又両者に対するアメリカのフアンの人気の差を現すものともいへやう。」

この当時アメリカの1ドルは日本円の2円に相当して居た。

大学を卒業して一流会社に入社した者の初任給が50円ないし60円であつたので、この試合の入場料の5ドルはたしかに高価である。月給の1/5か1/6である。現在の学卒の初任給7万円とすれば、この入場料は12,000円から11,000円位に相当するものであろう。しかしそれでスタンドのサービスはプロ野球と比較して悪いと云ふ。又プロ野球のペナント・レースの入場料より高いと云うので中尾氏も驚いて書いて居る。然しそれでも入場券の入手は大変に困難だと云うのである。

これは中尾氏もフットボールとプロ野球に対するフアンの人気の差を現はしてゐると同氏は書いて居る。それ程アメリカにおいては学生のフットボールの人気が凄いものであつたのである。更に中尾氏は何れにしても1人5ドルの均一は決して安い入場料ではないが、しかも元価の5ドルで入場し得た者は恐らく全体の半数にも達せず、大多数の入場者は20ドル、30ドルのプレミアムを支拂つてゐるだらうといふことだ。プレミアムといへば2、3年前のこの試合のとき、50碼ラインに近い絶好の座席を指定した4枚つづきの切符があつて、それが何千ドルとかの自動車と交換されたといふ話もある。同じやうな位置の入場券でも1枚よりは2枚、2枚よりは3枚と、番号が並んでゐるほど高いプレミアムがつくのださうで、「50碼線の附近で4枚並んでをれば、銀座に地所を持つてゐるやうなもんだ」といつた海老名君の冗談も大した誇張では無いかも知れぬ。この当時は銀座に限らず日本全國まだ土地の価格は現在とは比較にならなかつたのであろう。

「また、これは私たちが球場へ行く途中、サンフランシスコからバークレーへ渡るゴールデンゲート・フェリーの渡船の中での話だが「今日このフェリーで海を越す自動車が何台あるだらう」と海老名君がいふと「サア少くなくも1万台は下るまい」と藤井氏が答へる。バークレー、オークランド、アラメダ等球場と同じ側にある海沿いの町々から集る観衆も少い数ではないが、矢張り大部分はサンフランシスコの在住者で、それがわれ勝ちに海を越えて自動車や電車で殺到するさまは、確かに一種の壮観であつた。」

まだゴールデンゲート・ブリッジは架橋されて居なかつた頃であろう。

「校名は加大の青に対するス大の赤で、スタヂアムの正門から向つて左、山に沿う左方のスタンドの中央には加大の男学生応援団が2ブロツクスを占領し、更にそれに続く2ブロツクスを女学生が占めてゐる。

だが豪快を誇る肉彈戰（御承知の通りアメリカン蹴球の肉彈戰はラグビーなどの比ではない）に女性のキーキー声は不調和だと思つてか、彼女等は決して唄はない。唯味方のバンドの奏楽や男学生応援団の咆哮に合せて、各自が手に持つた黄菊に青リボンの花束を打ち振る

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

だけだ。

この当時のアメリカの大学の女子学生は大変におとなしいものである。現在の女子学生は応援団のリーダーになつて居るチヤーガールも多い。現代の日本の女子学生でもこの当時のアメリカの女子学生より余程おてんばでシャシャリ出る者が多いだろう。アメリカでも西部は東部より女性を大事にされ、又、それだけ女性のイバツて居るアメリカ西部の女子学生でさえこの様な状態であるから現今の日本の近代的女性と云はれる種族はもう少し考えなくてはいけないだろう。

一方、反対側スタンドの中央はス大の応援団で埋まつてゐるが、ビジティング・チームであるためか、それともス大の伝統か、これは男の学生ばかりで女はゐない。しかしこのサイドの観衆は九分通りス大鼠屓で白菊にモールでＳの赤字を嵌め込んだのを胸に手にまたは帽子にかざしてゐる。スタンフォード大学の応援席には女子学生は居ないと云う加州大学以上である。男女同権の習慣が古くから有るアメリカでさえ、何か明白なけじめがあつて気持が良い。

試合開始前 30 分、両軍の選手が約 60 人づつ入場してウォーム・アップをやる。それがまだ終らないうちに、型の如くス大、加大の順序で各百人近くの人数から成る応援のバンドが繰り込んで盛んなパレードをやる。華やかな服装と気取つた態度、奏楽。もし今の日本でこれを眞似たら、余りお芝居じみてゐるとか、眞面目を欠いたお祭り騒ぎだとかいふ理由で非難されるに相違ないが、アメリカの蹴球戦には欠くべからざる景物の一つとなつてゐる。のみならずこれには各大学がいろいろ趣向を凝してゐると見えて、シカゴではシカゴ大学が直圣 3 間以上もあらうと思はれる車つきの太鼓をドヤしながら押して来たのを見たし、ロスアンゼルスでは南加大学が男女二隊の賑やかな行進をやつた上、大きな汽船の模型を押し出し、最後に女子軍をその汽船に収容して、煙突から黒煙をあげながら楽屋に引込むといふ余興振りを見た。

それからプリンストンで見たネービーの応援は、バンド、喇叭隊、マスコットの山羊と順々に引張り出しただけでは足らずに、一隊約二百人の学生を八隊まで繰り出し、それがグラウンドーぱいに整列してエールを三唱した上で、初めて所定の応援団席につくといふ念の入つた騒ぎ方をやつてゐたが、さうなるとウォームアツプをやつてゐる選手などはそこ除けで、暫くは応援団がグラウンドの主人になつたかのやうな奇観を呈する。」

アメリカに於けるフットボール試合の応援合戦のお祭り騒ぎには、中尾氏も呆れ顔で書いてゐる。話が余談に亘つたつたが、さて当日の試合はといふとやつと試合経過について書き出した。

「前半は第 1 クォーターにス大が 1 タッチ・ダウンを得て 6 点をスコアしたのみ。第 2 クォーターは両軍零で、加大は圧迫されながらもよく防ぎ、可なり面白い試合であつたが、第 3 クォーターから加大が崩れて、結局 41 対 0 の大差でス大の大勝に帰した。

試合中最も目立つたのは、加大のハーフ・バック、ベツケツト君であつた。戦前ス大に 7 分の強味ありといはれてゐた予想に違はず、最初から加大は猛烈な圧迫を蒙り、第 1 クォーターにおいて早くも 1 タッチ・ダウンを許したのに奮起したのであらう。ベツケツトは第 2

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

クォーターに入る時からヘルメットをかなぐり捨て、素あたまを以て敢然と敵軍の猛者どもと相衝撃した。そしてタックル又タックル、たとへ手の先であらうが、足の踵であらうが、苟しくも彼が手がかりを得たが最後、如何なる者も引き倒さねばやまぬ猛斗振りを示し、刻々に戰況を報ずる拡声器は、ス大攻撃陣の殆ど各ダウン毎に「何ヤード・ゴー・タックルド・バイ・ベツケツト」を繰り返へした。」

その当時はヘルメット等も現在の様に完全でなく外側が皮で出来て居り、内部にフェルトを貼つた様なものであつたので、よく試合中にバックの者など走るのに邪魔になるので、ヘルメットを取り試合をした者も居たが、中尾氏の素あたまは傑作である。確かに素あたまと云う感じである。他のプレーヤーが皆ヘルメットをかぶつてゐるのに、1人だけ脱いで居るのだから目立つ筈である。日本においても最初の間は法政の梶谷だとか早稲田の島袋、立教の鈴木等はそれこそ素あたまを振りながら奮斗して居たものである。

「細い記録をもつてゐないから確かなことはわからないが、試合の過半を通じて、ボールをかかえたス大選手の恐らく8割は彼の手に引き倒され若しくは捻じ伏せられたであらう。
しかしベツケツト如何に勇猛なりとはいへ鉄石の身ではないから、戰いの進むにつれて次第に疲れ、泥と汗とに塗られた顔は蒼白となり、つく息も苦しげによろめきながら、それでもなほ戰線を去らず悪戰を続けたが、第3クォーターの半ばすぎに至つて、コーチも遂に見るに見かねたものか彼を退けて補欠を送つた。果然万雷の如き拍手はスタヂアムを揺るがすばかりに起つた。それは敵味方を問はざる8万大衆の、真に力尽きる迄健斗した彼の意気と力とに対する賞賛の響きであつた。」

ここの処は講談口調でベツケツト君を書いて居て面白い。取つては投げ、千切つては投げの口調であるが中尾氏もこのベツケツト君には感心したのであろう。

「一方、ス大側では第3クォーターから現はれたフル・バックのローサート（円盤と砲丸の選手で近く日本へ来る男）が目立つてゐたが、前半をベンチに休んでをり、後半に至つてその怪力と鋭気にまかせ疲れ切つた敵軍を縦横にかけ悩ましたローサートよりも、怒涛の如く殺到する敵軍に対して、よろめき乍ら其素あたまをブツつけて行つたベツケツトの方が私には一層ヒロイックに見えた。」

以上でスタンフォード大学対加州大学の試合の見聞記は終つて居るが、しかし当時の試合風景がよく出て居て面白い文章である。現在でこそプロフェッショナルのチームが多く出来て人気を得て居るが、この当時にもプロのチームは有るには有つたが大学のチームの人気には遠く及ばなかつたのである。中尾氏は引続いて次の様に書いて居る。

「27日のセント・メリー対オレゴン大学の試合は、桑港金門公園のケーザー・スタヂアムで行はれた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

加州大学対スタンフォードを早慶戰とすればこれは6～7年前の一高三高戰といつた格で、西部では可なり人気のある試合である。殊に昨シーズンのセント・メリーが聯戰聯勝相手のチームを悉く零敗せしめて行きつつあつた折柄、オレゴンが敗れながらも1タッチ・ダウンをセント・メリーから奪取した戰厂があるので、今シーズンの試合は一層興味を呼んでゐるといふ事であつたが、果して当日は双方タッチ・ダウン各一つをあげ、ただゴールが成ると成らぬとの差、即ち一点違ひでセント・メリーの勝に帰する接戰を見せてくれた。しかしこの日は生憎の雨天で、観衆もスタンドの半ばに充たず、折角の好ゲームもその割合に観者の感激を誘はなかつた。凡ての競技を通じて、観衆はその日の空気に大きな影響を及ぼす一つの要素である。」

ここでこの手記は終つて居る。内容はフットボールの試合の経過は殆ど無く、それよりむしろ試合場風景と云う点に重点が置かれて書いて居る。これは当然のことであろう。それと云ふのもその当時の日本人の読者ではフットボールとはどんなゲームかも知らない人が大半であつたのだからその試合の内容や又批評を書いても読者に諒解させることは困難であつたし、又中尾氏自身もアメリカに渡つてから15日や20日ではフットボールを理解することも出来なかつたろうから、書くことも出来ないのは当然のことである。

これが日本でも行はれて居るゲームであつたら、もつとくわしくゲームの内容を書いたであろうが中尾氏自身もアメリカに渡つてフットボールを見るまではフットボールとはどんな競技か知らなかつたのではあるまいか。事実、手記の中にも書いて居るようにヨーロッパを廻つてアメリカに来て陸上競技だとか野球だとか他の競技も色々と見て行く積であつたのが、シーズン制のはつきりして居るアメリカの然も最も盛んな競技のフットボールのシーズンになつてしまひ、他の競技が行われないので仕方なく、フットボールを見て歩いたと云ふ感がないでもない。
従つて試合場風景に重点が置かれたのは無理もない事であるが、中尾氏もフットボールのゲームを見てその場内の華やかさには驚いたり、又大変に興味を持つたことはこの文中に於ても明らかであり、そして又フットボールがアメリカでどんなに人気のある競技であるかと云うこと認識したのは事実であろう。

大体、日本人は野球はよく知つて居り、そして野球は勿論アメリカから輸入されたものであるから、アメリカでは野球が最も盛んなスポーツであると思つて居たが、アメリカに行つて見て初めて野球より盛なスポーツのフットボールがあると云うことを知る人が多い。その様なスポーツが何故に日本に輸されるのが遅れたのであろうか？　それには色々と理由があるであろう。

このアサヒ・スポーツの同号には「米口のスポーツを亡すもの」と云ふ題でアメリカのスポーツ記者のバドック氏が書いた記事が載つて居る。それはアメリカの青年が酒におぼれて居ると云うのである。当時アメリカでは禁酒法が施行されて居た。その為、良い酒が姿を消して密造酒が多く出廻つて居た。その悪い強い酒を青少年が飲みスタミナを無くし、記録が出ないと云うのである。禁酒法は逆に青少年迄酒飲みにさせて、彼等の体力を衰えさせたと嘆いてゐる。その内に

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

同じことを蹴球についてもいひ得る。肉と肉との相博つ昔の勇壮なゲームはもう見られなくなつた。

今ごろのフットボール・ゲームは力に代ふるにスピードとパッスとを以つてしてゐる。「それが蹴球の進歩を語るものである」・・・と普通にいはれてゐるが、それは一種の口実にすぎない。今の青年は60分間の激斗には堪へ得ぬから止むを得ずパッシングに訴へるやうになつたのだ。

フットボールのプレイヤーも酒に毒されて居る為にスタミナが無くなつたと云うのである。この理論は一寸こぢつけの気味があるが、当時の青少年が酒に害されて居たことは事実のようである。然しパスやスピーディなプレイは酒でスタミナが無いので止むを得ずやつて居ると云うのは、たしかにこぢつけの様な気がし、何時の世の中にもこの様な老人は居るものである。

昭和7年1月1日号のアサヒ・スポーツにはフットボールの写真が2枚出て居る。その一つは　最近行はれたエール、ハーバード両大学の蹴球試合で、エールのブース君は25ヤードのドロップ・キックに成功して3対0で勝ち、シーズンを無敗全勝の記録で終らんとするハーバードの希望を打ちこわした。写真はブース君がキックをしたところとある。1931年のハーバードは優秀なチームであつたらしい。

もう一つのトロージヤン対ノートルダムの蹴球試合は、過去3シーズン聯続的にノ軍が勝利を得てゐたが、最近行はれた両チームの試合でト軍が勝つた。それはノ軍の猛者パナス君が例の如くゴール前1ヤードまで突進したときト軍のホーキンス君がタックルし、次でト軍のジョニーベーカー君が24ヤードのプレースキックに成功したためであつた。写真はホーキンス君がタックルするところと云ふ解説がついて居るが、何か一寸変な解説で中が少し脱けて居るような気がするが当時の日本人は良く知らないから、そんなものかナァと云うことですましてしまつて居る。

そしてその年の7月30日からロスアンゼルに新しく建設されたオリンピック・スタディアム（現在はドジャースの野球場として使用されて居る）で第10回オリンピックが開催された。このオリンピック大会では日本の水泳が大活躍して男子競技6種目中5種目にメインポールに日章旗を上げた。特に100米背泳では3本共日章旗が上ると云ふ盛大さで口民を喜ばせた。又、陸上競技でも三段跳で南部忠平がメイン・ポールに日章旗を上げ、又、走幅跳でも南部忠平が3位に入賞し日本の選手が大活躍した。その他馬術競技では大障碍飛越で西中尉が優勝。メイン・ポールに日章旗を上げ、又、女子水泳200米平泳では前畑秀子が2位の旗を上げた。ホッケーは2位となつて、これも日章旗を上げたが、ホッケーは日本と印度と地元のアメリカの三國しか参加しなかつた。棒高飛で西田修平の2位、三段跳で大島健吉が3位、水泳では100米自由形　宮崎康二1位、河石達吾2位、400自由形　大横田勉2位、横山隆志3位、1,500米自由形で北村久寿雄1位、牧野正蔵2位、100米背泳清川正二1位、入江稔夫2位、河津憲太郎3位、200米平泳鶴田義行1位、小池礼三2位、800米リレー日本（宮崎、遊佐、豊田、横山）1位とこの大会は日本選手が大活躍したのであつた。この大会の自転車競技が行はれたのは有名なパサディナにあるローズボウル・スタディアムであつた。

そしてこの第10回オリンピック大会には番外競技としてアメリカンフットボールも参加した。

オリンピックには番外競技としてその主催國の特色のある競技を2種目迄は認めて居る。それでアメリカであるのでフットボールを加えたのである。そしてこれには東部地区と西部地区の選抜

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

チームが出場し10日目の8月8日にオリンピック・スタディアムで行つた。その結果は37－6で西部選抜軍が勝つた。

以上書いた様に当時日本においてはフットボールと云う競技は行はれては居なかつたが、新聞、雑誌、映画等にはしばしば出て来て居る。それと云うのも米國に於ける代表的なスポーツであると云うことは良く知つて居たのであろう。それ程興味があり乍ら何故輸入されるのが遅れたのであろうか？

それは前にも述べた様に怪俄、死亡者が米國で多く出ると云うのもその一つの理由であつたかも知れない。然しそれよりも日本のスポーツは欧州系のものが多く輸入されて居た事によるものではなかろうか。明治の中期頃より英國とは親交があり、日本に多くの英國人が来て居たと云うことに依るものが多いと思はれる。そして米國人は日本に来てもそれ程自國のスポーツを押し付けるような事はしなかつたのかも知れない。これを裏返へすならば米國人は仕事に熱心ではあるがその他の面についてはそれ程熱心でなかつたと云う事かも知れない。実際の問題としてこれ程米國において盛んな競技が現在でも尚欧州アジア、その他日本を除いた國では殆ど行われて居ないと云うことは米國人はその普及には不熱心であると云へるだろう。
然しその当時、日本においても水戸高校や高等師範等では研究をして取り入れを計画した事はあるらしいが、それは実行されないままになつて居た。

それから又、輸入されない原因の一つとして用具の問題もあつたのではなかろうか。運動具メーカーでは行われて居ないスポーツの用具を造る冒険はしないだろうし、用具が無くてはスポーツは出来ないと云う理由で輸入されなかつたのも一つの理由と云える。

然し新聞、雑誌、映画で度々紹介されて居ると云うことは、日本にもその気運は熟して居たと云うことになるだろう。私が立教の予科に入つた年、即ち昭和8年だが学校の体操の時、体操の先生がマーシヤル氏であつた為だろうがクラスの生徒を人数分けしてタッチ・フットボールを教えたことがあつた。その当時吾々はそれが何であるかは知らなかつた。フットボールと云うのはヘルメットをかぶつてタックルをするものであることは映画や写真で見て知つて居たが、タッチフットボールは全々知らないし、又、それがフットボールの親戚であることにも気がつかなかつた。
とにかく昭和9年頃は色々の見地から見てフット・ボールが輸入される要因は充分にあつたと云える。むしろ遅すぎたきらいがあつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

アメリカンフットボールの厂史

どんなスポーツもそうであるが、そのスポーツが何年何月何日から始つたと云うようなものは無い。とにかく人間がこの吾の中に出来た時から何らかのスポーツはあつたに違いない。それがスポーツと云はれる程のものでないにしろ、人間は生きて居る以上、何か身体を動かさないでは居られない動動なのである。

歩くことも、走ることも、或は跳ぶことも皆スポーツと云えば云えるであろう。そして同時にこれ等のことは人間が生活をして行く上に必要なことなのである。

それから人間が生活して行く為には食はなければならない。その食物を得る為には又身体を使はなければならない。原始生活においては木の実を食い、動物をつかまえて食う。木の実を取るには高い木に登つたり、又長い棒で叩き落さなければ手に入らない。又動物をつかまえる為には動物より早く走らなければならないし、又それと格斗をして倒さなければならなかつた。原始時代にはスポーツとは云はなかつただろうが、然しこれらの行為は皆現代のスポーツの原形である。人間が生活して行く為に必要な、そして自然的な行為である。そしてそれらの原始的行為が他人より優れて居れば居るほど他人より良い食物を獲ることが出来、それだけ多く食う事も出来るのである。

それから又、人間には、生来、斗爭心がある。他人に負けまいとする気持は誰にでもある。人より早く走ること、人より遠くに物を投げること、人より早く泳ぐこと、或は格斗して人に勝つこと等々人間には生来斗爭心を持つて居る。それが大きくなると戰爭につながることにはなるのであるが、然し又人間が向上して行く為には良い斗爭心は必要な事である。

そして衣食住の為に直接にそれ等の身体を使ふ必要がなくなるとそれをスポーツとして楽しむようになるのである。然しスポーツとして楽しむようになつても最初からそれをスポーツとして行うのではなく斗爭心の表現として行うのである。例へば早く走ると云うことでもその巨離を100米とか400米に定めたものでなく、只單に向うの小山の1本杉迄と云うような定め方をして走つたことから競走競技が出来たのである。それであるからスポーツの原形は原始的必要性から生じた個人競技である。

個人競技はそれであるから原始的と云える。古代ギリシヤで行はれたオリンピアの競技は個人競技であつた。そしてその勝者には個人の栄誉をたゝえて月桂樹の王冠を贈つたのである。

然し人間が進歩して来ると共に、その個人競技のみでは満足しなくなつた。單純な個人競技より復雑な、そして色々な個人競技を組合せ、そして頭脳を使うスポーツの方を好むようになつて来た。それが現代の団体競技の始りである。即ち單純な個人競技に飽き足りなくなり、より高等のスポーツを要求したのである。

然しそれは始めからルールを定めて行はれたものではない。自然発生的に出来たものである。例えばボールを1人で蹴つて居たのが1人より相対向する他の人と蹴り合う事の方が楽しめ、そしてその人数が増えて蹴り合う方が面白くなつた。そうなると敵味方2組に分れてお互に蹴り合うようになつて遂にはゴールを作つてそれに蹴つて入れて得点を爭う興味を憶えた。これがサッカーの始りであろう、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

然しサッカーも最初から11人宛つでグラウンドの広さも明確に定められて居なかつたが、それを楽しんで居る内に人数も11人位が調度良いし、グラウンドの大きも自然に経験を経て定められて来たものである。それであるから、例をサッカーにとつてもサッカーの厂史は何時からかは不明であると思はれる。

全てのスポーツは皆そうである。ラグビーにしてもその厂史は英國のラグビー・ハイスクールのサッカーの選手がサッカーの試合中、興奮の余りボールを抱えて走つたのが始りだと云はれて居るが、それは丸いボールでありゴールもサッカーのゴールであつた筈である。それが現在の様な楕円形のボールになり、現在のようなゴール・ポストになり、現在の様なグラウンドの広さになつたのは、一時にそうなつたのではなく長い年月がかかつて徐々に現在の様な型式になつたのである。

日本放送協会編「スポーツ辞典別冊スポーツ競技の見どころ」と云ふ本がある。この本の中で陸上競技の項に日本陸上競技聯盟常任理事の鈴木良徳氏が陸上競技の厂史を次の様に書いて居る。

「‘人間‘という動物が地球に現われてきた遠い昔、そこには義理も人情もなかつた、犬猫なみの吝界だけがあつた。猛獣から逃れるためにはより速く走ることが必要であつた。おなじような理由で、流れや障害物をより遠くへ飛び、食糧用のトナカイを捕獲するためには、ものを投げる必要があつた。

生きるためには、こうした走る、飛ぶ、投げるは、日常生活に欠くことのできない手段であつた。うつかりすると地球から消されてしまう。それが陸上競技の基本になつた。

くる日もくる日も、理屈なしに、死ぬまで戦うことの聯続であつた。

いま競技会のように考えられてゐる古代オリンピックを初め、そのころの競技会は、すべて神へ奉納するお祭りで、競技だけを目的としたものは、ひとつもなかつた。お祭りだから、死ぬまで戦つて、相手を殺してしまつては、その目的に反する。そこで‘古代オリンピック憲章‘にも規定されているように、相手を殺すと、優勝者にはなれない。そればかりか科料に処せられた。

古代の競技会は、スポーツではなく、死斗であつた。云々。」

と書いて居り、あらゆるスポーツの原型である陸上競技は‘人間‘と云う動物が生きて行くための必要条件として生れ、そして‘古代オリンピック憲章‘が出来るまでは、競技会は死斗であつたと云つている。

又、この本のボクシングの項では日本アマチュアボクシング聯盟常任理事小林正三氏は

「有史以前の人類は身を護るためにこぶしを用いましたが、こぶしを基として発生した護身術ボクシングがはじめて厂史に記録されたのは、紀元前688年の第23回オリンピア祭典からであります。」

と書いて居る。

拳斗の厂史も古い。然し現在のような拳斗はごく最近のものであつて、紀元前688年の第23回オ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

リンピア祭典で行はれた拳斗は全く違つたものであつたのであろう。

更にサッカーについては、矢張りこの本で日本蹴球協会常務理事竹腰重丸氏が

「フットボール競技は1,000年も前からイギリスにあつたということですが、正式には1863年にイギリスにフットボールという競技を統一規則でやろう、それまでは1,000年ぐらい方々でやつていたわけですが、競技規則がまちまちだつたために、よそとの他流試合ができない、それで不便だから統一規則でやろうじゃないかということで、「ザ・フットボールアソシエーション」、「イングランド蹴球協会」というものをつくつたわけですね。それが近代サッカーの初めだということになります。」

と云つており、現代のようなサッカーになつたのは100年位前からのことであり、それまでは規則のまちまちで勝手にやつて居たというのである。

又ホッケーについては日本ホッケー協会常務理事広太郎氏が

「棒で石を打つと云う人間の本能的動作は、おそらくどこの國でとくに早く始めたということもないだろう。ホッケーは非常に古くからあつたということは、アテネの遺跡の中に、今日のホッケーに似た浮き彫りが発見されたことでもうかがえる。それが今日のものに近い形をととのえたスポーツとなつたのは、1887年イギリスにホッケー協会が創立された時である。」

と書いて居る。

以上のようにあらゆる競技が現在のスポーツとして形をととのえたのはごく最近のことであつて、それ以前には人間が生きて行く為に必要な行動であり、それが基本となつて現代スポーツとなつたものである。そして現在のような種々なスポーツが出来たのであるがそれまでには大変永い年月が経過して居るのである。それであるから現在のスポーツはその規則が設定されてからの厂史はどの競技においても割合明確にわかつて居るが、それが発足は何時かと云うと、それこそ原始時代までさかのぼらなければならない。

アメリカンフットボールにおいてもその通りである。その紀原は走る、投げる、飛ぶ、等の人間の凡ゆる行動を総合したものであるから、原始の時代に始まつたと云えるかも知れない。然しアメリカンフットボールと云う名称がはつきり居る以上は、アメリカ大陸が発見されて後であることは確実である。

1492年コロンブスが米大陸を発見すると、ヨーロッパの各國は競つて新大陸に植民地を得、又それを拡大して行つた。そして各國共多くの移民をこの新大陸に送つた。特に北アメリカ東岸に

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

1497年ガボットがチェサピーク湾へ到着し、英國が勢力をのばし、18世紀の初めには13の植民地が出来た。又カナダには1534年にフランス人カルチイエが発見し、フランスの植民地になつたが後に英國の支配化になつた。

そして英國から、或はスペイン、ポルトガル、フランス等多くのヨーロッパから大陸を目指して多くの移民がアメリカに渡つて行つた。そしてこれらの移民と共にヨーロッパの文化も新大陸に渡つたのである。音楽、絵画、文学、経済、法律、等多くの文化が移民と共にアメリカ大陸に上陸した。その中に当然スポーツもあつたのである。即ち古くからヨーロッパ各地で親しまれて居たスポーツである。これ等のスポーツが新大陸で移民の間で親しまれたのも当然であろう。これ等移民の間で親しまれていたスポーツが、フロンティア精神のおう盛な彼等によつては旧来のヨーロッパ大陸のスポーツに飽き足りなくなり、より面白く、より豪快な、より科学的なスポーツを作り出したのである。即ち野球を作り、バケットボールを作り、そしてヨーロッパ大陸に古くからあつたサッカーとラグビーを基礎としてアメリカンフットボールを作り上げたのである。

平凡社発行の世界大百科事典のアメリカンフットボールの項にはフットボールの厂史として大谷要三氏は以下の通り執筆して居る。

「米式蹴球

アメリカの学生がサッカー、ラグビーから考案した独自の競技規則をもつフットボール。この名称はアメリカ以外の國で用いられ、アメリカでは單にフットボールという。

アメリカにおけるフットボールの厂史は、1869年11月6日ニューブランスィックでおこなはれたラトガースとプリンストン両大学の試合にはじまるとされているが、この試合はサッカーの規則によつたものであつた。このころからハーヴァード、エール、コロンビアなどにもフットボールクラブができはじめたが、1874年カナダのマックギル大学（モントリオール）がケンブリッジでおこなわれたハーヴァード大学との対戦でラグビーを紹介した。

これよりハーヴァードの学生が、従来ボールを足のみで運んでいたフットボールに、手を用いることの面白さを知り、自らボストンゲーム（当時ハーヴァードのフットボールをこう呼んでいた）にラグビーをとり入れて、今日のアメリカンフットボールの基礎となつたルールを考案した。1チームの人員が、現在の11名になつたのは1880年のことで、これを主張したのはウオルター・キャンプWalter　Campであつた。キャンプはエール大学の主将をつとめ、卒業後も永く規則委員の任にあつた権威で、今ではアメリカンフットボールの父と云はれている。

キャンプは、その他スクリメージ・ライン、クォーター・バックなども考えついたが、とくに重要なことは、4回の聯続ダウンが終つてなお5ヤード（現在は10ヤード）前進しない場合は攻撃権を失うという画期的な規則を制定したことである。なぜならば、この点がこの競技の最大な特色となつているからである。

エール、ハーヴァード両大学対抗試合（第1回は1890年）や陸海軍の対抗試合（同じ1890年）などは厂史と伝統にかざられ、現在も人気の中心となつている。又1920年にはプロ・フットボールがおこり、野球とおなじように2大リーグに分れ、シーズン（9月～11月）を通じ試合をおこなつている。プロの規則はアマチュアと多少の違いがある。

なおアメリカンフットボールの試合にボウル・ゲーム　bowl gameという云葉が用いられる

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

が、これはシーズン終了後おこなわれる選手権試合などのことで、ボウルは競技場の意で、これに試合のおこなわれる土地にふさわしい（例えば特産物など）名称を冠して、ローズ・ボウル、オレンジ・ボウル、シュガー・ボウル、コットン・ボウルなどと用いられるようになつた。」

と書いている。

フットボールの最初の試合は、ニューブランスウィックで1869年にラトガース大学とプリンストン大学の間で行われたサッカーの試合であつた。

1492年コロンブスがアメリカ大陸を発見以来、欧州各國はきそつて探険隊を派遣し16世紀から17世紀にかけてその広大にして豊かな土地と資源の輪郭が明らかになつた。

そして各國は新大陸に植民地を建設した。英口は1607年はじめて組織的なそして恒久的な英口の植民地をヴァージニアのジェームズ・タウンに建設した。植民地の感覚として、英國人はフランスやスペインと違つて、植民地を本國の延長のように考え、風習習慣、政治制度、その他をそのまま植民地に移した。その後フランス植民地と爭いが起き、その結果アメリカにおけるフランス植民地は英國植民地に吸収された。そしてアメリカにおける英國植民地は強固なものになつた。これと時を同じくしてヨーロッパでも英國とフランスの間に7年戰爭（1756年～63年）が起り、ここでも英國は勝利を収めたが、このため財政的に苦しくなり、これをアメリカの英國植民地に課税して吸ひ上げようとした。ここに植民地側の英本國不信の念が起り、1775年にジョージ・ワシントンのひきいる植民地軍と英本國軍の戰斗が起り、それが独立戰爭へと発展して行つた。そして、1783年パリ条約によつて英國にアメリカ合衆國を承認させたのである。

フットボールも英口移民と同時にアメリカ大陸に渡つて来たものであることは確実であるから、1600年頃からは、アメリカ大陸でも英國のサッカーが移民の間で盛んに行はれて居たことは考えられる。しかし日本蹴球協会の竹腰氏の話の中に英國で統一した規則が作られたのは1863年であると云つて居るから、その当時アメリカで行はれたサッカーはまちまちな規則の下で行はれたものであろう。そしてこの種々雑多なルールの下にアメリカ各地の移民の間でサッカーが行われて居た。それは当然子供の間にも行われて居たので小学校や中学校でも盛んであつたのだろう。然しアメリカンフットボールの厂史は、ラトガース大学とプリンストン大学の対校戰が1869年11月6日にニューブランスィックで行われたのが最初であるとされて居ることは、英國に於てサッカーの統一規則が出来たのが1863年であるから、その統一の規則の下に行われた第1回の大学対抗試合を以てフットボールの厂史の創りとしたのであろう。

それは英國サッカーの新規則が出来てから6年目である。6年とは少し長すぎるように思えるが、それもその当時の交通機関、文書の伝達等が速かにいかなかつたことと、新独立國の建設に多忙でそこまで手が廻らなかつたこともあつたろうが、実際にはもつと早く新規則はアメリカ大陸に渡つて来て居て、一部にはすでに新規則のサッカーをして居たと思われる。然しこの新規則が一般に普及して、しかもその新規則をプレーの上に活用するのには相当の年月を必要としたのは事実であろう。即ちそれ迄の各地の種々雑多な規則を統一するには英國でも長い年月を経ているのであるから、米國でもある期間は必要であつたことはわかる。その上大学対抗となると、それも

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

最初であるから、その手続きにも時間がかかることはうなづけるのである。それで英國に新規則が出来て6年後にアメリカで大学対抗の試合が出来たのである。

その後アメリカでもサッカーの新ルールが普及され、それによりハーバード、エール、コロンビア等の大学でサッカーが盛んに行われるようになつた。1874年にカナダのモントリオールにあるマックギル大学が、ケンブリッジでアメリカのハーバード大学にラグビーを紹介したのである。

それではラグビーはどの様な厂史を持つて居るのであろうか。平凡社発行の世界大百科事典のラグビーの項によれば

「イギリスで創始された球技の一種、正称は（ラグビーフットボール）というが、とくにアマチュアーのラグビーは＜ユニオン・ラグビー＞、プロフェッショナルのラグビーは＜リーグ・ラグビー＞と呼ばれる。

［沿革］ユニオン・ラグビーの創始は、教育の一環としてイギリスのパブリック・スクール（とくにイートン、ハロー、ラグビー、ウィンチェスター）に採用されたフットボールにおいて各校独特のルールで盛んに行われていたが、1823年ラグビー校におけるゲーム中、興奮のあまりウイリアム・ウェッブ・エリスが、規則と習慣に反して相手のキックを受けてそのまま走つたことが契機となつてラグビー・ゲームの特徴が創始されたといわれている。

また一説にはエリスは興奮のあまりボールを受けて走つたのではなく、彼が故郷のアイルランドでやつていたガェリック・フットボールのプレーをそのままやつたのにすぎないともいわれている。そののち学生間に急速に普及し、クラブが多数設立された結果、対抗ゲームも盛んに行われるようになると、当然、規則の統一が叫ばれるに至り、再三会議の結果、足だけを使うサッカーを愛好するものは1863年＜イギリス蹴球協会＞を設立、手も足も使うラグビーを愛好する者は72年＜イングランド・ラグビー協会＞を結成、そのさい全面的にラグビー校のフットボールの規則を基準として採用したところから、＜ラグビー・フットボール＞と呼ばれるようになつた。」云々、と日本ラグビー協会の大西鉄之祐氏が書いている。

これによつてもラグビーはサッカーから別れたものである。サッカーから別れたと云ふよりは、むしろラグビーはサッカーの一種であつたのである。即ち英口のアイルランドと云つていたもので、アイルランドにおいてはサッカーはこのガェリツク・フットボールであつたのである。それが1863年に足しか使うことの出来ないフットボールと、足も手も使うことの出来るフットボールとに分けて、足だけしか使うことの出来ないフットボールを統一してイギリス蹴球協会が発足した。これが現代のサッカーとなり、手も足に使うことの出来るフットボールは取り残された形になつていたが、それから9年後の1872年にイングランド・ラグビー協会が成立し、ここにサッカーとラグビーは明白に分離したのである。

アメリカのハーバード大学がカナダのマックギル大学からラグビーを紹介されたのは1874年であるから、イングランド・ラグビー協会が設立されてラグビーがサッカーから明白に分れた1872年から2年経過しているのである。それであるからハーバード大学は正式なイングランド・ラグビー協会設定の規則によつてマックギル大学からラグビーを教はつたのであろうことは確実である。

マックギル大学がハーバード大学に紹介したラグビーは、従来の足だけしか使うことの出来な

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

かつたサッカーには無い手を使うことの出来る面白さが理解出来たアメリカの青年の間に盛んになつて行つた。これは足だけしか使えず、又激しい体力の斗爭が出来ないサッカーでは物足りなかつたからである。そして更にそのラグビーを改良して、もつと激しく、より科学的でそしてもつと面白い競技に変えて、当時ボストン・ゲームと呼ばれていたハーバード大学のフットボールにラグビーを取入れて、今日のアメリカンフットボールの基礎を作つたのである。そしてこの競技はラグビーとも又違つた形になり、開拓者精神の旺盛な新大陸の青少年の人気の的になつて全アメリカに普及して行つた。しかしまだその当時は出来たばかりで現代のものとは大部変つたものであつたと思はれる。

1880年にかつてエール大学のフットボールの主将であり、又卒業後も永く規則委員を務めたウォルター・キャンプが現在のような規則を制定した。即ち競技者数を11人にすること、スクリメージ・ラインの規則、4回の攻撃権とその必須前進距離等である。これが現在のフットボールの基礎となつたのである。ハーバード大学がカナダのマックギル大学からラグビーを紹介された年の1874年からこの新しいフットボールの規則が出来る迄は、僅か6年しか経過していない。異状なスピードと云はなければならないだろう。それ程この新しいフットボールはアメリカ人の気質に合つたのである。ウォルター・キャンプはフットボールの父と云はれる人である。尚その当時の四回の攻撃の必須前進距離は現在の10ヤードより短い5ヤードであつた。そしてこの4回の攻撃権中に5ヤードを必須前進距離と定めたことは他のスポーツに例のない最大の特色となつている。

ウォルター・キャンプ等によつて1880年に新たに制定された規則によつて、アメリカンフットボールはサッカーでもラグビーでもない一つの人格を持つた独立した新しいフットボールとして、新吾アメリカのスポーツとして隆盛な勢をもつて発展して行つた。そしてその年はアメリカが独立してから約100年経過して居た。

新しく出来たスポーツ、アメリカンフットボールはアメリカの青少年、特に大学、高等学校の学生、生徒の間に猛烈な勢で伸びて行き、学校間の対抗試合が続々と行われるようになつた。新ルールが出来てから僅か10年経過したばかりの1890年には、陸軍士官学校対海軍兵学校の対抗戦（ネーヴィー・アーミー戦とも云う）、又同年エール大学対ハーバード大学の対抗戦が生れた。そしてこれらの試合は現在でもアメリカのビッグゲームとして続いている。エール・ハーバード戦は、吾界の学生3大競技試合として英國のケンブリッジ対オックスフォード両大学のボート・レースの試合、日本の早慶野球戦とならんで有名である。

フットボールがアメリカの青少年の間に盛んになると、そのスポーツ人口も当然多くなつて来た。それに従つてフットボールに原因する負傷者の数も増して来た。特にアメリカで問題になつたのはフットボールによる死亡者の増加であつた。これは前に述べたように1925年の死者20名を筆頭に毎年12～3名の死亡者が出、1906年から1930年迄の25年間に235名と云う夥しい数に達したのである。それで当時のアメリカ国会でもこの数字に驚いて問題になつたことがあつたが当時の大統領のフーヴァーであつたかが、“アメリカの将来の発展を荷負う青少年がこのような事に驚

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

いてスポーツをやる勇気を失うようではアメリカの発展もおぼつかない”と云ふ決断によつてフットボール禁止の声を押えたと云う話がある。しかし一時的ではあるがフットボール禁止の声は無視することが出来ず、先づ用具の改良を実施し、又他方では規則を改正し危害防止に努めたのである。その結果、死亡者も減少し、フットボールは益々隆盛の勢を示し現在に至つたのである。そしてエール対ハーバード、或はアーミー対ネービーのような厂史と伝統をもつたビッグゲームが全米にいくつも出来たのである。

又、アメリカでは大きな人気のあるスポーツにはシーズン制が確立されて居る。即ち野球は4月から9月迄、9月から11月がフットボールのシーズンで11月から翌年の4月までがバスケットボールのシーズンとなつている。

そしてフットボールは春に1カ月の練習期間が認められている。これは学生は本来学業を主とするので、一年を通じてスポーツをやつて居たのでは学業の成績が落ちる、それでシーズン以外は学業に専念させる、と云ふ主旨から採用されたのと同時に、一つのスポーツのみに専念すると他のスポーツをやることが出来ない。

他のスポーツにも良い処は沢山ありその良い所を学ぶのも一つの勉強であると同時に人間を不具者にしない、即ち何でも出来、そして何でも楽しめるようにする、そしてその個人の特性を生かすことの出来るスポーツを発見することが出来て、その個人とそのスポーツを発展させることが出来るのである。このようなねらいを含めてシーズン制を確立したのである。事実日本の学生のスポーツの在り方と云うものは一つの部に所属すれば一年中そのスポーツのみをやり、その者が他に優秀な能力を持つて居ても他のスポーツをすることが出来ないような制度であつて、競技者の身体を単一スポーツに特化してしまうような結果になつている。その代りそのスポーツに対してはエキスパートであるが他のスポーツの良い点を知らず、又他のスポーツの良い点を自己のスポーツに取り入れることも出来ない。その結果その個人もそのスポーツも行きづまりになつて進歩しなくなるおそれがある。

然しシーズン制を採用して、シーズン以外の時は他のスポーツをやらせることにより、他のスポーツから得た独特の技術を自分の専門のスポーツの中に採用してそのスポーツを技術的に向上させることが出来る有利な点は見のがすことは出来ない。日本においても古くは一人で2種目或は3種目の競技の選手をしたことのある人も沢山居たが、最近になり各競技共に綱張り根性が強くなり、又、閉鎖的になつて一つの競技に登録された者は他の競技に参加することは事実上不可能な様式になつたことはなげかわしい。

これも日本のスポーツにシーズン制の無いことに大きく起因していると思はれる。サッカー等も本来はウィンタースポーツであつたが最近は世界的に年間オールシーズンのようになつた。又ヴァレーボール等は室内競技の為かシーズンなしのスポーツである。矢張り少くなくともアマチュア・スポーツにはシーズンの区別はあつた方が良いと思はれる。

アメリカで高等学校や大学の学生の内に、スクール・カラーにその学校の校名のイニシャルを付けたスェーターを着て居る者がある。そしてその左腕の所に線が1本、2本、3本入つて居る。これはその学校の体育会からスポーツの正選手に送られる名誉のあるスェーターであつて、腕の横線の1本は一つのスポーツの正選手を表はしている。即ち2本入つていれば2つの競技の正選手であ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ることを示しているのである。このようなこともシーズン制が確立されていることによつて可能な事と云える。

又アメリカの学生競技には日本のようなリーグ戦形式、即ち総当りのゲームと云うものは少い。フットボールの試合でもそうであつて、一地区或は一ブロックの参加チームが毎年総当りをすることは少ない。主として対抗戦形式で2年ないし3年前にその年のスケジュールを各校同士話合で定める形式が多い。然しそのスケジュールの中には伝統と厂史を持つ試合は必ず組込まれている。

例えばA校のスケジュールの中には伝統のあるB校とC校の試合は組入れられているがその他のD校、E校は次の年は必ずしも試合をしないこともあるのである。そして強い学校は矢張り強い学校を相手に選らんでいる。例をニューイングランド地区のアイビー・リーグに加盟して居るプリンストン大学の或る年とその翌年にとつて見ると

当年			翌年
得点		失点	
20	ブラウン大学	23	ラファイエット大学
7	ペンシルヴェニア大学	20	海軍兵学校
6	ラトガース大学	22	ペンシルヴェニア大学
16	コロンビア大学	14	ブラウン大学
55	ヴァージニア大学	14	コーネル大学
47	ハーヴァード大学	7	ラトガース大学
20	エール大学	14	ハーヴァード大学
13	ダートマス大学	33	エール大学
184	計	156	ダートマス大学

となつて居り、当年プリンストン大学が勝つたコロンビア大学、ヴァージニア大学の2校は翌年の相手には選んで居ないのが目につく。そしてハーヴァード大学とエール大学には勝つて居るが、翌年の相手に選んで居るのは、伝統と厂史を持つ相手校であるからである。

尚ニューイングランド地区のアイビー・リーグの加盟校はコーネル大学、ペンシルヴェニア大学、ダートマス大学、ハーヴァード大学、ブラウン大学、エール大学、コロンビア大学とプリンストン大学の8校である。これを上の表と比較すると当年の欄ではコーネル大学がアイビーリーグの加盟校でありながら対戦して居なく、その代り他地区のラトガース大学とヴァージニア大学が対戦している。これが翌年になると、アイビーリーグのコロンビア大学が抜け他地区から海軍兵学校とラファイエット大学、それに昨年負けたラトガース大学を選んで居るのは面白い。

又中西部地区（MIDDLEWEST）の西部学生聯盟（WESTERN INTERCOLLEGIATE CONFERENCS,いはゆる米國において有名なビッグテン（BIGTEN）のノースウェスタン大学に例をとつて見れば

当年			翌年
得点		失点	
10	U.C.L.A	0	パードゥー大学

© 2004 日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

21	パードゥー大学	0	ピッツバーグ大学
19	ミネソタ大学	16	ミネソタ大学
0	ミシガン大学	28	ミシガン大学
48	シラキュース大学	0	アイオワ大学
21	オハイオ州立大学	7	オハイオ州立大学
16	ウィスコンシン大学	7	ウィスコンシン大学
7	ノートルデーム大学	12	コールゲート大学
20	イリノイ大学	7	イリノイ大学
171	計	77	

となつており、当年においては同じビッグテンに所属しているアイオワ大学、インディアナ大学とは対戦して居ないで他地区のU.C.L.A、シラキュース大学、ノートルデーム大学と対戦して居る。そして翌年にはU.C.L.A、シラキュース大学、ノートルデーム大学、をはずして、他地区からピッツバーグ大学、コールゲート大学を加え、そして同じビッグテン加盟のアイオワ大学を入れて居る。

南部地区の大南部独立聯盟（MAJOR SOUTHERN INDEPENDENTS）に所属して居る海軍士官学校は

当年			翌年
得点		失点	
7	コールゲート大学	21	南加州大学
7	コーネル州立大学	13	プリンストン大学
7	デューク大学	28	デューク大学
14	ミズーリ大学	35	ウィスコンシン大学
14	ペンシルヴェニア大学	20	ペンシルヴェニア大学
7	ノートルデーム大学	41	ノートルデーム大学
0	ミシガン大学	35	テューラン大学
0	コロンビア大学	13	コロンビア大学
21	陸軍士官学校	21	陸軍士官学校
77	計	227	

以上の様になつて居るが、同聯盟加入校のヴァージニア大学、チヤタヌーガ大学、ジョージタウン大学、マイアミ大学とは全々対戦をしないのである。

各大学共一応その地区の聯盟には加入して居るが、その加入校同士の対戦ではなく、他地区の強い学校を選択して対戦するのである。その為には2～3年前からお互に話し合つてスケヂュールを決めるのである。従つて力量の平均したチーム同士の対戦となるので、試合自体は面白くなる。それと同時に何時も同じ相手とばかり試合をして居たのではお互に手の内がわかり技術的に進歩は少ないが、他の知らない実力等も不明なそして異つたチームと試合することによつてそのチー

© 2004 日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ムの実力がついて行くものなのである。そして厂史的伝統をもつた相手との定期戦は大切にして、その年のスケヂュールに組むと云ふ念の入つた方法をとつている。アメリカは広大な土地であるのでフットボールは学生の場合はこれを9ブロックに分けて整理をしている。ニューイングランド地区（NEWENGLAND）で、ここにはプリンストン、エール等のアイビーリーグ（IVY LEAGUE）他6個の聯盟がある。

ミドル・アトランティック地区（MIDDLE ATLANTIC）で、ここには陸軍士官学校、ピッツバーグ等のメイジャー・ミドル・アトランティック・インディペンデンツ（MAJOR MIDDLE ATLANTIC INDEPENDENTS）他中部3校聯盟、西部ニューヨーク3校小聯盟、西バージニア体育聯盟、ペンシルヴェニア州教員大学聯盟、の4聯盟の他に加盟して居ない学校が30校許りある。

南部地区（THESOUTH）にはヂョージアエ科大学、アーヴァン大学の入つている南東聯盟（SOUTHEASTERN CONFE－RENCE）の他南部聯盟、大南部独立聯盟、オハイオ渓谷聯盟、南カロライナ小四校聯盟、マソン・ディクソン体育聯盟、北カロライナ州学生聯盟、グルフ州立聯盟、ディキシー聯盟、その他どの聯盟にも加入していない学校が20数校ある。

中西部地区にはミシガン、オハイオの加盟している西部学生聯盟（通称ビッグテン）、大中西部独立聯盟（これにはノートルディエム大学、ミシガン州立大学が入つている）、中米聯盟、オハイオ体育聯盟、中西部学生聯盟、イリノイ学生聯盟、フージアー学生聯盟、ミネソタ学生体育聯盟、パイオニア聯盟、ミシガン学生体育聯盟、バッジャー・イリニ聯盟、イリノイ学生体育聯盟、ミネソタ州教員大学聯盟、ウィスコンシン州教員大学聯盟、その他独立校が約40校の全米第一の賑やかさである。

ミズリー渓谷地区はアイオワ州立、ネブラスカ等の加盟しているミズリー渓谷学生体育聯盟（通称ビッグ・セヴン）、ミズリー渓谷聯盟、北中部学生体育聯盟、中部聯盟、ダコタ・アイオワ体育聯盟、アイオワ学生体育聯盟、ミズリー学生体育聯盟、ミズリー学生体育協会、中央学生体育聯盟、カンサス学生体育聯盟、ネブラスカ学生体育聯盟、オクラホマ学生聯盟、北ダコタ学生体育聯盟、南ダコタ学生体育聯盟、その他独立大学8校である。

南西地区はテキサス、アーカンサス等の加盟して居る南西部体育聯盟の他ボーダー学生体育聯盟、ローンスター聯盟、テキサス学生体育聯盟、アーカンサス学生体育聯盟、その他独立校5校である。

ロッキー山地区では、ユタ、デンヴァー等の加盟している山岳州聯盟（通称スカイライン・シックス）の他ロッキー山聯盟、コロラド2吞学生聯盟、で比較的少ない。

太平洋海岸地区はU.C.L.Aやスタンフォード等の強豪の加盟している太平洋沿岸学生体育聯盟に、カリフォルニア学生体育協会、南加州学生体育聯盟、エヴァーグリー学生聯盟、太平洋北西

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

部学生聯盟、極西部聯盟、南加州ジュニアー学生聯盟（東部地域）、南加州ジュニアー聯盟（西部地域）の多数である。

コロラド地区ではコロラド学生体育協会、南西部体育聯盟で比較的少ない。

以上のように全アメリカを9つの地区に分け、更にその地区の中に多くの聯盟があり、更に加盟していないものもある。そしてその九つの地区を統轄しているのがアメリカ学生体育協会（N.C.A.A）である。N.C.A.Aに加盟している大学は700校近くある。従つて大学でフットボールの選手をして居る学生は、10万以上にも達するのである。これが又高等学校になると更にチーム数もプレイヤーの数もふえて厖大な数になる。

アメリカは広大な國であるので九つの地区に分かれていることは前述の通りであるが、その一つの地区内でも何百マイルも離れて居る学校と対戰するのである。それが他地区、例えばアイヴィー・リーグの加盟校が太平洋沿岸地区の学校と試合する場合等大変なことである。それこそ何千哩もの旅行をしなければならないし、それに要する時間も大変なものである。特に有名校になるとそのチームの選手、コーチの他学校関係者、更に学校の応援団、その町の人や卒業生等多数参加するので、特別列車を編成して試合の行われる都市迄行くとか、又ビッグ・ゲーム等になるとスタディアムの近く迄臨時に鉄道を敷設したこともあると云うことである。

東京ガスの広報室の宇賀壌が昭和43年頃12月末日から1月初旬迄休暇をとつてアメリカ西海岸からメキシコ迄観光旅行に行つた時、ロスアンゼルスのホテルで服の胸の所にワッペンをつけた人が一杯で大騒ぎをしていたと云うことを帰朝談でして居たが、これは正月のローズ・ボウルの日に当つたのであろう。但し現在では特別列車や、又臨時に鉄道を敷設することはしないであろう。現在では飛行機の臨時便とか長距離バスを使つているのではあるまいか。

アメリカのシーズンは9月に始り11月一杯で殆どの試合は終了する。一校の試合数は5試合から10試合位の間である。そして各地区において優秀校が選ばれる。それも各地区の全チームが総当りする訳ではないので、顔を合せないチームの方が多いが、全般的に相合比較して優秀校を定めるのである。それにはフットボール関係者、新聞記者等が色々のデーターを集めて定める。そして各地区の優秀校は12月末から1月1日にかけて各地で行われるボウル・ゲームに出場するのである。

ボウル・ゲーム（BOWLGAME）のボウルはサラダボウルとかフィンガー・ボウルのボウル（BOWL）のことで日本で云うお椀とか鉢のことである。これはフットボールのスタディアムがボウルの形をして居ることに起因して居るのである。そしてそのボウル・ゲームにはそのスタディアムのある土地の名物や特産物等の名前がつけられているのはアメリカらしくて面白い。即ちパサディナのローズボウル、ニューオルリンズのシュガーボウルの様にである。

ローズボウル	カリフォルニア	パサディナ
シュガーボウル	ルイジアナ	ニュオルリンズ
コットンボウル	テキサス	ダラス

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

オレンジボウル	フロリダ	マイアミ
シュラインボウル	カリフォルニア	サンフランシスコ
ガーターボウル	フロリダ	ジャクソンヴィル
ハーバーボウル	カリフォルニア	サンディエゴ
サラダボウル	アリゾナ	ホニックス
デルタボウル	テネシー	メンフィス
パイナップルボウル	ハワイ	ホノルル
サンボウル	テキサス	エルパソ
シガーボウル	フロリダ	タンパ
レーズンボウル	カリフォルニア	フレズノ
タンジリンボウル	フロリダ	オーランドウ
プレイリーボウル	テキサス	ヒューストン
ヴァルカンボウル	アラバマ	バーミンガム
アイスボウル	アラスカ	フェアバンクス
リリーボウル	バーミューダ	ハミルトン

以上は１月１日に行はれるボウル・ゲームである。そしてその名称も上からバラ、砂糖、木綿、オレンヂ、神社、沓下止め、港、サラダ、三角州、パイナップル、太陽、葉巻タバコ、干ブドウ、タンジリン（蜜柑の一種）、大草原、ヴァルカン（火と鍛冶の神）、氷、百合とそれぞれ各地独特の名称を附しているのは面白い。そして厳寒の１月であるのでその場所もフロリダとかカリフォルニア或はテキサスと暖い地方が多いが、その内アラスカのアイスボウルは皓寒の地で行はれる。

この他 12 月には次のボウル・ゲームが行はれる。

リトルローズ	カリフォルニア	パサディナ
ノース・サウス	フロリダ	マイアミ
グレイト・レイク	オハイオ	クリーヴランド
オレンジ・ブロッサム	フロリダ	マイアミ
ブルー・グレイ	アラバマ	モントゴメリー
リフリアライト	インディアナ	エヴァンスヴィル
グラス	オハイオ	トレド
フルート	カリフォルニア	サンフランシスコ
キャメリア	フロリダ	オーランド
フィッシュ	ヴァージニア	ノーフォーク
シルヴァ	メキシコ	メキシコ・シティー
グレープ	カリフォルニア	ロデイ
ノース・サウス	ノース・カロライナ	シャロット
ペーパー	フロリダ	ペンサコラ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

テキサホーマ	テキサス	デニソン
オーリンダー	テキサス	ガルヴェストン
スピンドルトップ	テキサス	ボーモント
シュライン	アーカンソー	リトルロック

以上は 12 月に行はれるボウル・ゲームである。更に 11 月に行はれるボウル・ゲームは、

ボーリー	テネシー	ジェイソン・シティー
ホイート	カンサス	ウィチタ
コーン	イリノイ	ブルーミントン
フィッシュ	テキサス	コーパスクリスティ
テキサス・ローズ	テキサス	テイラー
リトル・オイル	テキサス	コーンロウ
ネーヴィー	イリノイ	シカゴ
ピアー	オレゴン	メドフォード
ゴールド・ダスト	カリフォルニア	ヴァリージョ

と多くのボウル・ゲームが行はれるが、ボウル・ゲームの本格的なものは 1 月に行はれるものであつて、11 月のは余り強くないチームの試合で、12 月はそれに次ぎ、本命は矢張り 1 月 1 日に行はれるゲームである。

そしてボウル・ゲームはそのスタディアムの在る地元の、その年の優秀校が他地区の優秀な成績を収めたチームを招待して行うのが主である。そしてボウル・ゲームの王様中の王様は 1 月 1 日カリフォルニアのパサデナで行はれるローズ・ボウルである。

パサデナ地方はバラの産地であつて、日本移民も多く、そしてその移民もバラの栽培に従事して居る者も多い。ロスアンゼルスの近くである。そして 1 月 1 日はパサデナでローズ・フェスタブルが行はれる。即ちバラ祭りである。この日は町を挙げてのお祭りで、午前中は町に幾組ものパレードが通る。それと共に花自動車も美しくデコレーションをして通過する。その花自動車の一台にはその年のバラの女王が乗つて町中をパレードするのである。そして午後には郊外にあるローズ・ボウル・スタディアムでフットボール・ゲームが行はれる。バラの女王の乗つた自動車はスタディアムの中迄入つて来て 10 万の観衆の声援に応える。とにかくこの日はアメリカ各地からフットボール・フアンがこの地に集つて来て大変な賑いを生ずるのである。

ローズ・ボウル・スタディアムはパサデナの郊外に建てられて居て約 10 万の観衆を収容するアメリカでも屈指の大スタディアムである。終戦後昭和 25 年頃だつたか、日本のプロ野球の巨人軍がアメリカに遠征したことがあつた。その時は太平洋岸の都市で何回か試合をしたのであるが、その内ロスアンゼルスで試合をするのについてロスアンゼルスの市をバスに乗つて出発した。しばらく行くと前方に大きな立派なスタディアムが見えたので巨人軍選手一同、大変張り切つて

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

あの様な大きな立派なスタディアムでゲームが出来ると一同大嬉びをしたのだそうだ。しかしバスはその手前の道を横に入つて行つて停車した処は草野球の試合をするような小さな球場であつたので一同ガッカリしたそうである。そして試合が終つてからあの立派なスタディアムは何かと質問するとローズボウルスタディアムであると聞かされ、是否一度スタディアムの内部を見たいと頼んで帰りに立寄つて見せてもらつた処、フィールドはジュータンを敷いたような美しい芝生がビッシリと植えられて居り、又10万人を収容するスタディアムの偉大さに一同驚たんし、この様な立派なスタディアムで試合が出来るのならば野球を止めてフットボールの選手になりたいと云つた位である、とこの時読売新聞の記者として同行した日本ホッケー協会の理事広堅太郎氏がこの時の話を私にしてくれたことがある。

何しろこのスタディアムは1年に1回ローズボウルゲームにしか使用されないし、又このローズボウルに備えて年中整備して居るのである。芝生も充分に手入されて居る。アメリカのスタディアムは殆どフットボールの為のものであるから年に何回も使用されないのが普通である。そして使用される期間は9月から11月の3カ月で、その間自分の学校がホーム・チームになつた時しか使用されないから、多くても年十数回の使用である。それでシーズンオフの時は芝の育生の為にフィールドに山羊を放牧して置くのだそうである。山羊は適当に芝を食い、その糞が又その肥料になつて芝の育生を助けると云うことを聞いたことがある。このローズボウルスタディアムは年に1回しか使用されないのでその芝生も見事で巨人軍の選手もうらやましかつたことは想像される。そしてこの時の話を広堅太郎氏は更に話してくれた。それはこの時巨人軍を乗せたバスの運転手が、日本の一番強い野球の選手を乗せて大変名誉なことだと感激して私の一番大切にして居るものをこの記念に皆にプレゼントしたいと云つて持ち出したものが過去何年間かのローズボウル・ゲームのプログラムであつたそうだ。それでさすがの巨人軍の面々もビックリしたと云うことである。その運転手にすればそのプログラムは何より大切な宝物であつたのであろう。それを呉れると云うのだからその運転手は余程感激したものと思われる。

又、このローズボウルゲームの日は皆自動車で見物に来るので、自動車置場がすぐ一杯になつてしまう。それでスタディアム近くの民家では臨時に自分の庭をパーキングにして一台いくらと金を取つて自動車を置かせるのだと云うことも聞いたことがある。

このローズボウルゲームは厂史は古く第1回は1902年に行われて居る。この時はミシガン大学がスタンフォード大学を49対0の大差で敗つて居る。1902年からどう云う訳か1916年迄試合は行われていない。そして1916年は復活され、この時はワシントン州立大学がブラウン大学に14対0で勝つている。そしてその後は毎年行われて居る。

シュラインボウルの東西選抜軍対抗のボウルゲームは毎年1月元旦にサンフランシスコで行われるが、これは第1回が1925年に行われて居る。

マイアミのオレンヂボウルは1933年の元旦から開始されている。ニューオーリンズのシュガーボウルの創設は1935年と比較的新しい。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

又、ダラスのコットンボウルは1937年から始つて居る。1920年にプロのフットボールがアメリカに誕生した。最近でこそプロも大変な人気を呼ぶようになつたが、第二次世界大戦後のことであつて、それ迄は余り人気はなかつた。野球はプロのものであり、フットボールは学生のものと一般に思われて居た。プロのフットボールが学生のフットボールのように人気がなかつた原因の一つには応援団が無かつたことである。それ程フットボールの応援は組織化されて美事なものである。

前述のアサヒスポーツの中尾氏もその応援の見事さ、スケールの大きさには驚いて書いている位である。それでプロの方もそれに気がついて組織的な応援団を各チームが持つようになつてから人気が出て来たと云うのである。それ程フットボールと応援は切り離すことの出来ない様な関係にあるのである。

フットボールの応援の方法はしばしば日本の野球等にも取入れられて居る。即ちスタンドに人文字を書いたり、又、ブラスバンドを使つたりする応援はアメリカのフットボールの応援を真似たものである。アメリカにおけるフットボールの応援は試合開始前とハーフタイム間に応援団がスタンドからフィールドに降りて来てフィールド内でバンドを先頭に色々とパレードを行うのである。パレード好きのアメリカ人の考案しそうなことである。そして試合中はスタンドで応援するのは勿論であるが、そこには多くのリーダーが居て統制のとれた応援をする。

更にリーダーの他にチヤーガールと云う女子学生のリーダーも居て飛んだり跳ねたりして見事な応援をするので、観衆もゲームと応援と両方を一緒に楽しんで見物するのである。このようにフットボールとその応援は切つても切れない関係にあることに気がついたプロでは、各チーム共相当の経費を出して自軍の応援団を持つた。そしてその応援団も学生応援団と又変つた応援を採用した。それはプロらしい華やかな応援で、全く白書の大きな舞台でショウでも見るような美しい応援で、それは応援と云うよりはショウである。

人数においては学生に及ぶべくもないが、女子を多く使い、しかもその衣装の美しさにおいては学生以上のものがある。又その踊りもよく洗練されて美しく、プロフットボールの人気がそれによつて増加したようなものである。プロの試合はアマチュアの試合とルールが多少違つて、見て面白くスピーデーになつて居るが、その為多少の危険はまぬがれない。

このようにプロも色々と趣興をこらして発展に努力したので現在ではアメリカン・リーグとナショナル・リーグの野球と同じように二つのリーグがあつて、各リーグ共20位のチームが加盟し9月から12月迄ペナントレースを行い、両リーグの優勝チームが1月下旬にスーパー・ボウルによつてその年の覇権を爭うのである。これは野球のワールド・シリーズと同様であるが、プロの試合にも多くの観衆が集つて充分に採算がとれるようになつて来た。

学生のフットボールには毎年オール・アメリカと云う言葉がある。これはその年にプレーをした各チームを見て、その中から優秀な競技者を各ポジションについて1名づつ選抜するのである。その第1回は1889年に前述のウォルター・キャンプによつて選衡されて以後毎年11名づつ選ばれて居る。プレイヤーとしては最高の栄誉であることは当然のことである。そしてこれはライン

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

はエンド、タックル、ガード、センターと選出されるが、バックは只單にバックとして4人が選ばれるのである。そして準オール・アメリカも同様にして選抜される。

1869年11月6日ニューブランスィックでラトガース大学とプリンストン大学の間で行われた試合を最初として、それから約100年の間にアメリカでは、フットボールは國技にまでなつてしまつたのである。

そして現在では大学、高校その他のチームを数えるならばその数は数万に達するのではなかろうか。更に中学校以下の子供には危険なタックルやブロックを使はないタッチフットボールやフラッグフットボールが盛んに行われて居る。タッチフットボールは勿論道具は用いないで両手でランナーに触れるとタックルと同様な効果を認め、フラッグ・フットボールは腰にハンカチーフをブラ下げて、そのハンカチーフを取られればタックルと同様と云う子供用の危険のないゲームである。更にハワイあたりでは道具をつけないで普通のフットボールをもやつて居る。それはベアフットボールと云はれて居る。

このように1869年11月6日ニューブランスィック州でラトガース大学とプリンストン大学の間で初めて行われたフットボールは全米に瞬く間に広ろがつて開拓精神の旺盛なアメリカ人に気質に合致しアメリカを語るにはフットボールを忘れることは出来ないようになつてしまつたのである。

それでニューイングランド地区におけるコーネル、ペンシィルベエニア、ダートマス、プリンストン、ハーバード、ブラウン、エール、コロンビアの東部における名門校8大学ではフットボールの開拓者でもあると云ふ誇りをもつてこの8校でアイヴィー・リーグ（IVY LEAGUE）を作つて居る。そして現在でもその加盟校の実力は全米でも屈指のものを持つて居る。然しアイヴィー・リーグよりは後進ではあるが、中西地区のミシガン、ノースウェスタン、ミネソタ、オハイオ州立、アイオワ、パードゥー、インディアナ、イリノイ、ウィスコンシン、それにノートルデームの10大学で作つているウェスタン・インターカレッヂエイト・コンフェレンス（WESTERN INTER－COLLEGIATE CONFERENCE）は通称ビッグ・テン（BIGTEN）と云つてこのリーグに加盟しているチームの実力は全米NO1と云つても過云ではなく、殆ど毎年のようにローズ・ボウルに出場して居る位である。

このビッグ・テンに対抗する実力を持つて居るのが太平洋沿岸地区のパシフィック・コースト・インターカレッジエート・アスレティック・コンフィレンス（PACIFICCOAST INTER－COLLEGIATE ATHLETIC CONFERENCE）で、これに加盟して居るのがカリフォルニア、オレゴン、南カリフォルニア、ワシントン州立、オレゴン州立、スタンフォード、ワシントン、U.C.L.A、アイダホ、モンタナの10大学であり、このリーグの最優秀校がその年のローズ・ボウルのホーム・チームとなつて、その地区以外の優秀校を招待するのである。

その他に強い実力を持つて居る有名校は、ニューイングランド地区のボストン大学、コネチカット大学、マサチーセッツ大学、ニューハンプシヤ大学、ヴァーモント大学、乾盃の歌で有名な

© 2004 日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

メイン大学で、中部大西洋地区では、陸軍士官学校、ピッツヴァーグ大学、フォーダム大学、ニューヨーク大学、シィラキュース大学、ラトガース大学、南部地区でジョジア大学、ジョージア工科大学、ミシシッピー大学、アラバマ大学、テネシー大学、フロリダ大学、ルイジアナ大州立大学、デューク大学、ヴァージニア大学、マイアミ大学、海軍兵学校、で中西地区ではビッグ・テンの他ミシガン州立、ミズリー渓谷地区ではオクラホマ大学、ミズリー大学、カンサス大学、ネブラスカ大学、コロラド大学、アイオワ州立大学、カンサス州立大学、オクラホマ A&M 大学、ウィチタ大学、南西地区ではサウザン・メソヂスト大学、テキサス大学、ライス大学、アーカンサス大学、テキサス・クリスチャン大学、テキサス A&M 大学、アリゾナ大学、ロッキー山地区ではユタ大学、コロラド A&M 大学、デンヴァー大学、で太平洋沿岸地区では太平洋沿岸学生聯盟の他にはネバダ大学、サンタ・クララ大学、セント・メリー大学、サンフランシスコ大学、ハワイ大学、と数多くコロラド地区ではウインストン・サレム大学、西ヴァージニア州立大学、等全米各地には有名校、強力校等数え切れない位ある。

そしてそれぞれの学校にはペットネームが付いていてそれを呼称するのである。例えばノートルデューム大学にはアイリッシュと呼ばれるようなものである。又チームによつてはゲームにマスコットを持ち出す所もある。例えば陸軍のロバ、海軍の山羊と云うのは代表的なものである。
そしてシーズン中は他の競技は殆ど影をひそめ、フットボール一色に塗りつぶされてしまう。ラジオもテレヴィもフットボールの中継放送で忙しくなるのである。

とにかく秋のアメリカは何処に行つてもフットボールだけになつてしまう。それはアサヒスポーツに中尾済氏が呆れて書いている通りである。そして一般の人も皆各々自分のひいきチームを持つて居り、そのチームの応援に忙がしい。そしてグラウンドに応援に行く時は自分の応援するチームのバッヂを胸につけて応援するのである。とにかく秋のアメリカはフットボールに明けてフットボールに暮れるのである。

昭和 25 年頃であつたか、朝鮮戦爭の最中にその当時の大統領はトルーマンであつたが、そのトルーマンと極東の米軍司令官マッカーサー元帥とが政策の打合せを太平洋の真中のミッドウェーで行つたことがあつた。トルーマンは米本国から、そしてマッカーサーは東京から夫々飛行機でミッドウェーまで飛んだのである。丁度その日は 11 月の末の土曜日でフィラデルフィアーのスタディアムでは陸軍士官学校対海軍兵学校のフットボールの試合が行はれて居たのである。
それでトルーマンもマッカーサーもミッドウェーの空港に着くやその第一声は陸海軍のフットボールの勝敗とスコーアーを地上勤務の者に聞いたと云ふことである。これは当時の日本の新聞にも出ていたことである。朝鮮においては激戦が展開されている最中に、その重大な会議をする為にはるばるミッドウェーに来た米國の両巨頭の第一声がフットボールのことであつたとは面白いが、それ程アメリカにおいてはフットボールの人気と云ふものは大変なものなのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

日本におけるフットボールの厂史

日本におけるフットボールの創立は、昭和 9 年 11 月 29 日木曜日アメリカ感謝祭の日である。
これは西厂で云えば 1934 年である。アメリカのニューブランスィックでラトガース大学とプリンストン大学が初めてフットボールの前身である当時のサッカーの試合を行つた 1869 年から 65 年経過した時である。然し考えて見ると、まだフットボールの形式をとつていない、フットボールの前身であるサッカーがアメリカで正式なゲームとして行われてから僅か 65 年しか経過していないのに、正式なフットボールとして日本に伝わつたのは厂史的に見て早いとしか云いようがない。ましてウォルター・キャンプが 1 チーム 11 名の現代の基礎となつたフットボールを考案したのは 1880 年であつたから、これから見ると日本にフットボールが移入されたのは 54 年後と云うことになる。

こうして見るとアメリカンフットボールがアメリカで考案されてから日本に移入される迄はそれ程長い期間がかかつて居なかつたと云うことになるのである。
然し日本には明治維新以来、外國の文化を吸収するのには呑慾であつた。経済の面において然り、文化の点において然り、明治時代は文明開化に狂奔したと云つても過云ではないであろう。この文明開化に從つてスポーツも外國のものがどんどん移入されて来た。明治に引続いて大正にも又新しいスポーツが日本に入つて来た。そして日本は世界各國のスポーツの展示國のような様相を呈して来たのである。然しこれ程世界のあらゆるスポーツが移入された中にフットボールだけは昭和 9 年迄日本では行はれなかつたのは何故であろう。

それには色々と理由があつたと思われるが、
その第 1 には当時のフットボールは余りにも危険であつたと云うことで、それに恐れをなして移入することをためらつたと云うのが大きな原因であろうと思われる。前にも書いた様に 1906 年に 11 名死亡、それ以降毎年 10 名以上死亡し、1923 年には 18 名、1925 年には 20 名と云う死亡者を出して居る。1906 年は明治 39 年で、1925 年は大正 14 年である。丁度明治の後半から大正にかけて外國のスポーツが続々と日本に入つて来た時代であるので、その頃の死亡者がアメリカでも一番多かつた時である。死亡者が 10 数名以上 20 名もあるとすれば、フットボールによる負傷者の数は膨大な数に達して居たであろうから、危険と云うことが第一印象となつて、日本でこのスポーツを行うことに二の足を踏んだのであろう。

第 2 の理由としては用具に金がかかると云うこともあつたのであろう。当時日本は世界の小國であり、貧乏國であつた。それで只單なるスポーツの為に金をかけると云ふことは仲々困難であつたと云うことは想像出来る。

第 3 の理由としてはアメリカ人が積極的でなかつたと云うことである。特に日本に来て居たアメリカ人に積極性がなかつたのではなかろうか。英國人は古くから植民地政策には積極的であり、ある地点に植民地を設定すると自國の文化をドンドンと移入し、その地点を本國化させる方法を

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

採用して、それによつて植民地をふやして来た。その習慣があるのでスポーツも本國のスポーツを新しい土地に移入させて、その國に行わせたのである。然しアメリカ人は元来移民國であつて、むしろ古い時代にはそのようなことをさせられた國であるので、そのようなことは積極的でなかつたのではないか。それと同時に当時は英國人に比較してアメリカ人の日本に駐留して居る人数が少なかつたのではなかろうか。それともう一つ日本に駐留して居た当時のアメリカ人は自分の仕事に忙しくて他の方面まで手が廻らなかつたのであろう。当時アメリかで猛烈な勢で普及していたフットボールの日本に移入することに積極的な行動をとらなかつた。

以上のような理由によつて、まだ日本にはアメリカンフットボールの移入がなかつたのである。

然し前にも書いたように昭和9年11月29日に初めて日本でフットボールの試合が行われたのである。これは突然起つたことではなく、当然日本にもフットボールが行われるような基盤が出来ていたのである。

それは前にも書いたように昭和の初期の3年4年頃から映画に、雑誌に、そして新聞にフットボールに関することがしばしば出て来た。それによつて一般にもフットボールに興味を持つ者がふえて来たのは当然である。それと同時に昭和5年頃からアメリカ生れの二世が日本の大学に続々と留学して来たのである。

明治時代の中頃からアメリカはハワイもしくは西部地区の開発のための安価な労働力として中国人と共に日本人の移住を認めた。それで日本人も多数移民船に乗つてハワイ、カリフォルニア方面に出かけたのである。これが即ち一世であつた。ところが昭和4～5年以後になると、この一世達の子供、即ち二世が大学入学の年頃となつたのである。一世の聯中は貧農や日本を食いつめた人達が多く、日本に居てもうだつが上らなかつたが、アメリカの新天地に行き、そこには多くの苦労があつたが、その苦労に打勝つた成功者は多く、そしてその人達は金をも持つようになつた。

そうなると自分達は小学校も卒業出来なかつた弱味もあるので子供だけには高等教育を受けさせたいと云う願望を持つようになつた。事実移民となつて移住して見ても常に白人達に押えられて居たので、その反発もあつて白人に勝つ為には立派な教育を受ける必要をつくづくさとつたのである。然し米國の大学に入学させるのには大変金がかかる。それと明治生れの第一世には故郷を懐しむ気持が強く、移民としてアメリカには来たが成功して、金を持つて生れ故郷に錦を飾つて帰りたいと云う気持が強くあつたのと、もう一つにはそのことも含めて子弟には日本の教育を受けさせてやり度いと云う気持もあつたのであろう。それで大学の教育は日本でと云う者が多かつた。

当時日本の円とアメリカのドルとの関係は大体2対1であつた。即ちアメリカの1ドルは日本の2円に相当したのである。ところがアメリカの大学に入学すると、その経費は1ヵ月少く見積つても100ドルは必要であつた。それが当時の日本では大学卒業者の初任給が50円位であり、朝夕2食付きの下宿料が月額20円位であつたので、アメリカの大学に入学した時の経費の半額の50ドルも送金すれば、日本では100円になつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

100円の月給取りともなれば会社では係長クラスである。大変にぜいたくな生活が出来る。それと同時に出費は半額ですむのであるから大変有利である。又第二世は現在の三世、四世と異つて日本語の勉強もして居たし精神的にも日本人であつた。それは一世は殆ど英語が出来なかつたので、家の内では日常日本語を使つており、又小学校、中学校の正式の学校はアメリカの学校でアメリカ人と一緒に勉強して居たが、放課後は日本語の学校へ行つて日本語の勉強もして居たので、日本語にも割合に不自由しなかつた。

それから又彼等の両親は日本に大人になる迄居た。その風俗習慣は日本のものをそのままアメリカでも実行して居たので、二世もそれを受継いで精神的にも日本人であつた。現在の三世四世になるとそれらのものがだんだん薄くなつて、日本語も話せない精神的にも全くアメリカ化してしまい、顔だけは日本人でその他は全くのアメリカ人と云うのが多くなつて来た。

それで日本の各大学にはハワイやカリフォルニアの二世が沢山留学して居た。そして彼等はアメリカ人であると云う気持より日本人の気持であつた。その二世はアメリカにおいては小学、中学、高校を通じて大なり小なりフットボールと云うものを知つて居たことは当然のことである。

以上のような要素が備はつて居たのでフットボールが日本に移入されるのは時期の問題であつたと云うことが出来る。ある日突然フットボールが日本に移入されたのではなく、日本にはフットボールを受入れる準備とチャンスは充分に熟し切つて居たのである。

昭和9年の春頃からその気運は動きつつあつた。その当時、立教大学の教授であつたポール・ラッシュ（PAUL　RASH）氏を中心に、同じく立教大学体育主事ジョージ・マーシヤル氏、明治大学教授松本瀧蔵氏、立教大学教授小川徳治氏、アメリカ大使館付武官ジョージ陸軍中尉、同ブース陸軍中尉等がグループを作り日本にフットボールを移入する協議を開いた。勿論これには駐日アメリカ大使ジョセフ・C・グルー氏も大変に熱を入れていた。

その会議は主としてポール・ラッシュ氏の自宅である東京池袋の立教大学第4号館で行われた。ポール・ラッシュ教授はテキサス州の生れで米國聖公会に所属し、東洋方面を担当し、東南アジアを経て大正の末、日本に来たのである。そして日本聖公会に所属して聖アンデレ同朋公と立教大学教授となつた。そして彼は第二世の面倒をよく見て居たので日本在住の第二世との聯絡をとるのにも大変都合のよい人であつた。又松本瀧蔵教授は第二世であつたが、早くから日本の大学に留学して、卒業後引続いて母校明治大学の教授になつた人である。1958年病死されたのは残念であるが、フットボールだけでなく終戦後は進駐軍と日本政府との聯絡に色々と活躍していた。

ジョージ・マーシヤル氏は1925年から1928年までオハイオ大学のフットボールでクォーターバックをやり、名選手として鳴らし、又同大学のバスケットボールのキャプテンもやつた人で、同校卒業後立教大学の体育主事として立教大学の体育、体操を担当すると同時に立教大学のバスケットボールのコーチもして居たのである。

小川徳治氏は立教大学卒業で、在学中はサッカー部に所属していたが、卒業後立教大学に残り、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ペンシルベニア大学に留学し、帰朝後は立教大学商業英語の教授となつた。ポール･ラッシュ氏とは師弟の関係にある人である。ジョージ中尉は1919年に米國陸軍士官学校フットボールの主将であり、又オール・アメリカにも選抜された名クォーターバックである。

ブース中尉は陸軍士官学校の1917年から1918年にガード、タックルで活躍した人である。

このように権威のある人々が集まつて色々と日本にフットボールを普及させる為の協議を盡したのである。然しフットボールが移入される可き気運は日本には充分あつたのではあるが、何しろ無から有を生み出すのであるから色々の困難があつたのである。競技をする者については多少でもアメリカで経験のある二世を中心にすれば何とか出来るが、その数だけでは足りないので無経験の日本の学生も入れなければならないし、又普及も出来ない。

又、用具その他を購入するのに金は必要である。その金の調達法をどうするか。更に日本の運動具屋では全々無経験な用具の製造の方法をどのように指導して作らせるか、等々色々と困難な問題が山積していた。

それで昭和9年春頃から何回もこれ等の人々が集合して協議を繰り返えしたのである。それで競技者についてはポール･ラッシュ氏及び松本瀧蔵氏が中心になつて在日二世の学生に働きかけて勧誘をし、更にその二世を使つて学内の希望者を集める方法をとつた。然しその他の用具の点で運動具メーカーを動かす件や、又日本國内でやるのであるから、國内のスポーツ事情にくわしい者が居なくては何かにつけて不便であるので、当時朝日新聞の運動部の記者をしていた立教大学ラグビー部のO.Bの加納克亮氏を一枚加えて、フットボールのP.Rと國内の聯絡のために有利にしようとした。

資金の点については仲々困難な問題であつたが、これはアメリカ大使館及びポール･ラッシュ氏が横浜にあるY.C.A.C　(YOKOHAMA　COUNTRY　ATHLETIC　ASSOCIATION) に働きかけて、在日米国人から寄付を募集する方法を採用することになつた。それでポール･ラッシュ氏は自分で文章を作り、自分でタイプライターを打つてY.C.A.Cのメンバーに手紙を発送した。Y.C.A.Cとはその名のとおり横浜にある外人の体育聯盟で、横浜の根岸の山の上に立派なクラブハウスと、芝生の美しいグラウンドやテニスコートから体育館まで備えた日本には外に例を見ないような立派な施設を持つたクラブであつた。そして其所には東京、横浜地区に在住して居る外人が日曜日毎に集つてスポーツを楽しむ機関であり特にラグビーやサッカー等は相当の実力を持つチームがあり、日本の一流のチームと対等の試合をして居たのである。

これと同様な外人クラブが関西にもあつた。それは神戸にあつて、K.R.A.Cと云つて居り、京阪神地区在住の外人がスポーツを楽しむ機関であつた。しかしそれは外人専用の施設であり日本人が自由に使用することは出来ない、招待される場合の外は日本人の使用は出来なかつた。そしてY.C.A.Cの場合でもK.R.A.Cでも同様であるが外人のスポーツ機関であると云うことは、外国人全体のことであつて、アメリカ人とか英国人とか一國の日本在住して居る外人のことではない。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

外人全体である。即ちアメリカ人も英国人もフランス人もベルギー人もドイツ人もイタリア人もあらゆる外国人が加入することが出来、そして使用することが出来るのである。その当時日本に在住して居る外国人は現在よりは大部数は少なかつた。然し日本に在住して居る外国人は宗教関係、商社関係、外国企業関係、教育者とかで現在のように得体不明な外国人は少なく、何れも彼等自身の母国においても相当な地位の者が多かつた。そして彼等は母国の企業なり団体から日本に派遣されて居たので金も相当持つては居たが、アメリカ人だけではないのでフットボールの寄附金募集についてもその点において苦労があつたと思われる。

事実それまでこれらの外人クラブで行われて居たスポーツでフットボールは行われて居なかつた。彼等の間で行われたアメリカのスポーツはバスケットボールと僅かに野球が少し行われて居たのみである。Y.C.A.Cではラグビー、サッカー、ホッケー、テニス等は盛んであつた。このようなクラブに寄附金を募集するのであるから、アメリカ人は当然フットボールに関しては良く理解はあるが、英国人やドイツ人、フランス人はフットボールは全々未知なものであるから寄附金についても仲々うまくは行かない。然し金持の外人でありクラブのアメリカ人の説得などにより一定の寄附を得ることが出来たのはポール･ラッシュ氏やアメリカ大使館関係者の盡力によるものが多く、フランス人もベルギー人も英国人も寄附してくれたのである。その外、日米協会にも寄附を依頼したのである。それで一応スタートする位の金は出来る見透しはついたのである。

金の方は充分とは云えないが一応の募金の見透しはついたが、道具の方をどうするかが又大きな問題であつた。何しろ日本に初めて行われようとするスポーツであるので、当然それまでは日本においては需要はなかつたのである。

従つて運動具メーカーでもフットボールの用具の製造はしていなかつたし、又その研究もしていなかつた。それならばアメリカから輸入するのも一つの方法ではあるが、それには多額の資金を必要とするし、又その方法であれば一時的には間に合うであろうが、フットボールを日本の土地に植え付ける為には非常に不安定である。それで何とかして日本で用具を製造させる方法を採るようにする必要がある。が運動具メーカーでも見たことも作つたこともない用具であるし、又それを作らせるには金型だとか、その他の資材だとか相当の資金が必要である。それを負担してまでフットボールの用具を製造するメーカーがあるだろうか。業者とすればフットボールはアメリカでは国技として非常に盛んなスポーツであると云うことは充分に知つては居るが、それが日本に移入されてどの位発展するかは不明である。

更に用具を製造する設備を用意しても、その採算がとれるかどうかは非常に不安である。どの運動具メーカーでも二の足を踏むのは当然のことであつた。

その件について設立準備委員会では何回も協議をくり返えし、その結果、日本のスポーツ事情にくわしい加納氏に依頼して方々の運動具メーカーに相談した。その当時日本でもアイスホッケーは盛んになつて来て、アイスホッケーの用具を製造するメーカーはあつた。それでその方面のメーカーにあたつた結果、アイスホッケーの用具メーカーとしては経験の豊富な、東京牛込の矢来下にある玉沢運動用具店で製作を引受けて呉れたのである。然し玉沢運動具店でもアイスホッケーの用具は製造しているが、フットボールの用具は造つたことがない。それで委員のジョー

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ジ・マーシャル氏が学生時代に使用した用具一通りを持つて来ていたので、それをサンプルとして用具の製作を初めたのである。マーシヤル氏の持つていた用具はマーシヤル氏がオハイオ州立大学の現役時代に使用した用具であるので、1928年頃のもので6年位の時代遅れのもので、その当時すでにアメリカでは新型のものが出来ていたが、その新型はまだ誰も持つて居なかつた。ヘルメットは今のように固いものではなく、外側は皮革で出来て居り、内側にフェルトを貼り、強く押すと二つにたためるようなものである。ショールダーパッドも外側は固い底皮で内側にフェルトを貼つたものであり、ヒップパッドはパンツの附属物のようになつて居た。それでパンツをはくと、腰から上の部分にヒップパッドの一部がユニフォームの上に出るような型になつて居た。

そのように1928年頃の旧式な型で、新型の用具は誰も持つていなかつたし、又、知らなかつたので、その旧型をサンプルとして玉沢では製造にかかつたのである。玉沢運動具店でも日本で初めて作るものであるから依頼を引受けては見たものの、大変な苦労をしたことと想像される。

それで一応プレイヤーの件、資金の件、用具の件と一番困難であつた件も解決する見透しが出来たので、それでは何時日本における第一の試合を挙行するかを決定しそれのP.Rをしなければならない。

昭和9年の5月頃に最初の話が出てから、これだけの準備をするのに4ヵ月位経過し、すでに9月の中頃になつて居た。それで9月中頃の会議では第一試合を何月何日に挙行するかについて協議された。そして用具が出来上るのは玉沢で努力はしているが10月末日頃がせい一杯でそれより早くは不可能であると云う条件が先づ第一であつた。設立準備委員会としては10月中頃から開始して11月一杯で終了したいと考えて居た。プレイヤーの方は一応、早稲田大学、明治大学、立教大学の三校にチームが出来ることが確実になつていたし、資金は目度がついたが、道具が出来ないのでは試合が出来ない。

10月末日にならないと道具が出来ないのでは、試合は11月中以降に行うより仕方がなかつた。それで協議の結果11月29日（木曜日）アメリカ感謝祭の日に、フットボール設立の為大変援助してくれたお礼にY.C.A.Cと明治神宮外苑競技場で日本最初の試合を挙行することが決定された。

そして日本側はこの三大学を中心とした学生選抜軍と決定した。選抜軍のコーチにはマーシャル氏ともう1人立教大学体育主事のE・ファウラー氏が当ることも同時に決定された。

早稲田、明治、立教の三大学には9月早々にしてチームが出来た。早稲田、明治には当時、アメリカ、ハワイの二世が多く留学して居たのでチームを作るのには割合に簡単に出来たが、立教大学はその当時予科、学部の全学生を合計しても1,200名が定員である関係上、二世の留学生も殆ど居なかつた。早稲田の20,000名、明治の10,000名に比較して学生の数が極端に少なかつたのである。その為に二世の留学も少なかつた。然しポール･ラッシュ、ジョージ・マーシャル、小川徳治、加納克亮とフットボール設立準備委員会の重要人物が立教大学関係者である以上、立教大学にチームを作らない訳にはゆかなかつた。それで立教関係の委員が色々考えて、当時学部の一年に居たカリフォルニアから留学して居た二世で太田次郎、通称ジミーを先づ中心にして、ラグビー部、ホッケー部、バスケットボール部、角力部、矛道部、拳斗部等からレギュラーの選

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

手には一寸なり得ないような者を選んで勧誘をしたのである。いわゆるラグビー部くずれ、角力部くずれとでも云う者である。それでともかくチームを作つてそれ等に練習をさせて成長させ、それ以後は正規に入部する者をふやして行こうと云ふ考え方であつた。これは立教大学だけに限らず早稲田大学においても明治大学においても、その数の大小はあるが同じような他の部のくずれが入つて来たのである。

そのようにしてフットボールに未経験な日本人を養成していかなくては、フットボールはあくまでもアメリカの競技になり、日本においては二吞のスポーツになつてしまつて、フットボールが日本に根を降すことが出来ないからである。

このようにして立教大学ではプレイヤーを集めたが、それでもまだ不足しているので一時的にでも他の運動部からプレイヤーを借りてチームを編成すると云う大変苦しい努力をしたのである。

このようにして早、明、立の三大学には9月中頃、すなわち第二学期の開始早々にチームを編成して練習を続けては居たが、その頃はまだ第一回の試合の日取りも、相手もまだ決定していなかつた。然し準備委員会の方で11月29日米國感謝祭の日にY.C.A.Cと神宮競技場でやると云ふ大きな目標が決定され、プレイヤーもやつと張り切ることが出来るようになつたのである。

その当時、東京には正式にスタンドを備えて観客を収容するようなグラウンドは明治神宮外苑競技場以外にはなかつた。それで外苑競技場は陸上競技、ラグビー、サッカー、ホッケーと各種のスポーツ団体が使用し、春秋のシーズンの土曜日、日曜日はとても取ることが出来ないような状況であつた。

しかし平日は割合に空いて居たので、加納氏が神宮側と交渉して11月29日に確保することが出来たのであるが、これにも相当な困難があつた。何しろ日本のスポーツは日本体育協会がこれを取り締つているような形になつて居り、体育協会に加盟していないスポーツ団体はスポーツではないように思われて居たのである。更に昭和9年と云えばそろそろ日本の軍國主義化が進んで来た頃である。即ち昭和6年に満州事変が起き、これが飛火して第一次上海事変にまで発展し、日本國内は戦爭状態に入る道を突進していたのである。

昭和9年頃は一応、満州事変は終息しては居たが國内の軍國化は進んでおり、昭和12年の支那事変へと情勢は邁進して居り、その間に國内においても不穏の情況を示しつつあつた。そして軍の尻馬に乗る官庁は一般をして益々國粋化に指導して居たのである。このような時期にスポーツとは云えアメリカのスポーツを取り入れようとするのであるから、その困難さは相当なものであつた。又一方、考え方によれば、このような時期であつたからこそ対米親善の必要もあつたのではなかろうか。アメリカ側としても対日感情をやわらげる為には日米の交流を計る必要があつたのかも知れない。いわゆる日米外交親善上、或は対外國のゼスチャーとしても、日米親善の実を内外に示す必要があつたのでフットボールと云うスポーツを通じて民間の親善を計つたのかも知れないが、その当事者としては種々の困難な問題を一つ一つ解決して行かなければならなかつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

その一つに明治神宮外苑競技場使用についても同様なことがあつた。明治神宮と云えば日本の代表的な神社である。その頃からボツボツ叫ばれていた神國日本の象徴の大本山でもある。その神域にある競技場でアメリカのスポーツの発足をすることについては多くの異論があつたことは想像出来る。

然しそのような時期にこそアメリカとの親善の為にも外苑競技場で発足する真の意義があると云えるだろう。とにかくこれの折衝にあたつた加納氏もバックに朝日新聞と云うマスコミを背負つて交渉して、平日であると云う好条件もあつて明治神宮外苑競技場を借りて第一回の試合を挙行することが出来たことは、大変な成功であつた。

一方プレイヤーの方はチームを編成して練習を始めたが、まだ用具が出来ていないので、本格的な練習は出来なかつた。主としてフォーメーションとコンビネーションの練習のくり返えしであつた。それでも 11 月 29 日に第一試合が決定して一同大きな目標が出来て張り切つて練習をしたのであるが、悲しいことには専用のグラウンドは、勿論ある筈がない。それで他の部がグラウンドの使用していない時間を見計らつては練習をすると云う不安定なものであつたが、それでも皆一生県命に練習を続けたのである。然し、練習許りを続けているとどうしても飽きが来て、何とか試合がやりたくなつて来るのは当然のことである。然し試合をするには用具がまだない。そこでハワイで行はれているベア・フットボールで試合をしようと云うことになつた。

ベア・フットボールとは、ルールは正式のフットボールのルールを使い、用具は両チーム共全々使用しないで行うフットボールである。ヘルメットも、ショールダーパッドも、スパイクシューズもお互に使用しないのである。相方共用具を用いないから危険度も少ない訳である。そのベア・フットボールで練習マッチをやることになつた。このゲームが真の日本最初の試合であると云えるかも知れないが、正式のフットボールでないと云う理由で表面には知られていない。

この試合は明治大学在学中の二世が組織しているシグマ・ヌ・カッパ対在日ハワイ二世との対戦で、昭和 9 年 10 月 25 日午後 1 時 30 分から池袋の立教大学のグラウンドで行われた。

この試合の予告を朝日新聞 10 月 25 日付では、次の通り書いている。

「日本で最初の米國式フット・ボール戦　　けふ立教球場で挙行

アメリカンフットボールの持つスピードと迫力はかねてから我が國青年の間で憧憬の的となつて居り、嘗ては東高師、水高或ひは横浜高工等でこれが研究並びにチームの組織を志し最近では慶応及び立教等の学生間でこの新時代スポーツに対する関心を持つ者が漸く多きを加へて来たが、今回明大在学中のアメリカ及びハワイの邦人第二世聯中が組織して居るシグマ・ヌ・カッパ倶楽部が中心となつて同大学の松本瀧蔵教授や立大のマーシヤル体育主事等と諮つてこれが具体化に努めた結果、在京のアメリカ生れ第二世邦人の選抜軍と 25 日午後 1 時から池袋立教球場で松本教授のレフェリーで日本最初のアメリカンフットボール戦を行ふこととなつた。尚今回は最初の試合でありこれを広く世間一般へ紹介する意味から大

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

いに一般有志の観戦を歓迎する由である。両軍メンバー左の如し。

（シ軍）		（選抜）
山本	RE	陶井
仁井	RT	今村
黒川	RG	三上
加藤	C	三枝
川辺	LG	青木
押田	LT	畑
二階堂	LE	島袋
吉岡	QB	福田
松本	LH	西原
杉山	RH	藤田
三浦	FB	仁井　」

以上のように昭和9年10月25日付の新聞の記事がのつた。

記事は「チーム組織を志し」とか「漸く多きを加へて来たが」今から思えば大時代的な用語が使われて居るが、二段の予想記事と云うよりむしろP.R的要素を多分に含んだ記事で仲々有効な記事であつた。

この記事の中にも書いてあるように、アメリカンフットボールについては過去においても興味を持つていた人は多くいたのである。即ち「嘗ては東高師、水高或ひは横浜高工等でこれが研究並びにチームの組織を志し云々」とあるように東京高等師範学校、水戸高等学校、横浜高等工業学校等でフットボールのチームを作るか、或いは作ろうとする気がまえはあつたらしい。それが何時頃かは明確ではないが、とにかくフットボールに興味をいだき、それをやつて見たいと志した人は少くともこれ等の学校には居たのであろう。

東京高等師範学校ではその性格上フットボールを研究し、それを又教材とする為にも研究をしていたと云うことはうなづけるが、水戸高等学校、横浜高等工業学校ではプレーをやりたいと云う目的の為ではなかつたのではなかろうか。然しそれも種々の今迄述べたような困難な条件の為に実現出来なかつたのであろう。誠に残念なことであつた。

さて昭和9年10月25日は晴天であつた、池袋の立教大学のグラウンドと云つても体育館の裏の現在の理学部の教室の建つている処に、昔はグラウンドがあり、陸上競技、ラグビー等が使用していた。勿論予科の体操や教練の時間にもこのグラウンドを使用していたものでスタンドも何もない只のグラウンドであつたが、新聞の宣伝で知つたものか約200人位が時間になるとグラウンドの周囲に集つた。勿論多くは立教の学生であつたが、その他にもフットボールに興味を持つ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ている各大学の学生も遥か電車でやつて来て見学をしていた。

何しろ用具がないので両チーム共、ジャージーも長袖のものもあればTシャツ姿、ランニングシャツ姿で、色も殆どが白であり、パンツもショートパンツの者、長ズボンの者と全部まちまちで自前のシャツ、パンツと云ういでたちであつた。中にはたつた1人だけヘルメットをかぶつて居た者がいたのはご愛嬌であつた。靴も殆ど運動靴で、中にははだしの者も4～5人居た。然しルールは正規のルールで試合をしていたのであるから、当りは仲々するどかつた。

その試合の記事が翌10月26日の新聞に次のように書かれていた。

「シ軍勝つ

日本最初の米国式蹴球日本最初のアメリカンフットボール戦、明大在学中のアメリカ第二吞シグマ・ヌ・カッパ対ハワイ第二吞との試合は25日午後1時半から立大グラウンドで松本（主）、マーシヤル（副）、村山（線）の審判で挙行したが何分道具が一つもないのでヘルメット、プロテクター抜きの素面、素小手、靴も蹴球用は危険とあつて多くは籠球用ゴム底靴ハワイ軍はハダシで対戦し、漸く第2クオーターで明大シ軍見事にタッチダウン。コンバーション成つて7点を得、第3、第4クオーターは得点なく7対0で明大シ軍に凱歌が挙つた。

明大シグマ	7	0	－	0	0　ハワイ二吞
		7	－	0	
		0	－	0	
		0	－	0	

川辺	RE	陶井
黒川	RT	今村
山田	RG	三上
武田	C	三枝
加藤	LG	青木
押田	LT	畑
二階堂	LE	島袋
吉岡	QB	福田
松本	LH	西原
斉藤	RH	藤田
山本	FB	仁井　」

以上であるが剣道ではあるまいし素面、素小手とは又大変な表現であるが、仲々妙を得ていると云うべきであろう。中に1人のアメリカの水兵のかぶる白い帽子をかぶつている者が居たのが

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

印象に残つている。

これが日本におけるフットボールの最初のゲームであると云うには余りにも寂しい。他のスポーツでも皆同様ではあると思はれるが、皆このような寂しいゲームが第一回となつているのであろう。然しこの試合は練習試合であつて、あくまでも正式のゲームではなかつた。即ち正式のゲームを挙行する為の下準備に過ぎないのであつて、日本のフットボール史上では、日本最初のフットボールゲームは飽く迄も11月29日となつている。然しこのゲームは用具こそ用いなかつたが、正式なグラウンドで正式な審判の下に正式な時間で行われたのであるが、日本最初の正式なゲームを盛り立てる為の準備であつた。

何回も書くようではあるが日本最初のフットボール・ゲームは、昭和9年11月29日木曜日アメリカ感謝祭の日に、明治神宮外苑競技場において東京学生選抜軍とY.C.A.Cとの間に行われたのである。

10月の末になると、製作を急いでいた玉沢運動具店から同店苦心の作の用具が出来たのである。勿論出来上がるまでにはマーシヤル氏やアメリカ大使館付武官のジョージ中尉、ブース中尉等が何回も指導したり相談に応じたりして、型は旧式ではあるがアメリカ製に匹敵する位の用具が出来たのである。この間玉沢運動具店の苦心も相当なものであつたことは想像出来る。日本のフットボールの厂史にこの玉沢の努力を忘れることは出来ないし、又玉沢はフットボールの恩人とも云えるのである。また玉沢運動具店としてもそれを誇りにしても良いのである。

さて用具が出来上ると、練習も本格的になつて来た。Y.C.A.Cの方も同様に本格的練習を開始したのは当然のことであつた。学生軍の方はコーチにマーシヤル氏とブース中尉が当つた。用具を装着すると各プレイヤーの動きも変つて来た。二吞の中には正式なフットボールをやつたことのあるプレイヤーも居たが、日本生れのプレイヤーは初めて装着する用具であるから、ぎごちがない。手が高く上には上らない、腰がやわらかくまがらない等用具に馴れるまでが、又大変であつた。

又練習用のグラウンドにも苦労した。何しろ出来たばかりであるので何処のチームも専用のグラウンドなど持つている筈はない。また各学校でも各部が専用のグラウンドを持つているのではなく、お互に時間の割り振りをして使用して居るような状態であるから、出来た許りのフットボールに使はせてくれるだけの予猷はない。まして選抜チームであるからなおグラウンドについては苦労した。それで主として池袋の立教のグラウンドでラグビー部、陸上競技部の使用していない時間に練習をしたのである。

Y.C.A.Cでも練習には苦労したことと思はれる。それはグラウンドはクラブ所有の立派な芝生のグラウンドがあつてその点ついては心配しなかつたが、プレイヤーの方の苦労があつたのではなかろうか。何しろプレイヤーはアメリカ人だけではなく英國人もドイツ人もフランス人もベル

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ギー人も入つていて、フットボールは見たこともない外國人が入つて居た。それをアメリカ人が指導してチームを作るのであるから、初歩からやらなければならない。まして彼等は何れも仕事があるので練習の時間に制限を受ける。その他学生と違つて社界人であるので、コーチする方も非常にコーチしにくい点も多々あつたと思はれるが、根がスポーツ好きの外人の集団であるので期日までには型を作ることが出来た。

一方、試合の裏方も忙しくなつた。11 月中頃には入場券の前売りを始めた。都内のプレイガイドや運動具店を使つて前売りをする外、出場する大学の部を通じて学生に前売をした。学生券 30 銭、一般券 50 銭、特別席 1 円の値段であつた。又当日試合場で売るプログラムの製作もしなければならなかつた、プログラムは一部 5 銭の定価をつけた。

その他、試合場の人の配置、医師の手配、招待状の製作発送、又グラウンドの作り方、これも又ラグビーやサッカーのラインの引き方やゴール・ポストの建て方はグラウンドの方で充分知つてはいるが、何しろ日本で初めてのことなので外苑競技場の方でも全々知らない。それで外苑競技場が出来た時から居る管理人の岡崎太郎氏によく話を通じてフットボールのラインを引いてもらうように依頼もしなければならなかつた。何しろルールに則つたラインを引いてもらうにはルールから説明をしなければならいのである。
その他、ヤーデッジ・チェーンやダウン・インディケーターそれにコーナー・フラッグ、ヤード標示板等何れも今迄日本で使つたことのないものばかりなので、これを作らせるのに一々手を取つて指導する必要があつた。

いよいよゲームの日が近づいて来た 11 月 25 日には、新聞記者発表を丸の内のアメリカンクラブで行つた。当時はテレビはなくラジオは JOAK だけであつたので PR の主力は新聞に向けられたのは当然である。在京の主力新聞記者十数名が集まつた。委員会の方からはポール･ラッシュ委員長を始め松本、小川、マーシヤルの各委員とこの記者会見をアレンジした加納委員も参加したのは当然である。そして各新聞記者共運動部のベテラン記者ではあるが、フットボールに関してはスブの素人であるので、フットボールの簡單なルールや、出場選手のメンバー表等の参考資料を配布し、フットボールの解説をし、その他の質義応答もあり相当盛会であつた。

11 月 28 日の東京の各スポーツ欄には各紙共 4 段全紙を使つて、相当にくわしい解説記事を写真と図解入りで載せた。各紙がこれ程大きく記事を取り上げたことは日本のスポーツ界においても稀有のことであつたであろう。これも委員の中に朝日の記者の加納氏が居て、色々と記者仲間を集めて吞話をしてくれたおかげである。

朝日新聞には
「米國式蹴球とはどんな競技か　あす日本最初の試合」と云う見出で 4 段抜きで
「29 日午後 3 時から明治神宮競技場に於て早明立三大学選抜軍と横浜外人団と初めて正式の米國式蹴球試合を挙行することとなつたが、アメリカンフットボールとはどんな競技

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

か？」

と書き出しグラウンドの大きさ、ゲームの時間、使用ボール、競技者数、ポジション、ゲームの進行のし方、反則の種類、得点、等について詳細に記載していた。

読売新聞も4段で

「AMERICAN　FOOTBALL　日本で初めて紹介試合　横浜Y.C.A.C対東京学生聯合軍　29日神宮競技場」の見出で「ラグビーによく似ていてもつと猛烈なアメリカンフットボールが29日午後3時から神宮外苑の競技場で我国最初の試合としとデヴュウする。かたや横浜のY.C.A.Cかたや東京学生聯合軍、この当日はグルー米國大使が開会の祝辞を述べる。ついでチーム間の記念品贈呈、選手の紹介などにつづいて國歌の吹奏、それから米國のフットボールに関するマーチを20も演奏して3時からキック・オフといふ大がかりなもの、これで日本に知られていないが米國スポーツ界の王者アメリカンフットボールを日本に移植しようといふのだ」

と書き続いて

「学生聯合軍といふのは米國生れの邦人が殆んど全部で現在早立明大などに学籍を置いてひたすら日本人的教養を受けつつある学生諸君。明後日の試合を前に27日の午後立教大学の長崎運動場で立教のマーシヤル体育主事、ブース米大使館員、コーチの下に、フォーメーションの練習に余念がない。何しろ英語の方が板についている聯中なのでクォーターバックの喋る英語も他の10人の動く気合もチョイト日本人離れがしている。

選手達の予想では“横浜の外人クラブは重量があるのと大きいから苦手だけれど、年寄り達が多いから初めの15分が過ぎればヘバルだらうと思つてます。だから後半で勝ち抜く気でいるんですよ”となかなか闘志満々だ」

と少々皮肉つた筆で書いている。即ち日本に留学して日本的教養をうけつつある二世がアメリカのスポーツを日本でやるとか、英語や動作が日本人離れしているとは大部皮肉つているが続いて

「試合方法と反則初めて観る人のメモ」でチーム、試合、競技場、試合時間、反則、見方と色々項目を別けて親切に解説し、最後に「ラグビーがウィットな試合であるのに対してアメリカンフットボールは全くフォーメーションの戰ひである。普通は図のやうなライン・アップを作るが、クォーターバックのシグナルでプレイが初められる直前に色々と配置の変化が行はれる、だからチームの一人が譜号を忘れたり、誤つたりするとチーム全体の動きが破壊されてしまふ」

と解説している。

各新聞が競つてこんなに大きく解説予告とも云うべき記事を書いてくれたかと云えば、加納さんの努力盡力は当然のことであるが、日本にフットボールが移植される気運が充分に熟し切つていたと云えるのであろう。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

さていよいよ日本最初のゲームの日、11 月 29 日がやつて来た。

当日は晴天であつた。明治神宮外苑競技場には新聞によれば 2 万人と書いてあつたが、実数は 1 万 5 千人位であつたが、とにかくメインスタンドは一杯になる位の観衆が集つた。そして貴賓席には秩父宮殿下のお姿も見えた。秩父宮様と云えばスポーツの宮様と云う愛称もあり、大変スポーツの好きな宮様であつた。お若い頃には内緒でラグビーもやられたことがあるとか云う話もあつた。その秩父宮様とグルー米國大使等が貴賓席で観戦されている中で日本最初の正式なアメリカンフットボールは華々しく日本において開花したのである。

記念すべきこの日は厳粛にと云うよりは華々しく行われたのである。約 1 万 5 千人の観衆を集め、フロリダのバンドが来場してアメリカの有名大学の応援歌を演奏し、二吞を中心とした応援団は黒紋付の羽織に袴と云う日本の学生応援団を見馴れた日本人の眼には異様に見える白シャツにズボン姿のアメリカスタイルで英語を駆使する応援団等、映画でも見ているような雰囲気であつた。

ゲーム開始に先立つて東京学生米式蹴球聯盟の委員長ポール･ラッシュ氏が、日本で最初の正式なフットボールを開催するについての現在までの経過及び内外有志各位の好意に対する感謝の辞を英語で述べ松本氏がこれを通訳した。そして次にジョセフ・グルー駐日アメリカ大使の祝辞があつた。その主旨は次の通りであつた。

「アメリカンフットボールほど観衆にも選手にもスリルを感じるスポーツはない。そして苟しくも米國人たるものはこのゲームを持つことに誇りを感じないものは一人もあるまい。アメリカンフットボールは意志強固にして責任感強く、スピードと忍耐力を備えるものにとつてのみ許され、価値あるものであつて、以上の素質薄弱なるものはこの競技にたずさわることは出来ない。私の考えでは、日本國民の習慣、生活態度及びスポーツに対する熱度から見てこの競技は全く日本國民に最も適したスポーツである。」

このグルー氏の云葉を全く至言とでも云う可きものであり、吾々フットボールをプレイする者はこの云葉を金言として来て現在迄もそれを忠実に実行していると云える。即ち意思の強固、責任感の旺盛、忍耐力の養成はどのスポーツにも必要であるが、特にフットボールにおいてはこれ等が欠除していたのではチームの力を発揮することは出来ないのである。その意味からもこのグルー氏の云葉はフットボールを志す者にとつては、必要欠くべからざる所の金言であると云はなければならないと思う。

さてその記念すべき日本最初のゲームの内容は、翌日の朝日新聞の記事を以下に写して見よう。

昭和 9 年 11 月 30 日朝日新聞朝刊運動欄「26－0 外人軍を圧倒し学生軍大勝す日本初の米式蹴球」の見出しで

「早明立学生混合軍対横浜外人軍の日本最初のアメリカンフットボール試合は 29 日午後

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

3時から神宮競技場に於て挙行。この日秩父宮殿下台臨あらせられグルー米國大使を始め外人観衆極めて多く、メインスタンドは満員で約2万を数へた。

レフリー・ジョージ大尉、アンパイヤー・ファウラー氏、主線審浜田氏、線審河辺氏、ラッセル氏。

何しろ初めての試合であり両軍共に訓練の期間が少かつたので試合は技術的にも戦法的にも殆んど見るべきものなく、外人軍はバックスが球を得れば唯密集に突つ込むばかり窮すれば3ダウンか4ダウン目にタッチを狙ふとかーかばちかハイパントを揚げて従らに攻撃を放棄するばかり。これに比べると学生軍は展開力もより広くFB川原がしばしば長駆して僅かながら競技的な興味を躍らせて居た。

第1クオーターでは学生軍は自陣30碼ラインからバックスの突進で第4ダウン迄に外人側40碼ラインを突破し続く攻撃の第4ダウンで15碼に迫り、次の第3ダウン目に川原最初のタッチダウンを得て6−0とリード。第2クオーターでは外人側40碼からバックスの突進で第3ダウン迄に25碼に迫り第4ダウン目に梶谷のフォワードパスを川原ゴール前5碼辺で掴んでタッチダウン、川原のプレイスメント決まつて7点を得、13−0とリード。第3クオーターは双方動きが鈍く外人軍のバック、ザバーの活躍があつたが決まらず両軍無得点。第4クオーターに入るや学生軍は外人側30碼のスクリメーヂからパスで突進、第2ダウン迄にゴールライン1碼に迫り、第3ダウンで川原右に抜いてタッチダウン。野中プレイスメント決めて7点を得20対0となり、タイムアップ前外人軍20碼から36碼辺に盛りかへしてからの第3ダウンでフォワードパスを試みるを藤田中央線付近でインターセプトして左にスワーブして抜き去り最後のタッチダウンを挙げ6点を得て26対0で快勝した。

紹介的な試合であつたから一概に云ふわけにはゆかないが外人側は1人余計出た時もあり試合そのものとして、極めて凡戦で、パスの攻撃など殆どなくフォーメーションも数へる程しか出なかつた。併し米國式蹴球は如何にも面白さうだといふことを見せる意味では外人見物のお祭り気分やバンドの活躍などにも彩られて大いに効果的だつた。」

と横尾俊彦記者は苦し気に書いている。

それもその筈であろう、この記事を見ても横尾記者はフットボールのことは知らないのではないかと云うことがよくわかる。ハイパントとかタッチを狙うとか、プレイスメントやスワーブと云うラグビー用語が随所に出て来るので、横尾記者はラグビー担当の記者であると云うことは解る。もつともフットボール担当記者と云うものはまだまだ誕生しない時である。やつとフットボールが日本に誕生したばかりで、今生声を挙げたばかりであるのでフットボール担当記者なんかある訳がない。ラグビーと似ていると云うので横尾記者が書かされたものであろうが、横尾記者としては大変に迷惑極まりないことであつたであろう。

それにゲームが派手な面白いものであつたらもつと何か他に方法もあつたのであろうが、何しろ初めての試合でプレイヤー自体がよく解つていないし、又経験も無い上に練習期間も短かつたので目のさめるようなよい試合が出来る筈はない。横尾記者にはその点気の毒であつたが彼は一応得点の経過は正確に記事にしている。唯惜むらくは得点のタイムとダウンがどのシリーズのダウンであるかが書いてないのは残念であつたが、とにかく初めての記事としては正確に書いてい

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ることは現在となつて非常に有難いことであり、そして又貴重な記録であると云うべきである。

この試合のスコアー及びメンバーは次の通りである。

学生 26 { 6 － 0 / 7 － 0 / 0 － 0 / 12 － 0 } 0 外人

14 FD 12
194 YR 105
50 YP 25

井上（早）	RE	ヒーシュ
山田（明）	RT	フィゲス
野中（早）	RG	シュバリエ
花岡（明）	C	ウェーソン
松本（早）	LG	ショーネ
畑（明）	LT	ダウ
梶谷（立）	LE	ワイスブラット
大前（明）	RHF	ハリス
藤田（早）	LH	デヴィン
太田（立）	QB	J.ハリス
川原（早）	FB	ザバー

（註）FD はファースト・ダウンを得た数
YR（ヤード・ラッシュ）全試合に突進したヤード数総計
YP（ヤードペナルティ）反則のため後退させられたヤード数総計

交代（学生軍）:FW 唐木（明）、山本（明）、黒沢（立）、横野（早）、根本（立）、加藤（明）、
頴川（立）、黒川（明）、FB 山本（明）
（外人軍）:FW テッシュ、ペスタロッチ、ロード
タッチダウン　学生軍　川原 3、藤田
タッチダウンよりのゴール　学生軍　川原、野中

以上は朝日新聞の記事によるものであるが、FD の数とか YR のヤード数、又は YP の長さ等これは勿論聯盟で発表したものであろうが、それを刻銘に載せていることは、現在においても大いに学ばなければならないことである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

学生軍のメンバー中、LE 梶谷（立）とあるが、梶谷は立教の学生ではなく法政の学生であつたが、このチームが早明立の三大学選抜と云うことになつているので聯盟の発表も立教としたものと思はれる。そして学生軍のスターティングラインアップは皆二世であつた。但し交代の中には日本生れの学生が数人入つていた。立教からの太田は二世でカリフォルニア大学を卒業して立教に入学した選手であり、黒沢は拳斗部に居た選手で、根本はラグビー部に居た選手であつた。頴川は通称ロニーと云い台湾人であるとのうわさもあつた人である。

とにかくこの様に日本最初の試合は盛会裡に学生軍が 26 対 0 で快勝して成功裡に終わつたが、翌日の各新聞は試合経過よりスタンド風景に主力を置いて書いていた。これもフットボールを書ける記者が各紙共居なかつたので仕方がなくそのような処置を採用したのであろうが、スタンドの風景は確かにその当時の日本のスポーツには珍らしい様想であつたのでその方が面白かつたのであろう。

朝日新聞にもゲームの写真とならべてスタンド風景の写真をのせて、それに「スタンド異色風景」と云う見出をつけて次のように説明している。

「初めて神宮で行はれたアメリカンフットボールは試合も試合だがスタンドの風景がこれは又頗る異色味たつぷりメーンスタンドを埋めた 2 万観衆に外人の多かつたのも平素と変つていたが記者席の前に陣取つた YCAC のバンド（上）がタイム毎、得点毎に吹き鳴らすジャズ張つた奏楽の賑やかなこと、國歌や行進曲以外に聞いたことのない一般フアンはビックリ仰天、それかあらぬか、3 大学学生軍の応援隊（下）のエールまでが凡そ日本人には聞き馴れぬ云葉ばつかり、手ぶり身ぶりまでが本場からの輸入もの、イヤどうもユカイなものでござる。」

と驚きと皮肉で書いている。

前にも書いたように昭和 9 年と云えば、昭和 6 年の満州事変が終り日支事変が近着き日本全体がそろそろ軍國調に踏み出した頃であり、神國日本の風調が強まりかけて来た頃である。神國日本の権化とも云うべき明治神宮の外苑で全くアメリカ調のスポーツが始り、スタンド全体をアメリカ調に包んでしまつたのであるから呆れるのも当然である。それまでこの競技場ではラグビーの試合も常に行はれてはいたが、ラグビー協会では拍手以外の応援は禁じられいた。

又六大学の野球の応援は盛んであつたが、応援のリーダーは正服正帽か紋付羽織袴と定つて居り、ブラスバンドなども入らないものであつた。それが神聖な神宮外苑にジャズ式のブラスバンドの演奏が鳴りひびき、それに合せて英語の応援がこだましたのであるから見物も皆ビックリ仰天してあきれたのも無理はない。

その時の応援団と云つても各学校の応援部ではなく二世聯中で米國の高校等で応援した経験のある者がリーダーになり、見物に来た二世や日本生れの学生を一ヶ所に集合させて聯盟で作つたテキストのプリントを渡しそれによつて応援をする臨時応援団ではあつたが、それは臨時傭いにしてはリーダーの指示がよかつたのか割合にまとまつていて臨時応援団とは思われない位であつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

その時の応援のテキストは次の様なものであつた。

YEILANDSONG
（HAILTEAM）（BIGTHREE）
HAI.....LTEAM!×（NAME）RAH..RAH..RAH..（NAME）
×××××××××
HAI.....LTEAM!×SONGS
TEAM!TEAM!TEAM!×HAILHAILTHEGANGS
ALLHERE
（ROCKET）×××××××××
WHEE.....（whistled）.....EE.....EBOOM!
AHHH.....HH.....HVARSITY
VARSITY!VARSITY!
×××××××××
Soft）VAARRSITYRAH!RAH!
Medium）VARSITYRAH!RAH!
Loud）VARSITY
VARSITY（EE）……VARSITY（EYE）WOW!
×××××××××
（WARCRY）
FIGH.....TTEAM.....FIGHTFIGHT!
FIGH.....TTEAM.....FIGHTFIGHT!
YEA.....H.....ＨTEAM
FIGHTFIGHTFIGHT
×××××××××
（OSKY）
OSKIE.....E.....EWOW..WOW!
WHISKIE.....E.....EWEE…WEE!
O.....O.....O.....OLYMUCKYEYE!
O.....O.....O.....OLYVARSITY!

日本の「フレーフレー」とか、「ガンバレガンバレ」とは格段の差であるが矢張りフットボールにはこの方が何かピッタリと来る様な気がした。これでは新聞記者ではなくとも日本人の観客は一様にビックリ仰天したのは当然であり、横尾記者ではないけれど「イヤどうもユカイなものでござる」である。

又読売新聞はこれ以上面白く書いていた。

「急に力が出た筈　米軍にもぐりが１人　アメリカンフットボール初試合珍風景」、との見出しで

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

「29日午後3時から神宮競技場でアメリカンフットボールがデビューした、横浜カントリー・アスレティック・クラブ（Y.C.A.C）対全東京学生選抜軍チームの試合、デビューにふさわしく鳴物入の素晴らしく華やかなお目見得だ。

フロリダのジャズバンドが出張して試合開始前からまるでお祭り騒ぎ、横浜の全外人が夫婦づれ、子供づれでドライヴして来て、中央スタンドは「アメリカ語」で煮えくり返つた。タクトを振る外人コンダクターの恰好もすつかりホール気分だ。見物の外人は指揮棒に合せて心を浮かれさせ立上つては大声でジャズの注文「ホイ乾杯の歌」。普通席も学生でギッシリの満員、早稲田、明治、立教の応援団が旗をなびかせて元気一杯の応援だ。この応援流暢なアメリカ語、学生軍の大部分がアメリカ生れの第二世だ。応援団もまた第二世で固められているのだから負けつこない。時々学生の向ふ仕込みで優しく見え過ぎる応援団長が外人の前に出張つて応援のリードだ。

活動では見たことがあつても本物の試合を見るのはこれが初めて。解説付5銭のプログラムが飛ぶ様に売れた。解説とにらめつこしての観戦だ。ヤンキー聯はさすがお國自慢のスポーツ、得たり顔に、試合なんか始めからなめてかかつて、奇声、歓声の聯発。

試合終了少し前外人軍に急に力が出た、レフェリーがきょとんとして人数を勘定していると思つたら、なあんだ12人。11人のメンバーが選手交替の時何時の間にか12人になつていた。お陰で外人軍反則で15ヤードの後退を命ぜられた。途端に毛皮を頭からかぶつた外人がスタンドの前に飛び出してとんぼ返りまでして応援だ。自称ジョニーウォーカー君、蜜柑を十字にくくつて首にぶら下げて居。26対0、ジョニーウォーカー君の折角のとんぼ返へりも、洋服が汚れただけのことになつた。

スポーツの宮様秩父宮殿下には競技場に台臨、終始御興深く御覧遊ばされた。」

以上写真入で書いてあつた。

「活動では見た…」とあるのは活動写真、即ち映画のことである。それから外人チームは交替時の聯絡が悪く1人退場しなくて12人になつたこともあり、とんだ御愛嬌であつた。

このようにして色々と批判はあつたが、とにかく大成功の裡に日本最初のフットボールの試合は終つたのである。そしてここで早稲田大学、明治大学、立教大学の3大学で東京学生米式蹴球聯盟を結成して発足したのである。

アメリカンフットボールでも良いのであるが、長過ぎるのと、当時の日本の情勢から成るべく漢字を使つた方が良いのではないかと云うことで米式蹴球としたのである。当時はサッカーをア式蹴球と呼び、ラグビーをラ式蹴球と云つて居たので、ここは新語を作る名人の加納さんが考えてアメリカンであるから米國式と云うべきではあるが、ア式、ラ式と同様の方がよかろうと米國の國を外して米式蹴球としたものである。

そして東京学生米式蹴球聯盟（TOKYO INTERCOLLEGATE FOOTBALL LEAGUE）の発足は昭和9年12月1日、即ち第一回の正式フットボール試合の翌々日に、フットボール設立準備委員会の席上において正式に発足したのである。

そして新聯盟の理事長にはP.ラッシュ氏が推選されて就任し、理事には松本瀧蔵、小川徳治、

© 2004 日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ジョージ・マーシャル、加納克亮の諸氏が就任した。
　そしてこの席上に於て今後フットボールを日本に定着させ発展させる為への色々な決議がなされた。その主な事項は次の様なものであつた。

1. 聯盟の定期試合の季節を毎年 10, 11, 12 月の 3 ヶ月と定め加盟大学の試合は総て聯盟の主催とする。
2. 明年度の定期シリーズ迄には他大学を勧誘して少なくとも六大学のリーグ戦を行ふ為努力すること。
3. 加盟大学選手の資格に関する事項。
4. ルールは総て米国ナショナル・カレッジエイト運動協会公認に従ふこと。

　主なるものは以上のような事項であつた。この内第一項のシーズンを 10, 11, 12 月と決定したことには重大な意義が含まれているのである。これまでの日本のスポーツはシーズンを殆ど無視して行つていたのである。即ち、あるスポーツを志した者は一年中同一のスポーツのみを行つていた。夏の暑い盛りにも冬の寒い頃も関係なく同じスポーツしか出来なかつた。そして、又、その練習は一年中繰り返されて居た。これは学生としての本分の学業についてもおろそかになり、又、プレイヤーにとつても一つのスポーツしか不可能な不具者的なプレイヤーを作る結果になる。これでは有能な才能を持つたプレイヤーでもその才能を発見出来ずに終らせてしまうような結果にもなりかねない。
　例えば野球のキャッチャーだとか、拳斗の選手だとかは近距離の運動神経が発達しているので、アイスホッケーのゴールキーパー等には非常に有力な場合が多く、拳斗では余り力を発揮することが出来なくとも、アイスホッケーのゴールキーパをやらせたら大変な力を見出すことが出来る様なものである。その為には一つのスポーツにしばり着けることなく色々なスポーツをやつて見て、自分に一番適応しているものを発見させることが必要だと云う観点からアメリカで実施されているシーズン制をそのまま採用したものであり、これは日本で最初のシスティムであつた。然し、それから 40 年経過した現在でもこのシーズン制をはつきりと尊定しているのは、フットボールだけであると云つても過云ではないだろう。
　野球、ラグビー、バスケットはややシーズンを守つているが、その当時一応シーズンを守つていたサッカーは、現在では全く無視して年中やつているし、バレーボールに至つては全々無秩序であると云うに他はない。このシーズン制を守つていることはフットボールの誇りであると思はれる。シーズンは 10～12 月であるが、春にはそのチームの実情に応じて 1 ヵ月の練習期間を認めることがこのときの理事会で決定した。これもアメリカのシスティムを準用したもので、1 ヵ月以上は許可されないことになつている。
　第 4 項の米國ナショナル・カレッジエート体育協会（N.C.A.A）のルールを採用するのは現在も同じである。

　そしてこの理事会で聯盟主催の第一回のリーグ戦を挙行することが決定した。その日程も次の通り決定した

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

12月8日	明治	対	立教	午後2時池袋
12月15日	早稲田	対	明治	午後2時神宮（有料）
12月22日	早稲田	対	立教	午後2時池袋

その他年内にもう一度Y・C・A・Cと何れかの大学が対戦し、翌年からは資金的援助を受けたお礼も兼ねて各大学共シーズン中に一度はY・C・A・Cと対戦することも決定した。

その第一回のリーグ戦の第一戦明治対立教のゲームは12月8日午後2時から池袋の立教グラウンドで行はれた。その経過を翌12月9日の朝日新聞は次のように書いている。

「24－0明大楽々勝つ　対立教・米式蹴球東京学生米式蹴球リーグ

第一戦の明大対立教の試合は8日午後2時から池袋立教グラウンドでレフェリー・ジョージ、アンパイヤー・ブース、線審ファーラー、松本4氏審判の下に挙行

明大24 { 6－0 / 6－0 / 12－0 / 0－0 } 0立教

経験のより多い明大は、第一クォーターから立教を圧迫して出で9分、先づ吉岡タッチダウンを挙げ6－0とリードし、第2クォターでは7分二階堂がタッチダウンを挙げ12－0となり、第3ダウンでは8分二階堂、10分仁井と何れもスクリメージからタッチダウンを挙げて24－0と開き、第4クォーターでは明大側フォワードパスで攻めたがミス多く立教の好防もあつて得点なく結局24対0で明大の快勝となつた。

（明大）		（立教）
畑	LE	井上
黒川	LT	黒沢
三浦	LG	村上（兄）
畑（進）	C	安藤
山田	RG	海津
加藤	RT	玄
花岡	RE	亀井
松本	QB	田中
吉岡	LH	村上（弟）
仁井	RH	関口
大前	FB	畑

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

（交代）明大FB二階堂

以上が記事であるが第3クォーターを第3ダウンと書いたり、或はタッチダウンはどんなプレイで挙げたかと云うことは少しも書いていない。書くことが出来なかつたのが事実であろう。
それは記者がフットボールを知らないのである。然しいくらリーグ戦最初のゲームであるとは云え、メンバー入れてこれ程書いてくれたのは余程希待するものがあつたのであろう。メンバー中、立教のFB畑とあるのは明大の畑3兄弟の1人を間違えて記入したものであろう。

この日も晴天であり、ユニフォームも両チーム共新調のものであつたのは当然である。11月29日の学生選抜とY・C・A・Cとの試合の時のユニフォームは、学生軍は白地に肩の所と番号を赤で染めたユニフォームを着、Y・C・A・Cは紺に腕から肩にかけての白縁を染め分けナンバーも白であつたが、この日の明治は紺のユニフォームにパンツはカーキ色、立教はオレンジのユニフォームにパンツはカーキ色であつた。このオレンヂは立教のマーシヤルコーチの母校オハイオ州立大学のカレッジカラーを模したものである。

そして試合の結果は、24－0と一方的ではあつたが、片や明大は全員二吞で固められて居り、何れもアメリカでは中学校から高等学校迄は大なり小なりフットボールの経験のある者を揃へているので、フォーメーションの数も多く、又、動きもフットボールの動きをしていたが、立教は主将の太田を除いては全員未経験の日本生れの者ばかりであつた。しかもプレイヤーの数も少いので色々と他の部から借りて来て臨時に偏成されていたようなものであつた。
Eの井上、QB田中、RHの関口はラグビー部、G海津、Tの玄は角力部、Gの村上は矛道部、Tの黒沢は拳斗部、C安藤は水泳部、Eの亀井はバスケットボール部と各部から集めたものであつた。

勿論これを機に将来フットボールに籍を置くようになつた者もいた。井上、黒沢、安藤、亀井、田中等である。その為に充分な練習も出来なかつたのは事実である。コーチは当時日本では他にはこれ程優秀なコーチは居ないと云はれた立教大学体育主事ジョージ・マーシャル氏であつたが、これではどうすることも出来ないのでフォーメーションも全部で5プレー位しかなかつた。
No1、No2、No3、爆弾3勇士、パス、パントとこの位である。No1がインサイド・タックル、No2がオフタックル、No3がエンドラン、で前の第一次上海事変の時に上海戰線で敵の鉄条網爆破の為、自己を犠牲にした小倉の工兵聯隊で有名を馳せた爆弾3勇士にちなんで名付けた爆弾3勇士は、インターフェアランス2人をつけたFBのセンタープランジであつた。これでは勝てる訳はないが、防禦の方は各自そのポジションをよく守つて明大の多彩な攻撃を防いだが、何しろ未経験の為、フェイクプレイに引つかかつて、得点されたのは殆ど明大のフェイクプレイであつた。
余り明大の行うトリックプレイに引つかかるので、見ていた立教の応援の学生が明治はキタナイ、あんなキタナイプレイをするフットボールなら止めてしまへとまで云つた者がいたが、何れにしても初心者許りの、しかも寄せ集めの立教としては善戰したとしか云いようが無いのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

12月15日には第一回リーグ戦の第2戦が明治対早稲田の間で行はれた。例によつて翌16日の新聞を引用して見よう。

「6- 2明大快勝す　対早大米国式蹴球

東京学生米式蹴球リーグ明大対早大の試合は15日午後2時から神宮競技場に於て挙行(レフリーブース氏、アンパイヤーファウラー氏、線審浜田氏、マーシヤル氏)

明大6	0 － 2	2早大
	6 － 0	
	0 － 0	
	0 － 0	

双方マーク良く試合は最初から接戦を演じたが早大は第1クォーターでセーフティーによる2点を挙げたのみで、最後迄タッチダウンを獲得出来なかつた。明大もタッチダウンを一つ得たのみであつたがフォーメーションも多く殊に前衛陣の確りしたプレーと、FB大前の突進で良く攻め、第2クォーターでFWのインターフェアランスによつてバックの進路を作り、スクラムラインを突破するラインバックが効を奏して大前が貴重なタッチダウンを挙げ勝敗を決定的なものとした。この試合は内容的には前回のYCAC対学生混合軍の試合に勝る各種のプレーが演じられ鋭さも増して相当興味深いものがあつた。

（明大）		（早大）
河辺	LE	陶
塚平	LT	永井
山田	LG	横野
唐木	C	島
黒川	RG	風間
畑	RT	井上
花岡	RE	竹崎
吉岡	LH	野中
畑（進）	RH	蔵力
松本	QB	藤田
大前	FB	川島

交代（明大）:FW三浦、半田、加藤、山本、HB二階堂

（早大）:FW三上・有賀、田中、宮田、HB村山田畑

タッチダウン大前（明大）

以上のような記事が出ていて大部記者も馴れては来ているがラインをFWとしたり、スクリメ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ージラインをスクラムラインと書いたり、矢張り処々にラグビー用語が出て来た。この日の早大のユニフォームは白地に肩の処と番号はスクールカラのエビ茶のものを着ていた。そしてこの記事にあるように両軍共大部分が二年であるために、試合も熱戦でフォーメーションも多く用いられて内容的には相当充実したものであつた。この時の早大は初めて「自由の女神」（スタチュア・オブ・リバティー）を使つた。これが日本で最初であつた。それ以来「自由の女神」は早大の得意なプレーになつたのである。なお早大のセンターの島は、その2年後には立教に入つて来た島袋である。

第3戦の早大対立教の試合は12月22日に行はれた
その朝日新聞の記事は

「6- 0早大勝つ 対立教米国式蹴球

東京学生米式蹴球リーグ最終戦早大対立教の試合は22日午後2時から立教グラウンドにおいてレフリー浜田氏、アンパイヤーブース氏、線審坂本氏、西川氏の下に挙行、早大は優秀選手が出場せず、顔振れは悪かつたため大体優勢に戦ひながらも、ブロッキング戦術をマスターした立教の好防に得点が出来ず、第4クォーターのタイムアップ直前にフォワードパスが成功して蔵力が唯一のタッチダウンを挙げ辛うじて6対0で勝敗を決した

早大 6 { 0－0 / 0－0 / 0－0 / 6－0 } 0 立教

（早大）		（立教）
島	LE	亀井
宮田	LT	鈴江
永井	LG	沢田
久保田	C	安藤
風間	RG	安部
井上	RT	黒川
陶	RE	上村
蔵力	LH	相原
野内	RH	田中
田畑	QB	太田
藤田	FB	西島

タッチダウン　蔵力　」

以上であるが、早大はメンバーを落としたように書いているが、対明大戦の時と比較してもそ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

れ程落としているとは思えない。早大としてもその時のベストメンバーであつたことには間違いない。

然し立教も第2戦となり、素人のチームも大部馴れて来たので対明大戦の時よりは見違える位進歩していた。それに早大の場合は明大のようにフェークプレーを多く使用しないので、その点においても大部有利でラインが良くチャージして早大のバックをつぶして居た。

それでタイムアップ寸前迄押されてはいたがよく持ちこたえて、あわや引分け試合になるところであつたが、矢張り素人の悲しさで、タイムアップ寸前に早大の攻撃で、立教陣30ヤードの立教ゴールに向つて右のインバウンズ・ラインから左にエンドランをした。このエンドランは前進せず、左のサイドラインに出た。ここて早大はノーハドルでいきなりスクリメージ・ラインについた。

この時、先のエンドランを行つた地点に早大のプレイヤーが1人倒れていたのである。それをそのままにして早大はスクリメージ・ラインについたものだから、立教側はビックリして、わざわざ早大側に「1人向うで怪我をして倒れているゾ」と知らせたり、レフリーに知らせたりして、ディフェンスの充分でなかつた時、ボールはインプレーになつた。そのトタンに倒れていたプレイヤは立上つて右のサイドライン沿いに走り立教のエンドゾーンの中でバックから投げられたフォワードパスをノーマークで捕球してタッチダウンを得たものであつた。

この時もこの試合を見ていた立教の学生もフットボールをよく知らないものであるから、フットボールのトリックプレーの何たるかが解らないので、インチキだとおこつてこんなインチキなスポーツは止めてしまえとどなつた者も居た。プレイヤーもそんなフォーメーションがあるとは知らないので、当然怪我をして動けないものだと思い込み、それに対する警戒は全々せず親切にも敵方に負傷している旨を知らせたりして、或る点では呑気なものであつた。立教のメンバーの中で黒川とあるのは黒沢で、相原とあるのは相京のミスプリントである。

この試合を他の新聞は次のように書いている。

「早大快勝す　対立米式蹴球

早大対立教の米式蹴球試合は22日午後2時から池袋で挙行、立教は押され乍らもよく守りタイムアップ直前まで早大得意のフォワード・パスを喰ひ止めていたが、早大は最後にフォワード・パスでゴール前2ヤードに迫り、この時QB蔵力は左タッチに伏して待ち立教側の目を眩ませて永井のパスを受けタッチダウンし快勝した。

早大6 { 0－0 / 6－0 } 0立教

（早大）		（立教）
久保田	RE	亀井
井上	RT	鈴江
風間	RG	沢田

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

島	C	安藤
宮田	LG	安部
永井	LT	黒沢
陶	LE	村上
蔵力	QB	相京
田畑	RH	田中
野内	LH	太田
藤田	FB	西島

交代（早大）：　藤野、有賀、村上、
　　（立教）：　堂本、太田」

以上であつて、この方が得点の経過がよく書いてあるが、その内容についてはおかしい所がある。それは永井のパスを蔵力が捕球したとあるが、永井はLTである、ラインマンがパスを投げる筈がない。

これで東京学生米式蹴球聯盟の第一回のリーグ戦は終了した。この結果、

優勝	明治	（全勝）、
第2位	早稲田	（1勝1敗）
第3位	立教	（全敗）

となつた。

また第3戦と同日の12月25日には明大がYCACと横浜のYCACのグラウンドで試合をして明大が勝つた。

明大 18 { 6－0 / 12－6 } 6 YCAC

これで日本に初めてフットボールが移入された昭和9年（1934）の記念すべき年は全部で6試合を挙行して終了した。もつとも10月25日の正式でない試合を除けば5試合になる訳である。そしてフットボールも軌道に乗り翌年からの発展が期待されたのである。12月末日の読売新聞の運動欄に、各種スポーツのその年を振り返つて星野竜猪記者が書いた「吾界の水準から」の記事の内の球技の項で「なお今年度に生れたアメリカンフットボールの前途はまだ未知数とはいへ興味深いものがある」と書いている。

とにかく無事に、しかも成功裡に日本にフットボールを移植出来たことは当時の社会の情勢もあるが、それに努力した準備委員会の委員諸氏の盡力によるものが多いのは当然のことである。この委員の内の松本瀧蔵氏と加納克亮氏が40年後の今日には故人となつたことは残念である。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

昭和10年はフットボール誕生第2年目である。この年の正月の読売新聞のスポーツ欄には写真入でローズ・ボウルゲームのことが出ている。この年のローズボウルはアラバマ大学が29対13でスタンフォード大学に勝つている。

この年の2月16日の朝日新聞の運動面には「米國式蹴球団招聘」の大きな見出で社告が出た。そしてその内容には

「アメリカ南加州大学蹴球部の先輩マロニー君の主唱によつて諸大学の選手から選抜統合されたアメリカン・オール・スター蹴球団35名は、本社の招聘に応じて、来る19日ロサンゼルスを出発、来月10日横浜着と決定した。昨秋我が國にも米式蹴球聯盟の誕生を見、既にその片鱗を窺ひ得た人士は少なくないであらうが、アメリカにおける蹴球が学生スポーツの花としてその王座を占むること年久しく、その精神において我が日本人の性格に適合すべきものあるべきは、疑をいれない。

本社が今回、多数の学生選手を招聘して我が國における新興スポーツとしてのアメリカンフットボールの基範を江湖に紹介せんとする所以も、先づその発足点において、このスポーツの真の精神並びに技術の誤りなき範を示さんがために、外ならぬオールスター軍は約4週間日本に滞在し、東京、大阪、名古屋の各地において米選手赤、青両チームのエキジビジョン及び、日米対抗の試合約10回を行ふはずである。」

以上が当日の社告であるが、これは相当な大冒険である。昨年、日本に初めて移植され、チームもまだYCACを加えても4つしかなく、日本になじみもないこのスポーツにアメリカから35人ものプレイヤーを呼び、しかも4週間も日本に滞在させる費用は、膨大なものである。それを試合その他で賄ふことは当抵不可能である。それをあえて実施したのは、朝日新聞社としてはフットボールを日本に定着させる為の相当な犠牲的精神の発露であつた。

勿論ポール･ラッシュ理事長以下の聯盟の幹部の要請もあつたことは実事であろうが、然しこれだけの費用を仕出すると云うことは並大低のことではない。朝日新聞としても、将来に希望を託して決行したのではあろうが、この招聘は日本のフットボールに明るい未来をあたえてくれた。朝日新聞のこの行為は、日本のフットボール界として忘れてはならないことである。

この社告の出た日の運動面には記事ものつていた。

「アメリカ諸大学蹴球部の選手らから成るアメリカン・オールスター蹴球団が、紅青2チームを編成し本社の招聘に応じて来朝することは社告の通りであるが、かく35名といふ多数の選手が海外から一団となつて来訪するのは、蓋し空前といつてもよからう。

アメリカンフットボールの光景は、しばしば映画によつて我國に紹介されたのみならず、昨年早稲田、明治、立教の三大学間に米式蹴球聯盟が生れ、この春に至つて慶法の両大学がこれに加盟し、関西では関西大学がトップを切つて最近米式蹴球部を編成して直ちに練習に着手するなど、日本における新興スポーツとして既に雄々しき産声をあげているが、朔風吹

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

荒ぶ寒天下に5万8万、時としては10万以上の大観衆を吸引し、その環視のうちに22個の肉弾が火花を散らして相衝撃する豪快味は、自ら渡米して親しくその光景に接した人でなければ諒解し得ざるところのものであつた。

殊にこの競技は、学生スポーツとして極度の発達を遂げ、現在アメリカの諸大学が各運動部の費用を殆ど蹴球部の収入だけで賄ひつつあることは世界周知の通りで、利を得るに機敏なる資本家がこの人気のある蹴球を見逃すはずなく、大学時代から鳴らした知名の選手を集めて職業蹴球団を幾つも編成している。然し何れも微々として振わず人気の点において、学生蹴球の足許にも寄りつけない。

この点はアメリカの野球が殆ど職業団の独歩に任せ学生野球が振るわないのと正反対の実情にあるといつていい。では何が職業団の蹴球より学生の蹴球に圧倒的人気が集るのかといふ問に対し、アメリカのフアンは異口同音に“蹴球は技術を見に行くのではなく熱と意気を見に行くのだ”と答へる。それは丁度大阪における本社の全國中等学校野球大会に集るフアンと同じ心理なのである。

即ち、アメリカンフットボールが技術以上に精神を重んじる学生スポーツとして発達し、一般大衆の関心を得る点において、到底職業者の企及し能はざる統制と訓練及び貴重の精神を持つていることが判る。今回、本社が特に35名といふ空前の学生チームを招聘したのも、日本における新興競技として米式蹴球の黎明期ともいふべき時期に際し、学生諸君は勿論一般の人士に正しく競技を理解して貰ひたいからである。」

と書いている。確かに35名と云ふ大量のプレイヤーを日本に招聘すると云うことは、未だかつて日本には無かつたことであろう。

極東オリンピック大会を除けば、これ程の大量な選手が日本に来たことは無かつた。アメリカから野球のチームが来ても20名以内であるから、35名に比較すれば物の数ではない。それだけに、日本の一新聞社としての朝日新聞がこれだけのものを招聘することは、大英断であつたのである。

この記事の中にもプロと学生フットボールと比較しているが、前にも書いた通り、この頃のフットボールは、プロはそれこそ微々たるものであつて、フットボールはその精神において全國中等野球と同じであると書いている点は面白い。そして最後に朝日新聞が招聘したのは、日本人に正しくこの競技を理解して貰いたいからであると云ふ点は、これは本音であつて、決してまやかしではない。これだけのチームを4週間も招聘する費用は、國内の試合入場料だけではとても賄い切れるものではない。この点において、現在でもフットボール関係者はこの朝日新聞の快挙には感謝していなければならないものがある。

そしてこの記事が出た日の運動面には、1940年のオリンピック大会を東京に招致すべく、オスロ会議を控えて東京市は牛塚市長の名で世界の40カ國宛に参加する國には、役員及び選手の出張費用として100万円を補助すると電報を打つたとの記事が出ている。1人100万円ではなく、1カ國100万円であるのは時代の相違をつくづくと感じさせる。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

そしてそれから後には毎日のようにフットボールの記事が紙面を賑はせていた。朝日新聞事業部としても、引受けた以上は少しでも損害を少なくさせようと思うのは当然である。

16日にはヘッドコーチ、マロニーの選手照介とチーム編成の苦心の話がロサンゼルス特派員から送られて来ている。

「カールクレメンスはハーフバックとして全米第1人者である。エルスキンスはバスケットボールでも全米一であり、ウィリアムソンはフットボールの他陸上の槍投げでも優秀だ。又オレゴン大学のモールスは1934年度のオールアメリカに選抜されている。等々そしてこのチームを編成するについては南加大学のジョーンズコーチの意見を大いに取り入れてある。又このチームは日本でラグビー、バスケットボール、拳斗の試合もしたり」

と書いてゐる。その中で面白いことは

「ただ心配なのは飲料水で我々はシカゴ、ニューヨークどこの試合に行くにも水だけは必ず持つて行くのですが、まさか日本へ水を持つて行くわけにもゆかないし選手は皆、日本の水は大丈夫だらうかと心配してゐます」と云つている。遠征するたびに水を持つて行くと云うことも又大変なことである。」

2月17日の朝日新聞朝刊にはロスアンゼルスの特派員16日発として練習状況を次の通り報じている。

「紅軍が圧倒的正攻法をとつて例のジョンズの「オフタックルプレイ」（前衛の先端第2者の内側を抜く攻法）に次でウキークサイドの猛突を2回、3回繰返へした後突如巧妙なエンドランに出で、今度は南加大学独特のクキックキックの鮮かなところを見せて遮二無二猛襲すれば、オレゴン、スタンフォード、加州、ワルサ、サンタクララ、オレゴン州立、シカゴ、ワシントン各大学のピカーのスターを選抜した青軍は一糸乱れぬチームワークで目にも止まらぬデセプション（米式蹴球特有のトリック戦術）と物凄いスピードに電光石火のパスを以つて巧みに敵の意表に出る千変万化の作戦を縱横に駆使し両軍とも天晴れ米口蹴球代表オールスターとして十二分の技倆を発揮した。

因にこの訪日蹴球団は旧臘クリスマスに行はれた東西爭覇戰で完全に全東部を撃破した全西部軍の選手を網羅してゐるし、当地タイムス社の運動部長ブレヴーン・ダイヤース氏も記者に対しこの米口オールスターズから11名の名を挙げて全米東西選抜軍とやらしても、問題なくこのチームが勝つことは蹴球記者なら誰1人異存はあるまいと語つてゐた。」

と報じ前景気をあほつている。又この日には南加大学の名コーチとして全米に有名なハワードジョンズの云葉も載せている。

「自分も一緒について行きたい位である。このチームは名実共にオールスターキャストであることは勿論、各大学チーム中、各ポジションに最も優れた成績を示した者を1人づつ推

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

薦した、米国蹴球界の最高名誉のオールアメリカンのメンバーをこれ程一緒に揃へたことはオリンピック以来ないことと思ふ。

蹴球は第１に厳格であつて合理的な国体統制と各選手の機敏、勇敢、忍耐、優れた技倆、体力等の他に日頃秩序正しい訓練を要することはいふ迄もない。この点より見て勇敢で然も頑張り強い日本人には最も適当したスポーツだと信ずる。選手一同には日本最初の米口蹴球として恥しからぬ試合をするよう懇々に訓しておいた。紅青両チーム共理想的な強チームで紅軍の特長を、強豪揃ひの攻撃力の物凄いチームとすれば青軍は奇襲作戦の巧妙さと比類なき防禦陣を以つて戦うチームといへよう。」

と語つてゐる。

勇敢な忍耐力のある日本人に適してゐると云つていることは、過日の日本第１回の試合の時駐日米大使のグルー氏の挨拶の云葉と期せずして一致している。そういうことはフットボールの性格が明確に現われていると思はれる。又この夏に駐ロスアンゼルス領事の堀公一氏の日米親善のために大いに期待すると云う云葉が出ている他、ロスアンゼルス・タイムズの運動部長のブレヴーン・ダイヤース氏が今度渡日するチームのメンバーの豪華さを唱えた云葉も載つている。

又南加大学総長ヴォンリーン・スミス博士は

「アメリカの代表的フットボールチームが今回朝日新聞社の招聘で渡日することは昨年日本を訪問し、畏くも叙勲の恩命に浴した自分として特に喜ばしく感じる。

チームワークの訓練と青年の士気を新興する上にもつともよいフットボールを日本に紹介せんとする此のアメリカンオールスターズは、渡日によつて日米両国民間の親交をますます密接ならしめると同時にまた將来日本の大学において必ずやこのフットボールが普及発達し日本チームの渡米招聘の日が一日も早く実現されんことを切に望む」

との辞が出ている。現在でも 40 年経過したがまだそれが実現していないことは実に残念に思う。

その翌日の新聞には重光外務事官が、「・・・由来スポーツ精神は国際的諒解の基礎となるものでありこれによつて従来国際的親善が培はれた実例は枚挙に遑がない。・・・」と日米親善の為に実に有意義であるとの云葉がのつていた。この時の重光外務事官は後に昭和 14 年に上海事変の時の 4 月 29 日天長節の日の祝賀会で上海において爆弾の為負傷し片足を失い、又第二次世界大戦の終了の昭和 20 年 9 月には東京湾内で米軍艦ミズリー号上で日本の降復文書に署名した人である。

又この日の同面には東京学生聯盟のポール･ラッシュ理事長は次の様に述べている。

「今回朝日新聞社が米口学生フットボール花形選手 35 人を招聘して大試合を催して下さることに深甚なる感謝の意を表するものであります。我等アメリカンフットボールを日本に

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

紹介せんとする先駆者にとりましては、当地に於ける新聞の支援、協力の御精神ほどうれしく感激させられるものは他にありません。この事は一般の興味を増進させ、幾百の選手の卵に真のプレーを見せ、如何によく訓練されたものであるかを理解させる絶好の機会であると信じてゐます。

日本で最初の試合は旧臘11月神宮で挙行されたが、その時米国大使ヂョセフ・グルー氏は次の様にいつて居られた。

「アメリカンフットボール程觀衆にも選手にもスリルを感ずるスポーツはない。そして苟くも米口人たるものは、このゲームを持つことに誇りを感じないものは一人もあるまい。このゲームにおける勝利は、より機敏なこと、より辛抱強いことによつてかち得られ、日本人の伝統的武士道精神、生活への根強い献身的精神、競技に対する全魂的熱意は、必ずやこのゲームに適することを進云したい」

大使のこの御云辞は全く我等がこのスポーツを日本へ移植せんとする目的を吐露せられたものであると確信してゐます。幸にも、朝日新聞社の最初の御催が2組の「教授チーム」の招聘であつて草創時代にある日本にとつては願つたり叶つたりであります。我等はアートマン氏（スタンフォード大学コーチ）バーク氏（オレゴン大学コーチ）及び35人の選手によつて、啻にアメリカンフットボールのテクニックを指示されるばかりでなく、斯技の裏に潜む偉大なるスポーツマンシップをも堅く握りしめたいと希つてゐます。」

と語つている。

随分朝日新聞社を誉めているようであるが、当時の聯盟関係者としては全くこの気持であつたのであろう。そして又このチームを招聘することについては当然聯盟の理事にも朝日新聞から事前に相談を受けていたことは事実であるので、聯盟としても是否このチームを招聘したいし、そして又このゲームを盛大にしたい、それには大いにP.Rをしなければならなかつたことは事実であるので機を見ては色々朝日の紙上に出て来ている。

この数日後には関西大学のコーチをしていた加納五六氏が語つている。同氏は南加大学を1931年卒業して日本に帰朝し出来たばかりの関西大学のフットボールのコーチをしていた人である。今度来日するチームの中にはロングビーチのハイスクール時代の同氏の同窓生が6人入つているのである。

「素晴らしいチームで、このチームなら1934年度の全米№1のミネソタ大学にも劣らない。南加大学はこゝ10年位アメリカのフットボールを牛耳つていて、南加大学選手中7名は1932年度に全米に覇を唱えた当時の選手である。」

云々とそして各選手の紹介をしている。

この年に入つてから東京では慶応と法政がチームを編成して正式に東京学生蹴球聯盟に加盟したのである。一方関西に於てはこれと時を同じくして関西大学がチームを編成した。これで東京学生聯盟は5大学となり関東においてはYCACを入れて6チーム出来たのである。関西では関

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

西大学と KCAR（神戸外人クラブ）で 2 チームが出来た。

2 月 20 日の朝日新聞は一行の出発を次の様に報じている。

「(ロサンゼルス特派員 19 日発)写真班とニュース映画班の前に並ぶ純白のスェーターに揃ひのフェルト帽子と左腕につけた朝日新聞社のマーク。太洋丸の甲板はアメリカン・オールスターズ渡日蹴球団の晴れやかな笑顔と、壯途を見送る大学の交友学生各部運動選手や、スキート・ハート達。選手の中には蹴球映画によく出てゐる聯中があるのでハリウッドの女優聯も繰り出して身動きも出来ぬ賑ひ、船室には武者修業に出で立つ昔の剣客のやうに、例のヘルメットと肩当、頑丈なフットボール・パンツなどを大事にしてゐる。

紅チームのユニフォームは真紅なヘルメットに同じ色のジャージ、パンツは華美な黄金色のサテン地でバックに紫色の太い線をくつきり現はし、一方青チームは真白なヘルメットに青色のジャージ、パンツは緑色のサテン地のバックに白筋を浮き出しどんな混戦になつても紅青両軍選手が一目で分るやうにしてゐる。やがて午後 3 時テープの紅と南加大学校歌合唱の裡に華やかに日本に向け出発した。」

と花やかな出帆風景を報道して来ている。

又、この日は駐日米国大使ジョセフ・C・グルー氏も「日米親善に偉功を確信する」と祝辞をのべていた。一行は全員ロサンゼルスから大洋丸に乗船したものではなく、ロサンゼルスのサンピドロからは 30 名が乗船し、20 日サンフランシスコに寄港し、ここから乗船する 5 名を加えてサンフランシスコで練習をして 2 月 21 日に出帆した。

2 月 21 日の朝日新聞には明治大学教授であり東京学生フットボール聯盟委員の松本瀧蔵氏が「スポーツの王座米式蹴球の人気」と云う題で一文をのせている。

「・・・シーズンのいよいよ始まらんとする 9 月頃から新聞紙上はフットボールの記事で賑ひ 11 月の大試合の前売切符もこの頃より申し込まなければ手に這入らないといふ有様である。

競技に対する人気は 1890 年頃より既に沸立ち、当時全米一と称せられてゐた 8,500 人のスタンドの収容力を有せる競技場も狭く 2 万数千人も押込めた記録が残つてゐる。その頃は 1 ドルの入場料は 1,903 年には 2 ドルになり、欧州大戦後は 2 ドル 50 セントに昇り、1,921 年には更に 3 ドルとなり、今日では 5 ドルも支佛つて見に行くといつた状況であり、その人気も何時峠に達するか解らないくらいである。而も今日は 8 万人以上も収容出来る大競技場が全国致る所の大学によつて建設されて居り、今では既に狭すぎるかの感を与えてゐる。米口の伝統を誇るハーバード大学対エール大学の試合当日の如きは各地から集るフアンを乗せた特別臨時列車だけでも 100 本に達するといはれてゐる。

自動車の如きもニューヨークからニューヘブンの競技場 73 マイルを殆ど続く位のすばら

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

しい人出である。況んやパサディナにおいて年々正月に催されるローズ・ボウルの東西試合当日の人出の如き想像以上である。競技場へ態々鉄道線路を敷き各地の列車を集るが如き現象はフットボールを除いては他の競技では見られない。

米口の大学における運動競技に要する一切の経費は殆どフットボールの収入から得られるのである。米口の諸大学を見学したもので運動設備の宏大であり且つ完備せることに驚かざるものは一人としてゐないであらう。これ等は悉くフットボールの恩恵に浴せるものである。

さてこの競技はなぜに斯くもポピュラーなのであらうか。即ちフットボールの対校試合は他に比類のない華々しい環境で決行されてゐる。宏大なるスタンドを埋めつくした大観衆が而もひいきひいきの学校のスクール・カラーを身にまとひ秩序正しい応援団と歩調を合して、或る待望と感激とで昂奮してゐる晴れやかな且つ緊張し切つた空気の裡に行はれて行くからである。

ドッと鬨の声が一方のスタンドから揚る。すると学校のバンドを先頭に22名の選手が頑丈な体格をユニフォームに包んで肅々として進んで来る。選手は中央で列をかへして間もなく所定の位置に走つて行きウォーミングアップを始る。するとスタンドはリーダーの指揮の下にカレッジエールをやる。科学的といふよりも優美な応援のデモンストレーションが開始され観衆の大きい叫び声が競技場に満ちて響き渡る。すると反対側のスタンドが一斉の拍手と共に応援の応酬を始める。相手チームの入場である。正しくこの応援は日本に輸入され、その一端が吾が大学野球リーグ戦に今日用ゐられてゐるのである。本場の米口でフットボール試合を観戦してこの光景に接した時、感激と昂奮の波涛の胸に迫るのを覚えざる者はゐないであらう。

併しフットボールの真の興味は試合そのものにあるのである。この競技程頭脳と勇気とスピードを要する団体競技は他にはあるまい。プレー毎に一々作戦を練つて攻撃を開始する点など実に科学的である。試合は万雷の如き拍手裡にキックオフと共に開始されるが、球を所有せる側のダウンから直に本格的の戦斗が始る。選手達はフォーメーションを作り腰を降ろして身構えをする。10万の観衆の前で誰にも見える公明正大なる広庭でプレーを開始する瞬間の選手達の姿は、ある犯し難い権威と英雄的気分を与へる。それはある純真なる荘厳さである。それは他の西洋のスポーツに見ることの出来ない一種の気合である。この瞬間の眞剣味は丁度撃剣の試合の時剣をとつて立ち上つた時のあの肅然とした気合である。而もこの真剣さが選手たちの全身に溢れて見えるのがフットボール選手の姿である。

クォーターバックの信号と共にセンターがバックの1人に球を投げると一斉に両軍の選手が電気装置の機械のやうな敏捷さをもつて動く！　球を受け取つたバックが韋駄天の如く走るのを相手側がタックルしてダウンする。その地点からまたたく間に再び攻撃のフォーメーションを組む。何と勇ましい競技であらう。このアメリカンフットボールに対する知識の何等ない者ですら映画でこれを見て血を沸さない者があるであらうか。進化した今日のフットボールは、頭脳、技術、スピード、気合の四要素は必須条件としてゐる点からして、この競技が我々日本人の性格にピッタリ適合せることは論を俟たない。

我国においても昨年の秋突然アメリカンフットボールに対する興味が抬頭し都下大学生

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

によつて聯盟が生れ神宮競技場並びに大阪において試合が決行されたが、不幸にしてこの競技の有する真のスリルと魅力を十二分に発揮することが出来なかつた事は返す返すも残念であつたが、初期のデビューとしてはこれも止むを得ない事であらう。

今回朝日新聞社の招聘によつてアメリカ西部における一流大学選手中から選つた優秀プレイヤーが来朝して真のアメリカンフットボール精神並に技術を指示して呉れることになつたが、

この新興スポーツを正しく我国に紹介する意味において、その貢献する所は計り知ることが出来ない。我々は絶大なる待望と感激をもつて彼等を歓迎すると同時に過渡期にある我国における此のフットボール競技に格段の進歩と発達を残して帰国してくれるものと期待してやまない。」

以上長編の来日フットボールチームの歓迎と PR を述べている。

この文章の中で松本氏は入場料が 1,890 年頃は 1 ドル、1,902 年は 2 ドル、1,921 年には 3 ドルで 1,934 年は 5 ドルになつたと書いているのは面白い。又大試合には各地から臨時列車が 100 本もあると書いている。特にローズボウルでは臨時に鉄道線路を敷設して臨時列車を競技場迄乗入れると云うのであるから大変なことである。大学の各運動部の経費は殆どフットボールの試合の入場料で支出されるとか、試合の風景や、色々面白く書いており全六段を使つてのキャンペーンは大変なものであつた。

又朝日新聞は上・下２回に亘つてジョージ中尉（駐日米大使館付武官、1.919 年米口陸軍士官学校の主將でオールアメリカのクォーターバック)、ブース中尉（駐日米大使館付武官、1,917 年～18 年米口陸軍士官学校のガード及びタックル)、ジョージ・マーシヤル教授（立教大学体育主事、1,925 年～28 年オハイオ大学のクォーターバック）及びポール･ラッシュ教授の 4 人による座談会の記事をのせている。その中でジョージ中尉は現在ではアメリカの国技は野球ではなくフットボールであると云つている。

そしてプリンストン大学、エール大学、ハーバード大学が米口で始めたもので陸軍、海軍はこれに次いで居り、シーズンは 9 月中旬から 12 月のクリスマス頃迄であり、「ポースト･シーズン･ゲーム」と云つて西海岸と東海岸の優秀チームが元日にやる、とアメリカでの厂史と現況を語つている。又「体格の点から云うと日本人は平均的にいつてフットボールをやるには身体が余り大きくない。つまりあの豪勇無双という感じのゲームをやるまでに身体が出来ていないといへる。然し良きものを取つて以つて更に良きものとする日本人はこのゲームを日本に入れて技を戦はすうちに段々立派なゲームをするようになると思ふ」とも云つている。

要するにフットボールは体力を非常に必要とするが日本人には日本的に充分にフットボールを消化して立派にやつて行くだろうと云つて居るのである。更にこの座談会の中でブース中尉は「どのスポーツでもそうであるが完全なチームワークがフットボールでは絶対的に必要である。このチームワークは身体、精神、智能の三者を渾然一にして、肉体的の障害物

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

を征服すると云う所に視点をおき、第１年から猛烈な訓練をやる。主眼はチームワークであるが、これが選手個人に与える利益は極めて大きい。フットボールの試合は両チーム共力倆は伯仲しているから、第一に決断力つまり機敏,スピードを要し、これを各選手個人について養うことが必要である」

と云つている。

又同中尉はフットボールの現況について「フットボールが盛んになつたのは 1,912 年頃で、現在は“イントラミューラル・システイム”と云う一つの大学の中に 11～12 の色々な部や会で作つているチームの内の優秀なプレイヤーをピックアップして、その大学の代表チームを編成して他校との試合をすることが広がつて来ている」と説明している。

とにかく朝日新聞としても莫大な経費を使うのであるから少しでも入場収入を挙げるように紙面を最大に利用して PR をしていた。引いてはこれはフットボールの PR にも当然なつたのである。

一方東京学生米式蹴球聯盟では 2 月 25 日午後 7 時から大阪ビル（丸ノ内）地下のレインボウグリルで昨年 11 月 29 日に対 YCAC 戦の日本最初の試合に参加した早明立の三大学の出場選手と YCAC の出場選手の懇親夕食会を開催し、学生聯盟から日本のフットボール発足について大変世話になつた御礼として YCAC にトロフィーを贈呈すると共に此度来日するアメリカチームのスケジュールとこれに対戦する日本側のチームとそのコーチを選任したのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

こうして日本内地では朝日新聞紙上で聯日来日フットボールチームの記事を掲載してPRしている内、2月21日いよいよ来日チーム一行は正午大洋丸でサンフランシスコを出帆して日本への航路についたのである。そして大洋丸船上からは監督マロニーから聯日のように聯絡があり、その都度朝日新聞には大きくその記事が掲載されていた。

又来日フットボールチームと対戦する全日本チームのコーチに選任されたジョージ・マーシヤル氏は次のように朝日新聞に手記を載せている。

「朝日新聞社がアメリカの一流選手を招聘しフットボールの真価を日本に知らせ、又日本のプレイヤーを指導することは感謝にたえない。

現在の東京学生リーグ戦ではフットボールの真価を充分に発揮することは出来なかつた。現在揺籃時期の日本チームの実力ではアメリカのチームに勝つなどは到底望むことは出来ない。日本人の体格は欧米人に比して劣つてはいるが体躯も大きく素質もよいのであるならこれに越したことはないが、只單に体躯が大きいと云うだけの者ならば素質の良い小男の方がはるかに勝つている。日本人は重量の点ではハンディキヤップがあるが数年を出でずして必ずや米口チームと勝負を爭うまでに発達するであろう。

アメリカンフットボールについて余りにも緩慢であると比評することを聞くがこれはラグビーと比格して考えるからである。フットボールとラグビーは味うべきところが違うのである。自分は日本で初めてラグビーを見てフットボールの立場からのみラグビーを見ようとしたが、この両ゲームが本質的に全く異つたものであると云うことを知つてからはラグビーに興味が沸いて来た。フットボールは日本人が要求する形のゲームであり、日本の民衆にピッタリ気分の合致する競技であると考えている。

勿論ラグビーもフットボールも虚弱な人のゲームではない。健全な男子によつてのみ行はれて発達して行くものである。我々はフットボールを普及させることによつて広く日本の青少年達にこのゲームを通じて自己の力を必要に応じて充分発揮させると同時に敏捷な判断力と克己心とを養はせたい。更に自己のみならずチームの為に最善の努力を盡すとゆう服從心即ち共同動作という精神を学ぶし、自己の失策は自らとの責に任じてひるまず、必要に応じては、最後の力、最後の勇気を揮い起して自己の努めるべきを努める責任感をも養つてくれる。

又勝利は必ずフェアプレイによつて獲なければならぬと同時に敗れたゲームでもフェアプレイと云う云葉の域を一歩でも出てはならないと云う教訓を深く与えている。戰に敗れて相手の技倆を貶したり或はそのスポーツマンシップがどうのこうのと難じたり、泣く等ということは絶対に禁物である。

フットボールマンは常に頭を高く上げ、胸を張り、目も高らかに自尊心を持たなければならない。フットボール競技場こそこれ等高尚な精神を次の世の人々に養う最高の場所であり、プレイを行う者のみならずこのゲームを見る者にこうした精神を吹き込む好個な場所ともいえる。フットボールは日本のスポーツ界に新たに一つの種目を加えることになつたが、必ずや多くの青少年がこの競技を行うことにより、フットボールの持つ精神を充分に養うことになるであろう。」

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

大体以上のような手記を載せているのである。然しアメリカとの体格の相違により40年後の今日も未だアメリカと対等な試合の出来ないのは残念である。又ラグビーとの比較については全くマーシヤル氏の云う通りでゲームそれ自体の性格が違うので、それを同等に比較することは困難である。次の精神論においては全くその通りであると思はれる。

アメリカオールスターズの乗船大洋丸が太平洋上を日本に向けて進行して居る3月初旬に、試合の前半のスケジュールが大洋丸上のマロニーとの打合せで次のように決定した。

3月14日（木曜日）	全米口学生対抗試合	明治神宮外苑競技場
3月17日（日曜日）	全米口学生対抗試合	甲子園南運動場
3月21日（祭日）	全米口学生対抗試合	甲子園南運動場
3月23日（土曜日）	明治大学対南加州大学	甲子園南運動場
3月24日（日曜日）	全日本軍対米口学生聯合軍	甲子園南運動場

会員券前売は3月6日より3円（指定席）2円、（同）1円、50銭、前売場所朝日新聞社受付、プレイガイド、三省堂（神田）、美津濃（神田）、美満津（本郷）、栗本（銀座）各運動具店、稲門堂（早稲田）、横浜朝日新聞支局であり、関西のは勿論大阪地区で前売りを始めたのである。

そして一方では新聞紙上による規則の解説やその他の記事が聯日掲載されていた。特に第2試合から第5試合迄は立続けに甲子園で挙行される日程であったが、関西地方ではその年の1月に早稲田大学対明治大学の試合が甲子園で行われただけであった。関東では既に6試合が行われているが、関西ではこの時点では1試合だけしか行われていないので、初めて見る人に対する解説的記事が多く出ていた。その内でも面白いことは関西のラグビー界の重鎮である厳栄一氏が、フットボールの面白さについて語つている記事が出たことである。

他方アメリカのチームと試合を行う明治大学と全日本チームは、3月10日頃各校の学期試験終了と共に練習を開始した。特に選抜チームである全日本学生チームは立教大学のコーチであるマーシヤル氏をコーチに東京芝浦にある朝日新聞社のグラウンドで聯日練習を行いチームワークの形成に務めていた。

訪日アメリカチームは大洋丸船上でトレーニングを続けながら18日間の航海で太平洋を渡り、3月10日午前9時に横浜に入港した。東京学生米式蹴球聯盟の役員や朝日新聞社の関係者はランチで港外迄出迎えたのである。そして一行は横浜から省線電車で東京に向い、東京駅には午後1時頃到着した。東京駅には又学生や朝日新聞社の人の出迎えがあり、直ちに日米口旗のついた15台の自動車をつらねて宮城を遙拝し、引続き明治神宮に参拝し外苑競技場を見て朝日新聞社に挨拶して、宿舎の帝国ホテルに着いたのである。然し直ちにユニフォームに着換えて又自動車を聯ねて池袋の立教大学のグラウンドに向つた。そして上陸第一歩の練習を行つた。練習と云うより

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

はデモンストレーションで立教大学のグラウンドには多くの日本人が見に来て居り、巨漢揃いのチームには皆目を見張つていた。

この日の朝日新聞の夕刊は、一面トップに6段抜きで一行の東京駅着と明治神宮参拝の写真入りで「本社招聘米口学生蹴球団荒波冒して来る　巨人35選手元気一杯で入京」と云う見出しで大きく記事を掲載した。その中で面白いのは「流石は巨人の一行、平均体重は180ポンド約22貫で重量拳斗選手の資格がある訳、事実大学の重量選手が7名もゐる。少し曲つた鼻つぶれた耳で明かにそれと判る。日本人でいへば角力一行と思へばその身体の偉大さが想像出来る。男女ノ川、武蔵山級の人間が半数を占めてゐる。ただし顔つきを見ると何れものんきそうな坊ちゃんのやうである。・・・」と書いている。当時の角力は武蔵山、男女ノ川の両横綱が人気を呼んでおり、天下無双と云はれた双葉山はまだ平幕か幕下に居た頃である。

翌3月12日は正午に宿舎の帝国ホテルの大宴会場で歓迎午餐会が開催された。出席者は約200名でグルー米大使夫妻を初め、徳川家達日米協会々長、朝日新聞関係者、フットボール関係者、それに全米軍と対戦する日本チームの選手等大勢で大変な盛会であつた。この午餐会終了後直ちに神宮外苑競技場で本格的な練習を行つた。赤軍は南加大学コーチのジョーンズフォーメーションに対し青軍はヌート・ラクニーのノートルダムフォーメーションと、各々異つたフォーメーションを使用しての練習であつた。

そしてその夜6時半からは九段の軍人会館（現在は九段会館）で歓迎会の「アメリカンフットボールの夕」が催され、入場者1,500人で満員の盛況であつた。主催者の朝日新聞社の編集局長の挨拶、元ペンシルヴェニア大学の選手であつた赤星四郎氏の「フットボールの見方」、グルー米大使の挨拶代読、ポール･ラッシュ氏の歓迎の挨拶、等でこれに対してマロニー監督の謝辞等の後、松本瀧蔵氏の紹介で各選手1人1人を紹介した。その他R.K.O社製作の「米口十大学応援歌集」と前に書いた日本題名「蹴球大学」本題「ノートルディームの精神」の2本の映画を上映してこの歓迎会は終了した。この時の入場料は10銭であつた。いくら物価の安い時代であつても10銭とは安いものであつた。その当時そばのもり、かけが8銭であり、2流の映画館の入場料は30銭位であつた。

この歓迎会に先立つてマロニー氏は6時25分からJOAKのマイクから全国に中継放送を行い、アメリカにおけるフットボールの話をした。3月13日の朝日新聞のスポーツ欄は全面フットボールの記事で埋まつていた。

「・・・青軍はワシントン、オレゴン、スタンフォード、ワルーサ、サンタクララ、サンノゼ、羅府加州等7大学の優秀選手から成る選抜混成チームであるのに対して、紅軍は“東にラクニー西にジョーンズ”と謳はれている現南加大学の名コーチ、ハワード・ジョーンズ氏の戦法を遵奉する南加大学チーム11名を根幹としてゐる。青軍の戦法は西のジョーンズに対して11日軍人会館で挙行された歓迎会“アメリカンフットボールの夕”に映写された

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

“蹴球大学”の撮影に監督として招聘され飛行機で向ふ途中不幸墜落惨死を遂げた故ヌート・ラクニー氏の創案にかかるノートルダム・システイムを代表する諸大学選手を集めたものであつて期せずして現代米本土で対立をしてゐる二つの科学的戦法を我が国において見る事が出来るといふことは・・・」

と書いているが、確にその当時の米国におけるこの二つの代表的戦法はフットボールフアンにとつては重大な関心事であつたのである。

又四至本八郎氏は

「朝日新聞が経済を度外視して招聘したその儀性的精神は立派である。フットボールは野球と違つて学生はプロ以上であり、卒業生はプロには行かないでむしろプロレスリングに転向する者が多い。ノートルデイエムの名選手であつたガス・リンネンバーグ等はその例であり、日本でもフットボールが今後盛んになればプロレスリングも出て来るであろう」

と云つてゐるのは面白い記事である。

現在から見れば日本においてはプロレスリングは終戦後のものであるが興業の上手であつた結果か、フットボールより盛んでありフットボールからプロレスリングに転向したものは立教の大山、慶応の百田位のものでまだ数と実力の点でプロレスリングの中程とは云えない。戦後プロレスリングの力道山がプロレス級の重量の者を集めてフットボールのチームを作つたら面白いだろう、と云つたと云うことを聞いたことがあるが、これは四至本氏の予想とは逆になつたことである。

そして3月13日の朝日新聞の朝刊には､2頁全紙を使つてフットボールの見方､ルールの解説、競技者のポジションの説明、フォーメーションの解説、審判員の任務、用語の解説等実に詳しく記載して初めて観る人の為に有効な手引となるものをのせている。これ位の記事はこれ以外、現在迄もどの新聞にも出なかつた様な立派な解説記事であり、朝日新聞が如何に熱を入れているか一寸悲壮なものさえ感じさせる位であつた。

又同日の夕刊にも大きく選手の動静を取扱い、又入場券の売行が凄いばかりであり3円券は売り切れと云うような記事が大きく出ている。来日したオールアメリカンのメンバーは次の通りであつた。

青軍

ウイリアム・バーク　（オレゴン大学）　H・B兼コーチ、24才、5呎7吋、165封度。ウォーターポロの正選手を3年間やつた。

アレックス・F・イーグル　（オレゴン大学）　R・T、22才、6呎2吋、210封度。桑港ロウェル・ハイスクールを卒業し1930年同チーム主將たり。3年間正選手を続けトラック競技も行ふ。全米代表選手、オールコースト選手、並に1935年ホノルルで行はれた西部オール

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

スターゲームに出場した。

コーウィン・アートマン　（スタンフォード大学）　青軍サイン・コーチ並にC、G、T、26才、6呎2吋、250封度。ロングビーチ・ポリイ・ハイスクール卒業。3年間正選手を続け、1924年カリフォルニア・プレボスクール・チームに参加し、次いで全米代表選手に選ばれ、1930年パシフィックコースト・オールスター選手を勤めた。

シンクレア・ロット　（羅府加州大学）　RE、22才、6呎2吋、185封度。ロサンゼルス・ポリテクニック卒業、3年間正選手を続け、ラグビー、トラック選手として活躍し、全米リレー・チームの優秀なメンバーである。

ウェズレェイ・ハッバード　（加州サンノゼ大学）　LE、24才、6呎、190封度。4年間正選手を続け2年間主將たり。東西シュライン・ゲームに参加した。

アル・ドード　（サンタクララ大学）　C、24才、6呎2吋、212封度。桑港ロウェル・ハイスクール卒業、3年間フットボール、野球選手を行ひその内1年間は両競技の主將たり。次全米代表選手に選ばる。

チャールス・ムーチャ　（ワシントン大学）　G、22才、5呎10吋、200封度。フェンガー・ハイスクール卒業、3年間フットボール、水泳の選手を行ひ、水泳部主將であり、メドレー・リレー記録保持者である。フットボールではオール・コーストのガードを3年間行ひ全米代表選手に選ばる。

ポール・バフキン　（ワシントン大学）　QB、22才、5呎10吋、175封度。テキサス・アマリロ・ハイスクール卒業、3年間正選手を行つた。ラグビーの選手である。

ジーグフリード・フアンク　（羅府加州大学）　G、C、24才、5呎9吋、180封度。サンタバーバラ・ハイスクール卒業、3年間正選手を行ひ、レスリング、ラグビー選手。

ヂャック・ドローン　（スタンフォード大学）　T、20才、6呎3吋半、225封度。ロスアンゼルス・ポリテクニック・ハイスクール卒業。大学では2年間フットボール、バスケット、テニスの選手であつた。

ポール・R・サルコスキー　（ワシントン大学）　FB、21才、5呎10吋半、200封度。ワシントン・ブヤラップ・ハイスクール卒業。3年間フットボール陸上選手を続け、その内2年間は次全米代表選手に選ばれ東西ゲームに出場した。

ノーマン・フランクリン　（オレゴン州立大学）　HB、24才、5呎9吋、185封度。ロングビ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ーチ・ポリテクニック・ハイスクール卒業。3年間正選手を続けオール・コーストのHBを勤めると共に次全米代表選手に選ばる。

レイモンド・ネヴュー　（オレゴン大学）　QB、24才、5呎9吋、175封度。3年間フットボール、陸上競技の正選手であつた。

ハワード・W・クラーク　（オレゴン大学）　T、23才、6呎1吋、205封度。ロサンゼルス・ポリテクニック・ハイスクール卒業。3年間正選手であり、トラック及びレスリングの選手である。

ハル・バングル　（オレゴン州立大学）　QB、22才、5呎9吋、195封度。サンタ・アナポリ・ハイスクール卒業。3年間正選手を行ふ。ポロ、ラグビーの選手であり、フットボールでは全米代表選手に選ばる。ブロッカー、タックラーとして名声あり、校内随一のプレイヤーとして知らる。

ウッドロウ・ウーリン　（ワシントン大学）　T、21才、6呎1吋、195封度。スントラル・ハイスクール卒業、3年間正選手を行ひ、ラグビー、バスケット、スキーの選手である。1934年にはカレッジチームの主將となり、全米代表選手に選ばる。又サンフランシスコで行はれた東西ゲームに出場、1935年ホノルルの西部オールスターゲームに出場した。

紅軍

ゲラルド・オストリング　（南加大学）　右E、右T、右G、左T、22才、6呎、200封度。ラグビーのFWもつとめヘビー級拳斗及びレスリング選手である。

エー・エル・マロニー　（南加大学）　QB、26才、5呎6吋、145封度。来朝軍の総監督。1930年度全米代表選手に選ばる。

ウィリアム・ヴォーヒース　（シカゴ大学）　右E、24才、6呎、185封度。籠球、野球、ラグビー、陸上の選手でもある。

バイロン・ジェントリー　（南加大学）　左HB、23才、5呎11吋、200封度。3ヵ年南加大学の正選手で野球選手をも兼ねている。

オリバー・バーディン　（南加大学）　C、G、22才、5呎10吋、205封度。3ヵ年南加の正選手であつた。

ケネス・ブライト　（南加大学）　右HB、22才、6呎1吋、215封度。3ヵ年南加の正選手、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

野球、ラグビーの選手。

レイ・モース　（オレゴン大学）　左E、23才、6呎1吋、195封度。オールコーストのEで第３位全米代表選手に選ばる。他に野球は2ヵ年間正選手である。

ワード・ブローニング　（南加大学）　E、6呎1吋、205封度。3カ年南加の正選手で他に野球、篭球の選手。

ハリー・ボヴィー　（ワールサ大学）　右T、22才、6呎2吋、220封度。3ヵ年間ワールサの正選手で他に水球、ラグビー、篭球の選手でもあり、2ヵ年間全オクラホマ州チームのTに選ばれた。

バーディー・ボイヤー　（羅府加州大学）　G、23才、5呎9吋、190封度。3ヶ年間加大の正選手でラグビーもやり、オールコーストのG並に次全米代表選手に選ばる。

ロバート・アースキン　（南加大学）　T、22才、6呎2吋、225封度。蹴球は3ヵ年、篭球は2ヵ年南加の正選手でオールコースト並に次全米代表選手に選ばる。

ジャック・ホールゲート　（南加大学）　C、20才、5呎、190封度。蹴球は1ヵ年、ラグビーは2ヵ年南加の正選手。

セシル・ストーレー　（シカゴ大学）　FB、22才、6呎1吋、205封度。3ヵ年シカゴの正選手であり他に篭球、陸上、ラグビーもやり、加州アマチュア拳斗ライト級の選手権保持者。

カル・クレメンス　（南加大学）　HB、21才、5呎10吋、205封度。紅軍の選手並にコーチで3ヵ年南加の正選手であり水泳、ラグビー、陸上もやり1933、34年全米代表選手に選ばる。又南加の最優キッカーの一人でもある。

エベレット・ブラウン　（南加大学）　HB、24才、5呎9吋、165封度。3ヵ年南加の正選手で他に篭球の選手。

ベン・パラマウンテン　（スタンフォード大学）　T、21才、6呎2吋、215封度。蹴球の他拳斗、ラグビーの雄。

ラリー・スチーヴンス　（南加大学）　G、22才、6呎2吋、215封度。33年正選手として出場オールコースト並に1932、33年の全米代表選手に挙げられた。

マネージヤー・トレーナー

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ヂャック・ガードナー　（マネージヤー）　先年バスケットボールコーチとして来朝したことのある名選手であり、一行中唯一の日本を知る人である。蹴球、陸上。南加大学卒業。

ハロルド・ハーディング　（トレーナー）　トレーナーとして加州屈指の技術者で一行選手の食事から体のコンディション、その他総ての相談役である。

以上 35 人が来朝した顔ぶれである。

一行中でケネス・ブライトは頭の毛の色が赤色で彼のあだ名はブリック（練瓦）と云い、彼の名刺にはケネス・ブリック・ブライトと印刷されていた。又バーデー・ボイヤーは 23 才の若さなの頭の毛がなくツルツルにはげて居り、グラウンドでもヘルメットを脱いだことが無い変り者であつた。

3 月 13 日午後 4 時から霞ヶ関の外務次官々邸で外務省主催の歓迎のお茶の会が開催され、重光次官以下が出席して一行を歓待する等官民挙げて大歓迎を繰り返えしていた。
3 月 14 日の朝日新聞朝刊スポーツ欄は全頁を使用し、当日挙行されるゲームの両軍のコンディション、予想される戦法、メンバー、両軍主將の談話等を載せているがその中で面白いのは観衆に対する要望事項がのつて居ることである。

今回のアメリカンフットボール試合は今後我が国において行はれる同試合の軌範ともなるべきものと考へられますから、すべてにその範を垂れて同競技の完全な発展を遂げさせたいため、いづれの競技にも起り易い野卑な弥次、ばかげた応援等は十分慎んで頂きたいと思ひます。尚活動写真の撮影は他の見物に迷惑をかけますので同機械の御持参は固くお断り致します。

と云うものである。その当時はラグビーの試合でも拍手以外の声援は禁じられて居たのでそれに従つたものであろうが、現代の時代に於てこのような注意事項を主催新聞に堂々と掲載出来る新聞があるであろうか。野卑な弥次とか馬鹿気た応援等と云つたら観衆は怒り出すであろう。野球でもサッカーでもバスケットでも現今のような野卑な馬鹿気た応援はその当時は無かつた。ましてグラウンドに飛び出すような馬鹿者は、絶対と云つてよい程居なかつた当時である。それはスポーツを見る人種が現今とは違つていたのではないだろうか。本当にスポーツを理解し楽しむ者が観衆となつていたのではないだろうか。

又活動写真を撮影してはいけないと云ふのも愉快である。活動写真は当然映画のことである。当時はもう一部のモダン人種は映画とかシネマ等と云ふのが普通であつたが、一般には活動写真であり又活動であつた。そしてその活動写真も一般には撮影機、映写機を持つて居る人は殆ど無く、こゝで云つているのはニュース映画のことを云つているのであろうが、大部分撮影機と云えば 35 ㎜のスタンダードかニュース用の 16 ㎜の撮影機で、8 ㎜のものは和製ではまだ無い時代で

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

あつた。ここで活動写真お断りと云うのは当時朝日新聞ニュースがあり、一週間のニュース映画を製作し各映画館で上映したり、又東京の方々にはニュース、短編専問のニュース映画館があつて 10 銭の入場料で見せていたがそのような処に配給を朝日が独占する為のものだと思はれる。

第一戦の 3 月 14 日は晴天であつた。その日の朝日の夕刊は、第 1 面のトップに 5 段抜きで大々的に試合前の競技場の状景を出していた。仲々の美文で次の様に書いていた。

「晴の第一戦の日は来た。日本ではまだ本当の搖籃時代のアメリカンフットボール、しかもその本場の試合がけふこそは我等の前に展開されるのだ。あの物々しい革兜は紅、青に彩られて、小随円球は快音をたてて、たくましい毛脛は風を切つて・・・キックオフの午後 3 時 30 分、それは我国スポーツ史上の記念すべき瞬間、選ばれて来た 35 の精鋭、それは重大使命を帯びた我国スポーツ界の大恩人選手達はもうすつかり船旅の疲労も癒えて今や両チーム共斗志にはち切れん許りだ。

その上天気は晴朗、明治神宮競技場のコンディションは絶好、胎蕩たる春風にゆられて芝生スタンド中央には日米両国旗が微笑んでゐる。そしてこの日を渇望してゐたフアンは午前から続々と詰めかけた。南加システイム勝つか？ノートルダムシステイム押えるか？緻密な正攻法と奔放な戦術とそして人間戦車群のばく進、巨体の激突、羚羊のやうな俊敏さ、余りにも日本人の性格にピッタリするこのスポーツの精神は“東洋に移植されたこの日”からファンの心を捉へ健康な熱病人にして了つた。

刻々増してゆくファン、次第に高まつてくる興奮・・・指定席にはグルー米大使夫妻、クライヴ英大使夫妻、パッソンピエール白国大使父子の顔・・・正 3 時場内に嵐のやうな拍手が爆発した。選手の入場だ。

戸山学校軍楽隊の行進曲に乗つて紅のヘルメット、紅白縫ひ合せのスェーターをつけた紅軍、青のヘルメットに青と黄の青軍がスタンド南方入口から姿を現わした。どれもこれもデカイ体の持主、満場歓声拍手で遠来軍を迎へればアメリカ学生らしく手を差し上げてこれに答ふる気安さ。日本学生聯盟加盟チーム早、慶、明、法、立の各大学各 5 名宛 25 人の代表選手から成る日本チームは北口から登場かくて日本チームを中にしてフヰールド中央前に整列。空には折から場上空に飛来した本社プスモス機、貴賓席に向つて敬意を表せば両国国歌が吹奏されて芝生スタンド上にヒラヒラと日章旗と星條旗が掲揚された。いよいよ華やかなウォーミングアップ。観衆狂喜の中に 3 時 30 分は近づいて来る」

以上のように試合開始前の状況が書かれて居り、又場内風景の内には“切符入口前に長蛇の陣を作つてゐるフアンは休暇中の学生、会社を休んで来たらしいサラリーマン、紳士、モダンガール……。手に手に「米式蹴球の見方」を持つて熱心に見入つてゐる等々云々”とも出てゐる。当時はまだモダンガールが居た頃である。

さて試合の方は 3 時 30 分から主審ジョージ中尉、副審ブース大尉、線審浜田、計時マーシヤルの四審判の下に開始され

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

青軍 17 { 0－ 0 / 0－ 0 / 14－ 6 / 3－ 6 } 12 紅軍

で青軍が勝つた。然し内容的には余り見る可きものは少なかつた。それはシーズンオフでありしかも優秀なプレイヤー揃いではあつたが寄せ集めのチームであつた為である。

試合経過は前半は両軍共一進一退を続けて無得点であつたが、第 3 クォーターに青軍の HB バッキンが紅軍 3 ヤードから左インサイドタックルを抜けてタッチダウン。サルコスキーのトライ・フォ・ポイント成つて 7 点。続いて 10 分に青軍 QB バングルが又もインサイドタックルを突き 40 ヤード快走して T.D。サルコスキーが T.F.P を挙げて合計 14 点とした。紅軍は QB マロニーがオフタックルで 60 ヤード快走して T.D を挙げ 14 対 6 とした。第 4 クォーターになり紅軍はリバースパスからフォワードパスによりバングルがこれを捕球して 14 対 12 としたが、タイムアップ前に青軍は紅軍 20 ヤードからフィールドゴールを決めて 3 点を挙げ、計 17 対 12 の接戦で青軍が第 1 戦に勝つた。

この試合開始について始球式をした松田文部大臣は「ああゆう純真なスポーツによつて結ばれる日米親善の効果は必ず大きいと同時に米口でも学術品性ともに優秀である選手達が打つて一丸となつて動く協同的精神とその進取的なプレイとはわが学生スポーツ界にも十分の貢献をもたらすものと信ずる」と云つて居り、又来賓として来席した内田鉄道大臣は「今日のアメリカンフットボールを一語に評すれば肉彈相搏つ肉彈戰だつたといふ感じだ。その試合ぶりはただ勇気ばかりで勝うといふのではなく一々作戰を練り知識を交へ秩序整然として試合を進めてゐた。こんな国体競技はチームが一糸乱れず作戰してこそはじめて勝利を得る。要するに智と勇と秩序が重大な要素だらう云々」と語つている。

3 月 15 日の朝日の朝刊のスポーツ欄は全頁この試合の記事で埋まつてしまつた。
一行は 15 日に東京を出発して甲子園の試合を行う為大阪に向つたのである。そして翌 16 日には朝日新聞の大阪本社、第 4 師団、大阪府庁、大阪市役所、毎日新聞社等に挨拶廻りをした。
第 4 師団に挨拶に行つたと云うのは面白いことであるが、それは 17 日の甲子園の試合に第 4 師団長の東久邇宮殿下がご観戰になるからではあるが、もうすでにその当時の軍国日本の色彩がだんだんと強くなつて来ていた為でもあろう。

第 2 戦の 3 月 17 日甲子園南運動場は、快晴の日曜日とあつて満員の盛況であつた。試合開始前、東久邇宮殿下はグラウンドに降り一列になつてお向えする来日選手一同にマロニー監督の紹介を受け一人一人握手をして廻わられた。

試合の経過は第 2 クォーター青軍は FB サルコスキーが 2 度に渉つてフキールドゴールを決め

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

て 6 点先取すれば、紅軍も FB クレメンズの 60 ヤードのロングランを加えて TD で同点とした。第 3 クォーターに紅軍はクレメンズの活躍で TD を挙げ 12 対 6 とリードした。第 4 クォーターは青軍がサルコスキーのランニングプレーで TD を挙げ同点とすれば、紅軍も青軍ゴール前のスクリメージから HB ストーレーが中央突破して TD。TFP もなつて 7 点を挙げ 19 対 12 で紅軍が勝つた。スコーアは次の通りである。

紅軍 19 { 0－0 / 6－6 / 6－0 / 7－6 } 12 青軍

19 日には甲子園南運動場で関西 OB 軍とラグビーの試合を行つたがこれは全く余技的なもので、木下（明）、丹羽（明）、伊地知（同大）、長沖（慶）等の OB が入つた関西 OB に 26 対 5 と大敗した。これは全くの御愛嬌であつた。そして 20 日は一行は奈良見物で楽しんだ。

第 3 回戦は 21 日午後 2 時半から甲子園南運動場で挙行された。
その結果は次の通りの得点で紅軍が勝つた。

紅軍 21 { 0－0 / 7－6 / 14－6 / 0－0 } 12 青軍

3 月 23 日は同競技場で午後 2 時 20 分から南加大学と明治大学の試合が行はれた。主審ジョージ、副審ブース、線審マーシヤル、計審ガードナーの下に開始されたが、誕生したばかりの明治大学と米口でも屈指のチームの南加大学では役者が違つて居り、全々相手にならず 71－7 で南加大学が勝つた。

南加大学 71 { 12－0 / 13－0 / 25－0 / 21－7 } 7 明治大学

ラストコーターに南加のキックオフのボールを明治の吉岡が自陣 10 ヤードで受けロングランをし、南加 25 ヤードで鳥羽にラトラルパス、鳥羽が唯一の TD を挙げた。挙げたと云ふよりは挙げさせてもらつた方が正確であろう。明治はフットボール部員以外に当時のラグビーの名 TB であつた鳥羽を入れていた。鳥羽は俊足で有名な人であつた。彼も又このような競技は大変好きな

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

人で、自分からかつて出たのである。

河辺	LE	オストリング
塚平	LT	アースキン
黒川	LG	ブラウン
唐木	C	ホールゲート
山田	RG	スティーヴンス
M畑	RT	バーディン
山木	RE	ブローニング
吉岡	QB	マロニー
大前	LH	ジェントリー
松木	RH	ブライト
畑（進）	FB	クレメンズ

交替　南加：モース、パラマウンテン、ボイヤー、ボヴィー、ストーリー、ヴォーヒス、
明治：畑（弘）、仁井、鳥羽、加藤、横野、花岡、富永、三浦、井上、梶谷、西原

この内井上は早稲田であり、梶谷と西原は法政から助つ人として出場したのである。この試合の翌日の朝日には次のように書いていた「・・・之に反して南加がライン突撃に出る場合、明大のブルーのユニフォームは赤い大きな番号を背負つた南加ラインズメンの巨体に掩はれてしまつてさながら明のラインは地下に埋つてしまつた観があつた・・・」と書いている。

この試合に続いて米軍同士の模範試合を2クォーターだけ行い、その結果紅軍が12対7で青軍を敗つた。

3月25日午後3時30分から甲子園南運動場でヂョーヂ中尉（主審）、ブース大尉（副審）、ガードナー（線審）、マーシヤル（計審）の下に全米軍と全日本軍との試合が行はれた。結果は73対6で全米軍の大勝に終つた。全米軍は来日オールスターズの青軍であつた。第2クォーターに全日本チームは第2クォーター開始と同時にHB鳥羽が自陣45ヤードからロングランをしてタッチダウンを挙げて気をはいただけであつた。

全米軍73 ｛ 20－0 / 13－6 / 20－0 / 20－0 ｝ 6全日本軍

畑（弘）（明）　LE　ハッバード

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

黒川（明）	LT	ウーリン
三浦（明）	LG	ムーチャ
唐木（明）	C	ドード
畑（稔）（明）	RG	クラーク
黒沢（立）	RT	ドローン
梶谷（法）	RE	ロット
松本（明）	QB	アートマン
畑進（明）	LH	バフキン
大前（明）	RH	バーク
川島（早）	FB	サルコスキー

交替選手（米）：フアンク

（日）：西原（法）、吉岡（明）、仁井（明）、加藤（明）、黒川（明）、河辺（明）、鳥羽（明）、山田（明）、山部（明）、富永（明）、山本（明）、塚平（明）、井上（早）、野内（早）、安藤（立）、安部（立）、武田（慶）、西島（立）

この試合に引続き米軍同士の試合が2クォーター行はれ青軍が7対6で勝つた。

翌26日は来日米チームは三宮駅から列車で福岡に向けて福岡での試合の為、出発した。当時はまだ関門トンネルが出来ていないので、下関から朝日新聞社特別仕立のランチで門司に着いて初めて日本式の旅館に泊り大喜びをしたと報じている。一行の行動が色々と新聞に出たが、その内面白いことが沢山あるがその内に皆酒もタバコもやらないでゲームに専念していると報じている。又“紅軍中全試合を通じて一回も休まず交代もしない選手にケネス・ブライト君がある。頭髪は紅軍の代表者といつていいやうに紅毛だ。ヘルメットをかぶつてさえ猛烈な衝突では目から星がでるといふのに、ブライト君のみは紅毛を振り立ててヘルメットを用ひない。実に八面六臂の武者振りだが彼ブライト君の超人的精力はいつたい何処から出て来るのか—ブライト君が公式の招待会以外は全く外出をしない。紅練瓦（ブリック）と呼ばれてゐる仇名も彼の日常を知つて初めて解つた。即ち單に頭髪が紅いといふだけでなく、練瓦の如く日常は沈黙を続け、ゲームとなれば練瓦の壁の如く対手を跳ね返す彼だと”と随行の記者は彼を大変にほめて書いている。そして彼等は福岡で初めて桜の満開を見て大変に喜んだとも報じている。

福岡での紅青対抗試合は3月27日に行はれる予定であつたが、豪雨のため3月28日に挙行された。この日も強風をまじえた豪雨の為、午後4時から試合を開始すると云う相当無理をしたゲームで主審松本瀧蔵、副審バングル、線審ガードナー、計審フランクリンで行はれ7対0で青軍が勝つた。そのスコーアは次の通りである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

青軍 7 ｛ 7－0 / 0－0 / 0－0 / 0－0 ｝ 0 紅軍

一行はこの試合を終了後、夜 8 時福岡発 11 時下関発の夜行列車で東京に向かつた。29 日午後 7 時 40 分に東京駅着直ちに帝国ホテルに入つた。この間約 24 時間の列車の旅には一同大部疲れたようであつたが、翌 30 日には明治神宮外苑での東京第 2 戦が待つていると云ふハード・スケヂュールであつた。

3 月 30 日の朝日新聞にはスポーツ欄に大きく「待望のフアンの前に、けふ決死の一戦、昨夜両軍元気で入京」と云ふ見出しで予想記事が出ている。その記事の下の方に「兵学校のコーチはるばる上京」と云ふ見出しの記事があつた。それには「江田島の海軍兵学校ではかねてから米式蹴球を学生にやらせてゐるが、そのコーチたる同校教官北林琢男氏は本社招聘の全米学生蹴球団の来朝をこの上なき機会とし、是非実地に見学をした上、同校学生に最新式の競技法を指導したいと 29 日はるばる江田島から上京した」と云う記事であつた。

この記事によると兵学校では以前からフットボールをやつてゐたと云うのであるがそれは何時頃からやつているのか吾々も知らなかつた。そしてどんな道具を使用してどのような方法で試合をしたのか解らない。当時の軍とは余り関係がなかつたので知られなかつたのであろうが海軍は色々と新しいものを取入れていたので或は本当にやつていたのかも知れないが、吾々の想像するところでは道具を装着しないいわゆるハワイ等で行はれていたベア・フットボールではなかつたかと思はれる。海軍魂の強い兵学校の聯中であるから道具なしで本式のフットボールをやつたのではなかろうか。とにかく吾々学生聯盟との交流は全く無かつたのでその様相はわからない。

東京における第 2 試合の 3 月 30 日は朝から夜来の雨が降り続き午前中は全くの雨天であつたが正午頃やつと雨は止んだが、グラウンドはぬかつて悪いコンデションの下に行はれた。主審ジョージ中尉、副審ブース大尉、線審マーシヤル、計審ガードナーの 4 審判の下午後 3 時 50 分開始された。結果は次の通りであつた。

青軍 7 ｛ 0－0 / 0－0 / 7－0 / 0－0 ｝ 0 紅軍

この日の明治神宮競技場は夜来の雨でグラウンドは泥田のようにぬかるんでいたので細いプレーが余り出来ず、それに聯日の試合、旅行の疲労もあり凡戦であつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

翌る3月31日は全日本学生対全米学生の試合が行はれたが、この日も前夜からの雨が続き晝頃には吹降りとなる最悪のコンディションになつてしまつた。然し貴賓席には秩父宮、同妃殿下、高松宮殿下、比白川宮、同多恵子女王、竹田宮、同妃、李王、同妃の各殿下が台臨され全日本軍も意気が挙つたが、何しろ最悪のコンディションは軽量の日本チームには不利で大敗した。

全米軍46 { 13－0 / 6－0 / 14－0 / 13－0 } 0全日本軍

モース	LE	畑弘（明）
パラマウンテン	LT	塚平（明）
スティーヴンス	LG	黒沢（立）
ホールゲート	C	唐木（明）
ボイヤー	RG	安藤（立）
アースキン	RT	井上（早）
ブローニング	RE	梶谷（法）
マロニー	QB	吉岡（明）
ヂェントリー	LH	川島（早）
ブライト	RH	大前（明）
ストーリー	FB	松本（明）

交替選手（米）：クレメンズ、ブラウン、ボイヤー
（日）：山本（明）、山田（明）、三浦（明）、畑進（明）、畑稔（明）、加藤（明）、今村（慶）、安部（立）、河辺（明）、富永（明）、野中（早）、鳥羽（明）、鈴江（立）、西島（立）

なお全日本軍のコーチはジョージ・マーシヤル氏であつた。この試合終了後模範試合として紅青対抗で1クォーターの試合が行はれたが、これは0対0で引分けた。

然し一行は皆若さに溢れて元気であつた。一行の中には他にも色々とスポーツをする者が多く、ジーグフリート、ハワード、オストリングの3人は明治大学のレスリングの1日コーチを行つたりした。明治のHBの大前はレスリングの選手でもあつたのでその関係で依頼したものであろうが、4月1日の日に明大のレスリング道場に行つてコーチをしたのである。

又4月1日の朝日新聞のスポーツ欄にはコラムで次のような記事をのせている。「夜間試合の弊害」と云う見出しで「夜間試合の発達しない日本では凡てが想像にすぎないが、馴れ切つた米口あたりではもうソロソロ飽きが来たと見え色々と文句をつけてその弊害を指摘している。その理由は夜間フットボールに対して、全選手、コーチ、父子から指摘されたもので米口らしい所が

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ある。

①睡眠不足になる。

②晝間太陽光線に輝されるのと比較して夜間の冷たい空気は堪らぬ。

③夜間競技場をおおう強力な放射光線による視力の害。

④晩餐時間を変更させられる為に起こる健康上の被害。

⑤祝勝宴の遅くなる為に学生選手自身の健康を害すること。

⑥夜間試合の往復に起る交通事故の頻発」

と云うものである。当時はまだ日本では夜間照明の装置のある処と云えば早稲田の野球場位のものであり、その年の10月からのフットボールを芝公園のグラウンドで夜間試合をやる位であつたが、米口ではすでに夜間照明のあるグラウンドは数多くあつて夜間試合が盛んに行はれていたのである。この記事にも夜間試合の弊害については学生の事しか書いていないが、この当時はプロの試合はあつたのであるが、学生の試合の人気には足下にも及ばなかつた頃である。

4月2日には一行は名古屋で3日に挙行される試合の為東京を出発した。そして4月3日午後2時から名古屋市鶴舞公園運動場で名古屋で初めてのフットボール試合を挙行した。

紅軍20 { 0－0 / 6－7 / 7－0 / 7－6 } 13青軍

の成績で同夜名古屋を出発して東京に向かつた。

そして4月6日にはオールスターズ最後の試合が明治神宮外苑競技場で行はれた。この試合の前座ゲームとして明治大学対早慶法立4大学の聯合チームとの試合が行はれた。この前座試合について明大には紅軍のモース、聯合軍には青軍のフランクリンの2人が名古屋行を止めて各コーチとしてチームをコーチングしたのである。その結果は0対0で引分けになつた。

明大		聯合軍
花岡	LE	陶（早）
加藤	LT	鈴江（立）
唐木	LG	安部（立）
富永	C	安藤（立）
畑稔	RG	風間（早）
塚平	RT	今村（慶）
畑弘	RE	梶谷（法）
吉岡	QB	太田（立）
畑進	LH	福田（早）

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

松本　　RH　　西原（法）
大前　　FB　　川島（早）

交替（明）：山本、黒川、河辺、三浦、岩村、仁井、山田、半田、鳥羽
（聯）：村山（早）、三上（早）、西島（立）、島（早）、久保田（早）、井関（早）、亀井（立）

引続き午後3時30分からヂョーヂ（主）、ブース（副）、ヅーバ（線）、ヒーシュ（計）審判の下に日本における最後の紅・青対抗試合が行はれた。天気は良好で両軍とも最後の試合で張り切つて行い仲々の好試合が展開された。

青軍22　15－0　7－0　0－0　0－0　0紅軍

そして翌4月7日には同外苑競技場で関東クラブとのラグビー戦を行つた。これは29対0で関東クラブが大勝した。

とにかく3月10日来日以来約1カ月の間に紅青対抗試合を9回、対日本チームとは3回、その外にラグビー試合を2回とハードなスケヂュールであつたが皆若く元気で大した事故もなく、無事来日の目的を果したのである。その精力には感服する以外にはない。そしてまだ揺籃期にある日本のフットボール界には大変良い刺激を与えて呉れたし、又一方一般の人にはフットボールがどんな競技であるかを良く知らせてくれたのである。とにかくこの一行は日本のフットボール界の恩人である。終戦後昭和27年この時の監督マロニー氏は日本に再び單身で来訪し、日本の最優秀チームにと云つてトロフィーを寄贈して行つた。そのトロフィーはマロニー杯として甲子園ボウル優勝チームが持ち廻りしている筈である。

4月9日一行は東京学生聯盟の選手達に見送られて東京駅発電車で横浜から日枝丸で帰米の途についた。横浜にも聯盟関係の多くの者が見送つた。来日丁度1カ月を日本で生活した彼等は名残り惜しさうに出帆した。それで面白いことにはこの日枝丸にはこのオールスターズ一行の他にカナダのサスカトンアイスホッケーチームの10名も乗つており、更にシカゴで挙行される全米プロ・ゴルフトーナメントに参加する日本のプロ・ゴルファー安田卓吉、浅見線蔵、宮本留吉、中村兼吉、陳清波、戸田籐一郎、の現在の日本のゴルフ界の重鎮が乗船しさながらスポーツ船と云う感があつた。

マロニー監督は日本を去る日に朗日新聞に次の様な手記を出した。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

“私及び私の監督下にある全米蹴球学生チームの選手達が日本で受けた印象をのべる前に何よりも先づ日本滞在中に受けた懇切丁寧な歓迎に感謝の意を表したい。吾々全米学生蹴球団は限りない歓迎に全く何と感謝していいか判らない。我々の見る所ではこれこそ日本人全般の持つ特性である。この考へはアメリカへ帰つても変わらないだろう。

神宮競技場及び其他における試合は天候によつて幾分ハンディキャップをつけられた。即ち数次の試合において降雨のためにアメリカンフットボールの神髄を発揮することが出来なかつたのである。然し日本のスポーツの証云や我々の競技の観衆の熱心さからして私は日本の大学においてフットボールが正課となるものと確信する。日本人は立派なフットボールのプレーヤーとなるだらう。我々米口選手は日本人選手との数回の試合で彼等の剛勇とスポーツマンシップと、そして体格の小さく経験も浅いにも拘らずこのゲームへの適応性のあることについて深い印象を受けた。

日本についての印象- といつてもその風景の美しさについては云葉で表現することは全く困難なことだ。建築様式の違うこと、伝統や慣習の相異、その他アメリカと異る多くの物ごとが我々の目に最初は非常に珍らしく映つた。然しこの短い滞在の間に吾々は日本人と同じ目で物を見、日本の慣習を理解し、日本建築の真価が判るやうになつて来た。そして我々のチームの誰でもが皆日本を新しい光の下に見直させるという使命をもつて故国へ帰り日本人の卓越した点を故国の人に伝え、これによつて国際平和、日米間の理解、調和の一助ともなさうといふ大目的を土産にしている解である“

と云うのである大変社交的、外交的辞令が多く入つているようであるが、しかし彼等自体本当にそう考へていた節も多分にあつた。この調子で進んだならば、6年後の日米間の戦爭は起らなかつたのではなかろうか、両国の役人同士のかけ引きよりも、純真な若者同士の心のふれ合いこそが国際間の真の平和をもたらすものである。

事実終戦後マロニーは再び日本に来て日本の学生のフットボール王座チームにとトロフィーを寄贈したのである。マロニーは若き日に訪れた日本を忘れることが出来なかつたのであろう。マロニーの再度の来日については又後の方で書くつもりである。この文章の中でマロニーはフットボールが日本の大学正課となるものと確信していると云つているが、現在まで正課にはならなかつたが、66の大学と55の高校と16の社会人チームが出来るようには成長して来たのである。

こうして一行は4月9日に丁度日本滞在1カ月の期間を終り秩父丸で横浜を出帆して帰口して行つたのである。そしてシヤトルに直行し、シヤトルで解団式をして各自想出を残して故郷に散つて行つた。

4月26日ロサンゼルスの朝日新聞特派員はその帰国の模様を次のように報じている。

「本社招聘のアメリカンフットボール全米スター軍はシヤトルで解団式を挙げ各出身地に向かい、南加大学と羅府、加州大学組一行は24日元気で当地に到着、マロニー君以下何れも日本で作つた白服と日本製の靴、ネクタイ、腕時計ですつかりメイド・イン・ジヤパンになつて大学、各新聞社等を厂訪し本社寄贈の日本刀、写真帖、ポスター、朝日新聞等を見

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

せ「日本は素晴しい国だ」を聯発してゐる。また最近当地各新聞の運動欄で身体の小さい日本人が米式蹴球に果して見込みありやと云うことが問題になゐるに対してマロニー、ドラウン、ロットなど全部口を揃へて、日本チームは僅か半年足らずの練習でよくもあれ程やれたものだと感心した。日本人は平均130封度の小躯だからランニング・パスには無論我々の方に分があるが、フォワードパスやラテラルパスはとてもうまい。

何しろ日本人は斗爭精神が旺んで決断が早く我々がラグビーで惨敗したのでも判る通り、科学的研究心の旺盛なること驚たんに価するものがある。恐らく5年後には立派な遠征軍が渡米して二流どころのアメリカ大学チームと互角の試合をするだろう。また大阪で東久邇第四師団長宮殿下より握手を賜り、東京でも宮様方の台覧の光栄に浴したことはアメリカのスポーツ史上未だ嘗てないことで非常に感激してゐる。日本で受けた素晴らしい待遇ともつともよい見学の如きは我々35名のものが永久に忘れることの出来ぬものであると語つてゐる」と報じている。

これも社交辞令的なものが多分に含まれてはいようが彼等としては又一面において真実であつたのであろう。この文章の中で一寸不可解な点がある。それは日本人は130ポンドの小躯であるからランニング・パスは不向きだが、フォワード・パスやラテラル・パスは大変うまいと云ふ件である。130ポンドは15貫600匁であるからそれはその通りであるが、フォワードパスには向いていると云うことである。フォワードパスも身体の大きい方が有利なことは当然である。ラテラルパスはラトラルパスのことであるが、これはラグビー式のパスで、ラグビーは余りやつていないアメリカより日本の方がうまいのは当然のことであろう。彼等のお土産もネクタイだとか靴等は当時の日本にはそれ程上等なものは出来なかつた筈であるが丁寧に作られていたので珍しいので買つて行つたものであろう。

又日本人は斗爭精神が旺盛だと云うことは、彼等の目には小さな体で大きな彼等と試合したのでそのように感じたのであろうが又日本人は好戦国民だと云う先入観もあつたのではなかろうか。

そして5年後には日本からのフットボールのチームがアメリカに遠征してアメリカの二流の大学チームと互角の試合をするであろうと云つている。その二流と云ふのが泣かせるところであつて、決して一流のチームとは云つていない。たしかに今度来たチームは一流中の一流であつた。日本人の体格をもつてすれば相当に経験を積んでも一流大学チームとは無理であると彼等も思つていたものであろう。たしかにその通りであつて、40年経過した今日でも二流はおろか三流或は高校にも及ばない状況である。5年後と云つたがその翌年の昭和11年には東京学生聯盟の選抜軍が渡米してアメリカの高校チームと対戦しているのである。そしてそれから以後は正式なチームの遠征はない。然し彼等は今度の日本遠征で大変良い印象を得て帰米したことは事実であつた模様で、日本のフットボールの将来に大変期待したようであつた。

このようにして昭和9年の中頃から計画された日本にフットボール移植に関しては約10カ月の間に大成功をおさめたのであつたが、又一方においてはフットボール界には大変忙しい10カ月であつた。即ちフットボール設立の準備、スケヂュールの計画、選手の養成、創立試合の準備、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

日本で最初の試合、第1回リーグ戦の準備、実行、アメリカチームの招聘等、大多忙に過ぎてしまつたのである。11月29日の第1回のYCACとの試合においても、それまで日本では行われていなかつた試合の進行を場内にマイクロフォンを通じて観客に解説することもアメリカの方法を採用して、明治神宮野球場で場内放送をしていた江頭氏に依頼しゲームの内容を細く彼に説明して、場内に放送したことなども日本のスポーツ界においては未曽有のことであつた。

そしてその頃のフォーメーションは各チーム共シングルウイングバックフォーメーションを採用していた。アメリカでもその頃はシングルウイングバックフォーメーション全盛の時期であつたのである。初めTフォーメーションにセットして、それからクォーターバックのワン、ツー、スリーのシグナルでバックがシングルウイングバックのフォーメーションにシフトするものである。バックだけでなくラインのガードもシフトする場合もあつた。

又早稲田ではこの当時からスタチュアオブリバティー（自由の女神）を使つていた。又各チーム共リバース、ダブルリバース等のトリックプレーは随分採用していた。来日したアメリカオールスターズも両軍共シングルウイングバックフォーメーションでフォーメーション自体としてはそれ程日本と変つては居なかつたが、パスの距離とキックの長さでは格段のものがあつた。

アメリカのチームが来てその道具が日本のものより数段良いのには皆大変驚いた。ヘルメットもそれまでの日本のは皮製で内部にフェルトを張つたもので全体にやわらかく、二つにたためる様なものであつたが、彼等の持つて来たものは外部がベークライトの様な堅い物質で出来て居たしパンツもそれまでの吾々のものはキャンバス地で出来たゴワゴワのものであつたが、彼等のはやわらかく自由のきく布地で色も美しかつた。このように彼等の来日はただ技術的なものだけではなく、その道具にも日本のフットボール界に大きな刺戟を与えた。それで彼等の道具を一通りゆづり受けて、それを玉沢運動具店に貸して直ちに日本製の新しい道具に各チーム共作り直し出した。

この来日アメリカオールスターズは誕生したばかりの日本のフットボール界に技術的なものばかりでなく用具の面についても大変な影響を与へてくれたのである。そしてこれから日本のフットボール界の行方に指示を与へてくれ、又明るい将来を約束してくれたのである。この点において日本のフットボール界は将来共このアメリカのチームを招聘した朝日新聞社の恩義は忘れてはいけないことである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

このようにして多忙であつた初年度はこのアメリカオールスターズの来日によつて第一段階の終止符を打つたのである。然し実際には第２年度の準備に着手していた。昭和10年１月頃には慶応と法政にチームが出来たのである。これは聯盟からのさそいかけによつて慶応ではハワイ育ちの今村が、法政では同じくハワイの二世の梶谷等が主力になつてチームを作り聯盟に加盟した。ここに東京学生米式蹴球聯盟は５校となり、この５校の期間が昭和16年に日大にチームが出来るまで６年間続いたのである。又関西においてもアメリカオールスターズの来日が発表された一月関西大学がチームを編成した。関西では関学１校と云う時期が長い間続いた。

東京学生聯盟の５大学では各校共３月の初旬が入学試験であつた。

各校の部員は新入部員獲得のため入学試験の日には学校に行き受験生に入部を説得し１人でも多くの部員を入部させるように努力した。又一方では対アメリカチームとの試合に備えて練習する者、又アメリカオールスターズ戦の諸準備等各校の部員も大変忙しい思いをしたのである。そしてアメリカオールスターズが帰國すると同時に第二年目の第一学期が始まつたのである。

聯盟の規約によつてシーズンは９月からであるが春には１カ月のプラクティス・シーズンが許可されていた。それで各校共大体４月の末日から１カ月の５月末日迄を春の練習期間としたようであつた。然し何しろ出来た許りのチームであるので各大学共正規の体育会の部としては認められず、殆ど体育会の部外団体としか認められていなかつたので練習のグラウンドに苦労したのである。何処の大学でも広大な敷地を必要とするグラウンドに余裕のある大学は少ない何れも何処かの部が使用しているのである。それで関係部と話合つて時間的に都合をつけて交互に使用するか又は何処か他にグラウンドの代用になる処をさがすしかなく、新しく出来たフットボールのマネージヤーはグラウンド探しに苦労した。それでなくても一つのグラウンドを二つの部位で使用しているのが多いのにそこに割込もうとしても話合いも時間的にうまく行かなかつた。

立教大学もご他聞にもれずその通りであつた。当時立教大学のグラウンドと云えば池袋の大学の裏に陸上競技とラグビーが使用しているものと上石神井公園の清水組のグラウンドをサッカーとホッケーが借りていた。そしてそれは何れも満員の状態であつて新しくフットボールの割込む余地は無かつた。それでも方々探した結果、目白の海上火災保険の野球場を借用することが出来たので春の練習はそこですることになつた。毎日午後から武蔵野線（現在の西武池袋線）の椎名町まで行きそこから歩いてグラウンドまで行くのである。グラウンドと云つても野球場とラグビー場を兼ねたグラウンドであつた。海上火災保険のグラウンドは目白の高台にあつて中々見晴しも良く環境も良い処であつた。そしてその近所の風呂屋と契約をしてその風呂屋で練習着に着替えて練習をし、終つたらその風呂屋の風呂に入浴して帰ると云うものであつた。

そして、その年は春の新入部員も３名入部し、更にそれまで居た他の部からの借入れ部員も整理され、又在学生中から入部した者等も増えてやつと正規の部員のチームになり、部員数も29名となつた。学部の２年生では主将太田二男、マネージヤー相京徹夫、井上和雄、田中軍雄、根本春男、中田文夫、藤井式、学部１年では会計安藤眉男、堂本誉三、村松守男、亀井勇、菊地隆吾、浅賀隆義、天田利男、満岡敏義、栄実、予科３年では鈴江弘、岸高誼、細田孝、池上弥太郎、服部慎吾、予科２年では廬正仁、阿部健一、上田守政、本吉勇、山口千三、予科１年では中村健

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

一、戸庸彬、杉山亀雄の 29 名でその他客員待遇で予科 3 年の安部博（柔道部）、上村陽一（角力部）が入つていた。

そして部長には小川徳治教授、コーチにはジョージ・マーシャル氏がなつていた。29 名の部員は居たが、新設のしかも体育会の部外団体であるのでひやかしの者も居て、常にグラウンドに来て練習をする者は 22〜23 名位のものでやつと 2 チームが出来る位であつた。それでも皆熱心に練習にはげんで居た。マーシャルコーチも常に学校の授業が終るとグラウンドに来てコーチをしていた。フォーメーションも前年とはがらりと変えて相当混入つたものになつて来た。そしてその数も 40 位のプレーがあつた。スピンプレーからリバース、ダブルリバースとかパスにもフェークを加入したものだとか前年の 10 位のフォーメーションに比較すると格段の進歩であつた。そして基本フォーメーションはアンバランスラインのシングルウイングバックフォーメーションであつた。

こうして皆熱心に海上火災のグラウンドで春の練習を続けたがこの期間中鈴江が足の骨折の負傷をして入院し約 2 カ月休んだ。そして春の練習期間の終り近くに池袋の立教のグラウンドで慶応との練習マッチを行つた。これは練習マッチであるが朝日新聞には次のような予想記事が出ていた。このことは現在ではとても考えられないことである。

「東京学生アメリカンフットボール聯盟に新たに加盟した慶応大学では春期練習終了にあたつて立教大学チームと 25 日午後 4 時半から池袋の立教大学競技場で試合を行ふこととなつた。この試合は先に本社が招聘した米口蹴球団に直接フィールドで鍛へられたメンバーを有する立教大学チームと、現在米本国で行はれてゐる該競技の精神的並びに技術的の眞髄をつぶさに観察した後誕生した慶応チームとが前年度リーグ戦に較べて果して如何なる進歩向上をとげてゐるかに多大の興味をひかれてゐる」

と云うものであつた。ただの練習試合にベタ記事ではあるが朝日新聞がこれだけの予想記事を書くとは少なくとも現今の新聞にはあり得ないことだろう。それと云うのもその年の春全米オールスターズを招聘し異状なるスポーツ界の反応を招んだことについて朝日新聞では大変な関心を持つていて、将来日本のスポーツ界にフットボールの位置を予想していたのであろう。

そしてその立教と慶応の練習試合は 7−6 で慶応が勝つた。この試合も朝日新聞はベタ記事ではあるが次の様に書いている。「慶応米式蹴球勝つ立教対慶応の米式蹴球試合は 25 日午後 4 時半から池袋で挙行、慶応はライン強固でバックメンもダッシュ鋭く、よくダウンを重ねて立教を圧迫しついに初の対校戦に勝利を得た。

慶応 7 { 7−0 / 0−6 } 6 立教

以上である。出来た許りの慶応が 3 カ月でも半年でも先にチームを編成し、しかも第 1 回のリーグ戦にも又対 YCAC 戦にも或は対アメリカオールスターズ戦にも数人の選手が参加した立教に勝つたのであるから慶応の得意は思いやられる。又立教としても予想外の敗北に呆然としたもの

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

である。然しこれは練習ゲームであつて新しい部員の1カ月の練習の結果の総合である点においては立教も慶応も変りはないのである。事実リーグ戦その他の過去の試合に参加した立教のメンバーは殆どが他の部、即ちラグビー部、柔道部、角力部の部員を借りて来てチームを編成し、そして試合を行い、又その中から選抜されたのであつて、4月から新しく正規の部員となつた者の中には、それ等他の部の者は居なかつたのである。事実過去の試合に出場したことのある者と云へば主将の太田、井上、安藤、亀井、田中、鈴江、相京、の7人で鈴江、相京は怪我をして欠場していた。一方慶応でも今迄試合に出た者は今村、武田と2人居る。こう見ると立教も慶応も全く同じ条件である訳である。この試合も試合開始間もなく慶応に点を取られてしまつたのである。まだ全員がその気になつていない間にズルズルと押されて得点され、後半盛り返して慶応を押したが1タッチダウンしかとれずに涙を呑んだのである。とに角この試合を最後に春の練習期間の1カ月は5月末日を以つて終了し、9月1日のシーズン迄は各校とも練習をすることも試合をすることも禁じられていた。

それで部員は各々道具を各自でシーズン迄保管して9月1日を待つたのである。6月の末から7月の初めにかけて予科は第一学期の試験があり、それから夏休みになつた。各自夏休みは自分の好きな行動をとつて体力の養成に務めるのである。夏休みに入る前に部会を開いてシーズン入りの合宿は9月1日から軽井沢千ヶ滝と決つた。

合宿は2週間で、これの費用は20円、出発は8月31日午後11時の夜行列車で沓掛下車、上野沓掛間の旅費学割片道1円70銭であつた。このような事がミーテイングで部員全員に知らされ、又夏休み中の聯絡を密にするように夏季部報を出すので各自現況をハガキで小川部長宅に出すことも要請されて解散し夏休みに入り部員は各々山に海にそして故郷に散つて行つた。そして長い夏休みの間には小川部長宅には部員から近況がとどいた。これを小川部長と中田文夫が編集してガリ版印刷の部報を作り、又各部員宛に発送した。この仕事も大変な仕事であつた。暑い盛りに山や海で遊んでいる部員の便りをまとめるのであるからその苦労は大変なものであつたであろう。然しそれでも原稿がよく集り第2号迄発送したのである。

8月31日夜上野駅には部員が続々と集つてきた。皆元気一杯で海や山で充分遊んで来た様子が見えた。4～5人が合宿に直行するので当夜上野駅に集合したのは部長、マーシヤルコーチ以下20名位であつた。一同は上野駅から乗車して車中で一泊したが皆ねる者は居なかつた。中学校当時の修学旅行のような賑やかさで、朝5時頃まだうす暗い頃沓掛（現在の中軽井沢）駅に到着した。軽井沢の9月の早朝は寒かつた。バスがまだ動かないのでしばらく駅で待つことになつた。寒さは肌にしみとおるようであつた車中で元気だつた一同も寒さの為おとなしくなつてちぢこまつてしまつた。その上雨まで降つて来た。バスはまだ動かない雨は降つており外に出ることも出来ない、それに寒さは寒い、汽車の中で元気だつた聯中も皆だまり込んで駅の待合室のベンチにジッとして座つてタバコ許りふかしていた。

その内に外はもう大部明るくなつて7時頃になつたろうか、やつとバスが動き出した。一同立ち上つて荷物を持つてバスに乗込んだ。バスは雨の中を沓掛の町を通り抜け坂を登つて千ヶ滝に向つた。沓掛の町を抜けると附近には人家も少なく寂しい所になつた。約20分位して人家のあ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

る所で停つた。千ヶ滝である。皆下車して相京マネージヤーの先導で宿舎に向つた。宿舎は箱根土地株式会社の千ヶ滝公会堂である。周りは静かな良い所でテニスコートやラグビー場がある中にその公会堂はあつた。公会堂と云つても木造の大きな建物で、丁度映画館のように広い土間と舞台があり、その舞台を上つて奥の方に行くと100畳敷位の広い畳を敷いた広間があつた。其所は宴会や集会にでも使う部屋なのであろうが、只だだつ広くて殺風景な上に畳も赤茶けてほこりぽく、ブカブカして足の感触が悪い。合宿所であるのでそんなに奇麗な部屋は予想していた訳ではないが、余りにもきたなくて殺風景なのに皆がつかりした。

だが一同あきらめ顔で荷物を各々部屋のすみにおいて一休みをしている内に、朝食が出た。そして食事をすませて休憩して部屋で体操をする位のものであつた。外は雨が大部強く降つており外に出ることも出来ない、と云つてほこり臭い大広間にゴロゴロして居るのも気分が悪い。皆することがなくて困つている時に荷物の中からボクシングのグローブが2組出て来た。これはマーシヤルコーチの私物であつたがコーチが何かの用にと持つて来たものであつた。それを見付けるとそのグローブを持つて舞台に行き交代で拳斗を始めた。グローブをつけた手を盲めつぽうに振り回すだけであつたが、それが顔に当ると痛い。始めの内は冗談にやつていたが、まともになぐられた方はムキになつて本当になぐり返す、すると一方も又本気になる。3回やると両方クタクタになつてしまう。次の者が2人又出てグローブをはめる。で大騒ぎした。栄実は予科2年迄拳斗部に居たのでさすがに堂に入つたもので、皆歯が立たなかつた。

彼になぐられるとほんとにかすつただけでもジーンとひびいて来るようであつた。皆で拳斗を楽しんでいる内に阿部健一が舞台に出ていた釘を踏んで足に怪我をしてしまつた。我々の合宿には怪我の手当をする為に当時日本体育協会の医事部で日本のスポーツ医学の大家の日本医科大学の斉藤博士と云う人が居たが、その弟子の櫻井栄三と云う人がフットボール担当であつた。その櫻井さんの下に居た日本医大の整形外科のマッサージ師が一緒に合宿に来ていたのである。私達は早速彼がカワウソに似ていると云うのでカワチヤンと云うあだ名をつけた。そのカワチヤンが早速阿部の足の手当をしてくれたが、大部深い傷で靴がはけなくて、阿部は折角合宿に来たのに殆ど練習も出来ずに終つてしまつた。

とにかく外は雨降りであるし合宿第1日は軽い体操と拳斗をする位で何も出来なかつたが、マネージヤーの相京や会計の安藤、それに小川部長は大変忙がしかつた。それは合宿所が余り見すぼらしいので気の毒になり、何所か他の所に合宿所を探すべく雨の中を走り回つたのである。然し仲々適当な所は急に探がしても見着からなかつたが、やつと千ヶ滝から歩いて20分位の所にある星野温泉明星館に交渉して其所を合宿所にした。

明星館は普通の旅館でありお客も沢山居るのだが9月になつて部屋が空いたのが幸であつた。一同は又荷物をまとめて又バスに乗つて雨の中を来た道を少し引返へして星野温泉に行つた。ここは旅館であるので公会堂のようなことはなく部屋も設備も良かつた。一同大嬉びであつた、風呂も四六時中温泉があつて申し分なかつた。そして部屋も八帖位の部屋に5人位づつ分けて入つた。そして上級生が室長になつていわゆる合宿の気分が出て一同やつと落付いた。その他食事、ミーテイング用に大広間も使用することが出来て申し分なかつた。皆部屋に入つて荷物を整理すると今度は各部屋対抗の拳斗の試合を始めた。一部屋に集つて大騒ぎであつた。下の部屋のお客

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

はたまつたものではなく文句が出て外でやつてくれと云うことになつた。それで風呂場の前の板の間にリングを移してそこで又拳斗を始めた。皆エネルギーを持て余ましているようであつた。

その内に大広間で夕食になつた。さすがに旅館であるので一人一人お膳が出たそれも二の膳付きで皆大嬉びで女中さんはご飯のおかわりでテンテコ舞いであつた。食事がすんで夜は明日からのスケジュールの打合せ等をすませて 10 時頃には皆就寝した。こうして合宿第一日目は雨と移転の為何も練習することが出来ずに終つてしまつた。

第 2 日目からは朝 7 時起床、体操、ランニング、食事、午前の練習、食事、午後の練習、食事、ミーテイング、就寝とスケジュールは一杯であつた。第 2 日目は晴天で起床と同時に宿舎の前庭で体操をしてそれが終ると沓掛の町まで往復約 4 キロのランニングをして、それから洗面食事の日課である、午前の練習は 10 時からで皆道具をつけてスパイクをはいて約 20 分歩いてグラウンドに着いた。ひどいグラウンドであつた。

平になつて居りゴールポストも立つては居たが石が多いのには驚いた。石と云つても浅間山の火山礫で大きいのは握りこぶし位のから、小さいのは拇指の頭位のが一杯になつて居り、更に奥の方は石だらけでグラウンドの 1／3 は使用出来ない様な状況であつた。それでもその石を片付けながら練習をした。午前の練習を終つて食事にもどり又午後 3 時から練習に出た。

午後の練習を終つて宿舎に帰り道具をほして風呂に入つて夕食、夜はマージャンやポーカー、拳斗である。しかし第 3 日目位になると体の方々が痛くなり階段の登り降りも四つんばいにならなければ出来ないようになつて来ると拳斗の試合も自然にとまつてしまつた。グラウンドは石を片付けてもスパイクでほり返すと下から又軽石のような火山礫が出て来て限りがない、仕方がないからその上でやるとすり傷のたえ間がない。カワチヤンはヨーチンや赤チンで忙がしい。又このグラウンドは雨上りなどにはブヨが沢山出て来て練習中のプレーヤーの手や足や首すじをさすのである。その数も一寸やそつとのものでなく動いて居る足に眞黒になる位たかつてさすので、皆足が大根のようにはれてしまつた。カワチヤンは又この手当にも忙がしかつた。皆カユイカユイでカユミ止めの薬をぬつてもらつた。

明星館の附近には別荘が多くあり、別荘の人達は明星館に風呂に入りに来るのである。有名な詩人土井晩翠氏もタオルをブラ下げて和服でよく入浴に来ていた。9 月になつて別荘の人達も随分帰つて空屋になつた所もあつたがまだ残つている人達も大部居た。そしてその人達は星野温泉に風呂に入りに来るのである。その風呂は我々と一緒であつて我々が入浴するのは一時に 20 数人が入るのだから浴場は満員になつてしまう、しかも汗と泥でよごれた者が入浴するのであるから他の人は大低時間を外して入浴していた。我々の入浴も乱暴なもので風呂の中で大騒ぎである。

この合宿から入部した上田等は上級生に逆さにブラ下げられて浴槽につけられたりした、又女湯との境の板を少しはずして女湯に入浴しているのをのぞいたり、とにかく他の泊り客や別荘の人達には大変な迷惑であつただろう。又ある時は近くの別荘の娘が大変な宝塚フアンでしかも小夜福子のフアンだと云うことでその別荘に小夜福子を招待したものである。その小夜福子が風呂に入つたと誰かが知らせたので夜であつたがソレと許り 6〜7 人が風呂に飛んで行つて例の境の板のスキ間からのぞいたりしたこともあつた。又近くの別荘に広田竜太郎（作曲家）の別荘があつて其所に娘が 3 人居た。皆愉快な娘で上の娘は小柄であつたが 2 人目は仲々の美人であつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

末の娘は大柄で晝間等シヨートパンツをはきその腰の所に玩具のピストルをさして歩いて居たが鈴江は何時の間にかこの姉妹と親しくなり、夜その家に遊びに行つたりした。私達も鈴江について 2～3 回夜遊びに行つたことがあるが、卒業後その上の娘と結婚した。

そんなロマンスもあつたが、毎日午前と午後練習をくり返している内にだんだんと皆の気持が荒んで来てケンカが起きるようになつて来た。10 日目頃になると極限に近くなり、主将の太田と同学年の中田が猛烈なケンカをした。それでその夜は小川部長、マーシヤルコーチ、相京マネージヤーが相談して夜の食事の時はビールを 1 本づつつけて宴会をやり、そしてそれから皆のカクし芸をやる慰安会を開いた。1 人 1 人やグループで色々カクし芸をやるのだから大変賑やかであつた。それで宿の女中さんや宿泊のお客さん迄が大広間に集つて来ての見物で一同皆大変張り切つて演芸をやつた大好評を得た。この演芸会の行事は次の年以後も毎年合宿の年中行事になつてしまつた。そしてその夜は門限を 12 時迄にしたので沓掛の町まで出掛けた者も居た。

翌日は何時もの通りのスケジュールで又練習にはげんだ。マーシヤルコーチも小川部長も別室ではあつたが我々と皆一緒に行動をして 2 週間の合宿を終つた。グラウンドは悪かつたが夜は涼しいし食物は良いし待遇も良かつたので合宿の成果は充分に挙がつた。

合宿最後の日は午前の練習を終えて、グラウンドでミーテイングをして星野温泉に帰り風呂に入つて晝食をして荷物をまとめて、バスを待つた。大変お世話になつた明星館の人々に皆別れを惜んでバスに乗り沓掛の駅に向つた。来る日と異つてその日は晴天で浅間山がよく見えた。沓掛から汽車に乗つて夜 8 時頃上野駅に着いて解散をして、皆それぞれ家に帰つて第 1 回の合宿は終つた。

合宿から帰つて 1 日おいてすぐ東京での練習が始つた。各大学とも 9 月以前には練習することは出来ないので皆 8 月 31 日の夜合宿に向つた模様であつた。このシーズン制は相当徹底していたのである。東京での練習は 9 月半ばでまだ暑い日の聯続であつたが目白の海上火災のグラウンドで行はれた。もう学校も第 2 学期が始つていた。それで午前の授業を受けて午後から練習に行くのである。その内に 9 月末になつた頃グラウンドが石神井公園の清水組のグラウンドに変つた。それはラグビー部が清水組のグラウンドの隣に新しくグラウンドを作つてそちらに移つたので、ラグビー場をホッケー部が使い、サッカー場がサッカー部だけになつたのでサッカーと時間を区分してフットボールは午後 3 時から使用することが出来るようになつたのである。

部員一同大嬉びで武蔵野電車の定期を買つて石神井公園まで通つた。此の頃になると春の時と部員のメンバーも大部変つてきた。即ち面白そうだとかカツコいいと云う気持ちで春に入部した者は練習がきびしいのと、規則正しく練習の時間には出なければならないと云うしばられる生活の出来ない者はやめて行つた。春の練習の時であつた堂本と云う二世の部員が居たがある日練習中に突然“僕もうご飯の時間だから帰る”と云つてさつさと練習をやめて帰つて行つてしまつたことがあつた。残つた者は皆アッケにとられて呆然としてしまつたことがあつたが、このようなひやかしの聯中は皆やめて合宿からは本気でフットボールをやる者だけが残つた。

主将太田二男、マネージヤー相京徹夫、井上和雄、田中軍雄、中田文夫、安藤眉男、村松守男、亀井勇、菊地隆吾、浅賀隆義、天田利男、栄実、鈴江弘、岸高誼、細田孝、池上弥太郎、服部慎吾、廬正仁、阿部健一、上田守政、中村健一、戸庸彬、杉山亀雄の 23 名が残つた。そして新た

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

に秋の東京での練習からハワイの二吞でハワイ大学のフットボールをしていた坂口哲雄とラグビー部をやめて来た竹内義雄の2人が加はり25名となつた。この内、太田、坂口、中村、杉山の4人は二吞で皆アメリカ本土、ハワイで中学か高校時代にフットボールをやつた経験者であつた。特に坂口はハワイ大学時代にフットボールをやつたし、中村はハワイのハイスクールでフットボール経験者でそのパント力とパス力は非常に優れており過去40年の厂史の中でもこれ位のプレーヤーは居ないと思はれる位であつた。パスレシーブも見事であつたし、又走るスピードは速くなかつたがその柔らか味のある無理のない走り方は抜群に優れていた。坂口もパントパスに優れていたが彼の場合は馬力でとばす方であつた。然しこの2人の優れたバックを持つた立教は練習にも熱が入つた。毎日午後池袋から武蔵野電車で石神井公園に行き風呂屋で練習着に着換えて池のほとりを歩いて高台のグラウンドに行つた。

この風呂屋はラグビー部、サッカー部、ホッケー部、それにフットボール部と四つの部が使用して大変賑やかであつた。グラウンドに着くと体操、ランニングをやつて、それからランニングパス、ダッシュ、ブロッキング、タックリング、シグナルプレーと毎日猛練習のくり返しであつた。そして九月の末には秋のシーズンに使用するプレーが正式に定つた。昨年のようにNo1、No2と云うようなものでなく右エンドラン、左オフタックル、右インサイドタックルと云うように大変混み入つたものが多くなり、プレーも30位になつた。それを毎日マーシヤルコーチの指導の下にスクリメージをやつて、コンビネーションをつける練習をくり返へしたのである。

夕方日が落ちてグラウンドを去り風呂に入つて着換え、そばの餅菓子屋で大福を食つて又電車で池袋に帰り各自家途につくのである。この電車の石神井公園の先には大泉があつてそこには新興キネマがあつた。その新興キネマの女優さんとも友達になつた。田中筆子、浦辺粂子、松平竜子、等とも知り合いになつた。又途中の武蔵野音楽学校の生徒等とも知り合いが出来たりした。

又風呂屋ではフットボール部だけは道具が多いのと又一番汚れているので正面からは入れて来れないで裏の釜場の方からしか入れてくれない。それで我々は裏で練習着を脱いで釜場を通つて風呂に入るのである。三助の出入りする口から風呂に入るのでその入口にはガラス戸が男湯と女湯の入口に1枚づつついていて三助が中をのぞけるようになつて居た。練習を終つた聯中は風呂に入る前に裸で女湯をのぞいて大騒ぎをしたりして風呂屋の主人におこられたりした。又ある時は練習が終つて帰り途グラウンドのそばの草むらで蛇を見付けた亀井がその蛇をつかまえて風呂屋に持つて帰り風呂屋の物干棹にかけたら、おやじが顔色を変えておこつたこともあつた。又練習を終つて風呂屋の裏で安藤が浅賀のジャージーを脱がせてやつている時、ジャージーから首だけ抜け出した浅賀の顔が気に入らなかつたとかで浅賀をポカポカなぐりつけた、首だけジャージーから抜けた浅賀は手がジャージーにかかつていて手の自由がきかないのでなぐられつぱなしになつている内に仲裁が入つて浅賀はなぐられ損でブーブー云つていたこともあつた。何れにして若い元気でいたづらつ気一杯の聯中には風呂屋のおやじも呆れたりおこつたりで忙がしかつた。

こうして各大学共合宿を終つて各々自校のグラウンドで練習を行いリーグ戦の開幕を待つていたのであるが、聯盟も又リーグ戦開幕の準備で多忙であつた。先づ最大の難関はグラウンドで

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

あつた。

当時東京には観客を入場料をとつて集めることの出来る競技場と云えば明治神宮外苑競技場しかなかつた。他はそれだけの設備はなく、殆ど各大学の練習用グラウンドだけであつた。その明治神宮外苑競技場は陸上競技、ラグビー、サッカー、ホッケーと既にある程度日本に歴史を持つ競技が使用契約をして春、秋のシーズンはウィークデーでもなければ空いていない状況であつた。これら古い競技でも土曜、日曜等は仲々使用出来ない状況で1年位前から使用委員会で決定していた。その委員会のメンバーにはこれ等の競技の役員がなつておりお互いにケンカ腰で使用日割を決定していたのである。そうかと云つてウィークデーでは学校の授業もあり、又入場者も少ないので採算はとれないし、観客を動員することは無理であるので、何れも土曜日曜をねらうのである。

フットボールのような新しい競技でしかも日本体育協会に加盟していない競技団体には使用割当委員会のメンバーにもなれず、従つて神宮外苑競技場の使用は不可能であつた。そうかと云つて各大学のグラウンドでは何れも都心から離れており観客は集らず、草野球のようになつて将来の発展はおぼつかないし、又少しでも入場料を挙げて道具その他の購入資金にしなければならないのでどうしても都内のしかも入場料のとれるグラウンドをさがす必要があつたので聯盟役員は大変苦労して方々さがしたが適当な所が見付らなかつた。

その時芝公園の競技場が約1,000人位収容出来る簡單なスタンドを持つている陸上競技用のグラウンドがあるのに気がついた、然しここは陸上競技用ではあつたが一周200米位の小さなもので、しかもフィールドは芝生でなく小ジャリのまざつた土であつた。小さいのとフィールドの状況が良くないので他の団体は気が付かなかつたのであろう。その盲点を見付けたのである、然しこの競技場は陸上競技の練習場であるのと東京市のものである為、土曜日曜は一般に開放しているのでウィークデーしか使用出来ないのである。そこでここに夜間照明をつけて夜間試合をやる決議がなされてそれが決定し、東京市と交渉し夜間照明設備を東京市で設備することになつた。夜間試合であるなら学校の授業にも差しつかえはないし、又市内であるので観客も来るであろうと云うのである。東京市との交渉も難行したが、夜間照明設備をすることによつて一般の使用率も増加し東京市も名目が立つので応じたのであろう。これにも聯盟の加納理事他の大変な尽力のおかげであつた。

こうして難関であつたグラウンドの件も解決し、10月5日の夜5時から帝国ホテルで理事会を開き競技場は芝公園で試合開始は午後7時と決定し、スケジュールを決定した。10月19日：立ー慶、10月20日：明ー法、10月26日：早ー法、10月27日：明ー慶、11月9日：法ー慶、11月10日：立ー早、11月16日：明ー立、11月17日：早ー慶、11月23日：法ー立、11月24日：明ー早と決定した。夜間試合は日本では屋内競技を除いては全く無かつた当時である。やつと早稲田の安部野球場に夜間照明装置が出来たがまだエキジビション程度のことしかやつていなく、正式の試合は日本では殆どなかつた。その点フットボールは日本のナイターの草分けとでも云うものであろう。フットボールは今迄の日本には考えられなかつたようなことをドンドンと採用実行するのでその突飛さには日本のスポーツフアンも少々驚き気味で興味深くそのやり方を見守つているようであつた。各大学のフットボール部員は9月1日の合宿から1カ月以上たつてやつとスケジュールと競技場が定まつて皆大変に嬉んで練習にも一段と熱が入つて来た。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

10月の中旬になると朝日新聞にシーズンの予想がのつた。これは加納克亮氏が書いたものであつたが大変に長文の予想記事であつた。“米式蹴球　慶法の新参加に爭覇戦開幕19日　慶立先づ戦ふ”と云う見出で、本文は

「聯盟創立第2周年を迎へた東京学生アメリカンフットボール聯盟は今春本社の招聘した全米学生選抜軍の来朝によつて現在米口における最高標準ともいふべきこの競技の精神並に技術を伝授され一躍長足の進歩を遂げた。又観衆の興味も次第に昂り新興のスポーツとしては予想外の速度で堅実な地歩を進めるに至つた。

今シーズンは新たに慶応、法政のリーグ参加あり。これに横浜外人クラブを加へて6チームの爭覇戦を展開する運びとなつたが、この聯盟が、現在日本の各スポーツが確然たるシーズンを有せず、各競技共殆ど一年中試合及び練習を続けている弊害を除去する目的で、各競技に率先して、シーズンを限定、練習は9月1日以降、シーズンは12月末日までとしこの外春季2週間の練習を許可することに決定したことは、日本のスポーツ界の将来に優れた指針を与へるものとして注目に値する」

と日本のスポーツ界に革新の風を吹き込んだシーズン制採用について大変ほめて書いている、そして続けて

「今シーズンの試合は10月19日から芝公園競技場に夜間照明を行ひ華々しく開幕することとなつた。

明大　このチームは殆どが米口生れの選手である。昨年はこれ等米口で多少の経験を有する選手達が各智能を集めて戦法を案出してゐたが今期はハワイ大学の選手であつた武田君をコーチャーに得て明大式戦法を案出、聯覇の意気物凄く早くも練習は完成期に達してゐる。ハワイ大学は昨シーズンの終り米本土から全米代表選手を招き、これを撃破した強チームで、このチームにあつて実際の練習に参加してゐた武田君をコーチャーに得、部員は約30余人この内には今春来朝した全米学生選抜軍との対戦で豊富な実戦の経験を有する選手も多数あり戦法の複雑多岐に亘ることでは断然他校の追従を許さぬ、が併しこのチームの苦衷はラインズメンの体重が軽すぎることで、精巧な技術もラインの破壊によつて遂行困難に陥る場合が多くないかといふ点である。

早大　昨年は明大と事実上の決戦を行ひ6対2といふ接戦の末長蛇を逸したが今シーズンは長身重量のラインズメンを揃へると同時に打倒明大の意気物凄く、特徴としてはラインズメンが平均17貫強といふところからライン突撃には自他共に許す強味あり、堅実な歩調でラインを衝き漸進又漸進するであらう。

立教　今シーズンはマーシヤル立大体育主事のコーチも漸く選手達の消化するところとなつた。その上ハワイ大学にあつて経験豊かな坂口君をバックフィールドに得、ライン突撃に一威力を加へることができた。好漢坂口君のダッシュは昨シーズンは何校にも見られなかつた本格的なダッシュで南加大のクレメンズ君を思はせる猛烈果敢なプレイ振りである。又優秀なキッカー中村君をハーフに据え、バックフィールドの陣容は早明に劣らぬ能力を備へ得たがラインに稍難色がある。

法政　今シーズンから初めてのリーグ戦参加であるが西原、梶谷君等全日本軍のメムバー

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

として全米軍との試合に出場した選手もあり、ハワイ大学出身の東君をコーチャーとして迎へることが出来たのでチームは基本的な訓練から始め漸次完成の域に進み、シーズン開幕の頃までには相当な纏りを見せるに至るであらう。

慶応　法政と共に新たに加盟し、今シーズン第1戦を立教と来る19日挙行することとなつてゐるが既に今春チーム編成間もなく立教と試合を行ひ快勝したといふ好スタートを切つたチームである、ここも明大と同じく全米軍を破つたハワイ大学のフォーメーションを採用してをり、ラインズメンの平均体重18貫といふリーグ中第一の重量ラインをもつてゐる。練習から見てもバックメンの走路開さくのためラインズメンは他校に比し、より猛烈なブロッキングを訓練してゐるから慶応のラインバックは相当他校の警戒を要するものであらう。又バックには武田、保木君等正確なパスの投げ手もあり、攻撃には特色ある重厚なプレイをみせる、慶応チームは新生チームとして予想以上優秀なものであつてダークホースとして斯界の注目の的となつてゐる」

と云う大変長くてくわしい予想記事であつた。

そして全ての準備はととのつた。各校ともヘルメットは春来日した全米軍のヘルメットをモデルにして早速玉沢で製作したし、又ユニフォームも各校各々その特長を出したものになつた。立教のユニフォームはヘルメットは新型でオレンジ色にし、ジャージーは昨年のオレンジのものを使用し、パンツは昨年のカーキ色のカンバス地のから変えて紺色で脚の背部に白線を入れたものを新しく作つた。

そしてリーグ戦開幕の前日、即ち10月18日の夜には各校から3名づつの代表を選んで新しく夜間照明の出来た芝公園のグラウンドで夜間照明に馴れる為の練習をした。練習と云つてもこれはデモンストレーションであつた。各新聞社の記者を招んで日本で初めての夜間照明下における試合の記事と写真を新聞に出してもらう為のものであつた。翌日の朝刊には各紙共その写真と記事を出して前景気をあおつた。

「照明下に開幕する米式蹴球リーグ戦

昨年初めて誕生した東京学生米式蹴球聯盟第2年目の今シーズンは明、早、立、慶、法5大学シリーズとなり、19日立教対慶応の試合をふた開けに夜間照明装置の出来上つた芝公園競技場で各試合とも午後7時から行ふが18日夜その照明の試験を兼ねて夜間練習を行つた。（写真は照明下のスクリメージ練習）」と書いたものや

「夜間競技場出現、19日から始まる東京学生米式蹴球のリーグ戦場所は芝公園運動場と決つたが、試合開始が午後7時といふので同運動場では夜間照明の電柱を5本新設した、18夜はこの照明テスト、既に各大学チームが溌剌とした練習をしたが15,500燭光下で米式蹴球の日土の試合日のみならず、毎夜照して各種陸上競技練習のスポーツマン達を喜ばせるといふ夜間練習場が出来たわけだ（写真は昨夜の練習）」と云う記事もあつた。

夜間照明と云つてもおそまつなもので大きなスポットライト1個をつけた電柱が競技場の周囲

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

に5本立つているだけのものでお世辞にも明るいとは云えない。むしろうす暗いもので小さなボールの競技はとても出来るものではなかつた。そしてその柱も普通の電柱位のものであるので、照明燈の高さも低くパスやパントの時には下手すると照明が邪魔することもあつた。更にグラウンドはそのフィールドは芝生でもなく、又普通の土でもなかつた。小さな砂利がしきつめられていた。丁度ザラメ砂糖のような小さな砂利であるので手の平やユニフォームから出ている所はすりむいてしかも皮膚の中にその砂利が入つてしまうようなグラウンドであつた。丁度サンドペーパーの上で試合をやるようなものであつた。

それでも正面には1,000人位入れるスタンドがあり、その反対側には土堤のスタンドがあつて両方で2,000人近く収容することは出来るグラウンドであるが、その他の所は金網が張つてあるだけであつた。10月18日は吾々も練習はフォーメーションの練習位に止め、道具を池袋の駅の近くの風呂屋に集めて試合の日を待つた。

当日は土曜日であるので夕刻池袋西口駅前の東京パンに集合。キャプテンから色々注意事項を受けた後夕食を攝つた。この時太田主将から食事は軽くパン食にしろとの注意があつたので一同パンで夕食をとつた。試合中腹がへつてブーブー云つていた者も居た。食事後池袋の風呂屋に行つてユニフォームと着換えて5人づつタクシーで芝公園に向つた。オレンジのジャージーに紺のパンツ、白のストッキングと仲々勇ましいスタイルであつた。芝公園は初日とあつて入場式があるので各校試合のない学校まで全員ユニフォーム姿で集つて来ていた。我々と慶応は試合があるので直ちに練習を開始した。ボールはエナメルで白く塗られて居た。グラウンドは暗いがそれ程不自由は感じなかつた。

型の通りパス、パント、フォーメーションと一通り汗をかいて7時一寸前練習を終つてグラウンドの外に出て入場式の体勢をとつた。各校校旗を先頭に昨年の優勝校明治を先頭に早稲田、立教、慶応、法政の順に一列で行進曲に合わせて入場し、正面に向つて一列横体に整列した。従つて立教は丁度メーンスタンドの中央に位置したのであつた。

聯盟のポール･ラッシュ理事長の開会の挨拶、東京市長代理伊藤教育局長の祝辞、松本明大主将の選手宣誓文の朗読等があつて入場式を終つた。東京市長の祝辞はこの芝公園競技場に夜間照明装置を設備してもらつたこと、それと芝公園を借用する意味で招待したものであつた。入場式を終つて立教と慶応は再び競技場に入つて軽いウォームアップをして7時30分から松本（主)、ファーラー（副)、川辺（線)、西原（計）の4人の審判で試合を開始した。慶応のキックオフでその結果は次の通りであつた。

立教24 { 6－0 / 12－0 / 0－0 / 6－0 } 0慶応

立教		慶応
中田	LE	桑原

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

浅賀	LT	上村
尹	LG	中村
安藤	C	今村
栄	RG	白井
廬	RT	加藤
亀井	RE	浜田
太田	QB	竹村
菊地	LH	武田
中村	RH	保木
坂口	FB	中上

（交代）立教：竹内、井上、田中、阿部、天田

慶応：稲葉、福田、藤堂、松井、斉藤、桂、竹村、疋田、岡野、光吉、根本

翌日の新聞には写真入りで次のような記事が出ていた。

「立教快勝す　対慶応米式蹴球

第2回東京学生米式蹴球リーグ戦立教対慶応の試合は19日午後7時半より芝公園競技場で挙行、明大松本主将は選手一同を代表して宣誓文を朗読。東京市長代理伊藤教育局長の祝辞あり、夜間競技の規則により白色に塗られたボールで試合を開始した。

立教はバックフィールドに俊足を揃へ、ラインズメンもよく頑張つて慶応のラインメンを漏らさずバックのエンドランやオフタックルを完全に行はしめた。慶応はバックに走力乏しく多くエンドランを試みたが抜き切れずに終つた。立教のバックでは坂口の直線的突破、中村のドッヂングによる好走が目立つた。

第4回目の立教のタッチダウンの如きは中村スクリメージの真背後から左サイドラインに投じた慶応のフォワードパスを巧みに見破り快走した。然し乍ら慶応も漸時試合に訓れてきたならば自己の持つ優秀な体格を使ひ切れるやうになり、ライン突破には見るべきものが生まれて来よう」と云うものであつた。

又他の新聞では

「24－0立教慶応を一蹴　米式蹴球リーグ開幕

東京学生米式蹴球リーグ戦劈頭の立教対慶応の試合は19日午後7時から芝公園競技場に於いて開会式を行つた後午後7時半から慶応キックオフで新設の照明下に挙行観衆5千余でスタンドは満員となり盛況だつた。

慶応はチームが新しいだけに2年目の立教とは相当の開きがあつた。立教は得意のオフタックルがよく成功し、ブロックも確りしていたので、バックのエース中村及び坂口らが盛んに突進し、第1クォーターで中村、第2クォーターでは坂口が2度第4クォーターでは慶応のパントをインターセプトして中村と四つのタッチダウンを挙げて快勝した。

併し後半に入つて幾分疲労が出た為かラインが前半に比して乱れ勝ちとなり時に慶応にラインを破られることがあつた」と書いてあつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

これによると観衆5千余となつているがこれは少々オーバーだと思えるが、とにかく正面スタンドから反対側の堤、それに両翼と満員の状況で4千人近くの観衆が入つて初日としては大変な盛況であつた。試合の方も最初からライン、バックとも終始立教が圧倒的に押しまくり、特にオフタックル、エンドラン、センタープランジ等がよく一方的な試合で最後の5分間では立教は全員出場するだけの余裕があつた。

マーシヤルコーチもベンチで煙草をすいながらなごやかにコーチをしていた。この人はどう云う訳か左手の中指と薬指の第2節から先がなく、タバコを吸うにもその短い指にはさんで吸つていた。練習中にパスを受けたときその短い指を突き指したと云つて亀井が笑つたことがある。第2の記事にあるパントを中村がインターセプトしたとあるのは当然慶応のフォワードパスをインターセプトしたことである。

とにかく我々は第1戦に勝つて大変気持をよくして又タクシーで池袋の風呂屋迄帰り風呂に入つた。夜であるので銭湯は大変混んで居たが一同大変容器に風呂の中で今日の試合の話をし乍ら入浴した。グラウンドが悪いのでスリ傷をした者が多く風呂の湯がしみて悲鳴を上げる者もいた。そして風呂から上つて池袋で軽い夜食を摂つて各自家路に帰つた。翌日の新聞には前に述べたように各紙共写真入りで試合の経過をのせていた。

又11月1日号のアサヒスポーツは一頁全部に入場式の写真と立教慶応戦の写真をのせて大きく報道していた。その号には又米口オリンピックチームのヘッドコーチのローソン・ロバートソン氏が「恐るべき日本のスポーツ躍進よ」と云う題名でサタデーイヴニングポスト紙の記事が出ていた。その中でフットボールについて「最近太平洋岸のアメリカ蹴球の一流選手達が招かれて日本へ行つた。6万の観衆がベーブルース一行の野球の選手に万才を浴せたが野球場の傍の明治神宮競技場でも大観衆は雨にづぶぬれになつてカリフォルニアの蹴球チームと6カ月前に誕生したばかりの日本蹴球チームとの試合をじつと見守つた。日本チームは第1回戦は71対7で敗れたが第2回戦は46対0で喰ひ止めて進歩の跡を見せた。

南加大学出身のアメリカチームのマネージヤーアル・マロニー選手は日本選手がゲームの特徴であるスピードを早くも捕へたのに感心したらしく次の如く述べている。チームワークを完成しゲームの真髄を呑み込んだら日本選手は直ちにどんなチームとも対戦して得点することが出来るやうになるだらう。

日本選手は私が今迄に見た事のないやうな熱心な選手達で、そのスピードは素晴らしい。彼らは3度バックを動かしてエンドランして一度は吉岡に20ヤードもとられた。彼らは数種のショートパスを完成しラトラルパスの攻撃法に上達して行く力をを示した。これは彼等の試合の特徴になるだらうと私は思ふ。日本人の様な軽い体重であんな猛烈なタックルにあつたのは初めてだ。大体オハイオ州のシステムに則り、クォーターバックが立派にゲームを進めていく能力を示している彼らは忠実に規則を守る。

前オハイオ選手のジョージマーシヤルが彼らをコーチしたのだ。彼らはブロッキングが大変うまくなつたので我々も長駆することがあまり出来なくなつた。第2試合の時は最長が40ヤード

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

だつた。大阪の試合でタッチダウンするのに疲れたのと比べてえらい違ひだ。我々は日本選手の体重等考慮なく押捲つた。日本選手は一時は芝生にノビて了ふがゼンマイのように又はね返つてくる。

最初は見物人はどこで声援したり拍手していいか判らない様だつたが、お終ひにはアメリカの見物人の眞似をしてすつかり急所を呑み込んでしまつた。日本チームがアメリカへやつて来たら（この計画は既に進められてゐるのだが）きつとアメリカの一流チームを驚すやうになるに違ひない。」と云う記事が出ていた。

アメリカのオールスターズが来日したのはその年の3月である。それが9月か10月のアメリカの新聞に再び書かれたと云うことはアメリカで日本のスポーツに対して大変な関心をよせている証拠であらう。然しマロニー氏も隋分日本のフットボールを持ち上げたものと思はれるが、一方又アメリカの新聞に書く位であるからマロニー氏自身日本のフットボールの将来をそのように見たのであらう。しかし残念乍らフットボール歴史40年になるがマロニー氏の予想がいまだに外れていることは残念である。

10月20日（日曜日）は午後7時から芝公園競技場でジョージ（主）、ファーラー（副）、マーシヤル（線）の審判の下に法政のキックオフで明治対法政の試合が挙行された。結果は次の通りであつた。

明治 6 ｛ 0－0 / 0－0 / 0－0 / 6－0 ｝ 0 法政

明治		法政
町田	LE	藤田
畑（稔）	LT	鈴鹿
黒川	LG	梅野
花岡	C	持田
山田	RG	上野
塚平	RT	小泉
椙村	RE	中野
畑（弘）	QB	原
畑（進）	LH	宮尾
大前	RH	梶谷
松本	FB	西原

（交代）明治：阿部、横山、胡子（エビス）、仁井、原田、富永、伴
法政：東、三枝、藍原、中島

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この試合は明治が多くのフォーメーションを使用してライン攻撃、ラン攻撃、トリックプレー、パス等によつて法政を攻撃したが、法政はライン、バック共よく防禦して特点をゆるさず、逆に第3クォーターには明治陣10ヤード迄進んだが、攻撃にもう一歩欠けるものがあつて成功せず、第4クォーター明治は松本から町田への20ヤードのパスに成功し法政陣5ヤードから大前がラインを割つて唯一のタッチダウンを挙げて明治が勝った。法政の梶谷は良い選手であつたが第二次大戦中、二吞であつたが日本陸軍に入隊して南方で戦死したのは実に惜しいことであつた。

10月26日（土）は午後7時から芝公園でマーシヤル（主）ファウラー、（副）森井、（線）加藤（時）の審判の下、法政キックオフで早稲田対法政の試合が挙行された。結果は次の通りであつた。

早稲田 12 { 6－0 / 0－0 / 0－0 / 6－0 } 0 法政

野村	LE	藤間
遠藤	LT	鈴鹿
風間	LG	梅野
島	C	持田
有賀	RG	上野
井上	RT	小泉
下田	RE	中野
野内	QB	宮尾
福田	LH	西原
永井	RH	梶谷
中田	FB	原

交代（早大）：後藤、山下、坂倉、中山、伊勢木、兼安、森村、
（法政）：浜本、東、中島、山田、相原、名護、宮武、陣野、大村、

この試合は開始早々、早稲田調子よく法政を聯続的に押し、3分タッチダウンを挙げて気勢挙つたが、その後法政はよく頑張つて逆に第4クォーターの始めは早大陣の5ヤードに迫つたが、得点出来ず、逆に13分早大福田、永井のパス成功して早大はタッチダウンを挙げてからくも勝つた試合であつた。

10月27日（日）の試合は雨のため29日（火）午後7時から芝公園でマーシヤル（主）、若林

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

（副）、西原（線）の審判で明治のキックオフで明治対慶応の試合が行はれた。結果は次の通りであつた。

明治 32	0－0 13－0 6－0 13－0	0 慶応

町田	LE	桑原
竹下	LT	岡野
黒川	LG	中村
安部	C	今村
富永	RG	白井
伴	RT	加藤
原田	RE	柳田
畑（弘）	QB	武田
松本	LH	竹村
畑（進）	RH	中上
胡子	FB	田村

交代（明治）：山田、椙村、大前、塚平、栗崎、畑（稔）、花岡、山田、
（慶応）：浜田、福田、斉藤、土井、松井、稲葉、光吉、

この試合は第 1 クォーターはもたついていたが、第 2 クォーター以後明治は調子が出てパスにランにやることなすことことごとく図に当つて慶応を一方的に押しまくつて明治は楽勝した。

11 月 9 日（土）は午後 7 時から芝公園で慶応対法政の試合が行はれた。その結果は次の通りである。

法政 12	6－0 0－0 6－0 0－0	0 慶応

名護	LE	桑原
梅野	LT	上村
中島	LG	稲葉
持田	C	光吉
上野	RG	白井

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

小泉	RT	加藤
浜本	RE	浜田
西原	QB	竹村
宮尾	LH	田村
梶谷	RH	保木
宮武	FB	片岡

交代（法政）：東、山田（政）、山田（美）、原、陣野、小池、鈴鹿
（慶応）：松井、土井、今村、桂、

この試合法政は梶谷、西原の両バックがよく活躍し慶応の重量ラインを突破して慶応を破つた。慶応は重量ラインを生かし切れずなすことなく敗れた。

11 月 10 日（土）は午後 7 時から芝公園でブース（主）、ヒーシユ（副）、梶谷（計）、西原（線）の審判により早大キックオフで早稲田対立教の試合が行はれた。その結果は次の通りである。

早稲田 7 { 0－0 / 0－0 / 0－0 / 6－0 } 0 立教

野村	LE	岸
坂倉	LT	尹
風間	LG	細田
島	C	安藤
陶	RG	栄
有賀	RT	亀井
井上	RE	蘆
野内	QB	太田
福田	LH	中村
永井	RH	菊地
下田	FB	坂口

交代（早大）：永田、山下、後藤、中山、角田、兼安
（立教）：池上、中田、服部、井上、田中、杉山、竹内

この日は日曜日であるので 4 時に池袋東京パンに集合し軽い夕食を摂つてタクシーで芝公園近くの銭湯に行きそこでユニフォームに着換えて歩いて競技場に行つた。スタンドにはバックスタ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ンドまで一杯観客が入つていた。型の通りのウォーミングアップを終つて試合開始のホイッスルを待つた。相手の早稲田は二吞揃いでしかも体格が大きい。然し当つてくだけろと許り一同張り切つていた。

夜間試合の照明が淡くグラウンドを照らして、プレーヤーのエナメルで塗つたヘルメットにその光線が当りピカピカと光つていた。11 月に入ると夜間は大部寒くなつて来た。皆オーバーコートをはおつてベンチに座つていた。そして夜間はグラウンドにモヤが降りて来て遠くの方はカスンでしか見えなかつた。試合の経過を翌日の朝日新聞の記事は次のように報じている。

「第 1 クォーター5 分立教自陣 20 ヤードの右スクリメージから坂口のフォワードパス成つて坂口 5 人の味方に護られ快走に移らんとして惜しくも機を逸すれば早大も短いフォワードパスで応酬、その後早大オフタックルで前進ダウンを重ねたが得点なし。

第 2 クォーター、3 分立教早大のパントをタッチバックし 20 ヤード中央から坂口左オフタックルに出で 40 ヤードを独走。続いてパントで早大をタッチバックに封じ早大の失策でゴール前数ヤードに迫つたが早大のパントで 25 ヤードに迫る。13 分立教中村坂口の短いフォワードパスで右隅 10 ヤードに入つたが早大懸命に防ぐ。

第 3 クォーター早大パントの形を構えてエンドランに出で、或は福田ライン突撃を試みてジリジリ進んだが依然得点に至らず。

第 4 クォーター早大は立教ラインの弱点を見出し盛んにライン突破を敢行ダウンを聯取すること 3 回右隅 10 ヤードに迫り 12 分福田中央 8 ヤードのスクリメージから左へエンドランし右へ切れ込んでタッチダウン成り其後のスクリメージからフォワードパス決り 7 点を挙ぐ」と云うものであつた。

実際前半は立教が早大を押し気味に試合を進め、しばしば早大陣深く攻め込んでもう一歩で特点と云う所まで行つたが決め手に欠けて得点出来ず、逆に最終クォーターに早大に得点され、昨年の対早大戦と同じ様な結果で敗れた。試合を終つて芝公園近くの風呂屋でユニフォームを脱ぎ風呂に入つた。風呂は相当に混んでいた。プレーヤーは試合中方々をすりむいているので風呂の湯がしみた。竹内は頬をすりむいて風呂から上つてヨーチンをつけたら裸で尻をたたきながら脱衣場を飛び跳ねていた。小さな砂利が掌にめり込んで所々小さく黒くなつて居りそれにヨーチンを塗つてから砂利を取り出すのであるが、中にはそれでもカノーする者もいた。

11 月 16 日は同じ競技場で午後 7 時からアンケニー（主）、ハンター（副）、梶谷（計）、西原（副）の審判で明治対立教の試合が行はれた。

その結果は次の通りである。

明大 6	6－6	6 立教
	0－0	
	0－0	
	0－0	

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

町田	LE	中田
畑（稔）	LT	尹
富永	LG	細田
阿部	C	安藤
黒川	RG	栄
塚平	RT	鈴江
椙村	RE	蘆
松本	QB	太田
畑（進）	LH	菊地
畑（弘）	RH	中村
胡子	FB	坂口

交代（明大）：山田、仁井、栗崎、伴、原田、花岡、阿部、大前
（立教）：井上、杉山、服部、浅賀、亀井、村松、池上

この日も池袋に集合しタクシーで芝公園近くの風呂屋を利用した。11 月中旬の夜間はもう隋分寒く、ゲームに出ている内は良いがベンチに戻ると汗が冷えてふるえる位寒かつた。この試合の経過は翌日の新聞によると

「明大の繊細な攻法に対し立教は玉砕的な攻撃法を取つた。明大は 20 ヤードに及ぶフォワードパスとライン突撃で右隅に得点を先取したが立教もキックオフを受けて直ちに蹴り返へす意表に出る攻撃で左隅 10 ヤードに進み、明大のキックのミスを押へて攻撃に移り坂口の猛烈な突進で明大陣を陥れ同点となつた。

第 2 クォーターは明大ラインを突いて漸進したが立教も好防して譲らず両軍得点なく第 3 クォーターに入り小雨降り出す。明大がエンドランに出れば立教のバックフィールド鮮やかなタックルを見せて止め、立教がラインを突けば明大のライン固く、タイムアップ近く立教坂口、中村のコンビネーションでフォワードパスを 2 回成功させ好調に攻めたが遂に得点の機なく引分けとなる」と書いている。

昨年大敗した明大に何とか勝たうと色々マーシヤルコーチが考へて中村のキック力を利用してリターンキック戦法を採ることに定めたのは試合の前日であつた。そしてその日の練習でもリターンキックの練習をやり秘密兵器としていたのである。しかしリターンキックをするには明大のキックオフの時しかないのであるが、この試合のスタートは立教のキックオフで始まつた。明治は試合開始 5 分位でフォワードパスによつてタッチダウンをした。その後立教はレシーブをチョイスし明大のキックオフのボールを中村が自陣 10 ヤードで捕球し少し前進して自陣 20 ヤード附近からリターンキックをした。明大は全員スタートをしたその留守を突いたキックドボールは無人のグラウンドを転々として明大陣左の 10 ヤードの所でアウトオヴバウンズに出た。

そこから明大の攻撃となり、明大は 2 回ラインを突いたが余り前進せず、第 3 ダウンでパント

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

した。そのパントを立教のラインが飛び込んでパントブロックして明大5ヤードの地点で立教がリカバーし、立教のボールになつた。立教は3回ライン攻撃をして明大陣半ヤードに押し、最後のダウンでラインは低くチャージをしてその上をボールを持つた中村がダイヴィングをして飛び込みタッチダウンをしたものである。新聞には坂口のリターンキックで坂口がダイヴィングをしたと書いてあるが、それは中村であつた。新聞記事の誤りである。

立教はこの得点によつて気をよくして押したが矢張り決め手に欠けて遂に引分けとなつたのである。然し昨年の明大のトリックプレーに思ふように振り廻された立教と比較すれば格段の進歩をとげ、明大も大いにあわてたことであつたであろう。試合が終つて雨の中を風呂屋に戻り、風呂に入つて疲れをとつて池袋に引返へした。途中選手の顔は皆何か満足気な所があつたが、その反面又勝利を逃した寂しさもあつた。

11月17日は矢張り午後7時から同競技場でハンター（主）、ファーラー（副）、加藤（計）、河辺（線）、の審判により早大のキックオフで早稲田対慶応の試合が行われた。その結果は次の通りであつた。

早稲田 31 { 6－0 / 13－0 / 6－0 / 6－0 } 0 慶応

野村	LE	藤堂
板倉	LT	上村
山下	LG	福田
横野	C	光吉
陶	RG	加藤
鄭	RT	今村
兼安	RE	浜田
末武	QB	竹村
永井	LH	保木
福田	RH	松井
大林	FB	片岡

交代（早大）：島、鈴木、吉沢、中山、遠藤、風間、井上、下田、角田
（慶応）：桑原、白井、田村、柳田、稲葉、土井、中上、岡野

この試合早稲田は慶応組し易しと見てスターティングラインナップを第2軍で編成して出場した。それには次の週に行はれる明治との決勝戦に備えて2軍に試合経験を得させようと云う気持

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

もあつたのであろう。然し果せるかな早大はキックオフから慶応を押しまくり、慶応を寄せつけず、一方的に快勝した。第3クォーターには末武が自陣40ヤードの地点から左エンドランを行い味方のインターフェアランスに守られて一気に60ヤードを快走してタッチダウンを挙げる等全く一方的な試合であつた。

11月23日（土）は午後7時から松本（主）、ファーラー（副）、川辺（計）、加藤（線）の審判により立教のキックオフで立教対法政の試合が行はれた。その結果は次の通りである。

立教12 { 0－0 / 6－0 / 6－6 / 0－6 } 12法政

中田	LE	藤間
池上	LT	鈴鹿
細田	LG	上野
安藤	C	山田
栄	RG	山田（政）
鈴江	RT	小泉
盧	RE	浜本
井上	QB	原
菊地	LH	梅野
中村	RH	陣野
坂口	FB	西原

交代（立教）：服部、杉山、亀井
（法政）：梶谷、東、中島、宮武、中野、大村

この試合は立教には負傷者が多く選手層も少なかつたが、それより法政をなめてかかつたのがまずかつた。法政は西原、梶谷の健斗でよく頑張つた。全般的には立教が押していたが第4クォーターには一寸した気のゆるみから梶谷から西原へのフォワードパスが成功して同点引分けとなつた。立教は全く残念な試合であつた。

11月24日午後7時からジョージ（主）、ブース（副）、マーシヤル（計）、ファーラー（線）の審判により明大のキックオフでこのシーズン最後の試合の優勝決定戦明治対早稲田の試合が行はれた。その結果は次の通りである。

{ 6－0 }

服部慎吾氏の記録

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

明治 12	0－0	0 早稲田
	6－0	
	0－0	

町田	LE	野村
畑（稔）	LT	遠藤
黒川	LG	風間
花岡	C	横野
山田	RG	有賀
塚平	RT	井上
椙村	RE	下田
松本	QB	野内
畑（弘）	LH	福田
畑（進）	RH	永井
大前	FB	川島

交代（明大）栗崎、富永、阿部、原田、横山、伴、半田、胡子、仁井
（早大）板倉、末武、山下

この試合は両チーム共これに勝てば優勝と云うので大いに張り切つて居た。また観客も両スタンド共満席と云う盛況であつた。戦況は翌日の新聞によると

「明大は 30 ヤード左中間で早大の失球を押へライン突撃で漸進フォワードパスで右隅 1 ヤードに迫り 10 分 S 畑左へインサイドタックルに出てタッチダウン、其後早大鮮やかなフォワードパスを生かせば明大も複雑なフォーメーションで攻め、第 2 クォーターでは明大は自由の女神（スタチュアオヴリヴァティー）と称へられているプレイ—フルバックはセンターのスナップバックを受けて恰も前投を試みる球を持つて後方に構へて立つた瞬間横後方から走つて来た味方がその球をさらつてエンドランに出る戦法—などを用ひ快走したが早大好防して乱れず。第 3 クォーターに入つて明大自陣左タッチ 34 ヤードから H 畑右へオフタックルに出で左へカットバックして左タッチに沿つて抜け 60 ヤードを独走左隅にタッチダウン 12－0 と離す。第 4 クォーターに入つて早大猛然ライン突撃を繰り返しダウンを重ねたが成らず明大 3 勝 1 引分けの成績で 2 年聯覇なる。

なお明大第 2 回目のタッチダウンは主審と計時審が同音のホイッスルを誤つて用いていたため計時審のオフサイドを報ずる笛を主審のゲーム停止の笛と誤認して早大側がプレイを中止したことによつて起こつたもので、ゲームの結果は変更なきも審判団は早大側の異議を認めるところあつた」と報じ、又外の新聞では

「双方覇権を賭けた一戦として熾烈な迫撃を演じ優勝戦に相応しい好試合を演じたが明

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

大はラインが強く個々の走力も早大を凌ぐものがあり、復雑な戦法をよく生かし、第3クォーターでは自陣34ヤードのスクリメージをオフタックルに出でH畑が見事に早陣を突破し66ヤードといふ今シーズン初めての記録的快走に一挙エンドゾーンを陥れて快勝した。早大は第4クォーターを除いては明大の鉄壁のラインを破り得ず、第2クォーターで中央線近くから一挙に明大の20ヤードを陥れるといふファインプレーがあつたのみだつた。米蹴第2年の学生シリーズはこれで終了したが各チームの進歩には著しいものがある（横尾）」とも報じている。

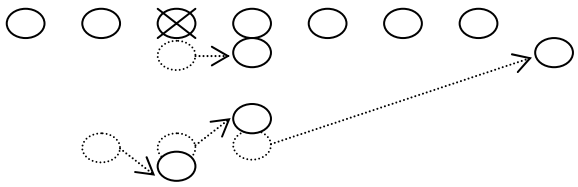
とにかくこの試合体力的に優れている早大が明大のラインを粉砕するのではないかと、予想では早大有利であつたが、明大のラインはよく頑張つて逆に強力な早大のラインを圧し、バックをよく走らせて優勝した。もつとも審判員の間違いで早大がゲームを中止したためにH畑にロングランをされてタッチダウンをされたのは気の毒であつた。

これで第2回目のリーグ戦は全部終了し、優勝明治（3勝1分）、2位早稲田（3勝1負）、3位立教（1勝1負2分）、4位法政（1勝2負1分）、5位慶応（4負）と順位が決定した。慶応は無得点に終つたシーズンであつた。

このシーズンは昨年と違つて各チーム共異状な進歩を見せた。特に立教はマーシヤルコーチの指導では昨年と見違へる位の進歩を見せて強豪明治、早稲田と対等の試合を行つたし、又新しく加盟した法政はダークホース振りを発揮して先輩の3チームに互してゆずらなかつた。ただ慶応は体力を持つてはいたがそれを充分に発揮出来なかつたのは経験の浅さからであつた。このシーズンでも経験のある二吞を多く持つているチームは矢張り強かつた。明治は渡辺、竹下を除くと全員二吞であり、早稲田も有賀、山下、鄭、大林、中山等を除いて二吞が大半であつた。又立教は坂口、中村、太田、杉山の4名の二吞を有し、法政は梶谷、西原の優秀な二吞がいた。慶応は今村、竹村が居たが振はなかつた。

又観客の数も芝公園競技場と場所も良く、しかも夜間試合と云う時間も良かつた故か各試合とも相当の観客を集めて大成功であつた。然し夜間試合は11月に入ると寒さが厳しくしかももやが降りて視界が悪くなり、決して條件としては良いものではなかつた。その上照明の数が少なく暗いのが難点であつた。又グラウンドは小さな砂利がしかれている為に選手はスリ傷をしその手当てに苦労し、終には手袋を使用する者も出た程であつた。各チーム共フィーメーションも前年に比較して多岐多様になつて繁雑なプレーをよくこなし得ていた。基本フォーメーションは初めTにセットし、クォーターバックのコールサインのワン、トゥ、スリーでバックはシフトしてシングルウイングバックフォーメーションになるもので、その他のラインをタックルを一方によせてアンバランスにするフォーメーション等も多く採用していた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会



又ディフェンスラインは7名が多く時には6名と云うスタンダードなものが圧倒的であつた。攻防共このフォーメーションはアメリカ本国でもその当時はこれが圧倒的に多かつたのである。そして攻撃に際してはバックはスピンやリバースを多く使つた。この頃はクォーターバックはシグナルを出すのを第1任務としてボールを持つことは少なかつた。そしてコールは殆ど「レディー、ハイク、ワン、ツー、スリー、」でシフトし次の「ハイク、ワン、ツー、スリー」でボールがスナップバックされた。勿論2度目はワンで出したり、或はツーで出す場合もあつた。このシーズンは早稲田はよく「スタチュアオブリヴァティ」（自由の女神）を使つて新しいチームを戸迷はせていたが、最終戦で逆に明治にこれをやられたのは面白い現象であつた。

こうして第2回のリーグ戦は盛況裡に無事終了し、11月24日の早明戦終了後は各校出場して閉会式を行つた。そして優勝校明治には朝日新聞と毎日新聞からのトロフィーが贈られる予定であつたが製作が間に合はなくて目録書が贈られ、本物は次の明治対YCAC戦終了後に渡されることになつてリーグ戦は終了した。

11月28日アメリカ感謝祭には本年の優勝校明治と横浜外人（YCAC）戦が午後3時15分から明治神宮外苑競技場で挙行された。その前日の朝日新聞には朝日新聞寄贈トロフィーの写真と共に次のような記事が載つていた。

「去る10月19日から11月24日まで芝公園競技場に展開された東京学生米式蹴球の第2回リーグ戦は明大が3勝1引分で優勝し早大3勝1敗で第2位、立教1勝2引分1敗、法政1勝1引分2敗、慶応全敗の記録を残して終了したが、本社が先に彫塑界の重鎮日名子実三氏に依頼中であつた優勝トロフィーが出来上つたので明28日午後3時から神宮競技場に行はれる感謝祭当日明大対YCACの試合に際し入場式挙行後、明大チームはスタンド前に整列し徳川家達公の手より優勝の明大チームに授与されることになつている。

尚当日の横浜外人チーム中にはリーグの役員であるオハイオ大学の選手であつた現立教大学体育主事であり同大学チームのコーチャーであるマーシヤル氏、米口陸軍士官学校の主将であつた現米大使館員ジョージ氏等も昨シーズンの惨敗を雪辱すべく敢然参加して第1線に活躍することとなつたので、明大の巧緻な戦法に対し重量とダッシュに優れた外人団との一戦は、日本のプレーヤーの将来とるべき方向を指示する上に重大な意義あるものとして大いに期待されている」と書いている。

この日試合開始前に明大に授与された朝日新聞のトロフィーは幅50センチ高さ50センチ位の

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

大きさの楯形のものでその中の銅板にはオフタックルでランナーが開けられた穴を走り抜けている図が彫刻されて居りその最上部には羽の生えたヘルメットがついていた立派なものであつた。

又同時に授与された毎日新聞杯は高さ 50 センチ位で 4 本の銀の柱が立つて居りその上に銀のボールが乗つているこれ又見事なトロフィーであつた。然し残念乍らこの両トロフィー共戦火に逢つたのか或は紛失したのか不明であるが戦爭終了時にはなくなつていた。

その明大対 YCAC の試合の結果は次の通りであつた。

明治 0	0－0 0－0 0－0 0－0	0YCAC

町田	LE	フロッカー
畑（稔）	LT	クラーク
黒川	LG	モァーリィ
富永	C	クック
山田（忠）	RG	ジョーン
塚平	RT	スワンソン
椙村	RE	ロード
松本	QB	デヴィン
畑（弘）	LH	ハリス
畑（進）	RH	マーシヤル
大前	FB	ズーバー

交代（明治）伴、原田、山田、栗崎
（YCAC）ジョージ、クロマティー

YCAC は昨年の雪辱とばかりにメンバーも揃へて善戦して引分けとなつた。もつとも明治はリーグ戦直後で手を抜いてはいたがそれでも YCAC は健斗した。

リーグ戦が終了したら法政と慶応が関西遠征を行い関西大学を相手に何れも大勝して気をよくした。法政対関大戦は 12 月 1 日で

法政 43	18－0 0－0 19－0 6－0	0 関大

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

藤間	LE	岡本
鈴鹿	LT	三浦
山田（政）	LG	中川
山田	C	秋本
上野	RG	小田
小原	RT	榎本
浜本	RE	三宅
西原	QB	佐伯
原	LH	竹原
梅野	RH	岩井
梶谷	FB	難波

交代（法政）：大村、小池、名護、中野、宮武、陣野

12 月 15 日慶応対関大戦の結果は次の通りである

慶応 23 { 7－0 / 7－0 / 0－0 / 9－0 } 0 関大

何れも甲子園南運動場で挙行された。関西ではまだ関大しかチームが出来ておらず試合相手もない関大であるので、東京のリーグ戦でもまれたチームとは相手が出来なかつたのが本当で法政、特にリーグ戦最下位でリーグ戦全部を無得点に終つた慶応にさえも大敗したのは当然であつた。

12 月の新聞記事に次のような面白い記事がのつていた。

「出丼した芝公園、競技場新たに公認

東京市が持つてゐる市民のための各種運動競技場はどこも賑やかに利用されてゐるが、ここで優秀な記録を出しても認められなかつたところ、今度芝公園陸上競技場が先ごろ米式フットボールの晴れの試合に用ひられたのがきつかけで日本陸上競技聯盟から公認されることになり、今後同競技場で出た新記録は堂々と全口へ公表されることになつたので市公園課では来春はもつと拡張して 50 メートル延長し一層立派なものに仕上げることに決定した」

というものである。

元来芝公園競技場は陸上競技場であつたが一周 300 メートル位の小さなもので練習場としてしか使用されていなかつたのである。それをフットボールに使用したので陸上聯盟としてはこのままにしておくとフットボール専用のグラウンドとしてとられてしまうのではないかと思つてあわてて公認をして確保を計つたものであろう。このようにして第 2 年目は終つたのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

昭和11年はフットボール歴では3年目であつた。

この年の1月16日の新聞には「全米10傑5態」と云う見出しでフットボールに関する面白い記事が出ていた。それは「アメリカの聯合通信社では例年通り1935年度の優秀選手をはじめ5項目について全米のスポーツライターから投票で募り、3、2、1と得点を与えた結果、ファーストテンは次の如く決定した。これはアメリカスポーツ界の“スポーツ英雄”とそれに対するフアンの関心とを如実に示すものであつて興味深い（特筆すべき競技者）

1. ジョールイス（拳斗）
2. ローソンリトル（ゴルフ）
3. ジェシーオーエンス（陸上）
4. ゼイ・パログナー（全米選抜蹴球チームのハーフバック）
5. ミッキーカクレン（デトロイトタイガースの監督兼捕手）
6. マルコム・キャンベル（英口の自動車快走王）
7. アンディー・ビルニー（ノートルダム大学蹴球選手）
8. ジェームス・ブラドック（拳斗）
9. ディジー・デイン（聖ルイス・カージナルス投手）
10. ユーレイス・ピーコック（陸上）

と云うもので拳斗のジョールイスがトップで、3位の陸上の100米のランナー、オーエンスが入つているが、10人中フットボール選手が2人入つている。

つづいて「（女子の優秀競技者）（返り咲いた競技者の次に（卓抜したチーム）世界野球爭覇戰に優勝したデトロイトタイガースが290点で第1位、カレッジフットボールの覇者ミネソタ大学が第2位となつた。

1. デトロイト・タイガース（野球）
2. ミネソタ大学（蹴球）
3. サウザン・メソジスト大学（蹴球）
4. プリンストン大学（蹴球）
5. シカゴカブス（野球）
6. 英口デ杯チーム（庭球）
7. ノートルダム大学（蹴球）
8. 南加大学（陸上）
9. デトロイト・ライオン（プロ蹴球）
10. 加州大学（漕艇）
11. 米口ライダー・カップ・チーム（ゴルフ）

となつており、その年のワールドシリーズで優勝したデトロイトタイガースが第1位で、続いて2、3、4位と大学フットボールが続いており、9位にプロ・フットボールが入つている。又フットボールの名門南加大学がフットボールではなく陸上競技で入つているのも面白い。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

「(番狂せの傑作) 春の練習では精々ナショナルリーグの 5 位程度と予想されていた、シカゴ・カップスがシーズンの終りには 21 試合に聯勝、デトロイト・タイガースと世界選手権を爭うに至つたのが番狂せのナンバーワン、ブラドックの奇蹟的勝利が第 2 位、最後の 2 分間で強敵オハイオ大学を攻めまくり 1 点の差で破つたノートルダム大学が第 3 位、第 4 位はペリーを破つた庭球のアリソン、次は蹴球でノートルダム大学を破つたノースウェスタン大学、第 6 位は全米オープンゴルフで奇勝を博したサム・バークス、第 7 位は全米陸上の 100 米でオーエンスを破つたピーコック、第 8 位はルーイスに TKO されたベアー、第 9 位は蹴球でノースカロライナを 25 対 0 で刺止めたデューク大学チーム、そして最後の第 10 位はシーズンの後半期に 2 年つづいてスランプに陥つたニューヨーク・ジャイアンツ」

とありここでも第 3、第 4、第 9 位と 3 つ大学フットボールが入つており如何に当時アメリカでは大学フットボールが全盛であつたかが判るのである。

なお 1936 年元旦のローズボウルはスタンフォード大学が 7 対 0 で S.M.U に勝つている。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

昭和11年は1月、2月、3月は行事がなく、2月末から3月にかけて各選手は学期末試験で苦労したが、それが終り3月中旬の入学試験が始ると新入部員勧誘のため休暇中ではあるが学校に出かけて受験生を説得するのに忙しかつた。何しろ当時の立教大学は予科学部総人員が1200名位の小数で、したがつて予科1年の入学生全でも250名しか居ないので部員を獲得するのは本当に骨が折れた。

それでも4月の新学期開始当時には部員も少数ではあるがふえたのである。
学部3年では主将太田二男、相京徹夫、井上和雄、中田文男、
学部2年では安藤眉男、菊地隆吾、浅賀隆義、亀井勇、栄実、
学部1年では服部慎吾、細田孝、池上弥太郎、鈴江弘、岸高誼、竹内義雄、小林万寿治、
予科3年では阿部健一、稲熊正男、
予科2年は中村健一、戸庸彬、杉山亀雄、上田守政、
新入部員には小黒博、鈴木辰雄、裵俸旭、洪興亀、田辺進と5人が入つた。
この内小黒と鈴木と田辺は二卉であつた。そして新入部員を含めて27名で4月末から春の練習を石神井公園のグラウンドで行つた。

立教大学のアメリカンフットボール部は米式蹴球部とは云つてはいたが立教大学体育会に正式には加入していなかつた。正式に加入していなかつたと云うよりは正式の加入を体育会で許可してくれなかつたのである。それはまだ出来たばかりでもあり、又実績も少いし、又部員も初年度の如きは他の部の流れ者が多く、それに又立教大学の全学の学生数が前述の通り1,200名位である為に体育会に来る予算も多くはない。然し体育会に加入している運動部は20位もあつた。

その20位の部が少ない予算を分けるのであるから既設の部とすれば一つでも新しい部が出来ればその部に予算を分配しなければならない。それだけ既設の部の予算が少くなるので新設の部の加入は出来るだけ認めないように各部とも考へているのでフットボール3年目になつても加入を認めてもらえなかつた。それで体育会部外団体としての取扱いを受けて年間予算30円を体育会の方から分けてもらえるようになつた。
新設の部は大低部外団体として取扱はれ、その部外団体を何年か経過して実績が認められれば体育会加入が許可されるのが普通であつたのでこれは止むを得ないことであつた。毎年根気よく加入の申請を続けて認めてもらへるようにするより仕様がなかつたのである。然し年間30円の予算ではいくら物価の安い時でも当抵足りるものではなかつた。それで部員からは月50銭宛の部費を徴集して僅かにその日活しの様な計算でやりくりをしていたのである。道具も補充しなければならないし、ユニフォームもボールも買はなければならないグラウンドの借り代も支払はなければならないし、又通信費もかかると云うことで何時もピーピーしていた。
そして玉沢運動具店には何時も相当額の借金があつた。玉沢のセールスマンの岡崎氏などには何時もいや味をいわれていたが無いものは払えないので、ついつい延ばしていた。玉沢には悪いことをしたと思つているが止むを得なかつた。然しそれでも文句を云いながらも玉沢は練習や試合に支障の無いようにしてくれたことに対しては大変感謝をしている。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この年に寂しいことが起つた。それはフットボールの日本の親とも云はれ日本のフットボール創立に大変努力したと同時に立教大学のフットボールのコーチをしていたジョージ・マーシヤル教授が6月中旬に任期満了となつてアメリカに帰口したことであつた。

我々部員としては本当に親を失つたようで先行に不安さえ感じた。その上昨年FBとして活躍した坂口が両親の反対にあい部を止めたことと重なつて大変寂しい思いをしたが、コーチの帰口はこれも止むを得ないことでこれからはコーチなしで主将の太田が中心となつて全員一致協力を約束して結束を固めマーシヤルコーチの恩義に報いるよう決心したのである。

7月に入つて間もない頃立教大学に学生騒動が起つた。それは木村総長の排斥運動であつた。そしてその排斥運動が頂点に達した頃は夏休みになつて学生の大半は田舎や遊びに出掛けて居なかつた。その頃体育会でもこの排斥運動に加入していたと云うよりはその中心となつていた。それで総長が辞任しなければ全学生は退学すると云うことに決定し、体育会から各部に部員の退学届をまとめて出せとの指令が来た。部員は散り散りになつて9月の合宿迄には居所をつかまえることも困難である。然し体育会の方からは1～2日の内に出せとの指令である。この指令に逆らつて退学届を出さなければ今後の体育会加入はおろか僅かではあるが年30円の予算もおぼつかなくなるおそれがあつた。それで安藤からその聯絡を受け安藤と私で7月10日頃であつたか小川部長宅にその件で相談に行つた。いくら学生側に勝つ自信があるからと云つて不在者の退学届を本人の承諾なしに無断で書くのであるから気が引けた。万が一にも退学届けがそのまま通つたら本人に申し訳ない、それで小川部長に相談に行つたのである。すると小川部長は体育会からの指令ならば出したら良いだろう、全体育会の退学届だけでも相当数になり退学と云うことは有り得ないだろうと云うことで全員の退学届を代筆することになつて半紙を買つて来たが、そこで又一つ問題にぶつかつた。

それは、退学届は毛筆で書かなければならない。安藤も私も毛筆は不得手である。それで小川部長に書いてくれと頼んだら小川部長は学校側の教師が学生の退学届の代筆をしたなどとは前代未聞だと云つたがそれでも27名の部員全員の退学届を書いてくれたのでそれを体育会に提出した。結果は全学で集つた退学届は800通を越え全学生1,200名の2／3になり結局木村総長は辞任した。それで全員の退学届は7月中旬校内の食堂の前の藤棚の下で焼いて万事無事解決したのである。

この年の6月頃今年優勝したチームを中心にして各校から優秀選手を選抜してその年の暮にアメリカ遠征をすると云うことが決定したので春の練習から皆張り切つていた。それで夏の合宿にも皆大きな希望をもつていた。

又小川部長の尽力で小川部長がアメリカのペンシルヴェニア大学に留学中の知人の斉藤一男氏と野波福三郎氏等を中心にして立教大学米式蹴球部後援会が出来て物心両面から後援してもらえることになつた。何しろ部の創立が新しいのでまだ一人もO.Bが居ないのでその方面からの援助は望むことが出来なかつたのでその点大変有難かつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

合宿は昨年と同様9月1日から9月13日まで軽井沢星野温泉明星舘に定つていたので、8月31日午前8時40分発の列車で一同現地に向つた。当時の汽車賃は学割で片道1円70銭であり、合宿の費用は13日間で22円であつた。これは勿論全額個人負担であつた。その年は前年の様な不手際はなくスムーズに経過して予期以上の成果を得て9月13日夜帰京したがマーシヤルコーチの居ないことが本当に寂しく思はれた。

合宿から帰つて又石神井公園のグラウンドに毎日練習に通つていたが、10月21日にリーグ戦の正確なスケジュールが発表された。22日の朝日新聞ではそれについて次の様に書いている。

「東京学生米式蹴球リーグでは創立第3年目のシーズンを迎へて21日午後7時半から東朝講堂に理事会を開き今シーズンのスケヂュールを発表したが競技場は総て昨年同様芝公園で24日の明慶戦から11月7日の早立戦までは夜間試合（午後7時半）を行ひ以降は晝間（午後2時半）挙行する。日程は左の通り。10月24日：明慶、25日：早法、31日：立慶、11月1日：明法、7日：早立、9日：法慶、13日：明立、14日：早慶、21日：立法、23日：明早、26日：リーグ優勝校対横浜外人（3時横浜YCAC)」と書いている。

昨年は全試合夜間であつたが11月の夜間は寒いのとモヤが降りてコンディションの悪くなる日が多いので前半を夜間、後半を晝間としたのである。この記事発表の前から我々にはリーグ戦開始は24日からと云うことは判つていたのでそれを目標に練習を重さねていたのである。

10月18日の朝日の記事にもアメリカの状況を報道している。

「ワールドシリーズ終了と共に米口運動界は挙げてフットボール・シーズンに入り大学チームは職業団と共に数万の観衆の前に毎週熱戦を繰り返へしてゐるが､17日一昨年来全勝を誇つていたプリンストン大学チームもペンシルヴェニア大学に7対0で敗れエール大学が海軍チームを12対7で撃破し陸軍チームが又ハーバード大学を32対0で撃滅フットボールシーズンを弥が上に煽つてゐる」と報じた。

そしてその記事に続いて「日本でも25日から」と云う見出しで「我が口でも米式蹴球リーグが誕生して早くも3年目、明早立法慶の5校は来る25日から芝公園競技場で日本では珍らしい夜間試合を挙行する。夜間試合では本家の米口と同様、球に白の着色を施して使用するが眩ゆい電光のもとで白球を抱いて突進激突を繰り返へすこのゲームはやがて我が口でも秋季競技会を飾る花形とならうとしてゐる」と大変ひいき目な記事がのつていた。第一、電光眩ゆいとは程遠いものでうす暗い電光であつた。秋のスポーツ界の花形もこれから約40年経過した今日でも未だ花が咲かないような状態である。

又10月24日の朝日には大きくリーグ戦の予想が出ていた。

「東京学生米式蹴球聯盟も創立以来早や3シーズンを迎へて今24日から芝公園競技場で

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

リーグ戦を挙行することとなつたが、リーグ戦前半の5試合は未だ気候も暖かく夕方よりゲームを開始する方が却つて四囲の雑音に妨げられることが少い—といふ理由から電気照明下に午後7時半キックオフで挙行することとなつた。今シーズンはリーグ戦終了後リーグ優勝校を主体として各大学より優秀選手を選出、招待に応じてロスアンゼルスへ遠征の計画が着々進行してゐるので各校は夏期合宿以来異常な緊張振りを見せて猛練習を続けてゐるが“オーバーコートはアメリカで購はうぜ”といふほほえましい流行語が生れてゐる程各校の優勝につなぐ野望は烈しいものだ。

又今シーズン全試合を通じて特記せられるべきことは各校共に期せずしてゲームのスピードアップが慎重に考えられてゐることで、米式蹴球では攻撃側が攻撃開始の位置につく前集合して次の攻撃法を司令することは重要な要素の一つであるが未だ普及の度も浅い現在ではこの独特の味も理解されることが少く却つて無用視される傾きさへあるので、一日も早くこのゲームを理解するものの一人でも多からんことを希つて各チームは多大な犠牲を払つてゲームのスピードアップをすることとなつたのである。そこで各チームの陣容は如何に？

明大　昨年一昨年と２ヶ年聯続優勝の栄誉に輝く明大チームは今シーズンも優勝候補のナンバーワンであつて昨年のメンバーからは主将であつたクォーターバックの松本君およびラインから塚平君の２名が卒業しただけ竹下、渡辺両タックルを除いてはプレーヤーの殆ど総ては加州或はハワイで経験を積んでいるもののみなので非常に復雑多岐に亘るプレイが可能で数多のフォーメーションを魔術師の一団の如く鮮やかに行使する。その上驚くべきことにはこのやうな復雑なプレイを行ひ乍ら各チームに率先してプレイ開始前の集合ハドルを廃止しダウンからダウンへ息つく暇もなくゲームを運んでいくことである。攻撃法としてはノートルダム大学の攻法を主体として精巧なラインズメンの動きで相手のラインを乱し間髪を入れずにこの空間を突破ししようといふラインプレイを重視しこれに長短のフォワードパスを混用して一挙に10数ヤード或は数十ヤードの前進を目指してゐる。

早大　2ヶ年共明大と決勝戦を行ひ乍ら惜くも敗れ去つた早大は今シーズンこそ石にかじり付いても勝ねばならぬと必勝の意気物凄く平均18貫の理想的体重を馳駆してライン突撃に力を集中、漸進主義の如くではあるが、4回のうち3回失敗してもよいから残る1回に長距離の前進を獲得しやうといふラクニー戦法を信奉してゐるチームであるからその攻撃は悠々動く戦車のやうなところもあるがこの戦車が爆音物凄く何時全能力を挙げて長距離の快走を試みるかも知れず、永井、末武、内藤君らバックフィールドの突進を補ける重量ラインズメンの動きこそ観ものであらう。

立教　殆どど無経験者から叩き上げたこのチームも３ヶ年の経験は漸く実を結んで来た。昨年は又ハワイ時代優秀な経験を持つていたフルバック坂口君の出現で精彩を加へた。坂口君の活躍はシーズン終了後聯盟役員有志の選出で作られた全日本チームのフールバックに挙げられた程峻烈な突進果敢なタックルを讃へられた名選手であつたが、今シーズンは家庭の反対で出場を断念してゐるのでこの痛手は立教チームに可成りの違算を生んだことであらう。併し乍ら、これも同じく名キッカーとして注目を集めた中村君依然健在であるから長蹴によつて立教の危機を挽回するであらうし又ラインズメンの充実はフォワードパスを完

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

成に導いて明大、早大に肉薄するものと思はれる。

法政　ラインズメンに重量級を揃へた法政は、攻法を南加大学の形にとつて僅少な前進ではあるが確実に歩一歩とボールを進めるジョーンズの戦法を行つてゐるのは策を得たものである。経験者の数から云へばバックフィールドの西原、梶谷の両君を除いては凡て昨シーズンから始めたもの許りであるが、ラインズメンの進歩と共に西原、梶谷、三枝、名護、竹中諸バックメンの突進は好個の突撃路を見出すことが出来るであらうし、立教と共に早明にとつては油断のならぬ存在である。

慶応　昨シーズンはラインズメンの頑健な体格から恐らく早明と誰もこのラインを突破することは容易でなからうといふ見方からしてリーグ中のダークホース視せられてゐたが如何せんこの競技に対する経験の薄弱さは個人的にも力の配分を誤つて意外の破綻を生み初陣では是非もない全敗の記録を残したのであつたが、今シーズンはラインズメンの向上とバックメンがタイミングのコツを会得したことによつてライン突撃に一段と鋭さを増し、殊に右へ展開するライン突破には相当の自信を持つてゐるものの如くである。又保木、武田君の送るフォワードパスに対して桑原、山片君等の捕球に慶応の攻撃に変化を加へるものとして活躍を期待されてゐる」

と云う長文の記事であつて、これは勿論朝日新聞の記者であり、又聯盟の役員でもある加納克亮氏の記事であつた。

確かに日本の観衆にはすぐラグビーと比較する為にハドルが気になつたのである。ハドルの為にゲームが寸断されて興味がつなげなくなると云うのである。然しラグビーでもタッチキックやスクラム等ではゲームが中断するのであるが、フットボールのハドルはとにかく気になるらしい。それでハドルの時間をスピードアップしようと云うのである。それで明治はフットボールを本場でやつたことのある者が多いのでハドルを廃止したのである。その方法はボールがレディフォアプレーになるとすぐ全員そのポジションにセットして、エンドの町田が立上つて番号を5つ位聯続コールすることによつてシグナルが決定するのである。即ち番号の組合せによつて次のプレーのシグナルが出るのである。ハドルと時間的には余り差はないが、それでもゲームが聯続しているように見えるので観客も満足するのかも知れない。

このリーグ戦に出場の立教のチームは、主将太田二男（21）、相京徹夫（45）、井上和雄（23）、中田文男（22）が学部3年で、安藤眉男（24）、菊地隆吾（25）、栄実（26）、浅賀隆義（27）、亀井勇（28）、金義行（29）以上学部2年で、学部1年は服部慎吾（30）、池上弥太郎（31）、鈴江弘（32）、細田孝（33）、岸高謹（34）、小林万寿治（46）、竹内義雄（47）、予科3年は阿部健一（35）、稲熊正男（36）の2名、予科2年は中村健一（37）、上田守政（38）、杉山亀雄（39）、戸庸彬（40）、予科1年は小是博（41）、鈴木辰雄（42）、田辺進（43）、裵俸旭（44）、洪尖耄（48）であつたそしてこの年からユニフォームが紺で両腕が白と紺の縞模様になつており番号は白く、パンツは紺でその背部に白のたての縞が入り、ストッキングは両腕と同じく白と紺の横縞の入つたものに変つた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この頃フットボールのことは“アメラク”或は“アメラグ”と云はれるようになつた。これはアメリカンラグビーを詰めて云つたのであろうが、私達にとつては嫌な言葉であつた。それは吾々のやつているのはアメリカンフットボールであつてアメリカンラグビーではないのである。

然し日本人にはボールの形とかタックルなどでどうしてもラグビーと云う先入感があるのであろう。然し私達は何だか新興スポーツで馬鹿にされているようで嫌であつたが“アメラク”、“アメラグ”の言葉は40年経過した現在でもなお続いていることは気にかかることである。関係者はこの言葉は使はないようにすべきである。

この頃の用具の値段はヘルメット10円、ショールダーパッド12円、パンツA　7円、B　5円50銭、ヒップパッド2円50銭、B　2円で、ジャージーはA　5円、B　2円70銭、靴は8円であつた。全部揃えると1人円44円位かかつた。現在にすると8万円か9万円位の計算になる。

この年の2月には2.26事件が起り、物情騒然として日本は戦爭に前進し軍口調がみなぎつて来たが無事にリーグ戦開幕と云うことになつた。

10月24日午後6時から昭和11年度のリーグ戦開会式が芝公園競技場で行はれた。聯盟加盟5大学は校旗を先頭に入場し、メインスタンド前に整列、ポール･ラッシュ理事長の開会の挨拶、選手宣誓と型の如く開会式を終り、引続いて第1戦の明治対慶応の試合がポール･ラッシュ理事長の始球式によつて開始された。その結果は次の通りであつた。

（ファーラー（主）、梶谷（副）、西原（計）、鷲塚（線））

明治20　{ 6－0 / 7－0 / 0－0 / 7－0 }　0慶応

椙村	LE	桑原
渡辺	LT	上村
清水	LG	福田
阿部	C	今村
坂本	RG	稲葉
畑（稔）	RT	加藤
半田	RE	柳田
仁井	QB	松井
畑（進）	LH	保木
保田	RH	田村
大前	FB	片岡

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

交代（明治）：竹下、伴、黒川、鈴木、町田、原田、横山、石橋
（慶応）：山片、光吉、根木、竹村

明治はトリックプレー等変化のある攻撃を展開し、プレーにもスピードがあり慶応を眩惑して得点を重ねたが、第3クォーターから軽量ラインの脆さを暴露し重量慶応に中央をしばしば破られて苦戦したが、慶応バックのフアンブルに助けられ又総体的に攻撃手段を多彩に変化させ又プレーの数も多く慶応を圧倒した。

次で10月25日午後7時30分から芝公園で早稲田対法政の試合がファーラー(主)、船田(副)、グレー（計)、松本（線）の審判の下に行はれた。その結果は次の通りであつた。

法政 13 { 0－0 / 7－0 / 0－7 / 6－0 } 7 早稲田

藤間	LE	野村
鈴鹿	LT	井上
大村	LG	有賀
間宮	C	島
中島	RG	小林
寿	RT	西岡
浜本	RE	山田
西原	QB	永井
三枝	LH	内藤
梶谷	RH	末竹
梅野	FB	鈴木

交代（法政）：名護、小池、内海、宮尾、博多、小泉、持田
（早稲田）：中山、兼安、大林、松井、下田

この試合も前日の明治対慶応戦と同様に正面、バック両スタンド満員で約3,000人位の観衆がつめかけて満員の盛況であつた。試合は早稲田の圧倒的勝利が予想されていたが法政の健斗で早稲田を破つた。即ち早稲田はラインには法政を圧倒するものがあつたが、バックに弱く苦戦をしている内に法政は梶谷、西原、三枝等の駿足が早稲田陣を突破してしまつたのである。早稲田は予想外の敗北を喫したのである。

10月29日には早稲田は東伏見のグラウンドで新聞記者団と試合をして14－0、12－0、0－0、6－0計32－0で勝つた。各紙の担当記者聯中も新しいスポーツに非常に興味を持つて記事を書く

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

だけでは物足りず試合をやろうと云うことになつたもので、殆どがラグビー出身者であつた。かつてのラグビーの名選手揃いの記者団も勝手の違うフットボールでは零敗した。

10 月 31 日は午後 7 時 30 分から芝公園でズーバ（主）、梶谷（副）、下田（計）、松本（線）の審判で立教対慶応の試合が行われた。その結果は次の通りである。

立教 9　{ 0－0 / 0－0 / 3－0 / 6－0 }　0 慶応

岸	LE	桑原
鈴江	LT	上村
池上	LG	福田
安藤	C	今村
栄	RG	稲葉
金	RT	加藤
亀井	RE	柳田
上井	QB	松井
細田	LH	保木
中村	RH	田村
菊地	FB	木村

交代（立教）：浅賀、鈴木、尹、田辺、服部、中田、小林、稲熊
（慶応）：桂、根木、光吉、竹村、疋田

立教のキックオフで開始したが前半は慶応の強固なラインに惱まされ攻めあぐんだが、第 3 クォーターに立教の中村が慶応陣 30 ヤードの地点からのドロップゴールが成功して 3 点を得た。これはフィールドゴールであるが、ボールをプレースしたプレースキックではなく中村がパントフォーメーションからボールをドロップしてその跳ね返つて来るボールを蹴つてゴールしたものである。中村は日本のフットボール界に未曽有の名キッカーであつた。そしてドロップキックも常々練習して居り、折があつたらドロップゴールをねらうつもりであつたが、たまたまチャンスを得て実施したのが成功したのである。このドロップキックによつてフィールドゴールが成功したのは日本のフットボール 40 年の厂史中これが一つあるだけである。

この得点によつて立教は調子が出てフォワードパスやエンドラン等変化のある攻撃で慶応を一方的に押しまくつた。特に中村の鋭い突進力と好キックは多くのチャンスを作り、第 4 クォーターでは中村のエンドランが成功してタッチダウン成り立教は快勝した

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

11月1日は午後7時30分から芝公園でファーラー（主）、ズーバ（副）、ハインライン（計）、船田（線）、の審判で明治対法政の試合が明治キックオフで行われた。その結果は次の通りである。

明治13	6－0 7－0 0－0 0－0	0法政

町田	LE	藤田
富永	LT	鈴鹿
黒川	LG	大村
安部	C	間宮
坂本	RG	中島
畑（稔）	RT	森
椙村	RE	浜本
畑（進）	QB	西原
畑（弘）	LH	三枝
保田	RH	梶谷
大前	FB	梅野

交代（明治）：藤家、石橋、神田、花岡、竹下、原田、栗崎、横山、仁井、布田、金、伴、半田

（法政）：宮尾、持田、博多、名護、竹中、内海、小泉、小池、高田、藤間

前半明治の変化のあるスピードプレーがよく成功し、第1クォーターには畑（弘）が40ヤードを快走し法政12ヤードに入り、次の第2ダウンで畑（弘）の右エンドランでタッチダウン、第2クォーターでも法政15ヤードから畑（弘）の右エンドランでタッチダウンを挙げ13－0としたが法政もよく防ぎ自陣で試合をしていたが明治のバックも突進力がおとろえて得点を追加することが出来なかつた。

同じ11月1日早稲田は横浜でYCACと試合をしたが13対7で早稲田は快勝した。これは今迄毎年優勝校がYCACと試合をしていたが、YCACとしては物足りなくなり各学校とシーズン中に試合をするように聯盟に申し入れたのを受諾したもので、聯盟から各校に通達をしてスケヂールに組込まれたもので各校とすれば一寸迷惑であつた。特に部員の少いチームはこの試合は本当に迷惑であつた。それは怪我がそれだけ多くなつて、本来のリーグ戦に手うすになつては何もならないからであつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

11月7日午後7時30分から芝公園でズーバ（主）、ハインライン（副）、デヴィン（線）、黒川（計）の審判で早稲田対立教の試合が行われた

早稲田 7	0－0	0 立教	
	7－0		
	0－0		
	0－0		

兼安	LE	岸
井上	LT	鈴江
有賀	LG	池上
島	C	安藤
青木	RG	栄
西岡	RT	金
野村	RE	亀井
永井	QB	井上
野内	LH	中村
末武	RH	細田
内藤	FB	菊地

交代（早稲田）：下田、中山、岩本、小林、秋中、山本、斉藤、柏原、平野、大林、角野
（立教）：浅賀、尹、杉山、服部、田辺、稲熊、鈴木、中田、上田

第1クォーターは早稲田のライン攻撃で立教を押し、第2クォーター8分立教ゴール前のスクリメージから内藤の中央突破でタッチダウンを挙げトライフォアポイントに成功し7－0と早稲田リードしたが、13分に早稲田のフォワードパスを立教、中村自陣20ヤードでインターセプトし70ヤード長駆し、早稲田のゴール直前まで攻めたが惜しくもハーフタイムとなつた。

第3クォーターでも中村の30ヤードのロングランで攻め、第4クォーターに入り、立教は早稲田陣30ヤードのスクリメージから鈴木のフォワードパスを中村が成功し早稲田ゴール3ヤード前に迫り、第1ダウン中村のオフタックルで2ヤードまで進んだが、その後早稲田の強固な防禦にはばまれて得点出来ず零敗した。特に後半は立教優勢であつたが、中村がマークされ最後の決め手に欠けたのは残念であつた。ここにおいてFBに昨年の坂口が居たら得点は出来たであろうが、惜しい一戦を失つた。これがリーグ戦での夜間試合の最後となつた。その後40年後の今日までリーグ戦を夜間にやつたことはなく、これが本当の最後の夜間試合であつた。

11月9日は午後2時半から芝公園で松本（主）、ファーラー（副）、坂口（線）、加藤（計）の審判で慶応対法政の試合が行われた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

慶応 13	0－0 7－7 0－0 6－0	7 法政

稲葉	LE	藤間
上村	LT	竹中
福田	LG	名護
桂	C	間宮
加藤	RG	大村
今村	RT	中島
山片	RE	内海
竹村	QB	宮尾
松井	LH	三枝
柳田	RH	梶谷
木村	FB	梅野

交代（慶応）：田村、光吉、淨土、根木、中田
（法政）：持田、森、小池、小泉、保科、博多

この試合は先日早稲田に快勝した法政とは思えない位に凡戦をくり返へしていた。QB 西原の負傷欠場が大きく響いていたらしく、プレーにもまとまりがなく、又フアンブルも多く先日の法政の勢いは何処にもなかつた。この試合で慶応はリーグ戦加盟以来の聯続無得点記録をまぬがれて初めて得点を得ると同時に初勝利をかざり気をよくしたのである。

11 月 13 日午後 2 時 30 分から芝公園でブース（主）、梶谷（副）、船田（線）、加藤（計）の審判で明治対立教の試合が行われた。

	0－0	
明治 26	6－0	0 立教
	7－0	
	13－0	

町田	LE	中田
富永	LT	鈴江
黒川	LG	池上
阿部	C	安藤

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

坂本	RG	栄
畑（稔）	RT	小黒
半田	RE	亀井
大前	QB	井上
保田	LH	中村
畑（進）	RH	細田
畑（弘）	FB	菊地

交代（明治）椙村、横山、仁井、竹下、伴、花岡、藤家、金、石橋、栗崎、山田、田沢、松本
（立教）杉山、鈴木、上田、田辺、尹、太田、浅賀、稲熊

立教のキックオフで試合は開始されたが立教はこれまでに負傷者多く出て練習も充分でなかつた為、明治に思うように走られて何等良い処なく敗退してしまつた。こうなるとマーシヤルコーチの居ない事が大きく響いて来た。

11 月 14 日午後 2 時 30 分から芝公園で坂口（主）、西原（副）、デヴァインズ（線）、山田（計）の審判で早稲田対慶応の試合が行われた

	21－7	
早稲田 60	7－0	7 慶応
	13－0	
	19－0	

兼安	LE	稲葉
井上	LT	上村
青木	LG	福田
島	C	桂
秋中	RG	加藤
西岡	RT	今村
野村	RE	山片
永井	QB	竹村
野内	LH	田村
末武	RH	木村
内藤	FB	柳田

交代（早稲田）：中山、岩本、大林、有賀、斉藤、平野、松井、角野、柏原、北村、下田
（慶応）：光吉、保木、根木

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

慶応元気なくリーグ戦開始以来の記録的大敗をした。

丁度この頃東京学生米式蹴球聯盟では加盟5校の選抜チームを編成してアメリカ遠征が決定した。この件については5月頃その噂はあつたが、聯盟ではアメリカ側と具体的交渉に入り11月中旬にアメリカ側からの確答があり決定したのである。それは監督、コーチ各1名、選手22名で、選手は優勝校を主力として他4チームから2名づつ選抜し、12月3日横浜出帆の秩父丸で渡米、12月19日ロサンゼルス到着、南加州の諸大学と3試合を行い昭和12年1月下旬帰口と発表された。これについて朝日新聞では次の通り大きく報道した。

「我が口に移入されてから未だ僅かに3年の才月を迎へたばかりのアメリカンフットボール界に劃期的な米口遠征の快挙がいよいよ具体化することとなつた。早慶明法立の5大学をようする東京米式蹴球聯盟ではかねてから本場米口に遠征し競技の真髄を会得すべく計畫を進めてゐたが、先年本社招聘により来朝した米口選抜軍のコーチ、マロニー氏のほん走により加州においてレタース王として知られ、先年我口へもフレスノ野球団を組織して来朝したことのある荒谷氏の好意を受け日本軍を加州へ招聘の議がまとまり、14日マロニー氏より聯盟理事長ポール･ラッシュ氏にこの快報がもたらされたのである。聯盟では直ちにこれの対策を協議した結果、既定の如く今シーズンの優勝校を主体とし他四校から優秀選手を拔擢、監督並びにコーチも加へた総員22名の選拔軍を組織し晴れの征途につかしめる事と決定した。

一行のスケヂュールは12月3日横浜出帆の秩父丸で遠征の途に上り同19日ロサンゼルス着、南加州諸大学と3試合を挙行、昭和12年1月下旬帰国の予定である。今回の遠征実現はこの競技が日本において着々急速度の躍進を遂げつつある現状に対し如何に米口民が深甚な関心を拂ひ、凡巾る好意の披瀝を惜まぬ気概を示してゐるかの現はれであつて米口において全スポーツ界に圧倒的人気を有するこの競技を通じ相互の遠征により日米青年の交流を行ふことは日米青年の親善に貢献するところが少くないと思はれてゐる。尚リーグ戦は未だ法立、早明の2試合を残し優勝校の確定を見ないが、聯盟ではアマチュア精神に立脚して最高位チームが同位となり優勝チームの決定を見ざる場合も特別に優勝を決する試合は行はず、今シーズンの最優チームは最高位の2チームとすることとなつた。而してこの場合の遠征チームは最高位の2チームより各7名他の3チームより2名宛の選手を選拔してチームを組織し、11月26日挙行の予定であるリーグ優勝校対YCACの試合は遠征に参加せざる5校の選手選拔軍で行ふこととなつた」
と報じている。

このようにして吾々の夢は実現することに確定したのであるがまだ誕生してから3年目で本場に行くについては多少の不安があつた。特にアメリカの実情をよく知つている二吾達に特にその不安は多かつたようである。然し勉強に行くのであるから選手一同は大変張り切つたのであるがあと残つている2試合を消化するのであるが、この時点においては既に優勝チームは早稲田か明治の何れかであつて、他の3校には優勝のチャンスは絶対にないことが確定しているので1校か

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ら2名を選ぶだけであつた。然しそれにしても大変愉快なことであつた。

11月21日午後2時30分より芝公園で加藤（主）、松本（副）、坂口（線）、大前（計）の審判で法政対立教の試合が行はれた。

法政 38	13－0 7－0 6－0 12－0	0 立教

藤間	LE	中田
鈴鹿	LT	鈴江
小池	LG	池上
間宮	C	安藤
大村	RG	栄
森	RT	小黒
浜本	RE	亀井
三枝	QB	鈴木
梅野	LH	細田
名護	RH	中村
梶谷	FB	浅賀

交代（法政）：竹中、内海、博多
（立教）：菊地、井上、金、服部、岸、稲熊、上田、尹、田辺

この試合は立教の楽勝が予想されていた。然し法政と云うチームは不思議なチームで強豪早稲田に勝つているのに弱い慶応に負けると云うその時のコンディションに非常にムラがあり調子が良いと途方もない力量を発揮するチームであつた。
この日も梶谷、三枝のコンビによるフォワードパスがよく通り又重量のあるラインは立教のラインをわり一方的な試合となつてしまつた。

11月23日午後2時30分から芝公園でブース（主）、坂口（副）、船田（計）、ファーラー（線）の審判で今シーズンの最終試合でしかも優勝決定戦となつた早稲田対明治の試合が行はれたその結果は

早稲田 7	0－0 7－0 0－0	0 明治

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

0－0

野村	LE	町田
井上	LT	富永
青木	LG	黒川
島	C	阿部
有賀	RG	坂本
西岡	RT	畑（稔）
下田	RE	半田
永井	QB	胡子
野内	LH	保田
末武	RH	大前
内藤	FB	畑（弘）

交代（早稲田）：秋山、中山、岩本
（明治）：石橋、花岡、伴、栗崎、椙村、山田、藤家、竹下

この試合は優勝決定戦であるので芝公園のスタンドは満員になつた。又両チーム共大変な張り切りようであつた。それには明治が勝てば米口遠征には明治から12名が選抜されることになり早稲田は2名しか送れない。早稲田が勝てば優勝は明治と分けるので7名の選手を送ることが出来るので両チーム共必死の試合であつた。それだけに内容も立派な試合であつた。

ラインの重量は早稲田が重くその重量ラインを有効に使つて、第1Qの終りには早稲田は明治のゴール前1ヤードまで押して第1クォーターを終った。第2クォーター早稲田は明治陣1ヤードから攻撃を開始したが明治のラインはよく頑張つて早稲田の得点をゆるさずパントで20ヤードに返えしたが、早稲田はこの第1ダウンで永井から野村へのフォワードパスに成功してタッチダウンを挙げサクセスフルトライ・フォア・ポイントも成功して7点を得た。

その後も好調であつたが後半は明治も調子を出し、大前、胡子が活躍し早稲田陣で試合を続けたがどうしても早稲田の重量ラインを抜けきれず7対0で早稲田が勝った。これで優勝は早稲田、明治、(3勝1敗)、第3位は法政（2勝2敗)、第4位は立教、慶応（1勝3敗）となつた。この結果米口遠征チームは早稲田、明治から各7名、他の慶応、法政、立教から各2名宛と決定した。そして早稲田はリーグ戦3年目で明治を破り同率ではあるが初優勝をしたのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

11 月 19 日の朝日新聞にはロサンゼルス特派員発の記事を次のようにのせている。

「東京学生米式蹴球聯盟では既報マロニー氏の招聘に応じて米口遠征を決行するべく準備を進めているが、一方米口においても着々準備は行はれ、この招聘問題について奔走してゐるシェラピー及びマロニーの両氏は 18 日記者を訪れ左の如く語つた。

時期が年末で各大学のビッグゲームが済んだ後に 1 月 1 日にパサデナで全米東西爭覇戰が挙行されるので主催者側が相当犠性を負ふことを覚悟せねばならぬが、将来日本における米式蹴球に資し、行く行くは日米間に爭覇戰が行はれることを希望して今回招聘する次第である。この計画が発表されるや方々の大学から試合の申込みがあつたが、今度は各ハイスクール選拔チームと試合する予定でクリスマス明けの 27 日と 1 月 3 日の 2 回当地ギルモア競技場で挙行、その間にローレイで 1 回或はサンフランシスコで 1 回やる計画でハイスクール選拔軍はなまなかな大学チームより強いので勿論日本チームとは丁度良い対抗試合になると思ふ」

と云う記事であり最初の予定の大学チームとは試合は行はないことになつたが、たしかに米口では 12 月末から 1 月元日にかけては各地にビッグゲームが行はれる時期であるので生れてから僅か 3 年の未熟な日本チームとハイスクールの試合にどの位観衆が集るかは大変不安があつたのは事実であろう。なるべく多くの観衆を集めるには日本人の多く住んでいる地域で試合を挙行し、初めての日本フットボールチームの試合と云うことで一吞二吞の応援を引付ける必要はあつたのでロサンゼルス近郊とかサンフランシスコ等を選んだのであろう。

然しそれにしても招聘することが決定してもまだ場所も相手チームも決定しないと云うこともアメリカらしい大まかな所がある。それにはグラウンドの心配がいらないと云うことが先ず第一の条件であつたのであろう。日本ならその当時は競技場の数が少なく各競技団体で取り合いの状況であるので何か月も前から競技場を確保していなければならなかつたが、アメリカでは 5 万や 7 万の観客を収容出来る競技場はいくらでもあるのでその心配がないのである。チームの編成についてもその時はシーズンの最中であり、いくらハイスクールとは云えまだ選拔することは無理であつたのであろう。大体のスケヂュールで招聘すると云うことも大胆な話であるがチームの編成については長いことフットボールをやつている聯中であるので合同練習なども短期間でよいのであろうから 11 月中旬から決定しておく必要もなかつたのであろう。

とにかく念願の米口遠征が正式に決定したことはフットボール関係者一同大変なよろこび方であつた。そしてこれにより日本のフットボール界もアメリカ本国の新しい技術を学んで来ることにより一段と躍進することが期待されたのである。

この昭和 11 年と云う年は日本のスポーツ界全体においても大いに飛躍した年であつた。すなわち夏にはベルリンにおいてオリンピック大会が開催され、日本は水泳競技において優秀な成績を挙げた他、陸上競技でも三段跳やマラソンに国旗を上げる成績を挙げて大いに国威を発揚した年であり、又第 12 回オリンピック大会の開催地が東京と決定してその準備等にかかり始めた年

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

であつた。その年末に新興スポーツのフットボールが本国のアメリカに遠征すると云うことは大きな話題ともなつたのである。

11 月 26 日にはシーズンのスケヂュール通り早稲田と優勝を分けた明治が横浜の根岸の YCAC のグラウンドで 3 時 10 分からファラー（主）、梶谷（副）、スミス（計）、坂田（線）の審判で試合を行つたが 13 対 0 で明治が勝つた。

そしてその試合のあつた 11 月 26 日午後 8 時から聯盟ポール･ラッシュ理事長以下役員が選抜した遠征軍のメンバーを各新聞社の担当記者を集めて記者会見をしその席上で発表したのである。

翌 11 月 27 日の各新聞スポーツ欄では何れも大きく掲載していた。その内代表的に書いた朝日新聞では“米式蹴球団 22 名、遠征軍顔觸れ決る。来月 3 日秩父丸で渡米”と云う見出で選抜軍各選手の顔写真入で大きく取扱つていた。

「昭和9年誕生以来短日月間に急速なる発展を来たした東京学生米式蹴球聯盟の初渡米遠征メムバー並びに試合日程は 26 日午後 8 時聯盟理事長ポール･ラッシュ氏より左の如く 22 名が決定発表された。一行は 12 月 3 日横浜解纜の秩父丸で華々しく渡米、ロスアンゼルスに於いて 3 試合を挙行、明年 1 月 23 日に帰朝の予定である。尚一行には米国蹴球界の機構或ひは競技方面研究のため特に理事長ポール･ラッシュ氏の私費で早大部員川島治雄君がマネージヤーの私設秘書として派遣されることとなつた。決定したメムバー並びに試合日程次の如し。

選手（20 名）
〔早大〕: 中山晟、有賀太郎、下田正一、野村武雄、末武広士、井上素行、永井愛人
〔明大〕: 畑弘、畑進、畑稔、保田進、黒川博人、阿部武人、町田整治
〔法政〕: 梶谷正明、梅野一夫
〔立教〕: 中村健一、安藤眉男
〔慶応〕: 福田栄、今村徳之、
〔コーチ〕武田道郎（明大コーチ）
〔マネージヤー〕加納克亮

遠征日程：横浜出帆 12 月 3 日秩父丸、羅府着 12 月 19 日
〔第 1 試合〕: 12 月 27 日 対羅府ハイスクール選抜軍（於羅府ギルモアフィールド）
〔第 2 試合〕: 1 月 1 日 相手未定（於サンフランシスコ又はゾローリー）
〔第 3 試合〕: 1 月 3 日相手未定（於ロサンゼルス）
〔横浜帰着〕1 月 23 日（竜田丸）」
と報じている。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この選拔については色々と批判はあつたことは事実である。特に早稲田においてはその感が深いものがあつた。早稲田には二世が多く、その二世達の活躍によつて優勝出来たのであるが選拔されたメンバーの中には中山、有賀の2人の日本生れが入つているのであるが、これは早稲田の家庭の事情であつたのかもしれない。即ち早稲田は将来二世だけではこの競技はやつて行けなくなる時期が来ることを予測して、早く日本生れを育てようと云ふことであつたかも知れないが、選からもれた者の中には不平の出たことも事実であつた。なおこの20名の選拔の内、早稲田の中山、有賀、立教の安藤、慶応の福田の4人だけが日本生れの選手で、その他16名は全部アメリカ或はハワイ生れの二世であつた。

遠征チーム一行は翌日から浜松町にあつた朝日新聞社のグラウンドで武田コーチの指導の下に合同練習を始めたのである。その間に渡航準備等大変な忙しさであつた。実際には11月中旬頃に渡航選拔チームは内定しており各人には内示があり各人は準備はしていたのであるが……。そして一行は12月3日は朝8時30分に朝日新聞社に集合し加納マネージヤーの引率で明治神宮に参拜し更に宮城を遥拜し、12時30分東京発の臨港列車で横浜に向い、午後3時出帆の秩父丸に乘つて遠征の途についたのである。一行は紺のブレザーコートを着、その左胸には日の丸と星條旗を交叉させたワッペンをつけて元気一杯で出帆した。12月8日の朝日新聞には聯盟の加納克亮氏が昭和11年のリーグ戦の総評を次の如く書いている。

「誕生第3回のシーズンを迎へた東京学生米式蹴球リーグ戦も11月23日の早明戦で1ヶ月余のシーズンを終つた。戰績から見ると明大、早大が共に3勝1敗で第1位、第3位は法政、第4位は1勝3敗で立教、慶応が同位と云う順であつた。同リーグでは最高位チームが勝負同率である場合殊更に特別の試合を行つて飽くまで勝負を決せねば・・・といふ態度を取つていないため、今シーズンは早大の対明大快勝によつて早明は同率となり優勝なしで唯單に1936年度は最高位チーム早明といふ記録に止まつたが、勝敗の変転経過のみを見ても実に年1年と各チームの技倆が接近して来た跡が認められる。

早大はシーズン始め弱敵と見做していた法政に得点をリードされ第3クォーターでやつと同点までに漕ぎ付けたが意外に法政には底力があり、遂に最終クォーターに1タッチダウンを加へて物の見事に追いすがる早大を土俵際で堂々投け飛ばして早くもシーズン初頭から波瀾を思はせた。早大にしてみれば学期試験明けて2日目が対法政戰であつたといふ非常なハンディキャップのあつたことも無視することは出来ないが、法政ラインズ・メンの元気、バックフィールドの尖鋭だつた突進速度は好調な早大をも苦戰せしめたであらうと思はせたものであつた。

明大はシーズンを通じてどの試合が特別に不調であつたといふものもなく全試合を能く緊張した気分で精巧な戰術を縱横に揮つて戰ひ拔き流石は優勝第一候補として目させた十分な貫禄を備へてゐた。これに就いては今回米国遠征軍のコーチに選ばれた明大武田コーチの周到な頭腦が能く選手の肉体の條件を試合に際して最好調に達せしむるやう、その方法を誤らなかつた事が最大な要素の一つとなつてゐよう。

法政は明大と並び称される強チーム早大をシーズン始めに破つて意気軒昂たるものがあ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

つたが、その後バックフィールドの西原君を負傷から出場せしめ得ず、何となくバックの攻撃力を衰微せしめて明大に敗れ対慶応戦では極端に緩慢なプレイ振りで意外な拙戦を演じて敗退し、法政のシーズン最後の試合であつた対立教戦には今迄の法政と位置を据え替えたやうに不調であつた立教を大敗せしめて、辛くも第3位をかち得たが、法政がシーズンを通じて示した好調不調の波は実に大きくこの点よりしてみても、今後シーズンを通じて或る一定の力を保ち進歩の歩みを続けて行くためには、尚一層練習方法、時間等その他に余程研究の余地を残してゐるといへやう。

立教は僅に慶応に一勝したのみで明大、法政には大敗を喫し、慶応は又法政に快勝したのみで早大には60対7といふ最大記録差で敗退したが、立教も慶応も共に法政同様、全シーズンの試合に際して自己の絶好のコンディションを生かすべき努力が必要であらう。

これには早明に比し他の3チームは競技者の数も少く、シーズンの深まると共に負傷者の続出によつて止むを得ざる力量の低下を来すこともシーズン中一定の限度を保つことが出来なくなる理由の最大原因となつてゐやうが、早明が主戦斗士に余り変りなくシーズンを完了することよりして見れば、まだまだ技術的方面にも研究の余地十分ありといふことが出来やう。

さてシーズン中最も優れていたのは何と云つても早明の一戦であつた。もつともこの日迄早大は法政に敗れて2勝1敗、明大は慶立法をなぎ倒して無敗、而も明大は優勝すれば米口遠征に12名の選手を送ることが出来るし、早大はこの明大に勝たねば2名の選手を派遣するのみといふ惨めさをみるので試合は開始直後から猛烈な意気と意気の衝突となり、前半第2クォーター早大が鮮やかなフォワードパスでタッチダウンを果した以外は、やつとダウンを2～3回重ねて2～30ヤードの前進を計つても、遂に対手の決死的防禦陣を割ることが出来ず、キックに攻撃権を放棄するといふ接戦ぶりで、リーグ3シーズンを通じて最も見応えのあつたゲームであつた。

遠征はかくして早大7、明大7、立法慶より各2名宛の選手が選抜され、本家の米国に渡つて技を練り、この競技の誤りなき精神を攝取する段取りとなつたが、果たして如何なる戦績を残し、如何なる成果を収めて凱旋するか、年一年と劃期的飛躍をとげつつある米式蹴球界今後の発展についてはこの遠征軍に選ばれたる20名の選手諸君の責任は重いと云はねばならぬ」

と加納氏はシーズンの総評を書いているが実際その通りであつて、立教も調子のむらがあり負傷者も多く出たことも事実であつたが、それにしても最終戦の対法政戦はひどかつた。それには昨年までのマーシヤルコーチの帰国が大きくひびいていたことは事実である。主将の太田がコーチを兼務したが、太田では主将は務まつてもコーチは無理で、特に最上級生の部員の間のコミニケーションが上手くいかなくそれが全チームの志気に影響を及ぼしたのである。

確かに早稲田、明治に比較すると他の慶応、法政、立教は競技者の数も少なかつた。早、明が30名以上の競技者数を有するのに対して他の3校は20名位でしかも有効に使用出来るプレイヤーが少なかった。日本生れの競技者は一番永い経験を有する者でも3年しかなく、その上、毎年

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

新しく入部して来る者が殆ど素人の無経験者である為、或る程度の人数は揃へることが出来ても実戦に使用することが出来なかった。従つて常に試合に出場する者は限られた人員である為、負傷の率も多かった。又一方では新人を早く使用可能なプレーヤーに育てるべく練習もはげしくなる為、負傷者も多くなると云ふ結果を来たし、シーズン終了間近になるとチームの編成にも苦労する有様であつた。

それであるから各競技者は一つのポジションだけでは事足りず、2つも3つものポジションを練習しなければならなかつた。即ちガードとタックルのポジションの者は両方を練習しどちらでも使用出来るようにしたり、クォーターバックとハーフバック及びフルバックのバックはどれでも出来なければ試合が出来ないのである。従つて早・明のように一つのポジションを1人で受持つていれば良いと云ふチームとは大きなハンディキャップがあつたことは事実で止むを得ないことであつた。

又ラインからバックに廻つたり、エンドが事故があるとバックがエンドに入つたり、1人2役も3役もやらなければならないのが3校の実情であつた。その為に法政にしても立教にしても試合毎にチームの最高のコンディションを作り上げることは非常に困難であり、従つてシーズン中試合毎に大きな波が出来たのである。

昭和12年1月第1号のアサヒスポーツに立教大学体育主事であり又東京学生米式蹴球聯盟の審判員でもあつたJ・E・ファウラー氏が、1936年度のリーグ戦を回顧してオール・スターズ・チームの編成をしているが、その編成した理由を次のように書いている。

「本年度の10試合を通じて回顧すれば、幾多波瀾の富んだ好試合が展開されたが、いまここに各試合にわたる戦績をふり返へるを避け、立教大学体育主事たるJ・E・ファウラー氏が、その戦績を検討して作り上げた全日本学生軍の編成を米蹴フアンならびに一般読者諸君にご紹介することとする。

エール大学の名フットボールコーチ、ウォルター・カンプ氏が初めてオールスターチームなるものを作つて以来、このチーム選定は一種の年中行事の一つとしてもう大分長い間存続してゐる習慣なのだ。カンプ氏は有名なフットボール研究家であり、批評家である。そして彼のこの独創は今や全米を風靡し、シーズン後のフアンの話題はこれを措いてほかにはないと云つても過云ではあるまい。しかし、これをやることは決して生易しい仕事ではない。私はこれをやることが日本の、まだ若いフットボールの成育のためによいことだと思ふので、私としては第2回目の全日本フットボールチームの選定、編成を一つやつて見ようと思ふ。

前述の通り、この編成は中々困難な仕事で、フアン全部が私の意見と一致するということは望み得ない。何故ならばチームが強いということは、そのチームのぞれぞれのポジションにある選手がそのポジション特有の技能を発揮するということで、そのポジションの「技能」といつても、範囲は相当広いのである。だからその選手が自己の技能の範囲をどこまで遂行し得るかということによつて、その選手をオールスターチームのメムバーに推薦せねばならぬのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

このオールスターチームに何等の躊躇もなく推薦し得るのは、ライトハーフバックとして立教の中村である。彼はこのポジションの要求する技能の殆ど全部を遂行し得る。それのみならず、もしや他のポジションが危機に瀕する場合、よくこれをカバーする技能さえ有している。彼は実に三位一体の選手と云つてよかろう。彼はウイングバックフォーメーションにおいて蹴ることが出来る。パッスすることが出来る。また球をキャリーすることが出来る。

彼のキックは、パントも、ドロップキックもリーグ随一のものであらう。そのパントは実に大きいと同時に高さをも持つているので十分エンドが前進する余裕をもち、敵に球を与へる前にタックル出来るのである。守備においても優秀であるということは衆目の一致するところであらう。そして彼の体格は非常に頑健で、何等の心配を要しない。またその判断も冷靜で適確である。

今一つのハーフバックのポジションには、明治のH·畑を推す。彼の第一の長所は、ボールをよくキャリーする点にある。優秀なチームワークの援助があつたとはいえ、彼の今シーズンの成績は賞讃に値する。背が低く、分厚い彼は、牡牛を思わせるものがあり、そのピストンのようによく動く短い脚は機関車のように彼を前進せしめる。彼はまた、戰況に応じてペースを変えるよいジャッジメントをも併せ持つているのだ。この技能は、どんなチームにとつても無くてはならぬものであらう。

フルバックは同じく明治の大前をあげる。早稲田のフレッシュマンスター内藤は、これに次ぐ猛者である。しかし今度は一歩を先んじている大前に、このポジションを与えることとしよう。大前は実に良く動く選手であり、必要に応じて確実に2、3ヤードの前進をいつでも敢行し得る力を持つている。なお立教の坂口がフットボールをやめた事は実に残念である。自分はフアンと共に、彼の姿をフルバックのポジションに見出し得なかつたことを悲しむものである。しかし彼はまだ2年間学生生活をしなければならないので、来るシーズンには彼の颯爽たる姿を見出す事を望んで止まない。

クォーターバックの人選は至難である。またある意味から最も容易であるとも云えるのは、このポジションには数人の推薦し得るプレーヤーがあるからである。しかしどれも実は団栗の背くらべに近い。クォーターバックという役割は、船でいえば船長にも較べられるもので、正にチームの頭脳であり、原動力である。諸種の点を考慮した結果、自分はここに早稲田の野内を推そう。彼はなんら花々しいところはないが、その判断力は見るべきものがある。

ライトエンドには早稲田の下田を置く。彼は早稲田のコーチなのだ。彼の身長と、重量と力量と、スピードとを買うものである。彼は猛烈なタックルにも良く耐え、パントに際してはこれを追つてよく駆け、フォワードパスを受けるにもまた巧みであり、その輝かしい防禦力は今更喋喋する必要はない。彼の対明治戰における、防備線上の活躍は、感銘深いものがある。レフトエンドには明のスター町田を推そう。軽くて早い彼は、防備の上では大したこともないが、その攻撃力は恐るべきものがある。彼のロングパスを受ける技倆はこれまたリーグ随一であろう。このポジションについて是非附云せねばならぬのは同じく明治の椙村が、僅な所でこの選に洩れていることである。

ハーフバックの中村と同じく、レフトタックルには異議なく早稲田の井上を推すことが出来る。彼の戰斗力は、このポジションは取つて無くてはならぬものである。彼の僚友、レフ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

トエンドの野村がしばしば美技を演じたのは、井上の援助に負うところ実に大である。かくの如く井上は、エンド、ガードを器用に援助している。彼はまたゲームの判断にも長けていて、必要に応じてその精力をよく傾倒している。彼のスピードにも見るべきものがある。

ライトタックルには明治の主将畑を推す。彼は井上とは変つた性質のプレイヤーである。というのは、井上が精力的で積極的であるに反し、畑は動作緩慢ではあるが実に確実である。彼はリーグの最も重量ある選手で、敵に対し磐石の如き防壁となる。彼は正に地面の上に低く築かれた山の様なもので、東京名物の地震にも一寸では動くまい。彼の綽名は「石垣」と称されている。

クォーターバックに次いで、人選の困難を感ぜしむるものはガードであろう。このポジションはチーム中最も重要なものと云へるにも拘らず、また最も地味なもので正に縁の下の力持ちと云つた形だ。敵の猛撃をよく退けねばならぬと同時に、味方の攻撃に対して通路を設けてやらねばならぬ。かくの如きいやな辛い仕事は一手に引受け、そしてその功名は一切他に譲らねばならぬ。レフトガードには明治の黒川を挙げよう。彼の軽量はこのポジションには物足らぬものがあるが、その良心的な勤勉と確実なプレイはオールスターチームの一員たるに十分であらう。

ライトガードには立教の安藤を拔擢する。彼は日本でこのゲームを習得した選手中のピカーであり、現在わがリーグ選手の多くはカリフォルニア、或いはハワイでプレイの経験を有しているが、彼は純国産の偉大、優秀な選手である。彼は体格も、プレイの型も、早稲田の井上とよく似た選手で精力的、積極的でいつも激戦の真只中に突入している。彼はまたセンターとしても優秀なプレイヤーである。

センターには明治の安部を推そう。彼を挙げたのは、対早稲田戦における目覚ましい活躍と、安藤がガードに選らばれているためとである。対早稲田戦に彼は異常な奮斗をした。もし明治の全部が彼のような見事なプレイをしていたならば、その結果は逆賭し難いものがあつたろう。彼のセンターからのパスは確実で彈丸のような鋭さをもつている。

さてこれで今年度の全日本軍ともいうべきオールスターチームの編成を終つたわけだが、明治の6人に対し法政、慶応は1人も代表を出していないことに就いて一云したい。慶応には今村というリーグで最重量を有する選手がある。彼がもう少しそのテクニックを錬磨したなら、彼はオールスター軍編入は間違いのないところであろう。彼はセンター、タックル両ポジションを相当よくこなしている。法政は現に、2人の水準以上の選手を持つている。1人は西原だが、身体がもう少し丈夫にガッシリして来なくてはクォーターバックに推すことは出来ない。他は梶谷だが、自分は彼がハーフをやることに疑を持つ。ハーフとしての彼は中村や畑と同じレベルに立つことが出来ぬことを自覚すべきである。もし彼がエンドをやつていたとしたなら、必ず本年度のオールスターの1人となることが出来たであろう。

1936年度オールスターチーム

R･HB	中村（立教）
FB	大前（明治）
L･HBH	畑　（明治）
QB	野内（早稲田）

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

R･E　　下田（早稲田）
R･TM　　畑　（明治）
R･G　　安藤（立教）
C　　安部（明治）
L･G　　黒川（明治）
L･T　　井上（早稲田）
L･E　　町田（明治）

以上のようにJ･E･ファウラー氏は1936年度オールスターズのメンバーの選抜発表とその選抜理由をくわしく書いていて、その発表によれば明治が6人、早稲田が3人、立教が2人となつている。リーグ戦成績が上位の法政から1人も選ばれずに、法政より下位の立教から2人も選抜されているのはファウラー氏が立教の先生である為に選抜したものではない。立教の2人は確かにオールスターズに選抜されるだけの実力を持つていた。特にファウラー氏も立教の中村をRHBに推すについては何等の躊躇も要しないと書いているが実際その通りであり、彼のキックの正確で距離の出ることは定評があつて50ヤードは軽く出るのである。その上、ドロップキックも正確で、現在まで日本にフットボールが移入されてから40年の間に試合中でドロップゴールを定めて得点したのは中村以外には私の記憶にはない。その上、パスも正確で距離があり40ヤード位は軽く投げていた。ただ足は余り早くはなかつたが彼の天性の柔なんな身体と又その運動神経によつて、彼のランニングのコースの良さと腰の重さによりダッキング或はスピンによつて敵のタックルをはずす上手さは独特なものを持つて居り、フットボールをやる為に生れて来たような人間であつた。従ってファウラー氏だけでなく他の誰でもが中村がオールスターズに選抜されるのは当然であると思つていたに違いない。

彼が立教でなく明治か早稲田に居たならばもつともつと活躍出来たであろうと思はれる。彼はハワイの二世でハワイのハイスクールを出て立教に入学する為に日本語修得する為に玉川学園に1年許り入学してそれから立教に入つて来たのである。過去40年のフットボール厂史中においてもその技倆の点において多くのプレイヤーが出たがその中での一・二を爭う名プレイヤーであつたことは彼を知るフットボール関係者は皆うなづくことであろう。又彼の人柄も実に良くおとなしい性格でチームメートのみならず他のチームのプレイヤーからも親しまれていたのである。

彼と並んで立教からRGに安藤が選抜された。これはファウラー氏も書いているように只一人の純国産プレイヤーとして永くフットボール界に名を留めおかなければならない人である。彼は東京市立第二中学校を卒業し立教に入学し直ちに水泳部に入つて競泳をやつていたが、その内にウォーターポロに主力を向け競泳よりウォーターポロの方が専門になり、ウォーターポロでは強力なメンバーであつたが、ケンカ早い彼は水泳部内の色々の因習にあき足らず、フットボールが誕生すると同時に水泳部をやめてフットボールに転向したのである。フットボールに転向する際にも水泳部と色々ゴタゴタがあつたようであるが、それが又彼の負けん気をかき立てたのであろうか、とに角フットボールで一流になつて見返へしてやろうと云う気を起したのか、とにかく体

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

力も有つたが、気力はものすごい気の強い人であつたので練習も猛洌にやつたのである。とにかく気の強さにおいては人後に落ちる事はなく、親友であつた浅賀等はよくケンカをしていた。浅賀は安藤と非常に仲の良い友達であつたが突然ポカポカとなぐられ、浅賀が気がついてなぐり返えそうとする時にはすでに周囲の者からとめられてしまい、俺は何でなぐられたのか見当がつかない等よくボヤイていた。その位負けん気の強い男であつた為、人一倍の練習を積みファウラー氏の選んだオールスターの中の唯一の国産選手となつたのである。

彼はこの年に彼の友人で彫刻家の加藤と云う人に依頼され昭和 11 年の夏頃から彼のフットボールのユニフォーム姿をモデルにして“安藤選手の像”と云う彫刻のモデルとなつて練習後夜加藤氏のアトリエに通つていた。その“安藤選手の像”が何かの展覧会に入賞したと云つて彼もよろこんでいた。そしてそのミニチュアの像をもらつていたが、彼は立教卒業後、日立製作所に入社したが、その年の昭和 13 年 12 月に横旦を病みあつけなく死んでしまつた。戦後リーグ戦が復活した時、聯盟に金がなく優勝杯も買うことが出来ず、又戦前の朝日、毎日両新聞社から寄贈されたトロフィーは焼けてしまつて無くて困つている時に、安藤の遺族のお母さんからそのミニチュアのブロンズを何かに使つてもらえたらと云う話があつたのでよろこんでもらつて関東聯盟のリーグ戦の優勝チームの持ち廻りのトロフィーとしたのである。それが今日の関東リーグ優勝校の“安藤杯”である。

彼は初めはセンターをやつていたが、2 年目位からガードとセンターをやり 4 年目頃からはフルバックをやると云うオールラウンドプレイヤーで確かに二吞の中に入つても二吞以上の実力を持つていたのでオールスターズにも選ばれ、又アメリカ遠征チームにも選抜されたのである。

このオールスターズに選抜されてアメリカ遠征に選抜されなかつたプレイヤーも居た。明治の大前と早稲田の野内の 2 人であつた。大前は明治でレスリングの選手もしていたのでその関係で遠征軍に参加しなかつたのかも知れないが、野内が参加しなかつたその理由は不明であつた。とにかくこのようにファウラー氏が苦心してオールスターズを選抜したその作業は偉大なもので、そして又その選抜は正確で誰が見ても充分にうなづけるものであつて何等それに異議をはさむ余地はなかつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

さて一方アメリカ遠征軍と云うよりはアメリカに勉強に行く選抜軍は前述の通り昭和11年12月3日、明治神宮に参拝し宮城を遙拝して渡米の途についた。明治神宮参拝、宮城遙拝はこの当時はオリンピック参加チームを初め、各競技共海外遠征する場合には必ず実行した一つの行事であつた。それだけ吞の中は軍国調の色彩が強くなつて来ていたのである。

渡米チームを送り出した12月9日には午後3時から横浜のYCACのグラウンドに於て、今シーズン優勝した早稲田の留守チームと当時グアム島に居たアメリカ海軍々艦ゴールドスター号の乗組員のチームとの試合が行はれた。このゴールドスター号と云う特務艦はグアム島に常駐して居り、年に一度12月に日本に寄港して買物をする艦であつた。この早稲田との試合を皮切りにゴールドスター号と東京学生リーグのどこかのチームと国際定期試合としたいとの意向があつて来年からも実施することが決定したのである。試合は早稲田が7−6で辛勝した。早稲田は7人の主力選手を渡米させている上に相手は大きなアメリカ人であり、その上リーグ戦終了後であるので練習もしていなく苦戦を強いられた。

試合終了後YCACのクラブハウスで交歓パーティーが行はれた。ビールとサンドウィッチ外で米艦からは艦長以下応援団まで入り、早稲田の選手の他YCACの関係者等も交ざつて大変賑やかであつた。水兵達もビールを飲んで大気炎を挙げて居る内に誰かが水兵にその帽子をくれないかと云ふと一斉に20〜30の白い水兵帽を投げてくれた。水兵帽は官給品であるのに気軽にくれる所など如何にもアメリカの軍隊らしく日本の軍隊ではとても考えもつかない所であつた。

12月8日の朝日新聞には郵船秩父丸から銚子無線経由で渡米途上の第一報が加納氏から次のように打電された記事が載つていた。

「米口遠征の途にある吾吾米式蹴球団を乗せた秩父丸は3日出港以来相当のゆれ方であつた。毎日午前8時からと午後3時から約1時間半行ふ練習にこの日迄に落伍してベッドへもぐりつきりとなつたもの2人揃ひも揃つて中山、有賀の早大組の両君だ。その他の聯中は贈られたキャンディーや果物をパクパク食事の合図を待ち兼ねて食堂へラッシュする元気さである。

船中のことで広い場所も得られず自由な練習は出来ないがそれでも船長や事務長の好意で船では一番広い後部甲板のベランダ前を使つてフォーメーションの練習を行つている。ピックアップのチームではあるが各ポジションにムラがないだけどんなプレイをしても運行が、円滑でやつぱり日本最優のチームだと肯かせるものがある。

一行中の布哇出身者には音楽が好きな聯中が多くハワイヤンギター、ウクレレ等で巧みなチームを作り、練習の余暇を自分等も楽しみながら一行を退屈から救つている。従来日本から外国へ遠征した各種の競技団体は大方この方面では何等の準備もなくかなり不自由を感じていたことと思ふがこの点が我が一行は豊富な材料を備えて、競技場以外の交歓に慰安に役立てている。出発に先立つて作られた遠征団歌ももう2回程伴奏つきで練習し、これならばと自信を固めている」

と云うものであつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早稲田の中山、有賀が船酔いでベッドにもぐり込んだままだと云うのも愉快であるが、たしかにハワイの二世聯中は誰もが殆どウクレレ位はひけるのでハワイの二世が5人集まればすぐハワイヤンバンドが出来てしまう位であるから、畑3兄弟を中心にしてバンドが出来て遠征軍一行だけでなく他の乗客にも慰安の役に立つたものである。

12月10日夜一行はハワイのホノルルに入港した。そしてハワイ報知新聞社の斡旋によつてハワイ大学の学生から歓迎を受けて、11日の午後にはハワイ大学で久し振りに大地をふんで思い切り練習を行い、その夜はハワイ大学のスタディアムで挙行されたカリフォルニアのサンノゼ大学対ハワイ大学の試合に招待され、本場のフットボールを勉強したのである。そして12日にはホノルルを出帆して又サンフランシスコに向つたのである。

そして12月17日サンフランシスコに着いたのである。その状況を朝日新聞は次のように報じている。

「米式蹴球選手桑港へ着く。佐藤選手紐育へ直行」と云う見出で

「わが米式蹴球選手及び庭球選手佐藤俵太郎氏が乗つた郵船秩父丸は17日予定より入港遅れ午後9時サンフランシスコへ着いた。夜中の入港ではあるが海員罷業中のこととて移民官は特別に沖合に出張旅客の便宜をはかつた。同船には庭球選手佐藤俵太郎氏のほか米式蹴球選手団一行も乗船しており何れも元気であつたが秘書の川島君は航海中在米の母親死亡の悲報に接し悲しみの中に上陸した。

一行は自動車に分乗し世界最大を誇るサンフランシスコ、オークランド間の大鉄橋を渡り更に夜のサンフランシスコ市内を見物した。18日朝はサンフランシスコの蹴球運動場において軽い練習を行ひ、正午ロサンゼルスに向ひ出発する筈」

と云うものであつた。

一行の乗つた秩父丸には庭球のデヴィカップの日本代表で当時世界的選手の佐藤俵太郎が一緒であつたのである。翌19日の朝日には「桑港羅府間秩父丸特電」がのつていた即ちサンフランシスコを18日正午出帆してロサンゼルスに向う途中で加納特派員の報告である。

「我等の米式蹴球遠征団一行はホノルル出帆後2日許りは大暴風雨に遭つて練習どころか起きてもゐられず床の中で暮していたが、その後は静かな航海で昨日桑港入港、19日午前中にはサンピドロへ入港の予定である。

ハワイではハワイ大学々生聯盟の好意により停泊の2日目の晩加州サンノゼ師範大学とハワイ大学のナイトゲームを見ることが出来た。場所がホノルルなのでサンノゼ側には応援団がなく気の毒であつたが、ハワイ大学側は片側のスタンドを全部埋め盡しリーダーは胸に青のHをつけた白いスェーター、その両側には白のスカートに軍服型の青い上衣を着けた女大学生が2人さながらレヴューのダンシングチームのやうに踊りながらタクトを取つて映画そのままの応援熱狂振りを見せた。

プレイについては昨年本社が招聘したアメリカンオールスターズが当時の最高プレイであつたことは間違ひないが、その後2シーズンを経た現在ではプレイはなほ一層迅速となり

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

シフトも同じ調子、1、2、3で動かずクイック、クイック、スローのこれも急テンポであつた。そしてゲームの早いこと鋭いことは想像以上でタイムアウトが少なからずあつたので試合が終るまで2時間15分程かかつたが、少しもゲームはだれず観てゐてもそれ程長い時間がかかつたとは思はれなかつた。

サンフランシスコではオリンピック役員で、又本聯盟の書記者であつた松本明大教授の意外な出迎えを受け一同嬉びに歓声を上げた。同氏の語るところによれば、ロサンゼルスでは日本人会も大いに力を入れて歓迎準備に大童であるとの事で、これ又一行をよろこばせた」と報じて来ている。

即ちホノルルを出帆の直後から海が荒れて、今度は早稲田の有賀中山以外にも船酔いをした者が居たが、しかし大半は元気で毎回の食事は船酔者の分まで食つてしまうような元気さであつたが、ただ甲板に出ることが出来ないので、従つて特2等の自室でゴロゴロしているか、或はロビーに行つて遊んでいるかしかすることが出来なかつた。3日目当りから天候が回復すると例の通り甲板に出てフォーメーションとコンビネーションの練習をしていたのである。

そしてサンフランシスコには夜上陸して夜のサンフランシスコを見物したのである。当時日本には思いもつかない、バレースクに入つて一行呆然としてそのストリップショーに見とれたりもしたのである。サンフランシスコでは松本瀧蔵明大教授の出向かえを受けたのは意外であつた。一行の中には明治のプレイヤーが多いので特になつかしがつたのである。松本氏は二吞であるので冬休みにアメリカに出張を兼ねて帰国していたのである。

一行は予定通り12月19日にロスアンゼルスの港サンピドロに午前中に到着したのであるが、税関の手続に手間取り上陸したのは午後3時頃になつてしまつたのである。そしてロスアンゼルス市内の「ヤマトホテル」に宿を取つたのである。ロスアンゼルスには日本人が多いのでその一吞、二吞は大変な歓迎をしてくれた。

そして試合予定は12月17日に南カリフォルニアの高校選抜と対戦し、1月3日には在留邦人との対戦と2試合が確定し、出来ればサンフランシスコでも一試合を予定されていた。上陸して2日間許り休養をして27日の試合に備えて一同張り切つて練習を開始した。それには当然日本から用意して行つたフォーメーションが主であつたが、ハワイで見たハワイ大学とサンノゼ大学の試合を参考にして新しく作られたフォーメーションも加えられていた。一同は陸の上での練習は久し振りなので大変よろこんで疲れる位に練習をして、早く船でくづしたコンディションを取戻すべく懸命であつた。

ところが第一試合の12月27日は前夜から豪雨が降つて朝になつても雨がやまず午前10時頃になつてやつと雨はやんだが、その前に試合延期と決定し、そのことをラジオで放送してしまつたので、雨は晴れたが試合は1月3日に延期されることになつて一同ガッカリした。試合延期決定がもう少し遅ければ出来たのであるが、この試合には保険金がかかつていた関係で早々に延期と決定してしまつたのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

それで1月3日迄正月を入れて練習の聯続であつた。そして練習の間にロスアンゼルスの見物を楽しんだ。或るいは土産物の買集め等相当忙しかつた。一行の殆どは二世であるので町に出ても英語には不自由しなかつた。又日本生れの国産選手も2週間も居る内には片云ながら英語を話せるようになり、特にアメリカ人の云つていることは英語で理解出来るようになつて一人で町に出掛けて行く者も多くなり、町でも一人で買物をしたり飲食店で飲み食いするのに不自由を感じなくなつて来た。

そしてその間の12月25日にはプロの試合を見学したが一行が思いかけない幸運にめぐり合つたのはローズボウルゲームの見学であつた。ローズボウルスタディアムを持つているギルモア氏の好意によつて1月1日のローズボウルゲームに招待されたのである。しかも中央線付近の良い席であつた。日本を出る時は思つても見なかつたことであつた。

この時はピッツバーグ大学とワシントン大学の試合で、一行はそのスタディアムの大きさに吃驚りしその美しさに呆然としたのである。この時の入場者数は有料87,196名と発表されている。その人の多いのにもさすが本場であると云うことを思い知らされうらやましく思つたのである。又応援の見事さ、それに全米の一、二を爭う両大学の高度の技術には只々見とれるばかりであつたが大変勉強になつたのである。試合は21対0でピッツバーグ大学が勝つたが、このローズボウルゲームを見ることが出来ただけでも渡米した目的が達せられたようなものである。

なお同じ日サンフランシスコで行はれた東西対抗戦は大接戦で第3クォーター東軍のクォーターバックのサンドバック（プリンストン大学）の決めたフィールドゴールが唯一の得点となつて3対0で東軍が勝つたのである。

1月3日は晴天であつた。ロスアンゼルス郊外にあるギルモアフィールドは小さなスタディアムではあつたが、芝生のきれいな小じんまりとしたグラウンドであつた。試合は午後2時から開始されたが、この日、日本チーム応援のためロスアンゼルス及びその近郊に住んでいる在留日本人を主として観衆は約1万人もあつた。日本でこんなに多くの観衆の見ている中で試合をしたことのない一同は第一試合と云うこともあり、又相手の力量もわからないので大いに緊張していた。

相手は南カリフォルニアのハイスクールの選抜チームである。ハイスクールとは云つても体格は大きく平均日本チームより40ポンドも多く体重のある聯中で試合開始早々はその体力に圧倒されたのと緊張のため一同上つてしまつたことで、充分に実力が発揮出来ず第一クォーターに一つ、第2クォーターに二つのタッチダウンを入れられ前半で19対0となつてしまつたが、後半は相手にも馴れ又緊張もホグして第3クォーターにハーフバックの中村健一が敵陣3ヤードから飛び込んで唯一のタッチダウンを挙げて大いに見物の日本人の声援に応えて気をはいたのである。後半は常に押し気味に試合を進めたがその他は得点出来ず遂に19対6で惜敗した。

南加州ハイスクール選抜 19 ｛ 7－0 / 12－0 / 0－6 / 0－0 ｝ 6 日本

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ロスアンゼルスでもう一試合出来得ればサンフランシスコでもう一試合の予定であつたのであるが第一試合が雨で延期になつたこととサンフランシスコで適当なチームがなかつた為、この一試合を行つただけで帰国することになつた。一行はもう一試合位はやりたかつたのであるが誠に残念ではあつたが、1月5日ロスアンゼルスサンピドロ港出帆の日本郵船竜田丸に乗り込んだのである。一同サンフランシスコやロスアンゼルスで買つたお土産をドッサリと持つて帰国の途についた。

もう一試合アメリカでやりたかつたと云う気持ちが一杯で何か忘れものでもしたような気持ちであつた。ところがその船中にホノルルからの電報でハワイのホノルルで今シーズンハイスクールの優勝校となつたルーズベルトハイスクールと試合をしないかと云う照会であつた。一同ウズウズしていた所であるので直ちにOKし、帰途ハワイに立寄るのが1月12日であるので試合期日も1月12日と決定、一行は又大いに張り切つたのである。

サンフランシスコを出帆してからしばらくは海があれて練習が出来なかつたが、それから後ハワイに着く迄は、来る時と同じように甲板でフォーメーションの練習を続けたのである。ホノルルには1月12日の午前に着いたのである。一行は船の中でユニフォームに着換え、ユニフォームのまま下船してバスでホノルルスタディアムに向かつたのである。ここでもハワイ在住の日本人を主として約4千人の観衆が集つた。宣伝期間が短かつたので見物が少ないと云うことであつたがそれでもその位の観衆が集つて来たのである。試合は日本チームは船から降りたその足で試合をする不利な条件であつたが、カリフォルニアでの経験を充分に生かしてハワイのハイスクール優勝チームであるルーズベルトハイスクールと対等以上に試合を行つたが、遂に0対0の引分けに終つた。試合終了と同時に又バスに乗り竜田丸に帰つた。竜田丸は5時30分にホノルルを出帆したのである。帰途のハワイは本当に試合をするだけの時間しかなかつた。こうして大変に忙しい試合をしてハワイを後にして一路帰国の途についたのである。

そして横浜港には予定の1月22日より一日早い1月21日午後5時入港した。多くの出向えを受けて一同元気で上陸して来たがハワイや加州に親の居る二吞はそのまま現地に残つて後日の船に乗ることになつたので、竜田丸で横浜に帰つて来たのは12名であつた。その日はそのまま皆家に帰つたが、翌日朝再び船に集合して荷物を降し税関の検査を受け、それから一同揃つて宮城を遥拝し、次いで明治神宮に参拝して解団式をしてこのアメリカ遠征の大行事は無事終了した。

この遠征にマネージヤーとして同行した朝日新聞の運動部の記者であり聯盟理事の加納克亮氏は朝日新聞運動面に2回に分けて「米蹴遠征土産」を次の通り書いている。

「競技聯盟創立第3年目にその競技発祥の国へ遠征したといふ全日本スポーツ界を通じておそらく例を見ない惠まれた東京学生米式蹴球聯盟の代表団一行は横浜出帆以来15日目の12月15日の夜桑港へ入港、初めて発祥国の香りを嗅いだのだつた。

何しろ米口側から招聘の確定電報を受けたのが出発1週間前といふあわただしさであつたが羅府の港サンピドロに着いて第一番によろこばされたのはサンピドロ在留邦人小学生が

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

300名、殆ど全部を挙げて朝から歓迎のため埠頭につめかけてゐるといふ報らせであつた。そう聞いたばかりで一行の誰も彼も早く上陸して歓迎に応えたいと願つていたのであつたが、旅具の検査に少し手間取り折悪しく中食の時間にかかつてしまつた。然し小学生の一行は午後1時半頃まで頑張つていてくれたが税関倉庫をへだてたまま遂に会えずにしまつた。真に吾々としても残念なことであつた。

羅府到着後2日間は船の疲れもあるので全然練習も休み体の恢複を計ることにしたが、ホテルは日本人経営、食事は純然たる日本食で各自は家庭でくらしてゐるのと少しも変らない、それに真冬だといふのに気候は東京の秋のような温さなので船酔も疲れも2日間の休養で殆ど恢複した試合の予定は12月27日に南加州のハイスクール選抜軍と第1回の試合を、正月の3日に在留邦人選抜軍と2回の試合が予定され出来たら桑港で1回試合を行ひたいと云う招聘者側の希望であつた。

そしてこの間にはプロフェッショナルチームの試合見学それから又正月元旦には全米最大の試合であるローズボウル試合の見学が予定されているなど我々としてはこれ以上望むところがない程の好意をよせられてゐたものであつた。ローズボウルゲームといふのは日本でも各種の競技がシーズンの総決算的にシーズンの最後を飾つて東西対抗ゲームを盛んに行つてゐたが、丁度これと趣旨を同一にした全米の東西対抗戦で毎年元旦にパサディナ市のローズボウルと呼ばれてゐるスタディアムで西部地方の最優校とこの最優校が東部のいくつかの最優校の内から自由に選定したものとの間に東西対抗の形で試合が行われるもので、今年は西部の優勝校ワシントン大学が西部の代表となり、このワシントン大学は東部のピッツバーグ大学を選定したのであつた。

我々はこの競技場の所有者であるギルモア氏の好意でフィールドの西北側45ヤード線を真下に見下す良いシートを与へられ、このゲームの人気の素晴らしさは西部地方はいはずもがな、東部、中部でもこのゲームを一度見物しないことにはフットボールフアンとして資格の軽重を問はれるといはれている程で、米口人にとつては渇仰の的となつているゲームでもある。もし我々がこの日与えられた入場券を2枚一組にして市中で買手を見附けるとしたら、原価1枚が4ドル半の入場券が何と100ドルなら羽が生えたように売れるだろうとの話であつた。

さて我々の第1回の試合は27日の予定なので我々も何とかこの日にチームをベストコンディションに持つて行こうと苦心し、幸いこれなら実力を十分発揮出来ようといふ所に漕ぎつけたが、当日は朝から雨降りで普通の場合と状態が違うので主催者側でこの試合をやむなく延期することになり、我々もその事情を察して延期に同意したのでした。

そして尚も練習を続け一週間後の日曜正月3日に南加ハイスクール選抜軍と聖林に近いギルモア競技場で待望のゲームを展開した。結果は既報の通り19対6、タッチダウンの数で云えば3対1の接戦で惜くも敗れたのであつたが、相手は高等学校程度の選手とは云えハイスクールの規則によつてシーズン以外の試合に出場した選手は、翌年選手として学校を代表出来ぬことになつてゐるので、選手の凡ては今年卒業と共に大学選手として嘱望されて、やがてはオールアメリカンともなる輝かしい将来を持つたプレイヤーばかりである。

体格からして我々の140ポンドに対して平均180ポンド、中には200ポンドを越す者もゐ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

て約40ポンドの差があり競技年月から云へば数段の差があつたのだから、この対手に対して3対1の接戰を演じ、しかも後半試合をリードし続けたのだから全然ハイスクールにも問題ではなかろうと思つてゐた観衆を驚嘆させたのは勿論のことであつたが、驚きはむしろ自分等の実力を疑問視してゐた我々自身の方が大きかつた。

加州では始め3試合の予定であつた処が種々の理由から3日の試合1回限りとなり多少物足らぬ気持ちがしないでもなかつたが・・・」

と報告している。

確かに生れて僅か3年目で海外遠征をすると云う競技団体は少ないであろう。それからこの報告にもあるようにアメリカからの正式の招聘が来たのが出発1週間前であつたので、その間のあわただしかつたことは事実であろうが、しかし選抜を内定されていた選手は遠征が出来るのかどうかで気が落着かなかつたのである。その点日本人と違つて米口人は鷹揚なものである。渡米したチームがプロの試合とローズボウルを見学出来たことは思わぬ幸運であつた。この報告でもその点にはくわしく書かれているが詳細に書かれているのはローズボウルの方でプロの試合については殆どふれていない、プロの試合は見なかつたのではなく確実に見たのであるが、その当時のプロは出来て余り年月が経過していなく、人気も少なかつたのである。

フットボールは学生のスポーツで野球はプロのスポーツでると云う気持ちがアメリカにあつたのである。事実日本チームが見たプロの試合のロスアンゼルの近くの余り大きくないスタディアムで行われた観衆も1万人位のもので、とてもローズボウルの比ではなかつた。フットボールの印象としても余りにもローズボウルの偉大さに、プロの試合の印象がかすんでしまつたのである。

1月3日の対南加州ハイスクール選抜軍との試合でアメリカのハイスクールのスポーツ選手の規制が書いてあるのが面白い。この頃は対手がハイスクールとは云え180ポンド平均で我々より40ポンドも重い。そしてその技術も大学に準ずると云ふことの前程として書かれたものであるが、もう一方にはシーズン制の確立を云つているのであると思はれる。たしかに米口は明白なシーズン制を採用して居り、そしてそれを又確実に守らせていることは立派でありそして気持のよいことである。そしてシーズン以外に競技をやつた選手は翌年はその学校の代表選手とはなれないと云う。たしかに1月3日はシーズン以外であるのでこの規程が適用されるのである。相手がはるばる日本から来たチームであつてもこの規程はまげない精神は見事である。その為に来シーズンはそのハイスクールを卒業してしまう選手のみを選抜したのであるからハイスクールの最高学年であるので体格も大きいのである。そのチームに後半は対等以上むしろ押し気味にゲームを進めたのであるから日本チームが如何に健斗したか想像出来るのである。

「帰途桑港から乗船後ハワイの申込みを受けてハワイ･インターハイの覇者ホノルルのルーズベルトハイスクールと一試合を行つた。この試合は両軍無得点に終つたが、我々としては加州で相当優秀なチームと接戰した結果、一段と自信を増してゐたので、初めからこの試合こそ勝つて帰らなくてはといふ気持が強かつた。併し桑港出帆後の2日ばかり非常に海が荒れたので船酔のため気は張り切つてゐたのだが何としても足がフラフラで思ふように走

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

れず掴み得るチャンスを逃したことも数回に及んで遂に引分けの勝負に終つたのであつた。
併したら今回の遠征の目的は初めから試合に勝つことを第一目標として行つたのではなく米蹴発祥の地へ行つて、実際にこの競技の精神並に技術及び施設環境等を凡ゆる角度から視察し体験して誤りなくこの競技を日本に移植しようといふのであつたのだから・・・

米本土以外で本土と同様な発達をとげ高い水準を維持してゐるハワイで試合の経験を得たことも大きな収穫であつた。さて今回の遠征から我々の使命である競技についての収穫は何があつたかといふと2回の試合によつて選手が得た体験が最も大きなもので、この体験によると今後我国においてより一層体格の良い者を訓練して行つたならば多少平均体重に差があらうとも向ふの大学チームと十分に対抗し得るといふ自信を得たことである。
又戦術については我々軽量級のチームとして進むべき道は、初めから体重差で不利なラインつまりプレイヤーの密集地帯に球を進めるといふことを出来るだけ避けて球の進路をオープンに求めなくてはならない。最近米口の戦術の推移を見ても昭和10年本社が全米の名選手をよつた全米オールスターズ蹴球チームを日本へ招聘した当時は、この代表チームの間においてもスクリメージラインに突撃して球を3ヤード、5ヤードと漸進せしめるいわゆるジョーンズ戦法といふものがプレイの大部分を占めてゐたが、その後米口では戦術が著しく変化を来たし、球は極端にオープンに廻され複雑なフォワードパスなどが発達して1回のプレイで10ヤード或いは数十ヤードの前進を得るプレイが隆盛となつて来た。
殊に新しい傾向としてラグビーのように球の保持者より後方にゐる味方にパスする方法が盛んに用ひられ効果を上げてゐる。我々軽量チームとしては重量級チームと対戦する場合の必然的な方法としてオープンプレイを行うといふ結論に達したのであり、米口では従来の戦法にあきたらず変化を求めてここに致つたのであるが期せずして我々がラグビー蹴球から取入れ又独創的に考案したオープンプレイが現在米口における尖端的戦法と合致してゐたといふのは面白い廻り合わせであつた。
併しながらこのような戦術的歩調の偶然の一致も米口チームの行ふオープンプレイといふのは敵味方同様の体格をもつチーム間で行はれるものであつて我々として国際試合のこの戦術を取入れるやうな場合には尚一層研究して我々の行い得るものとしなくてはならない。この点今回の遠征中最も豊富な参考資料を提供してくれたのはハワイ大学チームであつた。一行は12月12日夜ハワイ大学と本国より遠征して来てゐたサンノゼ大学との夜間試合を見学することが出来た。ハワイ大学は今シーズンこそ余り香ばしい成績を挙げなかつたが過去数年間は米本土より多数のチームを迎へてこれを破り、数年前には西部代表チームを迎へてこれを撃破した輝かしい歴史を持つてゐるチームである。チーム全部が軽量である、中でも俊足の闘将クアルककककイ君といふハワイ人のハーフバックは身長5尺4寸程で目立つて小造りだが、彼の快速で急角度の走路転換の技術は戦前から観衆期待の中心であつた。彼はこの試合でも全ゲームを通じて一回の交代もなく戦ひ通し球を運ぶ任務を過重と思はれる位負はされゐた。
このクアルककककイのチーム、ハワイ大の戦法は軽量チームが重量チームに対抗するためには斯くの如く進むとりほか道がなからうと思はれる程実に我等の得た結論をその儘もつと

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

もつと複雑化して実地してゐた。攻撃主体は球を持つたバックを3名或はラインズメンを加へた4名で囲むやうにして掩護してオープンへ走り出る。そして奇襲的にラインを突く場合には球がプレイに移された直後味方のラインズメンが球の通路を作り僅かな時間ではあるが持ち耐えてゐる間にその通路へ突進する方法と、バックメンがスクリメージ背後で誰が球の保持者かをだますスピンナー等を行ふ場合があつたが、後者の場合はラインズメンがバックフィールドで時間をとり、それから前進して来るまで持ちこたえられぬ場合が多いので殆ど成功したのを見なかつた。

この結果に徴してみても軽量チームがラインを突く場合には味方のラインズメンが割つて作つた通路をその瞬間通過するやうな突進法でなくては成功率が低いといふことを教えられた。このやうに重量に差のあるチーム間の試合を見ていずれが優つてゐるかを見分けることはさして困難なことではないが、今までその比較を実際について体験し又は観察する機会のなかつた我々にとつては得がたい研究材料となつたのだつた。

今回の我々の遠征は見たもの体験したものの総て参考とならぬものはなかつたのであつたが、ハワイで試合を行い、又ハワイ大学に対する認識を深めたことは、ハワイが米式蹴球の正統派を汲む我国にもつとも近い土地であり、将来我国と相互にチームを交換し我国米式蹴球界の発展を促進するためには米本土より遥かに負担が軽いので、この発見こそは将来日本に於ける米式蹴球発達の過程に偉大な役割を演ずることになるのではないかと思はれる」

ここではハワイの試合について書いているルーズヴェルトハイスクールとの試合はサンフランシスコを出帆後の竜田丸の船中で決定したものであつて決してスケヂュールに入つていたものではなかつたが、南カリフォルニアのハイスクール選抜軍と試合をやり自信を得た聯中にはアメリカの一試合だけでは物足りずハワイの試合申込みに直ちにO.Kしたのであるが、サンフランシスコ出港後2日許り海があれたため船酔と練習も、不充分であつたので勝てるチャンスを逃したと云うので本当であろう。船でユニフォームを着けて直ちにグラウンドに向ふと云うのは前代未聞のことであつたであろう。

そしてこの遠征2試合を通じて日米の体格の差をまざまざと見せつけられ、この差がもう少し少なければ日本人のファイトと熱心さを以つてすれば何とか焚対抗出来ると感じたのである。それは軽量チームが重量チームに対抗するには重量チームと同じ事をやつていたのでは勝てない、勝つ為にはボールを早くオープンに廻わしインターフェアランスを沢山つけてランナーを守らせしかもその上にラグビー式のラトラルパスを多く使用する等早いプレーで重量陣をかく乱する戦法が最良であると云うことは遠征チームが最初に見学したハワイ大学とサンノゼ大学の試合を見てつくづく感じたのであつた。又アサヒスポーツ昭和12年2月第2号には同じく加納氏が執筆して次のように書いている。

「アメリカンフットボールほど、国際的に均衡のとれてゐない競技は少ないだろう。何しろアメリカでは野球より何より国民的スポーツとして人気のある点では断然他のスポーツを抜いてゐる。けれどもこのアメリカ内で最大の人気を有するアメリカンフットボールも、一歩国外に出ると何のことはない、競技方法すら知つてゐるものが無い状態である。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

これには大きな障害がある、と云ふのはアメリカンフットボールはアメリカから映画を輸入興業されてゐる国では、ニュース映画または劇中にもしばしばある競技やこれを主題としたもの等も現はれとにかくボディーコンタクトに終始するゲームだといふ観点を植付け、そしてアメリカでは1ヶ年にこの競技から何十人の死者が出ると云つたやうなことが耳に這入つて来るので、第一に非常に危険なゲームだと畏怖先入感がある。その上に用具が相当複雑だし高価でもあるので、財政的にもなかなか誕生が難しいといふ状態で、国際的の発展が遅々として進まぬのであろう。

日本とアメリカンフットボールとの関係は、東京学生米式蹴球聯盟が、昭和9年立教大学のポール･ラッシュ教授の唱導によつてリーグが創設され、その翌年には朝日新聞社の招聘ににによつて時のアメリカ学生球界を代表するアメリカンオールスターズの渡日を見、一躍アメリカに於ける最高標準の技術並びに精神に触れることが出来たのだつた。それから2シーズンを終へた去る12月3日には、アメリカンオールスターズの監督として来朝したアルバート・マロニー氏の斡旋によつて、日本のスポーツ界に例を見ない急ピッチで海外遠征を実現したのである。

この遠征は成績の如何を問わずアメリカにとつても外国チームの遠征を向えた最初のものであつて、アメリカ蹴球界の国際的発展の第1頁を飾る快挙でもあつたのだつた。先年来朝したアメリカンオールスターズもそうであつたが、どうもアメリカンフットボールの遠征には雨がつきものらしく、我々も雨の珍らしいロサンゼルスで相当雨に悩まされた。

それでも、第一試合を予定されてゐた12月27日までは大した降りもなく、当日の蹴球場に当てられてゐたギルモアフィールドで練習を行ひ、着々船旅の異状もとれて暖い気候にも慣れて来たのだつたが、この暖かさといふのが想像以上の暖かさで、膝に入れてゐるファイバー製のプロテクターが水気を吸つて丸味がなくなり、パンツの中へ菓子折の四角なフタでも入れてゐるように、ピンと平らな板になつてしまつたのには驚いた。

そして試合の前日には遠征のハンディキャップを除けば最上のコンディションとも云へる状態になつたが、惜しいことには27日は朝から降り続いて何時晴れるとも知れなかつた。それでも我々としては試合があるつもりで準備していると、朝の10時頃になつて主催者側から試合を中止するといふ報せが来た。一同は張り切つてゐたことであり、ちょつと落胆したのだつたが、大きな団体を招聘して全責任をもつてゐる主催者側の特別な事情を察して試合延期に同意したのだつた。

この事情といふのはロサンゼルスでも欧米諸国で実地されてゐるレイン･インシュアランスといふ面白い保険があつて、試合の開始1時間前から試合終了予定時間内に1ミリメートルの雨が降れば、何程かの率によつて掛けた保険金がとれる。そこで主催者側では当日の降雨を考へ、この保険を契約して降雨中の試合をやらずとも、この保険金で負担を補ひ、遠征国の優待を計ろうとして中止したのだつた。ところが朝からの降雨はこの規程時間中だけ一粒も降らず、主催者側のは何と云つて良いやら解らない程気の毒な思いをした。

一週間繰り延ばされた南加ハイスクール選抜軍との対戦は正月3日、ギルモア競技場で1万2千余の観衆を集め華々しく挙行された。若し27日に第一回戦が済んでゐたならば、この日は南加の邦人チームと第二回目の試合を挙行する予定だつたが・・・、その日は朝から

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

晴れ。東京でいへば「颯爽とハイキング」と鉄道省のポスターが眼につく10月中頃の陽気、何しろ試合中選手か使つた水の量がこの競技場のレコードだつたといふだけでも、その暖かさが想像されませう。

試合は、対手が重量もあり、平均して5尺8寸程の大柄なので前半は何となく我軍は圧され気味であつたが、前半を終る頃から対手の実力が殆ど知れて来たので、後半は気分にゆとりが出来て積極的な攻撃を開始してみると、案外脆いところがあるのでますます調子が出てダウンを3回4回と重ねたこともあつた。試合は日本軍がリードして行つたが、対手は40名もの選手を揃えてゐるのに対し、我々は負傷者も相当出て、後半中頃には僅かに15名にまつてしまひ、出場選手に休養を与えることが出来ず、大事なところで走力が低下し遂に得点機を掴めず、対手の反則でゴール線前のスクリメージを中村ラインに突撃して1タッチダウンを還したが、19対6、タッチダウンの数で3対1の接戦で敗れた。

試合としてはこの試合と帰途ホノルルで行つた試合の2つに予定が変更され、2試合が減じられた訳であるが、その他に我々は往路ホノルルでサンノゼ師範大学対ハワイ大学の試合を、またロスアンゼルスでは職業選手の試合とアメリカ人でもめつたに見られぬ全米東西対抗戦を、ギルモア氏の好意により見学出来たことは何よりの収穫であり、一生の想い出となる見学であつた。

この遠征の最大の目的であつた競技についての収穫は・・・先づ我がチームは体格の相異より受けるハンディキャップをいかにして抹殺するか、それには独創的なプレイを案出しなくては対抗出来ない。そこで最も体重の差より受ける打撃の多いスクリメージラインを衝くことを避け、フォワードパスおよびオープンへ球を運ぶプレイを攻撃の主体として作戦を樹てて行つたのである。

ところがハワイ上陸第一歩に見学したハワイ大学対サンノゼ大学の試合で軽量のハワイ大学チームの戦術こそ我々が苦心研究してゐたものを実際に見せてくれたもので、遠征中最大の見学であり、将来我々が範として進むべき指針を与へてくれたものであつた。ハワイ大学は如何に戦つたかといふと、矢張りオープンプレイを主とし、フォワードパスを送るにも捕球する者が大きな対手に邪魔されないやう、出来るだけマークを外すために、例へばパッサーが恰も左オープンへ突進するかに見せてグッと後退し、対手をその方に引付けてから、その前方へ置き忘れられたやうに見えてゐる味方に、突如パスを送るなど常に出来るだけ体格の相異より来るハンディキャップを補ふために、慎重な戦術がめぐらされてゐた。名はアメリカ遠征だつたが、我々はハワイで実に貴重な経験を得たのであつた」

以上のように書いてゐるが、確にフットボール位おかしな競技はないアメリカでは非常に盛んな競技ではあるが、一歩國外に出るとフットボールをやつている国は実に少い。それはこの当時から40年を経過した現在でも同じことが云える。サッカーのように世界中何処に行つても盛んな競技、或は新興スポーツとして共産圏から未開発国を中心にして盛んになつたヴァレーボール等世界中何処でも盛んに行はれているが、あれだけアメリカ人の血をわかせているフットボールは僅かアメリカを中心に僅かな国しか行つていない。

これには用具の問題、危険度の問題等色々の点があるであろうが、それよりもアメリカ人自身

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

にその気がないと云ふことではなかろうか、英国人のように植民地を拡張して行く国民には自国の文化を植民地に押付けるように自国のスポーツを最高のものとして積極的に他国に押付ける気持がアメリカ人には無いのであろう。もしやりたかつたら勝手におやりなさい、多少の援助ならしますよ、よそ様のことより自分が楽しんでいられればそれで充分ですと云う態度である。

この遠征もアメリカとしては他国のフットボールチームを本国に迎えたのはアメリカ建国以来の出来事ではなかつただろうか。それも先年来日したオールスター—ズのマロニー監督の一方ならぬ努力によつたものであつた。この遠征によつて日本におけるフットボールの技術は一段と向上したのである。そして小型のチームが大型のチームに対戦する戦法は出発前から色々と考えていたことであるが、それが初めてハワイでハワイ大学とサンノゼ大学の試合を見学して、それが小型チームのハワイ大学で実証されているのを見て一同気を強くしたものであつた。

ハワイでハワイ大学とサンノゼ大学の試合見学は往路でもあり又予想外の見学でもあつたし更に初めて見るビッグゲームであつたので一同の感激は一層深いものがあつた。そしてローズボウルゲームはその規模の優大さとはなやかさに気をとられてしまつて呆然としたと云ふのが本当であろう。それにしてもプロフットボールのゲームも見たのだが、その点にはどの報告も殆どふれていないのが面白い。それには吾々の当面の対手は学生であり又吾々も学生であると云ふこともあつたであろうが、それよりもその当時は野球はプロのものであつてフットボールは学生のゲームである云ふ思想がアメリカでもあつて今日のようにプロが盛んでなかつた為、入場者も少なく遠征軍も余り興味を示さなかつたのであろう。

とのかくこの遠征は日本のフットボール界に大きな功績をもたらしたのである。それは東京学生聯盟加盟5大学から代表選手が参加したので、帰国後各チームに帰り新しい技術を各自のチームに植つけたために、その年のリーグ戦は目ざましい進歩の跡が各チーム共見えた。

2月5日夕方6時30分から朝日新聞社講堂で遠征軍の帰朝報告会が行はれた。この会には駐日米口大使クルー大使も出席し「日本人のスポーツに対する熱意をたたえ日本のフットボールの発達によつて益々日米青年の親善が蜜になることを願ふ」と云う挨拶があつた後、加納氏の報告があり、パラマウントニューズの上映又ハワイ二世によるハワイアンバンドの演奏等賑やかであつた。参加したのは東京学生聯盟参加校の選手役員等約100人であつた。

これより先に立教大学は1月24日関西遠征をして関西大学と甲子園南運動場で試合をした。実はこの試合の決定したのは前年11月中頃であつてリーグ戦終了後12月の下旬に挙行する予定であつたが、アメリカ遠征があり立教からもスタープレイヤーの安藤と中村が参加するので延期して、アメリカ遠征軍の帰朝後と云うことになり、一行が1月22日帰国するので24日となつたのである。これにも又加納氏に頼んで朝日新聞社から遠征費を補助してもらつたのである。

その当時関西には関西大学しかチームがなく、関大は対手を東京に求めるより他になく東京からもチームがよく関西に行つていたのである。関西大学にチームが出来たのは昭和10年1月でありこの点では慶応、法政と同様の時期であつたが、設立の意図は東京チームが出来たことに刺激されて出来たのではなく全く独自の意図によつて設立されたものらしい。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

即ち関大のOB関西スポーツ界の大御所の松葉徳三郎氏が当時大阪Y.M.C.Aの体育主事であつたが昭和7年にロスアンゼルスで行われたオリンピックに行き南加大学とスタンフォード大学の体育施設を見学した時、フットボールを知り同年11月帰国し大阪YMCAに居た米口スプリングフィールド大学を卒業した竹内伝一氏にルールを教はり、神戸の外人クラブのKRACに行きそこでハワイ大学でフットボールの選手をしたことのあるハワイ二世のレイノ上島氏に紹介され、彼に基本的なフォーメーションを教はつた。

そしてフットボールに益々興味を持ち何とか日本にもチームを作りたいと思つていた時、東京にチームが出来たのを知り母校の関西大学に昭和9年秋にフットボール部を創設するべく部員募集した。この時約30名の学生が応募し、コーチに竹内伝一、レイノ上島、ハワイ二世のポール加納、森本が当つた。

そして昭和10年1月13日に甲子園南運動場で東京学生米式蹴球聯盟の早稲田大学と明治大学が朝日新聞の後援で関西における日本で最初の紹介試合を挙行した。この試合は13対0で明治が勝つた。この試合に刺激され昭和10年1月29日に大阪YMCAで関西大学フットボール部の発会式を挙行し、ここに関西で初めてフットボールのチームが誕生したのである。

そして昭和12年に関西外人クラブKRACにチームが出来るまでは2年間関西唯一のチームであり、試合対手は東京から遠征するチームか或は東京まで遠征するより方なかつたのである。そして昭和15年に同志社大学にチームが創立され、昭和16年に関西学院大学にチームが出来てここに関西三大学リーグが誕生したのであるが、関西大学は昭和12年頃は唯一の関西チームであつた。この頃迄関西大学は昭和10年12月1日に法政43対0関大。昭和10年12月15日に慶応23対0関大。昭和11年5月30日に東京芝公園で法政39対0関大と云う成績を残して居り、未だ1点の得点をもしていなく、東京とは実力の差があるのもこれも止むを得ないことであつた。その為に試合の対手がほしくて仕方がなかつたのである。

これも最初は12月初旬の予定であつたが、アメリカ遠征の為に1月末まで延期されたのである。立教としても最初の遠征であり全員参加したいので延期したものであつた。アメリカ遠征の安藤、中村は1月21日夕刻横浜に入港し、翌22日に朝日新聞社で解散式を行ひチームに戻つて来た。そしてその翌日の1月23日午前9時東京駅発のつばめで関西に向かつた。アメリカ遠征の安藤、中村は長途の疲れも見せず元気に参加したのである。なおこの関西遠征には3月に卒業する選手は参加しなかつた。又練習も全員揃つての練習は出来ず残留者のみで軽いシグナルプラクティスを3日位たつただけであつたが秋のシーズン中の練習の引続きであるのでタイミングやコンビネーションには不自由なかつた。又フォーメーションは秋のシーズンに使つたのをそのまま使用することにしたのである。

一同揃つて修学旅行気分で大阪駅に夕方5時着、直ちに出向えの関大マネージヤー他に逢い、阪神電車に乗り甲子園に行つた。そして甲子園ホテルに入り、入浴、夕食とすませ夕食後ミーテイングを行つた。このミーテイングは主将の安藤が主席であつた。前主将の太田は3月卒業なので次期主将は11月中頃のミーテイングで安藤と決定していたものである。一応明日の試合に対する作戦等を打合せその後は主として遠征の土産話が主であつた。この甲子園ホテルは仲々立派なホテルであり又食事に牛肉を沢山出してくれた。さすが神戸牛の味はまた格別であつた。

又阪神電鉄は吾々の為に乗車券を沢山くれたのである。明日の試合は吾々の後にラグビーの試

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

合があるとかでキックオフは 11 時 30 分と云うことであつた。それで一同明日に備えて早く床についた。翌日は曇り空であつたが午前 7 時に起床し朝食後甲子園南運動場で軽い練習をしている内に天気は良くなつて快晴となつた。それで一旦ホテルに帰り軽い昼食をして午前 11 時頃ユニホームで試合場の甲子園南運動場に入場した。試合開始 11 時 30 分と云う中途半端な時間でもあり、又関西にはなじみのうすいフットボールである為見物は少なかつたが、グラウンド自体は中々立派なもので、一寸東京には少い位であつた。結果は昭和 12 年 1 月 24 日午前 11 時 35 分関大キックオフ、上島（主）、斎藤（副）、加藤（計）、森本（線）の 4 審判で

立教 32 { 0－0 / 0－0 / 12－0 / 14－0 } 0 関大

田辺	LE	吉田
鈴江	LT	藤本
安藤	LG	丹羽
服部	C	秋元
栄	RG	北村
小黒	RT	岡本
亀井	RE	中川
鈴木	QB	岩井
中村	LH	難波
細田	RH	岡村
浅賀	FB	坪井

交代（立教）：稲熊、池上、竹内、尹、岸
（関大）：橘谷、森田、幸、山内、館野、佐伯、滝山

この試合で立教は初めて 6 人防禦ラインを採用した。それまでは防禦についてもラインは 7 人であつたが、アメリカ遠征の影響でセンターを下げてバックアップの位置におきラインを 6 人にする防禦法を練習を兼ねてこの試合から採用したのである。その結果成績は仲々上出来であつた。

立教は練習不足の為前半は仲々思うように試合は進行しなかつたが、5 分に関大 15 ヤードから中村の右オフタックルで最初の得点を挙げた。その後の立教のキックオフの球を関大は自陣 15 ヤード位の所で円陣を作つて動かないのには一寸面喰つた。立教タックラーが近付くとその円陣は四方にフェイクして散つて行く古いフォーメーションを使つたがそれは好果を示さなかつた。

後半になりやつと立教はまとまりが出て実力を発揮し、関大 5 ヤードから中村右エンドランでタッチダウン、6 分にも関大 15 ヤードから中村右エンドランでタッチダウン、第 4 クォーターには関大 15 ヤードから中村左エンドランでタッチダウン、12 分関大 15 ヤードより安藤（FB にな

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

つていた）中央突破で一気にタッチダウンを挙げ、結局 32 対 0 の大差で立教が勝つた。立教はシーズン以後殆ど練習はしていなかつたので、前半は調子が出なかつたが後半になつて調子を取り戻してからは楽な試合であつた。試合終了後ホテルに帰り入浴後早目に夕食をすませて全員散々伍々に阪神電車の乗車券を持つて四散し大阪の夜を楽しみに大阪市内に出掛けた。門限は 11 時であつた。皆目抜けの場所に出かけて大阪の夜を楽しんで翌朝の汽車で大阪を出発帰京した。これが立教フットボール部の最初の遠征であつた。

なお前年 12 月初めの新聞に次の様な面白い記事が出ていた。その真疑は不明であるが新聞に出ているので全々ウソでもあるまい。

「日本から持ち帰つたペルリ縁りの勝利の鐘米口海軍兵学校の祝勝式に鳴る」と云う見出しで

「アメリカ蹴球界の人気試合たる陸海軍対抗試合ーウェストポイントの陸軍士官学校対アナポリスの海軍兵学校の蹴球戦は今シーズン（11 月 27 日）フィラデルフィアで行はれ 10 万 2 千と云記録的な大観衆の下に非常な接戦を演じたが、兵学校の鮮かなフォワードパスが決つて 27 対 0 で海軍に凱歌が挙がつた。

ところでこの兵学校には陸海軍対抗戦創始以来極めて意味深重な習慣があつて、未だに厳かに行はれてゐる。それはアーミーを破つてウェストポイントに帰つて来るとその昔ペルリ提督が日本を訪れた際琉球から持ち帰つたといふ由緒の鐘をキャプテンが得点の数だけ打ち鳴らして勝利を祝福するといふ凱旋式であつて、「日本の鐘」をつくところがわれわれにもウレしい。この鐘は兵学校々庭の一番神聖なところにそなえてあつて陸軍との蹴球の対抗戦に勝つたときだけしか鳴らさない敗北を知らぬ勝利の鐘だ。そしてその嬲々たるしらべには兵学校数千の若人の歡喜の血が流れてゐるようといふこの上なくおめでたい鐘なのである。

ところで5千の海兵がこの鐘の前で盛大な祝勝式を行つたのであるがフットボールチームの主将モレル君が高らかに七度この勝利の鐘を打ち鳴らす栄誉をになつた。そして最後の余韻が消えるとこの鐘は次の対抗戦まで黙々として海の児らが勝つて帰るのを待つてゐるのである」

と云ふ小記事である。日本で余り盛んでないフットボールに日本のお寺の鐘がアメリカで鳴らされていたと云ふことは全く面白いことである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

さて以上で昭和11年度のフットボール界は幕を閉じてやがて4月新入部員を加えて行ふ春の練習期間迄は休みとなつた。

この年に東京学生米式蹴球聯盟各大学の卒業者は、

早稲田では有賀、川島、兼安、井上、永井、島袋、柏原、小林の8名、

明治では畑（稔）、畑（進）、阿部、仁井、の4名、

立教では太田、相京、中田、井上、の4名、

法政は西原、梶谷、鈴鹿、藤間、浜本、名護、森、小泉、宮武の9名、

慶応は木村

とフットボール界初めて多数の卒業生を送り出し各チーム共その穴埋めを新入部員の獲得で補うため、新入部員募集に懸命で入試試験をねらつて残留部員を引つぱりに学校に出かけたものであつた。

そして此の年新たに立教のフットボールに入部した者は陸上競技部から学部2年生の栗林それに早稲田の専門部卒業で同大学のフットボールのセンターを務めていた島袋、新入生では金子、松田、内藤、鄭、の6人であつた。各大学とも卒業生を送り出し新入部員を加えて4月末日から5月の末日にかけ春の練習に入つた。そしてその終りには相手を選んでスクリメージ（練習試合）を行つた。

この5月中頃の新聞に次のような記事がある。

「眞紅な上衣に、眞白なズボン憂鬱を吹き飛ばさうョ」と云う見出で、

「アメリカのカレッジ生活の華と記はれる学生バンドの王者ーカリフォルニア州パサデナ市の有名なパサデナ・ジュニア・カレッジの男女学生200名から編成された「トーナメント・ローゼス・バンド」が今夏、休暇を利用して日本を訪問、観光を兼ねてアメリカ独特のカレッジアン・スピリットを紹介したい、と今回堀ロスアンゼルス領事を通じて同学長ジョン・Wハープソン氏から外務省に正式に申込んで来た。

此のパサデナの学生バンドは全米数千万の若人達の胸を躍らせる大蹴球戦「ローズ・ボウル」の東西対抗試合に常に西部の各大学を代表して応援演奏を行ふのみならず、南部カリフォルニアの諸都市のあらゆる市民行進には常にパレード随一の人気者として先頭をリード、はち切れさうな明朗と感激の青春風景を描出してゐる。

ハープソン学長の手紙によると「アメリカのカレッジ精神と意気のため」この200人の学生バンドをつくつたといはれ眞紅の上衣に純白のズボンのユニフォームで堂々と市中や競技場を大演奏行進するさうだ。演奏プログラムは音楽パレード、ヴォードヴィル、カレッジ的余興とすこぶる多様で指揮者簾ストング氏の手紙には音楽は吞界的な云葉です。

この非常に有名なアメリカ学生のバンドは日本のために大きな貢献をするでせう。と熱情を披訂してゐる。日本には一ヶ月滞在の予定で外務省でも大歓迎で実現方を斡旋する筈」

と写真入の記事が大きく掲載された。

ローズボウルゲームの際デモンストレーションや応援のバンドと云うので吾々も映画でよく見るので非常に期待していたのであるがその後は何の音沙汰もなかつた。結極は来日しなかつた

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

のではなかろうか。このバンドがその夏来ると云うので楽しみにしていたのであるがその後は新聞にも何も出なかつたし、又そのバンドが来日したと云ふ噂も聞かなかつたが残念であつた。

この年の4月に聯盟から各大学に60円の金銭が授与された。この金はアメリカ遠征チームが帰途ハワイでルーズヴェルト･ハイスクールと試合した時の入場料の内、総ての計費を差引いたものが聯盟に送られて来たものであつて、その内から聯盟の諸経費を差引いた残りを加盟5大学に均等に分配したものであつた。各大学共思はぬ収入があつて大喜びであつた。

僅か60円とは云え立教大学の体育会から部外団体であるフットボール部に来る年間予算は30円であつたのに比すれば、この60円は如何に重要であつたか想像がつくと思はれる。そしてこの金は殆ど玉沢運動具店の借金返済に当てられたのは各大学とも同じであつた。それで当時としてはハワイ遠征は大変皆が期待し、單独のチームでもチャンスがあつたらハワイに行こうと意気込んだものであつた。即ち20名のチームで貨客船に乗つて行けば全部で費用は1,000円もあれば足りるのである。1人千円ではない、1チームで千円なのである。そして現地の滞在費と帰路の船賃は現地で一試合すれば充分に出る。そして更にもう一試合もすれば帰りに土産の金銭をもつて帰ることが出来る計算になるのである。これは実現不可能ではないが又一方では予定通り収入のない場合の危険もあつた。事実明治のバスケットボール部がそれでハワイで立往生して部員がアルバイトして帰りの船賃を工面したこともあるが、バスケットボールとフットボールでは多少違う面もあるので色々と各チーム共研究したのであるが、日支事変が起つてあらゆる海外遠征は非常に困難になりどのチームも実現しなかつた。

そしてこの年、即ち昭和12年7月には北支那北京郊外の露溝橋において駐支日本軍と中国軍と交戰状態に突入し、いわゆる第二次支那事変がぼつ発した。この北京郊外の日中両軍の交戰状況は直ちに上海に飛火し、上海陸戰隊と中国軍とが上海市街で交戰し戰火は一気に全中国に拡大されて行つた。この為に国内においては予備役兵に召集がかかり聯日出征兵を送る歌が町中にひびいていた。吾々のフットボールの最初の実施者であつた西島威も学業半ばでこの夏に応召して中国大陸に向つた。このように吾状が騒がしくなつている中で吾々は9月からの合宿の準備に忙殺されていた。昭和12年8月発行の「立教大学米式蹴球部夏期部報第6号」にはポール･ラッシュ教授が次のような一文を寄せている。

「今将に催されんとする立教大学米式蹴球部の夏期合宿に参加される部員諸君。

諸君は今日尊い生命を賭して北支及び中支で邦家日本の為に正義の御旗の下で、戰つておられる諸君の先輩兄、親類同胞の第二のものとして、次に来るべき国家の中堅者となるために、今度の合宿に参加して、第一に精神訓練そして肉体の鍛錬をせねばなりません。

参加前軽井沢に出掛けぬ前に既に充分の覚悟をしていかねばなりません。遊びに行くのではないのです。又他の運動部が合宿をするから諸君も合宿するのではないのです。どうか根本的の精神をしつかりと握んで行つて下さい。合宿ではいろいろとつらい、いやな事も沢山あるでしょう。面白くないこともあるでしょう。でもどうか大きな眼、大きなしつかりとした腹をして大局をつかみ進んで下さい。そして合宿が終るとき反省して合宿に参加する前にした覚悟の実現に失敗ないように努力して下さい。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

私は9月9日の船で米口の大会に参加の為一時留守にします。然しどうか憶えていて下さい。私の心は何時でも諸君の上にあることを。合宿の成功、今シーズンの制覇を祈つて止みません」

と云うものである。

ポール･ラッシュ教授としては非常に珍しい文章である。平和愛好家で宗教家である同教授としては珍しいのである。それはもう日支事変が始ると同時に日本は非常事態に入つて、国内全体が戦事態勢に進行して行つているのである。軍国日本の態勢は固りつつあつたのである。このような時期に同教授としてはアメリカの国技であるフットボールが今後どのような位置におかれるかを予測し、これを少しでも好転させる為の方法は何かと云ふことを心配していたのではないだろうか。このような非常事態の内に吾々は第四年目のシーズンを迎えることになつたのである。

7月初旬夏休みになると部員は各自遊びに海や山或は故郷に帰る者もいて学校は静かになつた。そして9月1日からの合宿に備えて各自で体力の基礎をつけるべく適当なトレーニングを続けていた。立教の合宿は今年も又軽井沢の星野温泉と決つた。もう星野温泉にも3回目の合宿とあつて皆充分に気心も知れて我が家のような気がしていたのである。然し一方中支の上海では激戦が繰り返され巷には出征兵士を送る歌があふれていた。

8月31日の夕方一同揃つて星野温泉の合宿に入つた。それから2週間は例年の通り浅間山を仰ぎ見ながら練習に汗を流した。この合宿の間の一夜の慰安日の行事はもう定例になつてしまつて星野温泉の人達も楽しみにして、我々に催促する位の人気であつた。

例に依つて各部屋毎に趣興をこらしてかくし芸を披露するのである。宿の人或は宿泊のお客さん迄が大広間に集つて来て見物するようになつてしまつた。一方グラウンドの方は年々良好になつて来たがそれでもまだ火山櫟が下から出て来て部員一同すり傷がたえなかつた。合宿を終了して午後の列車で帰京する途中蕨の駅の近くに「シャンクレール」と云うダンスホールがあつたが、その看板が列車から見えると一同大喜びの歓声を挙げて上野に着き解散した。

秋の練習は9月中旬から又石神井公園の清水組のグラウンドで聯日行われた。そして9月20日頃には秋のリーグ戦のスケヂュールが発表された。10月2日：明治対慶応、9日：早大対立教、16日：法政対慶応、23日：明治対立教、30日：早大対法政で、これまでは多摩川のオリンピア球場。11月5日：立教対慶応、12日：明治対法政、19日：早大対慶応、26日：立教対法政、12月1日：明治対早大で、明治神宮外苑競技場と定まつた。

この発表と前後して東京学生米式蹴球聯盟の空席となつていた会長にアサノセメント株式会社の取締役浅野良三氏が就任して、ここに聯盟としての立派な体型がととのつたのである。この頃の新聞に次のような記事があつた。

「米蹴リーグ、新星に充実、来月2日開幕」と云う見出しで

「東京学生米式蹴球リーグ戦は10月2日から本年度のシリーズを展開するが例によつて

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早、明の王座爭ひは動かぬところと見られながらも慶、法、立の3チームが充実して来たので俄かに予断出来ぬ情勢である。各校とも多数の新人を入れて陣容は何れも豊富だが、その中で明治のレフトハーフとしてデビューする国重は今春フレズノから帰省した二吞で加州の相撲と400ハードルの選手権を持つ優秀選手で体重20貫馬力と俊足に米口仕込みの腕前は今シーズン各チームの脅威と見られてゐる」

と云う記事で新興スポーツとして4年目を迎えたフットボールの記事に新人が入つたと書いてあるのは当時如何にフットボールの将来の発展に期待されていたかがわかるものであろう。

又10月1日の朝日新聞の運動欄には加納氏が5段抜きで大きなリーグ戦の予想を次のように書いている。

「愈々けふから米式蹴球戦早明の堅塁に突撃、立法慶の躍進目覚し」の見出しで

「東京学生米式蹴球聯盟昭和12年度リーグ戦は愈々2日慶明の試合をもつて開幕のはこびとなつたが、昨シーズン終了後、ロサンゼルスの有力者より招聘を受け､加盟5大学より精鋭を選つて遠征し技術並びに精神を練磨するのに絶好の機会を得た。

メンバーは昨シーズンリーグ戦で最優同率となつた早、明からその主力を、租他の各校へもこの好機を捕へ本場米口の最新知識を輸入することが出来るよう法、立、慶の代表も選抜して行き、数多の収穫を挙げ帰国したのであつて、各チームは夫々代表選手の新知識によつて今シーズンはプレイの上に幾多の改良進歩の跡が認められるが、中でも法立慶の下位チームが割期的の躍進をとげて早、明の上位チームに急迫してゐる勢は注目に値する。

昨シーズン迄上位の早、明の事実上の優勝戦である早、明の一戦に主力を盡すことだけで足りてゐたのであるが、今シーズンの現状は早、明にも昨シーズン迄の気易さを許さず、試合を追つて歩一歩勝利を確保して行くことに全能力を盡さなくてはならなくなつた。

明大　新主将ハーフの畑（弘）君の下にバックには浜崎、国重、藤家、保田、栗崎、胡子、の諸君、ラインには富山、近見、黒川、坂本、竹下、渡辺、町田の諸君を第一線に挙げてこの外20名の多数交代選手をようしてゐる。

昨年の主力選手からは畑稔、畑進、大前、阿部、半田の諸君を失つたが、戦法としては依然ノートルダム及びスタンフォード大学のシステムを併用し前者の長投、長駆を志す玉砕的戦法に後者の複雑多彩なトリックプレーを配してゐるのだが、フォワードパスには50ヤードの投球可能な胡国重両君あり、トリックプレーによるオフタックルのライン突破には近見21貫渡辺19貫といふ重量両タックルを有するので、バックに十分な時間と広さを与え巧微な走法をもつてゐる畑主将や藤家君の突進を遺憾なく発揮させるだろう。又前記の国重君は加州フレズノ生れで加州インターハイの昨年400障碍記録保持者で相撲でも加州邦人間で優勝した万能選手、近見君は今夏加州訪日相撲団の斗勝であつた。

早大　戦法としては早大伝統の着実な漸進を主義としてゐる。従つてラインも球を持つセンターを中心に左右両翼に平均した人員を配して相手の予測を許さずラインのどこへでも機に応じて突進を試みるといふバランスフォーメーションを布いてゐる。

最優のラインアックと思はれるものはラインを左から野村（E)、島村（T)、上野（G)、福

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

田（C）、後藤（G）、西岡（T）、山田（E）、永井（Q）、野内（H）、岩本（H）、内藤（F）、大林（F）といふところだが、早大には米口遠征にプレイヤーで助コーチとして参加した下田君を始め永井、中山、野村の4君が健在で遠征によつて得た経験を多分に生かし、結局軽量な日本人チームとして国際試合においては球がプレイに移されてからは可及的に時間を空費することなくラインメンが開いた突進路に突入しなくてはラインは相手の重量あるラインメンによつて再び次の瞬間には塞がれてしまうといふ理由によつてであろう。

バックメンは既定の方針に従つて捕球と同時に間髪を入れず突進して相手のラインを割つて出るという速攻法を主戦斗武器としてゐる。殊にセンター福田君は今春ハワイから入学した新人ではあるがハワイオールスター軍に選抜された優秀なプレイヤーである。今年は又新入部員が20余名加はり部員数の上では5大学一の盛大さを誇つてゐる。

立教　昨年のメンバーからはクォーターバックの井上、エンドの中田君が卒業しただけで今春の米口遠征にガードとして選ばれ、その活躍を認められた安藤主将の下に、これ亦遠征軍中の名キッカー中村君も健在である。中村君のキックはリーグの中でもその右に出るもののない長飛距離と確実性を有し立教が作戦として敵のキックを受けるや否や蹴り返へしその結果生じた地点を死守して攻撃権を得、これよりラインの突撃又はパスにより間近の敵陣を陥れるといふクィックキックの戦法を特色の一つとするところからみてもうかがい知ることが出来よう。

法政　18貫強のラインメンを揃へ得た今シーズンの法政はバックメンの突進を強化するためラインの人員を一方に片寄せて掩護するアンバランスのラインを布くにはまず有効な重量をラインメンに集めることが出来たといえよう。

バックメンの顔ぶれはボールのキャリアーとして又長蹴者として有能な三枝君を始めトリックプレーに秀でた白石、小野の両ハーフがある。ライン突撃のコースとしては持田（19貫）内海（21貫）の両タックルを持つ関係から殊にオフタックルには断然自信を強くしてゐるものの如くで、又内海君をエンドとして出場させるとき三枝—内海のコンビネーションで狙ふ長前投球にはこれ亦相当の期待をかけ得るものと見られてゐる。昨年の主力からはバックで梶谷、西原の駑級、名護、浜本の諸君を失つたが大村主将を中心に益々団結心を鞏固なものとした今シーズン法政の躍進は注目に値するであらう。

慶応　ここは田村、保木、緒方と100米11秒の走力を持つプレイヤーをバックに揃へてゐるのだが、昨年度は重量の割にはラインが脆くしばしば相手方にラインを割られたので、バックの走力を現はす機会に恵まれことが甚はだ少なかつたが、中本コーチは昨年より引続きラインの技術発達に重点をおいて殆ど昨年と変りないラインメンに全精力を傾けて指導したので、最近の向上振りは素晴らしく、今年こそバックの駿足並びに片岡主将及び栗原君の強靭な突進力を生かして目覚ましい攻撃を展開することであらう」

と云ふ長文の予想記事を書いている。

文中何か辻妻の合わない文章になつている処はあるが、加納さんが酒にでも酔つぱらつて書いたのかも知れないが、大朝日新聞にこれだけのスペースをさいて掲載したことは最近では全々ない。如何にその当時フットボールに着目していたかが偲ばれる。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

こうして昭和12年のリーグ戦は多摩川のオリンピヤ球場で開幕された。10年、11年と親しんで使用していた芝公園の競技場は陸上競技聯盟からの横槍で東京市当局から使用を断はられたのである。

フットボールが芝公園を使用するようになつてから夜間照明設備やその他の施設の改善そして芝公園の知名度を高からしめたのであつたが、その結果陸上競技聯盟がこの競技場を公認し正式な陸上競技場と設定し、他の競技会の開催を極力閉め出すことを東京市に申し入れをしたことと、東京市としては市民の為の陸上競技場としての大義名分上からフットボールにも良い日を割当てくれないので、多摩の原つぱの様な河原で開催するより仕方がなかつたのである。

ここは東横電車の多摩川遊園地の対岸で、勿論スタンドもなければその他の設備もない、只の原つぱである。多摩川球場と云つてもそれは草野球の球場で5チームも10チームもの草野球の出来る河川敷のグラウンドですぐ傍には多摩川大橋が頭の上にかかつてゐる処であつた。従つて見物人も少なく競技している方としても張り合いがなかつた。

昭和12年10月2日午後2時半から明治対慶応の試合でこの年のリーグ戦は開幕された。その結果は次の通りであつた。

明治20 { 7－0 / 6－0 / 0－0 / 7－0 } 0慶応

大村	LT	藤原
伴	LT	松尾
清水	LG	富田
坂本	C	光吉
竹下	RG	加藤
石橋	RT	渡辺
富山	RE	田澤
胡子	QB	保木
国重	LH	田村
浜崎	RH	遠見
藤家	FB	片岡

交代（明治）：谷、高木、原田、黒川、椙山、栗崎、畑、横山
（慶応）：上村、山岸、今村、竹村、鹿島、柳田、稲葉、桂、根本、浮上

この試合は明治2軍を使つて楽に勝つた試合であつた。そして第1軍は殆ど使はなくても済んだのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

10月9日は早稲田と立教の試合が挙行された。当然このグラウンドには夜間照明はないので開始時間は午後2時半からであつた。吾々は渋谷駅から東横線で新丸子迄行き新丸子で下車し、多摩川原近くの風呂屋と契約してあつたのでその風呂屋でユニフォームに着換えてグラウンドに出た。グラウンドとは云つても只多摩川の河原にラインが引いてゴールポストが立つているだけのものでダダッ広いしまりのないグラウンドであつた。これならば石神井の立教のグラウンドの方が数段上である。河原にはヨシズ張りの茶店等もあつて呑んびりしたものであつた。

試合は松本（主）、中本（副）、今村（線）、黒川（計）の審判の下で挙行された。結果は以下の通りであつた。

早稲田 13	0－0 7－0 0－0 6－0	0 立教

野村	LE	上田
島村	LT	小里
藤岡	LG	池上
中山	C	服部
上野	RG	栄
西岡	RT	鈴江
村山	RE	菊地
永井	QB	鈴木
岩本	LH	中村
野内	RH	細田
内藤	FB	浅賀

交代（早稲田）：吉本、福田、福島、田口、下田
（立教）：栗林、竹内、島袋、亀井

この試合では立教は練習中の故障者が多くそれに強敵の早稲田であり又リーグ戦の第一試合であるので二軍を使用することが出来ず、全員殆どフルタイムの出場でよく頑張つたが、最後には疲労して追加点をとられて惜敗した。

この試合中、RH細田はロッ骨を折つて痛がつていたが、グラウンドに来ている医務班の日本医大整形外科の櫻井医師は胸にバンソクコーを貼つて大丈夫だからゲームを続けろと云はれて、試合を続けた。試合が終わつて風呂に入つて電車で新宿に帰り新宿で私と2人で食事して四谷の「きよし亭」に寄席を聞きに行つたら彼は胸が痛くて笑うことが出来ないとこぼしていた。翌日彼は日本医大でレントゲンをとつたら2本ヒビが入つて居たとかでしばらく練習を休んだ。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

10 月 16 日は山田（主）、井上（副）、町田（線）、安藤（計）の審判で、法政対慶応の試合が挙行され、結果は以下の通りであつた。

慶応 14	0－0 7－0 0－0 7－0	0 法政

田沢	LE	谷田
茂木	LT	持田
下村	LG	大村
吉田	C	笹沼
富田	RG	小池
津上	RT	竹中
鹿島	RE	内海
桑原	QB	三枝
緒方	LH	六井
竹村	RH	小野
片岡	FB	中島

交代（慶応）：遠見、上村、桂、加藤、稲葉、山片、今村、保木、田村
（法政）：梅野、橋本、鬼塚、藤本

慶応はこの試合ではラインが健斗しバックの進路を開いてバックをよく走らせて部の創設以来の快勝を挙げたのである。

10 月 23 日は中島（主）、中本（副）、保科（線）、下田（計）の審判で、明治対立教の試合が 2 時半から多摩川オリンピア球場で行はれた。

明治 12	12－0 0－0 0－0 0－0	0 立教

椙村	LE	岸
渡辺	LT	鈴江
黒川	LG	池上
坂本	C	服部

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

竹下	RG	栄
石橋	RT	小黒
町田	RE	上田
保田	QB	鈴木
国重	LH	中村
胡子	RH	浅賀
藤家	FB	安藤

交代（明治）：浜崎、原田、伴、松本、清水
（立教）：金子、島袋、栗林、竹内、松田、内藤

この試合では立上り立教の調子が出ない内に立続け明治の早いプレーにまどわされ、バタバタと 2 つタッチダウンをされてしまつたが、その後は立教も立直り明治と互角に戦つたが第 1 クオーターの 12 点が大きくひびき惜敗した。

10 月 30 日はファーラー（主）、川島（副）、黒川（線）、山田（計）の審判で 2 時 30 分から多摩川オリンピアで、早稲田対法政戦が行なわれた。

早稲田 46 { 12－0 / 7－0 / 14－0 / 13－0 } 0 法政

山口	LE	谷田貝
島村	LT	松本
北村	LG	奥域
福田	C	笹沼
長谷川	RG	藤本
福島	RT	持田
山田	RE	内海
中山	QB	中島
野内	LH	藤沢
吉本	RH	六井
大林	FB	小野

交代（早稲田）：内藤、野村、青木、野内、岩本、下田、上野、村山
（法政）：梅野、大村、橋本、竹中、鬼城

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この試合は早稲田の一方的試合で法政はなすがままであつた。

ここでリーグ戦は前半の5試合を多摩川オリンピア球場の草野球場で草フットボールの様な試合を消化したのである。後半の5試合は明治神宮外苑競技場を使用する予定であつたが、この競技場は大日本体育協会加盟団体以外が使用することは非常に困難であると共に、東京には設備のととのつた競技場は非常に数が少く、特に秋のシーズンには陸上競技、ラグビー、サッカー、ホッケー等目白押しに使用をねらつて居り仲々その内に割込んで良い日を取ると云うことは体協未加盟の新興スポーツ団体としては無理なことであつた。そこで東京学生米式蹴球聯盟の役員には非常に頭の良い人が多く居り、突飛なアイデアの持主が多かつたのか、或は困惑のはてに思いついたのか、とにかくそれ迄のアマチュア競技団体が考えても見ないことに気がついてそれを実行したのである。

それはプロ野球の殿堂として偉容を誇つていた後楽園の野球場を使用することである。それ迄の日本の競技団体では各々その競技場はその競技の目的の為に建設されたもので、それをそれ以外の目的に使用すること事体には考が及ばなかつたのである。即ち野球場は野球のために、そして競技場は陸上競技の為のものであり、その内のフィールドは陸上以外に球技にも使用出来る。プールは水泳の為と云ふように、それは既定概念がありそれ以外には考へられなかつたのである。ましてプロの殿堂をアマチュアが使用することなど全然考へても居なかつたことである。

プロ野球は大体10月一杯でシーズン・オフになつてしまうのでグラウンドは空くのである。そしてこの後楽園の野球場は出来てまだ3年位しか経過していないのも盲点になつていたのかも知れないが、とにかく他の団体も使用申込みがなく空いているのに吾が聯盟は目をつけてリーグ戦後半5試合の日程を後楽園野球場に組んだのである。

11月5日：慶応対立教、11月12日：明治対法政、11月20日：早稲田対慶応、11月21日：法政対立教、12月5日：早稲田対明治と決定した。尚、試合開始は午後2時半とし、多摩川オリンピアではどうしても出来なかつたリーグ戦の入場式を改めてこの素晴しいグラウンドが使用出来るようになつたので、この後楽園で行う第一試合の11月5日の慶立戦に先立つて行うことになつた。

当日11月5日は午後1時より明治、早稲田、法政、立教、慶応の順で当日試合のないチームもユニフォームを着用して校旗を先頭に後楽園球場で入場式を行つた。そして三塁側スタンドに正対し縦体に整列して、浅野新会長の挨拶等型通りの入場式を挙行して引続き2時30分から保科（主）、井上（副）、梶谷（線）、黒川（計）の審判で、立教対慶応の試合が慶応のキックオフで開始された。

この後楽園野球場の特設グラウンドはバックネットから左翼のスタンドに向い三塁線に沿つてサイドラインが引かれ、他のサイドラインはバックネットから中堅より右翼よりに引かれて居た。グラウンドは三塁側に面して居り、スタンドも三塁側の内野及び外野の一部のスタンドを使用し観衆を収容した。その為にエンドゾーンの一部が欠けては居たが多摩川とは比較にならなか

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

つた。ただしバックネット寄りの40ヤード付近にピッチャーズマウンドが小高くもり上がつて居て、知らないで走つて居るとつまづく様な感じがした。この日は三塁側のスタンドはほぼ満員の観衆を集めた。試合の結果は

立教 0　｛ 0－0 / 0－0 / 0－0 / 0－0 ｝ 0 慶応

上田	LE	山片
鈴江	LT	加藤
池上	LG	根木
服部	C	桂
栄	RG	上村
小里	RT	今村
亀井	RE	稲葉
鈴木	QB	俣木
中村	LH	田村
細田	RH	遠見
安藤	FB	片岡

交代（立教）：浅賀、菊地、岸、島袋、竹内、松田、内藤
（慶応）：富田、桑原、藤堂、松尾、下村、光吉、竹村、柳田

翌日の読売新聞には横尾記者が次の様に書いている。

「プレイグラウンドは野球のダイヤモンドを中心に左翼メインスタンド寄りサイドラインを引き、ゴールは一塁側、本塁近くと、左翼外野に設けられて見物には便利である。慶立戦は雨のため展開が鈍く双方得点に苦しむ有様だつたが、試合は総体に立教が圧迫勝でエース中村の左右ガード突破或はエンド迂回の突進は目覚しかつた」

とある。

この試合は慶応は法政に勝つているので立教に勝つて上位に進出すべく必勝の決意で望んで来ていた。試合開始直後降り出した雨はだんだんと激しくなり、スパイクには泥がついて走りにくくなり、防具、ユニフォームは雨にぬれて重くなつて動きにくくなつて、確かに両軍共動きが鈍くなつた。又フォワードパスは投げる方も、捕球する方も手がすべつてミスが多いのでどうしてもラインの中央を突くより他に手のない有様であつた。

センターもボールをスナップするのに手が滑りコントロールが悪くなるのだが、手を拭く場所もない位体全体が濡れてしまつたものである。それでも試合は全般的に立教が押し気味に進めら

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

れたが、得点をすることが出来なく、第四クォーターに入り立教は総力を挙げて攻撃し慶応をしばしばゴール直前迄押し込んだがフアンブルや雨の為に滑つてチャンスを得点に結び付けることが出来ず遂に0対0の引分けに終わつた。

試合が終りスタンドの下の控室で雨に濡れたそして泥まみれになつた重いユニフォームを脱いで風呂に入つたが、後楽園の風呂は小さくて多人数が一度に入浴することが出来ず待つて居るのに11月の夕方の気温の寒さにふるえ上がつた。そして入浴後道具を整理してバッグに入れて持つたらその重いのに驚いた。よくもこんな重いものを着て走り回つていたものだと感心したのであつた。

11月12日は同後楽園野球場で午後2時30分からファーラー（主）、中谷（副）、井上（線）、下田（計）の審判で、明治対法政の試合が明治のキックオフで行われた。結果は次の通りであつた。

明治55 { 14－0
0－0
21－6
20－0 } 6法政

富山	LE	谷田貝
近見	LT	大村
松本	LG	鬼城
坂本	C	持田
竹下	RG	藤本
渡辺	RT	間宮
町田	RE	内海
畑	QB	三枝
胡子	LH	藤沢
横山	RH	六井
藤家	FB	小野

交代（明治）：清水、黒川、原田、椙村、保田、谷、布田、髙本、浜崎、国重
（法政）：竹中、橋本、海野、笹沼

明治の一方的試合で明治の思ふようにトリックにパスに或はランと、やること全部が成功し、法政には全々良い処がなかつた。

11月14日は立教が横浜YCACに出向いて立教対YCACの試合を行つた。結果は次の通りであつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

立教　21－0　YCAC

この試合では体格の大きいYCACに対してリーグ中でも小柄な立教が押しまくつて快勝したのである。さすがに重量のある外人ラインに突破口を開けるのには骨が折れたが、それでも若さの力で重量差をはねのけたのである。

YCACのハーフバックのバッキー・ハリスは小柄ではあつたが重量とその馬力には立教も悩まされた。この人は終戦後NHKに努めた人であつて終戦後のフットボール復活にも尽力をしてくれた人であつて、終戦後は杉山ハリスと云つて居り、日本語の非常に達者な人で、この試合でも立教の金子が試合中にバッキーをタックルしそこなつて大きな声で「コノヤロー」と云つたら「このやろうとは何だ」と日本語で食つてかかつて来た程であつた。

YCACのラインには酒を飲んでプレイをしている者もあつて、スクリメージでその人の前に居る立教のプレイヤーは酒臭い息を吹きかけられて弱つていた。然しとにかく一方的な快勝を挙げYCACのシャワーを浴びて綺麗なロビーで試合後の交歓会をビールとサンドウィッチ等で行つた。YCACに試合に行くのはこの交歓会も一つの大きな楽しみでもあつたので、皆多いに食つて意気揚々と横浜を引き上げたのである。

この頃甲子園南球場では明治と神戸外人との試合があつて神戸外人が19対12で明治に勝つた。

11月20日の朝日新聞には加納氏記の予想が大きく出ている。

「学生米式蹴球　けふあすの二試合、早大牙城に迫る躍進慶大軍の斗志」と云う見出しで以下七段に亘つて書いている。即ち

「東京学生米式蹴球リーグ戦も、残すところ早慶、法立、早明の三試合となり、20日には早慶、21日には法立と続けざまに後楽園スタディアムで挙行されるが、早慶戦では今シーズン慶応が過去2シーズンの沈滞を破つて異常な躍進を遂げたことによつて、明大と共に優勝候補としてリーグの双璧をなしてゐる早大の牙城に迫る迫撃戦に大きな魅力を感じさせ、法立戦ではシーズン中ばでやや不消化を起こしてゐる立大の虚を突いて立ち上つた法大背水の陣にこれ又早慶戦に劣らぬ興味をひかれる。

早慶戦－早大は今シーズン新たに20余名の新人を加へ試合場では40名に余る選手を自由に交替し、試合時間中疲労を知らぬ戦斗力を示してゐる。早大会心のラインナップとしてはセンターに福田君、ガードに最近進境の目覚しい藤岡君、精悍なタックルを行う青木君、又稍々小柄ではあるが斗志の甚だ旺盛な北村君等タックルには島村、福島両君、エンドには選手兼コーチの下田君、巨体を躍らして無敵のタックルを試みる野村君、フォワードパスの受け手としてチームの信頼を得てゐる村山君といふライン。

バックメンではセンターから後衛陣にそれもクォーターバックの重責を負はされた中山君、巧みなブロッキングを持つ野内君、野口君、それに吉本君を加へ、突進力の優秀さと常に冷静を保つて凡ゆる場面に応じて縦横に攻撃法を適切に選択してゆく大林主将等をバックに持ち、フルバックには長蹴者としてリーグ中でも主位を争う内藤君といふ顔触れである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

これに対して慶大は3年来殆ど異動を見ぬメンバーで、ラインはセンター桂、ガード上村、根木、タックル今村、加藤、エンド山片、稲葉の諸君、バックフィールドには突進力の優秀な片岡主将をフルバックに藤堂、桑原、田村、遠見君等のハーフ、クォーターバックには保木、桑原の両君が主戦斗士であつて、今シーズンは第一戦に明大に敗退したが続いて法大を破り、早明に次ぐ実力と見られてゐる立大に対して一歩もゆずらず、引分けの熱戦を演じてゐる。

この慶大躍進の主な動力はどこから火ぶたを切られたかといふと慶大は昨シーズンも、亦一昨年もバックスには相当の突進力を持つてゐたがラインメンに脆弱なところがあつて作戦通りの攻法に支障を来たすことがしばしばあつた。この弱点が今シーズンに入つてラインメンの必死の努力で一戦毎に堅実味を増して最近ではリーグの上位チームをも警戒させるやうになつて来たのであつた。

この躍進の慶大が独特の雰囲気をかもし出す早慶戦の名の下に従来にない充実した実力のを持つて突撃して行かうと云ふから意気においては早大に一歩もゆずらぬ軒昂さを示してゐるといへる。果して慶大が頼みとするラインメンが強敵早大のラインを圧へてバックに好個の突進路を開くことが出来るか、早大の老巧さが慶大斗志の出鼻を叩いて乗ずるすきを与へずに押切るか、この一戦は両者の技量を超越した対抗意識が意外な結果をもたらす場合があると予想されるので早慶各々の実力を知るものには亦別な興味が湧かうといふものである。

法立戦ー法大は去る12日対明大戦で前半接戦を演じてゐながらメンバーの不足は後半戦の疲労を救ふべくもなく堤の崩壊するやうな敗北を喫したが、この対立大戦が今期最後の試合でもあり、負傷者の恢復によつてチームの内容も従前通りに復したので三枝ー内藤両君のフォワードパス、小野、六井、大村君等の巧走によつて立大陣を脅やかすであらう。

立大は慶大と思はぬ引分けを演じ自身としても意外の感に打たれたことであらうが比校もこの試合をもつて今期の幕を閉ぢることになるのでこの一戦は是が非でも勝たないことには全敗ー引分けの惨たる記録を止めることになる。いずれにしてもこの試合を失へばリーグ最下位という芳ばしからぬ位置に甘んずる結果となるので一勝を狙ふ両チームの意気は必然的に高調され、その上技術的には相当優れてゐる両チームのことであるから大胆な攻法の応酬で試合ははなやかに展開されるだらうと期待される。」

と云う長文の予想記事が大きく掲載されて読者の期待と興味をさそい、気分を盛り上げていた。

11月20日午後2時30分から後楽園野球場でファーラー（主）、松本（副）、梶谷（線）、安藤（計）の審判で早慶戦が行はれた。結果は

早稲田43 { 13－0
12－0
6－0
12－0 } 0法政

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

野村	LE	稲葉
島村	LT	加藤
藤岡	LG	福田
福田	C	光吉
青木	RG	富田
西岡	RT	浄土
村山	RE	田沢
中山	QB	保木
内藤	LH	田村
吉本	RH	遠見
大林	FB	片岡

交代（早稲田）：野口、福島、山口、山田、野内、北村、上野
（慶応）：竹村、藤堂、桑原、山片、今村、上村、根木、渡辺、吉田、緒方、遠見

翌日の朝日新聞には「小春日和の暖かさに恵まれ観衆はタッチに沿ふスタンドを埋めつくし盛観であつた。」と書き出して居るが本当によく入つて後楽園野球場の三塁側スタンドは一杯になつた。一万近くの観衆が入つたのではなかろうか。さすがは早慶戦であると思はせた。或は先日の朝日の予想で接戦を期待して来たのかも知れないが、試合の方は早稲田が一方的であつて慶応は良い所が少しもなく早稲田は思うように気持よく試合を運んだ。

読売の記事には「技術的には格段の差あり早大はダブルリバースパスの如き幻惑戦術で慶応を撹乱、大林主将の馬力、野口の俊足で着々得点を重さね健脚の慶応を零封に封じた」と書いて居る。確かに格段の差があつた。大林は国産選手であつたが体格も良く中央突破はよく成功していたがこれ迄の試合には余り出て来なかつた。然しこの試合で一挙に押し上がつて来たのである。

この同じ 11 月 20 日には甲子園南運動場で神戸外人（KRCA）と東京から遠征した明治大学とが試合をしている。その結果は

神戸外人 19 { 0－6 / 0－6 / 13－0 / 6－0 } 12 明治

で明治が敗れたのである。明治は遊び半分の試合をしたのではなかろうか。それでなければ関東の勇者がこんな敗れ方はする筈がないと思はれる。

11 月 21 日午後 2 時 30 分から後楽園野球場で中本（主）、松本（副）、井上（線）、下田（計）審判で立教対法政の試合が行われた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

立教 27	7－0 6－0 14－0 0－6	6 法政
内藤	LE	内海
鈴江	LT	笹沼
池上	LG	大村
島	C	持田
松田	RG	藤本
斐	RT	橋本
亀井	RE	谷田貝
細田	QB	三枝
中村	LH	藤沢
栗林	RH	六井
浅賀	FB	小野

交代（立教）：金子、竹内、安藤、小黒、服部、岸、菊地、鈴木、上田
（法政）：中上、中島、奥城、杉本、間宮、梅野、

翌日の朝日新聞には

「立大は開始後ラインを突きダウンを更新すること四回、右タッチ 11 ヤードに進み第四ダウン目、中村、亀井のフォワードパス成つて左隅にタッチダウン、細田のセンター突破で 1 点を加へ、その後も法政の交代選手少なくラインメンが疲労して来るにつれてライン突破に功を奏し攻撃をつづけてゐたが、法政も第四クォーター立大がメンバーを替へて第一線選手が休養している間に続けて 4 回、藤沢の長駆を織り込んで立陣中央ゴール前 6 ヤードに迫り、藤沢のライン直破で遂にタッチダウン成り、その後優勢に立陣を脅やかしたが時間なく敗退した」

と書いている。

この試合、立教としては最後の試合であり、法政には勝てる自信もあつたので、来年に備えて新人をスターティングラインナップに入れてスタートしたのであつたが、試合開始直後直ちに一軍に編成替をした。非常に楽な試合であつた。ラインの中央が弱かつた。特に左が弱くセンターの私と右ガードの栄とのコンビネーションも最高であつたのか、私がスナップバックをして栄と肩を合わせてダッシュして、法政のセンター、或は左ガードを狭んで首で押え付け 2 人の肩の上に乗せて 10 ヤードから 15 ヤード前進すると大きな穴が開き、その後をフルバック浅賀がボールを持つて私と栄の後からついて来れば一気に 10 ヤード位前進出来ると云うように、面白位にボールを前進させることが出来た。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

従つてこの試合は中央突破のくり返えしだけで充分であつた。最後の第4クォーターには又来年に備えて殆ど新人を出して試合を続けたらさすがに法政である。今度は逆に聯続ダウンを更新して得点を得て零敗はまぬがれたが、今シーズン立教は最後の試合を快勝で飾り慶応と共に3位になつた。この試合で法政の内海は鼻に黒いカラス天狗のようなマスクをして出場した。これはその前の試合で彼は鼻の骨を骨折したので鼻の保護の為に特別製のプラスティックで作つたマスクをして出場したのであつた。その当時には現今のようなノーズガードは誰も使用していなかつたので鼻の骨を折つたのであり又そのような特殊なマスクを使用していたのである。

11月25日のアメリカ感謝祭の日に横浜の外人クラブYCACで慶応対YCACの試合が行われた。結果は次の通りである。

YCAC 26 { 0－0
13－0
0－7
13－0 } 7 慶応

12月4日にはシーズン最後の優勝戦の早明戦が行われた。その前に朝日新聞は大きく予想を加納氏の記事で出している。

「2ヶ月に熱戰を経て東京米式蹴球リーグ戰も来る4日無敗同士の早明が今シーズンの覇権を賭けて後楽園スタディアムに相会することとなつた。昨シーズンは明大と早大が同じく最優の成績で爭覇戰に登場したのだつたが、明大の無敗に対して早大は学期試験後の練習不足が大きな影響ともなつて法大に13対7と不覚の一敗を喫してしまつた。

が併し、この意外の敗北に気分を引締めた早大は対明大戰の折のチームの面貌を一変した如く、全身に斗志を漲らして試合の頭初から明大の巧緻なプレイを圧へてラインを強襲し早大の得意とする力の進撃を水ももらさぬ正確さで敢行して7対0、1タッチダウンの得点を死守し通して遂に明大の猛攻を退けたのであつた。

今シーズンは早明共に慶法立の3チームを大差に退けて余裕綽々たる完璧の姿を共に決勝の舞台に登せることとなつたのであるが、今シーズンの双璧早明の戰法は昨年に引続いて各自が信奉する形式を継承してゆずらず、早大がラインの左右両翼へ球を持つセンターを中心に平均した人員を配置してバックフィールドのみノートルダム大学の形式を採つて一方へ4名を雁行させる所謂シングルウイングの形をとつてゐるのに対して明大はスタンフォード大学の戰法に則つてラインは球を持つセンターを中心に一方へ人員を片寄せて配置し、バックフィールドは4名のうち2名をラインの両端後方に恰も両翼を張り広げた如く置くダブルウイングの戰法をとつてゐる。

かくの如く両チームが各々戰法を異にするに至つた理由としては各々チームの人的要素の要求に従つて相反するやうになつたものでこの両戰法には特長として挙げ得る幾多の相

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

違点がある。

早大の採用してゐるシングルウイングは球を持つて前進する者がラインの開いた突進路に突撃する場合、ラインメン以外に前方に控えた味方のバックメンによつて尚一層確実な進路を押し開くことが出来るし又ラインメンが完全な進路を作り得た場合には球を持つて進む味方のバックメンがラインを突破する以前に前方のバックメン2人はその進路を通過して、なお其後に迫る相手側バックメンの防御を排除することが出来て確実に所期の目的を達することが出来る。

一方明大の採るダブルウイングの戦法によればウイングとしてラインの背後両翼に出ているバックメンとセンターから球を受けたバックマンとの間にこの三者がスクリメージ後方で織り重さなるやうな行動によつて凡ゆる変化に富んだトリックプレーが生まれて来る。

早大がシングルウイングを採用してゐる理由としては以上の戦法を活かす為必要な強力ラインと強引の利くバックメンを持つてゐるからであつて、又明大がダブルウイング戦法を用いてゐる理由はトリックプレーに適した敏活なバックメンを有してゐるからである。

さてこのような人的要素の相違から出来上がつた二つの特長のある早明を相対的に検討して見ると、明大は早大に比してラインが優勢でないことは否めぬ事実である。従つてトリックプレーによつてラインを襲撃することは、バックメンが後方でトリックを用ひるだけラインに到達する迄に余計に時間を要することになるので、早大ラインメンを明大側が一時耐えることが出来て突進路を開くことが出来てゐても、早大側に直ちに立直られる惧れがありトリックプレーによるライン突破には相当の不安がある。早大の強引の利くバックスは重量もあり又強力なラインメンの活躍によつてよく突進路を進むことが出来るとしても、フォワードパス、或はエンドランには敏活な明大バックスメンによつてその進撃を遮断される場合が多からう。

結局早大はラインで活躍する福田センター、野村、下田の両エンドの鋭い出足によつて明大の攻撃をスクリメージラインの後方に圧し、味方の攻撃にあたつては藤岡タックル、西岡ガード、又は島村タックル、上野ガードの開くラインの突破路にボールキャリヤーはバックメンの協力を得て漸進することに生命があり、野村、下田、村山各エンドに投ずる野内のフォワードパスに明大の虚を衝くこととならうが、明大は早大の強力なラインに対しては突進路の開拓に困難があると同時にトリックプレーによる時間の空費はより以上ラインの突破に蹉跌を来たすこととなるので或はトリックプレーを排してラインメンが開いた進路に間髪を入れず突入する方法によるとも考へられるが国重、畑、胡子、藤家君等の敏活駿足をかつて敢然エンドランのオープン戦に挑むこととならうし、胡子君の好投を受ける椙村君の活躍、又畑、安田両君の援護によつてエンドランの長駆も狙ふ国重君の腰の強い走法も早大の警戒を要するところであろう。

かく技術の明大、力の早大と判然とした対立のうちに今シーズンの覇権を爭ふこととなつたのであるがこの爭覇戦こそ本家のアメリカにおける代表的蹴球戦にも劣らぬ技術と熱のある試合が展開されるものと期待される。」

と云ふ長文のものであつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

事実ラインの早大に対してバックの明大であり体重も平均約4Kg早大の方が大きかつたのである。そしてその年は各チーム共アンバランスラインのシングルウイングバックフォーメーションを採用して居り防御は6人ラインが多かつた。

12月4日午後2時30分から後楽園野球場内の特設グラウンドにおいてファウラー（主）、坂口（副）、梶谷（線）、安藤（計）の審判の下に、明治の先蹴でリーグ戦の最終試合である明治対早稲田の試合は、その年の覇権を賭けて挙行された。この日は前の早慶戦の時以上の入場者があり三塁側スタンドからレフトの外野席の方まで一杯に入場し、その数は一万人位であつた。結果は次の通りである。

早稲田 26	0－0 7－6 0－0 19－0	6 明治

野村	LE	椙村
島村	LT	伴
藤岡	LG	黒川
福田	C	坂本
福島	RG	竹下
西岡	RT	石橋
村上	RE	町田
中山	QB	畑
野内	LH	保田
吉本	RH	国重
大林	FB	胡子

交代（早稲田）：内藤、野口、山田、北村、上野、下田
（明治）：渡辺、浜崎、横山、清水、檜本、藤家、原田、花園

試合の結果は26対6と早稲田の一方的のようであるが、点が開いたのは最終クォータであつて、それ迄は優勝決定戦にふさわしい大接戦であつた。本当に最後の5分迄勝敗の帰趨がわからない好試合であつた。明治は試合開始直後、自陣36ヤードから国重が右エンドランで65ヤード長駆してタッチダウンを挙げたかと思われたが、明治にクリッピングの反則があつて得点にならず。

その後も明治優勢に試合を続け、第2クォーター5分には明治は早大陣5ヤードに迫り、早稲田の野内がパントをする処を明治のラインが飛込んでパントブロックをして、エンドゾーンに

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

転々とする処を明治・畑おさえて最初のタッチダウンを挙げたが、その後早稲田の奮起して13分明治陣2ヤードから攻撃し、内藤飛込んでタッチダウン、トライフォアポイントも成り、早稲田1点をリードし前半を終りった。

後半第3クォーターは両軍一進一退を続け第4クォーターに入り10分頃迄は一進一退の熱戦を続けたが、だんだん軽量の明治ラインに疲労が現われ、10分には明治5ヤードから早稲田・野口のタッチダウン。続いてその直後早稲田・下田が明治のフォワードパスをインターセプトし50ヤード独走してタッチダウン、更に14分には早稲田、又明治のフォワードパスを福田がインターセプトし60ヤード独走でタッチダウンを挙げ､試合は最後の5分であつけなく勝敗が定つた。

結論として早稲田の強力な重量ラインが明治のラインに体力で勝ち、明治のラインもよく頑張つたが、最後に力盡きて惜敗したのである。

この結果その年のリーグ戦の成績は優勝早稲田（4勝）、第二位明治（3勝1敗）、第三位立教、慶応（1勝2敗1分）、第四位法政（全敗）と云う順位で早稲田はリーグ戦開始以来4年目に単独優勝をはたしたのである。

こうして昭和12年度のリーグ戦も無事終了し、その後東京学生米式蹴球聯盟審判協会委員長のファウラー氏はその年のオールスターズ第1軍及び第2軍を12月5日発表し、各新聞は一斉にのせた。

第1軍		第2軍
内藤幸男（早）	FB	大林卯一（早）
国重竹雄（明）	HB	藤家一（明）
中村健一（立）	HB	胡子次郎（明）
畑弘（明）	QB	野内平市（早）
町田整治（明）	RE	野村武雄（早）
西岡敏男（早）	RT	小黒博（立）
黒川博人（明）	RG	根木浩（慶）
坂本三郎（明）	C	福田勝人（早）
上野遣司（早）	LG	藤岡進（早）
野村利雄（早）	LT	今村得司（慶）
下田正一（早）	LE	椙村覚（明）

こうして昭和12年は無事終了したのであるが、日支事変は益々拡大して行き上海から戦局は大きく伸びて12月には日本軍は南京を攻撃して南京入城となり、日本全国は大いにわき各都市で提灯行列を行つて戦勝を祝う等、日本全国は軍国色一色につぶされて行つた。

そして昭和13年を迎えたのである。吾々フットボールの先輩聯中も現役兵或は予備役兵として徴集されて続々と中国大陸の野戦にかり出されて行つた。この様なあわただしい新年を迎え

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

益々諸事が困難になつて来た。

然し昭和13年1月初旬のスポーツ新聞のスポーツ欄にはその年のローズボウルゲームの記事が出ていた。この年はカリフォルニア大学はH.Bのポッタリの大活躍によりアラバマ大学を13対0で敗り、カリフォルニア大学が快勝したと報じている。又アメリカの聯合通信社発表の1937年度のスポーツ10傑の記事ものせていた。それによれば第1位は庭球のドンソバッヂで、第4位にエール大学フットボールのHBフランク、第5位にコロラド大学のバックホワイト、第10位にフットボールのピッツバーグ大学のゴールドバークが選ばれ、チーム花形10傑には、第1位野球ヤンキーズ、第2位にフットボール、ピッツバーグ大学、第6位プロフットボールのレッドスキン、第6位はアラバマ大学、ミネソタ大学、カリフォルニア大学とフットボールの3大学が、そして第8位にフォーダム大学とプロのシカゴベアーズが選ばれていた。

又番狂せ10傑の第1位は拳斗のファー対ルーイスで、第2位にビッグテンのミネソタ大学がネブラスカ大学に敗北したこと、第4位にエール大学がハーバード大学に負けたこと、第6位ラフェット大学の活躍、第7位プロフットボールでワシントンが巨人に勝つたこと等が出ている。まだまだアメリカは全くのんびりしたものであつた。

1月22日には立教対関大の試合が甲子園南運動場で午後2時半から行はれた。その結果は

立教 6	0－0 6－6 0－0 0－0	6 関大

上田	LE	吉田
小黒	LT	岡本
池上	LG	北村
服部	C	秋本
栄	RG	浜本
鈴江	RT	藤本
亀井	RE	小林
鈴木	QB	岡村
細田	LH	山内
中村	RH	佐伯
浅賀	FB	坪井

交代（立教）：安藤、菊地、竹内、岸、島袋、竹内、金子、松田、鄭
（関大）：横谷、奥野、丹羽、榊部、藤井、辛、村沢、吉岡、古山

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この試合は不本意ながら引分けに終わつてしまつた。それと云うのもこの試合を予定したのは前年の 12 月の初めのシーズンを終つた直後であつた。そしてその時点においては前年と同様に朝日新聞社が後援をしてくれて、遠征チーム即ち立教の旅費宿泊費を負担してくれることを加納氏を通じて内諾を得て居たつもりであつた。それでシーズン終了時にはその旨を部員につげて、納会を終わり、翌昭和 13 年の 1 月 15 日頃から対関大定期戦の練習に入る予定であつたのだが、1 月中旬頃再度朝日新聞に確かめた処、朝日は後援はするが諸経費は出さないと云う返答であつた。

それでは全く吾々の予定していた條件と違い又その費用を部員個人負担にすることも出来ないので不本意ながら本年は中止するより他に方法がなかつた。尚、朝日とはその後も交渉を続けたが、色好い返事はもらえなかつた。それで関大の方に事情を説明して中止することにして練習も取止めにしてしまつたのである。

そうしたら 20 日近くになつてから朝日から半額だけは出そうと云うことになり、試合をやらなければ関大の方で困ると云うことで急に試合再開に決定したいきさつがあつた。それやこれやで練習は殆どやらないで関西に行つて試合を挙行したのである。リーグ戦終了後約 2 カ月全々ボールにふれていないのでは勝てるわけがない。それでも良く 1 タッチダウンは取れたものだと思ふ。

試合が終つて南甲子園ホテルで夕食し、その夜は門限 11 時にして各自大阪の町に出かけた。夜 11 時迄には皆帰つて来たが、唯一人フレッシュマンの鄭だけが帰つて来ない。12 時になつても帰らないので幹部聯中は心配して起きて待つていた所、午前 3 時頃になつてやつと帰つて来た。よく聞くと間違えて阪神電車を一つ手前の尼崎で下車してしまつたそうで、終電車も逃がしてしまい、阪神国道を夜中歩いて甲子園迄来たと云うのである。一同安心すると同時に大笑いになり、それ以後、鄭のことを迷い子と名付することになつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この頃から東京学生米式蹴球聯盟と関西大学との間に日本協会設立の件が具体化して来たのである。そして昭和13年1月末に日本米式蹴球協会が設立され、会長に東京学生米式蹴球聯盟の会長浅野良三氏が就任したのである。理事長にはポール･ラッシュ氏が兼任した。

この日本協会設立の第一の仕事として東西対抗戦を行ふことになつた。東京は良いとしても関西は学生はチームは関大だけであるので、学生だけの試合は出来ないので、YCAC、KRAC等その他OBも加えた東西対抗戦となり、第一回東西対抗戦はアメリカのボールゲームと同様1月1日行ふのであるが、第一回に限つて3月21日の春季皇霊祭の日に東京の明治神宮外苑競技場で行ふことになつた。そしてこれも朝日新聞社後援であつた。

関東軍は東京学生米式蹴球聯盟の昨年度のオールスターズを中心にし、それにYCACのメンバーを加えたチームを編成し、関西軍は関西只一の学生チームの関大とKRCAとの混成チームであつた。この日の入場料は指定席券1円、一般席50銭ときめられた。又この日の前座試合として東京学生米式蹴球聯盟加盟校の予科生聯合チームとOBクラブの対抗戦が行われた。このOBチームにはフットボールのOBは勿論であるが、その他明治の鳥羽、笠原等の当時ラグビー界で人気のあつた選手も参加した。

3月21日午後2時40分から明治神宮外苑競技場において第一回東西選抜対抗試合が挙行された。東西選抜対抗戦が正式な名称であつて、又別名東西オールスターズ対抗戦とも云つた。3月21日当日は風は強かつたが晴天に恵まれ、その上に祭日とあつてスタンドは一杯にあり、芝生のスタンドも両翼を除いてほゞ一杯の観衆が入つた。約2万人の観衆を集めて大成功であつた。この東西対抗戦の前に予科軍とOB軍の試合があつた。

3月21日午後1時明治神宮外苑競技場、花岡（主）、中山（副）、坂口（計）、菊地（線）で予科チーム先蹴で開始された。

関東O.B	6	0－0 0－0 0－0 6－0	0予科選抜

仁井（明治）	LE	金子（立教）
伊集院（明ラグビー）	LT	浄土（慶応）
三浦（立ラグビー）	LG	富田（慶応）
米須（　）	C	光吉（慶応）
原（法政）	RG	松田（立教）
井上（早稲田）	RT	茂木（慶応）
亀井（立教）	RE	山口（慶応）
松本（明治）	QB	鈴木（立教）
梶谷（法政）	LH	藤堂（慶応）
鳥羽（明治ラグビー）	RH	遠見（慶応）
中本（慶応コーチ）	FB	竹村（慶応）

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

交代（OB）：名護（法政）、保科（法政）、大村（法政）、片岡（慶応）、川島（早稲田）、笠原（明治ラグビー）、岩下（慶応ラグビー）、上野、御牧（立教ラグビー）
（予科）：山片（慶応）、松尾（慶応）

以上のメンバーでフットボール以外のメンバーが相当入つている。

伊集院は毎日新聞の記者であり明治在学中は陸上競技、角力、ラグビーと万能選手であつた。又岩下は同じく毎日新聞の運動記者で慶応のラグビー名選手、御牧は東京新聞社のスポーツライターで立教ラグビー黄金時代の名選手、三浦も立教のラグビーで電報通信社の記者である。

更に鳥羽、笠原は当時明治のラグビーにあつて TB と FB の名手で二人共不出吝と云はれる位の名手であつた。このように新聞社の運動部の特にラグビー担当記者はフットボールをやつて見たくてウズウズしていた聯中が参加したのである。このような試合に参加させることによつて各自の新聞の記者もくわしく書いてくれるので協会としては大いに歓迎するところであつた。試合はさすが明治の駿足 TB の鳥羽がラグビーのスリークォーターバックのパスによつてサイドラインを走つてタッチダウンをしたのであつた。そして OB 軍は予科選抜軍に 1 タッチダウンの差で勝つた。そして O.B 軍は大嬉びであつた。

引続いて第一回東西オールスターズ戦が挙行された。それに先立つて日本米式蹴球協会々長浅野良三氏の挨拶があり、浅野氏の始球式に引続いてファウラー（主）、松本（副）、梶谷（計）、井上（線）の審判で関東のキックオフで試合が 2 時 40 分開始された。

関東 21	7－0	0 関西	
	7－0		
	7－0		
	0－0		

當山（明）	LE	中村（KRAC）
小黒（立）	LT	ゾロタレフ（KRAC）
藤岡（早）	LG	岡本（関大）
坂本（明）	C	林（KRAC）
黒川（明）	RG	木村（KRAC）
渡辺（明）	RT	浜本（関大）
村山（早）	RE	藤波（関大 OB）
畑（明）	QB	山内（関大）
国重（明）	LH	Ｖ．ゾロタレフ（KRFC）
内藤（早）	RH	藤井（関大）
胡子（明）	FB	上島（KRAC）

交代（関東）：安藤（立）、上野（早）、島村（早）、野口（早）、保田（明）、中村（立）、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

藤家（明）、ロス（YCAC）、竹下（明）、野村（早）、福田（早）、下田（早）、栄（立）

（関西）：北村（関大）岩井（関大）坪井（関大）

試合そのものは得点差以上に東軍の一方的な試合であつた。この試合で第2クォーターの得点は中村（立）の一人舞台でTDを挙げ、続くトライフォアポイントは中村のドロップゴールで得点をした。トライフォアポイントをドロップキックで挙げたのは中村一人で、それ迄もそれ以後も無かつた。

試合の内容は関東側の一方的で面白味は少なかつたが、これによつて関西側にとつては大変良い刺激となった。今迄関西大学には公式の試合は少なかつた。関東からの遠征したチームの試合は何れも練習試合のようなものであったが、それが日本協会主催の公式試合に出場出来ると云う大きな希望がもたれて、関西のチームとしては大変張り合いが出来たのである。そしてこの東西対抗は毎年一月一日に挙行することになつた。一月一日は毎年慶応と京大の試合が挙行されるが、これは東京と関西で毎年交互に行はれるので、フットボールの東西対抗はラグビーの慶京戦と反対に関西と東京で行うことになり、さし当たつて来年は1月1日に明治神宮外苑競技場で行うことが決定したのである。

此の試合をもつて正式に昭和12年度のシーズンは終了したのである。昭和12年度はフットボールは又大きく飛躍した年であつたと云える。即ちアメリカ遠征より帰り各チーム共技術的に大きく飛躍したし、又東西対抗と云うビッグゲームが出来た事等によつて、一般にアメリカンフットボール或は米式蹴球と云うものが大きく理解されて来たのである。

従つて見物客の数も随分と多くなつて来たのであるが、それに反して社会情勢は益々厳しくなつて来た。日支事変は当初の不拡大方針に反して益々拡大して行き中国大陸に日本の陸軍はドンドン進撃して行く。それにつれて毎日のように駅頭には出征兵士を見送る団体が見られるようになつた。吾の中がこのようになると何時の吾でも同じであるが、このような時勢の尻馬に乗る者が居るもので、それらの者が今迄は口にもしなかつたような立派なことを云つたり、行つたりして自己の保身の術を考え出して極端な行動に出て来た。即ち神国日本とか、他に比類のない立派な国であるとか、それがどんな結果になるか考えるより先に、軍のお先棒をかついで、権力者にあまね自らも権力者の一端に加わり自己保身を計ろうとするのである。この様な者が多くなつて吾国全体に変なムードに傾いて行き、国粋主義的な風潮が昂まつて来た。国粋主義的な傾向が昂まつて来るとどうしても外来のものは目の仇にされるようになつて来るのである。その点でフットボールにも色々と風当たりが強くなる傾向が見えて来た。折角これ迄になつて来た吾々のフットボールを益々発展させる任務のある吾々には気が気でなくなつて来た。

それで昨年の春、即ち昭和12年の春から立教大学米式蹴球部はフットボールの校内大会を行つた。これは校内にポスターを出して参加チームを募集して行うものであつた。そして道具は貸してやるのである。又コーチを希望するチームには部員をコーチとして差し向けたのである。第

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

一回の応募チームは意外に多かつた。角力部、ラグビー部、ホッケー部、サッカー部だとか全部で8チーム程集つた。それでコーチに部員を派遣してフォーメーションからルールの解説等を行つて、石神井のグラウンドで校内大会を挙行した。第一回の優勝はたしか角力部であつたと思う。それで優勝チームには優勝のバックルを全員に贈呈した。これは部が体育会の年度予算が未だに年間30円しか呉れない部外団体であつたが、毎年体育会の正式な部に認めてもらおうとしても仲々認可してくれないので、一つには時節柄も考えてP.Rを兼ねたものであつた。何しろ年間30円の予算と部員から集める一円の部費とでは玉沢の借金もとても拂えるものではなかつた。昭和12年の春にはアメリカ遠征チームがハワイで行つた試合の入場料の収入を各チームに分けてくれたので大いに助かつたが、それがなければ苦しい処であつた。

この校内大会は大変評判がよく、参加各チームからは毎年やつてくれと云う要望があつたが、体育会の正式な部として認めることはこれとは関係ないと云はれたが、然しこの校内大会によつて良い印象を植えつけたことは確実であり、このようなことを毎年行ことによつて近い将来は吾々の希望もかなえられるものと思つて毎年続けることにしたのである。

昭和13年の行事は3月の新入部員獲得のことから始まつた。例年の通り入学試験の日には全員学校に行つて体格の良い受験生を見付けて入部をすすめ、その名簿を作り発表の日には又発表を見に行き入学者を確認し、4月の入学時には又新しく入つた新入生の中で他の部に所属しない者の内で体格の良いのをさがして入部をすすめると云う大変手数のかかるものであつた。特にこの年は3月末には東西対抗の第一回戦と重なつて現役は大変忙しい思いをしたのである。

又一方では此の年の3月には各校共大量の卒業生を送り出した。この卒業生は殆どフットボールが日本に移入された当時からのプレイヤーであつて日本のフットボールの草分けとしての功労は大きいのである。

先づ立教大学からはアメリカ遠征に行つた安藤眉男、バックの菊地隆吾、浅賀隆義、エンドの亀井勇、ガードの栄実等であり、

早稲田では下田、大林、村山、野村、内藤、野内等、

明治では畑（弘）、黒崎、富永、山田、子胡、椙村、町田、伴、の多数であり、

慶応からは片岡、今村、保木、松井、上村、桂、加藤、稲葉で

法政からは大村、三枝、梅野、間宮、内海、保科

と一挙に多数のプレイヤーが卒業して行き各校ともにチームの再編成には大変苦心をした。そして、これらの補充をしなければならず、新入部員の獲得に一生懸命に努めたが仲々思うようには入部希望者がなかつた。特に立教のように全学生1,200人位の小人数では新入部員の獲得には骨が折れた。然し新入部員を獲得しない事にはチームの運営が出来ない。特に本年の卒業生はチームの中堅として活躍した者許りであり、ベンチウォーマーは一人も居ない5人であるのでこれの卒業の補充には並大抵のことでは出来ないので、現役の聯中はあらゆる方法で新入部員獲得に奔走した。

それで昨年一年休部をしていたハワイ大学卒業者で学部3年の坂口を説得して、再入部してもらい坂口にコーチを委任した。その他在学生中の勧誘ををしたり、又東西対抗で忙しい中を入学

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

試験の日に現役全員手分けして受験生を勧誘して入部を予約させたり、又入学式の日にも新入学生を勧誘して、それでも在学生の永井三郎、それに新入生では広澤得郎、小池貞二、山田隆太郎、立川明教、芹澤利一、横山欽一の7名を得、部の人員は26名と一応は揃つたが実力的には昨年度より数段と低下するすることは止むを得なかつた。そしてこの人数をもつて石神井公園の清水組のグラウンドで春のプラクティスシーズンを4月末日から行つた。

毎年のことであるが5月頃になると体育会の予算期になるのである。フットボール部はもう誕生してから5年目になるのにまだ体育会の正式な部としては認められておらず、部外団体として予算も30円しかもらつていなかつた。年間30円ではいくら何でもやつて行けない。部員から月50銭の部費を集めても出来ない。ましてフットボールには用具が必要であり、その用具の補充もして行かなければならない。ところが用具の購入先の玉澤運道具店には借金があり、それを返済しなければ用具購入も困難である。昨年のようにアメリカ遠征の帰りのハワイでの試合の入場料の利益を一校30円でも分配して呉れると云う思わぬ余得でもあれば良いのだがそれも望めない。

それで何とか正式に、体育会の部に認めてもらえば、年間100円以上の予算が学校からもらえるので、体育会の各部の高学年の友人達に予算会議でフットボールを正式の部に認めるように頼んだのであるが、各部でも予算の全体の額が定められているのに各部共少しでも多く予算を取りたいのが実情で、そこへ新しく部を認めるとそれだけ予算全体から支出が多くなるので、新しい部の認可は極力押えるようになつていた。この年も色々と努力をしたが正式の部には認めてもらえなかつたが、昨年迄の実績を認めて年間予算として昨年より20円多い50円が認められたのであつた。

予算については毎年部の幹部は大変頭を痛める問題であつて、部員から集める部費を増額することはむずかしいし、試合の入場券の売上はまだ各校に分配する迄には達しない、用具購入の借金は増加する一方である。これは各校共同じ苦しみであつたろうが立教の様に全校の学生の少ない所では、尚その苦しみは多かつた。

それで各校共そうであつたが立教のフットボール部でも一昨年の昭和11年の12月に部の基金募集のために映画会を開催したことがあつた。昭和11年12月6日（金）午后6時から九段の軍人会館（現在の九段会館）で「カレッジ･リズムの夕べ」と云う会で、映画はパラマウントの「カレッジ･リズム」と云ふジャッキー・オーキー主演のフットボールの映画を上映し、その他灰田勝彦兄弟のヒロ･カレッジアン・セレナーダスのハワイ音楽淡谷のり子の歌と当時としては相当の内容であつた。観客も軍人会館一杯になつて盛大であつたが、色々の出費が多くて純利益はいくらもなく、僅かに玉沢運動具店の借金の一部を返済することが出来ただけであつた。

現在でもそうであるが、このスポーツが日本に入つて来てからまだ年月が経過していないので試合の見物の観衆も余り多くなく、又OBも少ない上にOBもまだ学生を卒業したばかりの者達ばかりで、従つて経済的にも後輩の面倒を見ることが出来るような者は居ないので部の経済的困窮は解つているがこれを救済する能力はない者達許りであるのでOBにタカル事も出来ず、結局部員同士で工夫をして何とかやつて行くより他には道がなかつた。野球部を除いては他の部も大なり小なり同じ様な状況ではあつたろうが、フットボール部は一番新しい上に道具に金がかかるの

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

で最も経済的には苦労の多い部であつたのである。

４月末から春のプラクティスシーズンが始り新入部員を加えて石神井公園の清水組のグラウンドで約１ヶ月間の練習を行つた。季候は良く順調にスケジュールも進んで法政とのスクリメージもやつたりして５月末日で終了した。後は９月からの合宿を待つてシーズンに入るのを待つのである。

然し世の中は益々変化して行つた。昨昭和12年12月には日本軍は中支の南京を攻略しこれを占領し、日本全国は提灯行列で祝福をした。これで支那事変も一段落して決着を見るかと思はれたが、戦局は益々拡大し漢口攻撃へと進展して行き、街には毎日出征兵士を送る幟りと歌が流れて行つた。吾々フットボールの先輩でも、昨年大学を卒業した相京徹夫が四街道の陸軍飛行学校に幹部候補生として入校した。又中田文夫は近衛歩兵一聯隊に入営し、８月末日には井上和雄が広島の輜重歩兵第５聯隊に召集入営する等続々軍隊に入営して行つた。一方その当時の主将太田二男は卒業と同時に米国に帰へつた。今年卒業した聯中も続々と徴兵検査を受け殆どの者が甲種合格となつて、本年12月から来年の１月にかけて入営して行くことが確実になつた。

今年の最上級生も就職がきまり、来年入社すると同時に徴兵検査によつて軍務に服することは明らかである。皆の間では陸軍省への就職は確実だと冗談を云つて自らをなぐさめて居た。世の中は非常時一色に塗りつぶされて軍国調になつて来た。学校でも教練の時間は厳確になつて他の授業はともかく教練の時間だけは全員が出席するという状態であつた。

６月も終わり７月に入り夏中休暇が近づいたある日、吾々のチームのスタープレーヤである中村健一が部を辞めると云い出した。色々と聞いて見ると家庭の事情でこの一学期が終ると同時に学校も辞めてハワイに帰ると云ふ。チームとしては大変な痛手ではあるがハワイに帰ると云ふのをとめることも出来ないので涙を呑むより仕方がなかつた。

各大学のチームを通じて最も優秀なプレーヤーで、パスを投げさせてよし走らせてよし、ディフェンスも良いが特に彼のキックは抜群のものがあり、東京学生米式蹴球聯盟の至宝である中村を失うことは立教のチームのみならず日本のフットボール界の大損失であるが止むを得ないことであつた。立教のチームも今年は坂口の復活を見て中村・坂口のコンビで大いに躍進を期待していたのであるが、逆に戦力としてはマイナスの面が出て来て困難な状態におかれることになつてしまつた。

６月に私は１人で沓掛の星野温泉に行き９月からの合宿の打ち合わせ予約をして来た。毎年行つているので宿の人も皆喜んでくれた。７月に入り夏期休暇の始まる前にミーテイングを行つて合宿の件について伝達した。そして部員全員の各々各方面に散つて行つた。然し世は非常時態勢で学生としても色々の制約を受けるようになつた。俗に云う学生狩り等もその一例であつた。学生狩りとは平日の午前中に喫茶店や映画館、マージャン屋その他の盛り場等に居るのが警官に見つかると警察に聯行されて、お説教を食うと云ふもので新聞にも毎日何人聯行されたとか云ふ記事が出ており、特くに早稲田署は東京で最も厳しい署であつた。

このように種々の制約下ではいくら夏休みだからと云つて思うまま気ままには仲々行動が出

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

来ない。事実夏休み中に学校から全校生宛に文部省が出した訓示を送付してきた。それには未曾有の非常時に際して学生としての本分を忘れず、勉学と体育の訓練により体力を増強して非常時の役に立つように心掛けよと云うようなものであつた。このような状態であるので文部省では学生のスポーツの海外遠征を禁止すると云う告示も出した。

実はこれは一つの空想として吾々は去年位から考へていたことであるが、それは昨年アメリカ遠征に行つて帰つて来てから聯盟加盟の各チームにアメリカでの試合の入場料の利益が分配されたことにより立教單独のチームでアメリカに遠征して資金稼ぎをやろうかと云ふ事であつた。船は貨物船を使つてハワイまで一チーム約千円位の旅費で良い、勿論片道である。そしてハワイで３試合位やればハワイの滞在費と帰りの船賃を支払つても3千円位の利益を挙げてそれを持つて帰れば部の資金も充分にうるおうと云ふ計画であつた。然しこれに行きの船賃の千円と云う大金を如何にして集めるかと云う大きな難問があつて夢物語ではあつたが、それも今度の文部大臣の告示によつて不可能になつてしまつた。そして学生は何所に行つても聞かされる出征兵士を送る歌のかげに小さくなつているより仕方がなかつた。

暑中休暇に毎年発行している夏期部報にも軍国調が明らかに出ている。小川部長の便りにも「・・・大学を通じて諸君の手許に達せられた文部省の訓示を更によく心して充分時局の重大性を認識し諸君の父兄、大学当局並びに国家が諸君に期待して居るものに副う生活を営まれんことを希望します」と書いてある。

又先輩ＯＢの兵役の状況や徴兵検査の結果等も記載されている。又細田主将は「・・・今年は特に国民精神総動員実施中のことであり又聖戦2年目超重大な時局下にある折から・・・」等と皆時局の重大さをひしひしと感じて居たのである。

昭和13年度の夏期合宿は、8月31日から9月10日までの間、軽井沢沓掛の星野温泉明星館で行はれた。合宿費は三食付で22円、汽車賃は学割で片道1円75銭であつた。一昨年に比較すると諸物価高騰し合宿日数を3日早く切り上げなければならないようになつた。

8月31日は午前8時に上野駅1,2等待合室に集合し8時30分発の列車で合宿地に向かつた。一同修学旅行のような和やかな気分で汽車の旅をし星野温泉に着いた。新入部員以外は聯続4年も来て居るので様子もわかつて居り、その日はゆつくりと休養した。翌日からは日課に従つて練習が開始された。合宿2日目から3日目は体が生つているので疲れが出て体の方々が痛く、宿舎の階段の上り降りも四ツンばいにならないと出来なかつたり、便所に行つてしやがむのが痛くて苦しかつたりするものであるが、それでも道具を着けてグラウンドに出るとシャンとして平常通り練習が出来るものである。

グラウンドは年々幾分かは良くなつて居るが、それでも例の火山礫の小さいのが一面にあつてすり傷がたえない。それでも順調に予定の日程を終り9月10日午後の汽車で沓掛を出発して上野に向つた。上野近くになり浦和をすぎ、蕨駅の近くに来ると倉庫の様な建物の「シャンクレール」が見えると一同大はしゃぎをした。夜8時頃上野に到着し無事合宿を解散した。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

合宿が終わると学校も二学期が始まる。それと同時に毎日石神井公園の清水組のグラウンドで午後2時から練習を繰り返へした、9月29日には東京学生米式蹴球聯盟から昭和13年度リーグ戦の日程が発表された。それによると

10月10日（月）：入場式早稲田対法政
10月18日（火）：明治対慶応
10月20日（水）：立教対法政
11月 9日（水）：早稲田対立教
11月16日（水）：慶応対法政。これまでが明治神宮外苑競技場。
11月19日（日）：明治対立教
11月23日（水）：明治対法政
11月26日（土）：早稲田対慶応
12月3日（土）：立教対慶応
12月11日（日）：早稲田対明治で後半の試合場は後楽園野球場と決まつた。

又東西対決は1月元旦に神宮外苑競技場か後楽園のどちらかにすることが発表された。前半の明治神宮外苑競技場の使用はウィークデイであるが、こらは当時東京には正式の競技場はこれ一つしかなく、ラグビー、サッカー、ホッケー、陸上競技と種々の団体が少ない土曜・日曜日を使用するので新興の団体のフットボールには使用されないウィークデイより他に使うことが出来なかつたのである。

後半の後楽園はプロ野球のシーズンが終わつた後にしか使用出来ないので11月の後半からと云うことになるのである。然し昨年からではあるが後楽園野球場を使用することは画期的な行為であり、他のスポーツ団体が予期もしなかつたことで、相当な効果を挙げたのである。只フィールドの中央にピッチャーマウンドが小高く盛り上がつていて其所に来ると足がつかえて、つまづくような事はあつたが、その他については申し分のないグラウンドであつた。

リーグ戦開幕の前日には例に依つて朝日新聞に加納氏の展望が各チームの主将の写真と四つの攻撃フォーメーションの図解入で大きくのせられて居りそのフォーメーションの説明が永々と書かれて居た。

「東京学生米式蹴球聯盟の今期リーグ戦は10月10日の早法戦で開幕の運びとなつたが、この聯盟は創立以来シーズン制の確立統制を提唱し、練習はシーズンオフの春季に1ヶ月間、秋季シーズンは9月1日以降と限定して、その後12月中旬迄にリーグ戦を行つている。これは学生の本分を守る為にシーズンを厳格に統制したもので、ルーズになりがちの我国スポーツ界に好個の指針を与へている」という見出しで、引続き

「今年度の各大学チームの戦法展望すると、まず昨年の覇者早大は左或いは右の一方にバックメンを集中し、ラインもセンターを中心に一方へ人員を多く寄せる戦法を得意としているが今シーズンは早大を初め立、慶、法も殆どこのラインを一歩に片寄せるアンバランスドラインを採用している。早大と覇を爭うであろうと思われる明大も今シーズンはこのアンバランスドラインを併用しているが・・・」

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

と以降、左オフタックルの図解の説明をし

「明大は正確な送球者坂本君をセンターに持ちバックスには藤家、安田、浜崎君等の技術的なそして突進力豊かなプレイヤーを有しているので、ダブルウイングバックの戦法によつて絢爛たるプレーを展開するだろう。・・・」

とダブルウイングバックのフルバックスピンプレーを解説して居り、続いてフォワードパスを図解により説明し

「早大の福田、内藤対野村、福島君等のコンビネーション、明大の藤家、浜崎対町田、当山、保田君等の聯絡には30ヤードを越すフォワードパスが間断なく碧空を切つて投げられるものと予想される。

その他慶応にはパッサーとして藤堂、遠見君があり、捕球者としてバックに田村、桑原、エンドに緒方、山片君等がいる。

法政にはパッサーに中上、小野君、捕球者として六井、中田君のエンドがあり、立教にはパッサーに坂口、島居、捕球者には山田、上田君等のエンドが居るが、以上慶法立のチームは早明の如く長距離のフォワードパスよりも短距離のパスに巧緻さをみせるだろう。又立教のフルバック坂口君のキックは正確であり、そのタックルの凄烈勇壮なことはリーグ随一であつて、同君2年振りのカムバックは、他チームの一大脅威であると云えよう」

と予想を書いている。

確かに立教の坂口君のカムバックは他チームとしては大変恐れられた。一時のような馬力は無くなつてはいたが、それでも彼のタックルは骨身にこたえるようなはげしさがあつた。

さて昭和13年度のシーズン入りは、10月10日午後3時から明治神宮外苑競技場で挙行されたが、この試合に先立つて東京学生米式蹴球聯盟の参加校5大学は各校旗を先頭に入場式を行い会長浅野良三氏、理事長ポール･ラッシュ氏の挨拶があつて、引き続き早法戦が開始された。審判はファーラー（主）、ラズベリー（副）、坂口（線）、保田（計）、の4人であつた。

早稲田 19	6－0 7－0 0－0 6－0	0 法政

野村	LE	谷田貝
中橋	LT	小林
北村	LG	深江
中山	C	笹沼
藤岡	RG	呉
島村	RT	西川
福島	RE	河原
野口	QB	中上

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

西岡	LH	六井
岡本	RH	小野
内藤	FB	畑

交代（早稲田）：福田、山田、笹井、松田、神宮、崔、張、尾根、宮本、野呂、渡辺
（法政）：竹中、中野、佐々木

この試合は劣勢の法政が良く健闘して早稲田を押さえたが、交代人員も少なく早稲田のラインに負けたようなものであつた。

第2試合は10月18日午後3時から明治神宮外苑競技場でラズベリー（主）、ファーラー（副）、梶谷（線）、内藤（計）の審判の下に明治対慶応戦が明治のキックオフで開始された。この日の朝日新聞スポーツ欄には例によつて加納氏が長文の予想記事を書いて居た。試合の結果は

明治 27 { 0－0 / 13－0 / 7－0 / 7－0 } 0 慶応

町田	LE	緒方
渡辺	LT	福田
黒川	LG	油士
坂本	C	光吉
花岡	RG	根本
大浜	RT	浮土
当山	RE	山片
保田	QB	桑原
吉本	LH	藤堂
浜崎	RH	遠見
藤家	FB	田村

交代（明治）：福島、北村、江隅、福永、井上、和田、布田、中村、一見、木村、広川
（慶応）：吉田、富田、平田、降矢、田沢、竹村、渡辺、吉田、

この試合は慶応は明大のパス攻撃に弱点をバクロして負けた。

立教対法政の試合は10月26日午後3時から明治神宮外苑競技場で坂本（主）、福田（副）、保田（線）、藤堂（計）の審判で挙行された。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

法政 12 { 6－0 / 6－0 / 0－0 / 0－0 } 0 立教

谷田貝	LE	上田
小林	LT	鈴江
深江	LG	池上
笹沼	C	服部
畑	RG	襄
西川	RT	小黒
河原	RE	岸
中上	QB	鈴木
小野	LH	山田
中田	RH	栗林
六井	FB	細田

交代（法政）：中里、佐々木
（立教）：島、坂口、金子

この試合は立教としては最初の試合でしかも山田、栗林と比較的新しいバックを入れたこともあり、全体的にコンビネーションが悪く更にセンターのスナップバックのコントロールが悪くバックとのタイミングが合わず惨敗した。

この頃の読売新聞のスポーツ欄に「米蹴球界に初の邦人シ大の田代君」と云う見出しでシンシナティ一発の記事が次の様に掲載された。

「野球に代わつて秋の全米シーズンを賑はす大学蹴球界に一際めだつて活躍する日本人がある。これはこの秋からシンシナティ大学チームのハーフバックとなつた田代清君で 168 封度のウェートある巨躯をもち、特にパスを受けてのエンドランを得意とし同大学活躍の中心を承つてゐる、日本人として米国蹴球選手となつたのは同君をもつて最初とするが、同君はアメリカ生れで父君四郎氏は同大学の生物化学教授として令名がある。

米国では今春水上界に躍り出た広瀬、仲間の両選手があり、これ等の二吝があつぱれ米口スポーツ界の中心に活躍し来たつたことは注目に値ひする」

と云うものであつた。

日本人及びその二吝の大学フットボール選手は前にも何人かは居たと思われるが、然し非常に

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

数が少なく珍しいことである。それで日本人として最初と見たのかも知れないが太平洋岸にはまだ居たはずである。この記事の中でパスを受けてエンドランが得意とあるが、これは記事の間違いか或いはパスはフォワードパスではなくセンターからのスナップバックパスのことではなかろうか。然し何れにしても、フットボールの記事が多く出るようになつて来た。

立教対早稲田の試合は11月9日明治神宮外苑競技場で挙行された。例によつて朝日新聞には加納氏の予想が大きく出た。

「早大多彩の攻撃、立教後陣に威力を蔵す」と云う見出しで次の様に書いている。

「二聯覇を狙う早大と、リーグ随一のタックラー坂口君のカムバックで光彩を加えた立教との米式蹴球戦は9日午後3時から神宮競技場で挙行される。早大はリーグ第1戦に法政を3タッチダウンで降ろし持ち前の豪放なプレイを発揮したが、この試合では練習さえしつかりやつてゐたならば犯すこともなかつたらうと思われる反則でチャンスを失ふことしばしばであつた。併し乍らこの対立教戦迄には3週間余を経てゐるので、此等の点は悉く改良されてゐることと思われる。早大が得意とする戦法は強靭なラインを利用して凡ゆる角度にライン突破を企てることであるが、見た目に最も鮮やかな印象を与へる長距離のフォワードパスも早大流の豪胆さで、しばしば30ヤードを超える長投を放つパッサーとしては福田、野口君あり、捕球者としてはエンドの野村、福島、笹井君等があり、フォワードパス完成後ラグビーのパスの如きラトラルパスに移して攻撃を続行して行く巧みさも亦今シーズン早大チームの得意とする奥の手の一つだ。

これに対して立教には如何なる武器があるであらうか。立教はバックメンに鈴木、細田、島君の勇敢なライン強襲者を持つてゐる。これ等のバックメンは走力もありタイミングも良く他のチームに少しも劣るところがないのだが、去る対法政戦ではこれを守つて敵の第2戦の防禦、つまりライン突破後に来る敵のバックメンを防禦する為に球を運ぶ者に先行してラインを抜け敵の第2防陣をつぶさなければならぬ援護走者のタイミングが悪かつた。それで折角ボールキャリアーが快走出来るチャンスもこの援護走者が先を塞いでゐるので味方同士の追突が起るなど不手際を生じてゐた。

又折角数回ダウンを更新してゴール線へ10ヤード程の所へ迫り乍ら暗号の聴き違いからセンターがバックメンの出て来ぬ所へスナップバックして対手に球を取られたりしてたけれども、此等の欠陥は対法政戦の経験で充分補強改良されてゐることであろうから、この対早大戦ではアメリカンフットボールによつて初めてみられる全員の協同動作、球が競技に移されるや否や一斉に各プレイヤーが各自分担の攻撃体型に展開する協同動作の美しさを遺憾なく示すことだろう。

何はさて、立教の立場としては勝敗に捉はれず玉砕的に打突かつて行けるだけ思ひ切つたプレイが出来る訳であるから好天でさえあれば素晴らしいオープンゲームが展開されよう」

と云うもので、前人気をあおる書き方であつた。

早稲田対立教の試合は11月9日午後3時から明治神宮外苑競技場で山田（主）、浜崎（副）、名護（線）、福田（計）の審判で挙行された。結果は

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早稲田 33 { 6－0 / 13－0 / 14－6 / 0－0 } 6 立教

野村	LE	立川
中楯	LT	鈴江
北村	LG	池上
中山	C	服部
藤岡	RG	襄
島村	RT	小黒
福島	RE	岸
野口	QB	鈴木
西岡	LH	島
国本	RH	栗林
内藤	FB	細田

交代（早稲田）：張、崔、屋根田、梶、野呂、渡辺、笹井、山田、梅田、神宮、宮本
（立教）：金子、広沢、小池、山田、鄭、坂口、竹内、永井、松田

この試合ラインに圧倒的強味を持つ早大は、立教ラインを押しまくり優勢に試合を進め、立教のフォワードパスをインターセプトして 3 回タッチダウンする等一方的であつたが、立教も第３クォーターには鈴木から岸への 20 ヤードのフォワードパスに成功し、早大陣に迫り島の中央突破でタッチダウンを挙げ一矢をむくいた。早大の重量ラインは交代者も多く入れ代わり立代りして戦力を温存して常に平均的な力量を保つたが立教のラインは軽量の上に交代も少なく疲労し惨敗した。

11 月 13 日の日曜日には明治が横浜根岸の YCAC で YCAC と試合を行つた。
明治 6－ 0 YCAC

11 月 16 日には慶応対法政戦が挙行されたが、又例によつて朝日新聞には加納氏の長文の予想記事が出た。

「突撃戦の展開慶法米式蹴球予想」と云う見出しで
「慶応が余り技巧を弄せずにバックの走力に依つて前進を計るのに対して法政は慶応に劣らぬバックの突進力に加えてアメリカンフットボールの大きな魅力の一つである複雑なダブルリバースと呼ばれる戦法を鮮やかに使ひこなして一挙に 20 ヤードもの大幅な前進を行ふ。この複

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

雑な交錯したパスが3秒間程の間に行はれるので、見事に行はれた時は見物席から注意してゐても果たして最後に誰が球を持つて走つたのやら眩惑されてしまふ程である。

慶応は何れかといふと、この種、法政が行ふやうなプレイは得意とせず田村、藤堂両君の優秀な走力によつて複雑なプレイを避け早明に比適する強力なラインメンの開けた突撃路を直進したり、或は大きく左右を迂回するエンドランを得意としてゐる。両軍共にバックメンには異なつた特徴があり、従つて法政も全く別な動きを見せるが、まず同等の力量とみることが出来るだろう。

併し乍らラインに重量もあり試合経験の深い慶応にやや勝味があると思はれる。そこで法政の戦法としては慶応のラインメンを如何に捌くかと云ふことがゲームを左右する重大なポイントとなる訳であるが、バックメンがラインの突撃を縦として、主力をオープンの走力戦、つまり法政が最も得意とするエンドランに注いだならば慶応作戦の裏をかいて予想外の結果を挙げることが出来るのではないかと思われる。いずれにしろいま上昇の意気軒昂たる両軍の顔合わせは猛烈極りないと突撃戦の応酬に火花を散らすことであろう」

と云ふ内容的には一寸解せない点はあるが、例に従つて前景気をあおる様な文章であつた。そして初めて加納氏は「米蹴」という言葉を使つていた。

この慶応対法政戦は11月16日午後3時から明治神宮外苑競技場で福田（主）、坂口（副）、ファウラー（線）、野村（計）の審判の下に慶応のキックオフで挙行された、その結果は次の通りであつた。

慶応 33 ｛ 14－6 / 6－7 / 7－0 / 6－0 ｝ 13 法政

富田	LE	谷田貝
福田	LT	小林
平田	LG	深江
吉田	C	笹沼
根本	RG	呉
浄土	RT	西川
山片	RE	河原
田沢	QB	中上
藤堂	LH	藤田
竹村	RH	中田
田村	FB	六井

交代（慶応）：桑原、光吉、遠見、緒方、松尾、渡辺、谷藤

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

（法政）：畑、竹中、小野、山田、佐々木、南

この試合は強力なラインを持つ慶応がオフタックル、エンドランのランニングプレイを駆使し、法政はフォワードパスで対抗したが、後半法政は重量のある慶応のラインに押されラインが疲労し敗退した。

11 月 19 日からは試合場が明治神宮外苑競技場から後楽園野球場に移され、しかも土曜、日曜と云う有利な条件の下で行はれた。神宮外苑の場合はグラウンドが一杯で土曜、日曜の使用ができずウィークデイで試合を行つた為、観集も少なく試合にも気が乗らないようであつた。後楽園の第１戦は明治対立教戦から始り、しかも日本で初めてのラジオによる試合中継放送が行はれた。

その当時であるから民間放送は無く現在の NHK、すなはち当時の JOAK がスタンドにマイクを置いて中継したのである。この明立戦とリーグ最終戦の早明戦の二試合を中継放送した。何れにせよ今迄は全々中継されたことがなく、本当に日本で初めてのラジオによる中継放送であり、他の競技でも野球、陸上、水泳、角力、ラグビーを除いては放送されたことはなかつたと思う。フットボールとしても最も記念すべき日で、フットボールが今後日本で大いに飛躍すべき基礎ともなる日と云うことも出来るであろう。

この明立戦の日は 11 月 19 日で、この日の朝日新聞には例によつて次の様な予想記事が加納氏の執筆で掲載された。

「明の突進防ぐ立、興味集る OB 対外人戦」と云う見出しで

「五大学米式蹴球リーグ戦も、いよいよ後半戦に入つて 19 日には明大対立大の試合が後楽園で行われるが続いて 20 日の日曜日には午後 1 時から横浜外人クラブ対東京オールドボーイズクラブの試合が学生リーグ戦とは別個に挙行される。

明大対立大：このゲームでは明大の旺盛な攻撃力が観衆の目を奪うであろうが、一方立大は短躯乍らスタートダッシュのよい島、細田、鈴木君等の精悍なライン突撃、坂口君の巧妙なフォワードパスで応酬しようが、ラインメンが攻撃にあたつて明大ラインメンの侵入を如何に防圧するかが立大の得点機を左右する重大の分岐点として興味をもつて見られる。

外人対 OB 横浜：外人チームは昭和８年（これは９年の誤りである）学生聯盟の創立と同時にチームを組織して日本に於ける第一回の公開ゲームをその年の 11 月 29 日神宮競技場で学生聯合軍との間に行つた先駆者である。メムバーは巨漢揃いで、ラインは平均 19 貫半、この内北海道で成長し中学時代スキー選手をやり、早大に来てからはハンマー投げ、レスリングもやつてゐた万能選手のボロビョフ君がタックルに頑張つてゐる。

バックではロス主将以下聖林のハイスクールで鳴らしたハムシャー君、最近来朝したばかりのラズベリー君。ラグビーでは全関東 OB 対全在住外人戦にハーフとして出場したハリス君等優秀なプレイヤーを第一線に揃えてゐる。戦法としてはラインの重量を利してライン突撃を最も得意としてゐるが、６尺豊かなラズベリー君等前へ倒れただけで優に 2 ヤードは前進すると云ふ重宝さだ。特色ある戦法としてはシャベルパスと云はれているフォワードパス

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

を行ふ。

東京オールドボーイズ軍の顔ぶれからすると、前5大学リーグのそうそうたるプレイヤーを網羅してゐるが、ラグビーOB界からも有名なプレイヤーが参加してゐる。OB軍はすでに1ヵ月余に亘る夜間練習を芝公園で行ひ、コンディションは正に好調の絶頂にある。OB軍に云わせると、外人は重量があつて多少やり難いが、日本人と違つて下半身に粘りがないから低く体当たりすれば対手の重量を逆に利用して倒すことが出来ると非常な張り切りかたであつた。全然毛色の変わつた準国際的なこのゲーム、果たしていずれに軍配が上がるか全く待遠しいゲームの一つである」と云う物であつた。

明大対立教の試合は11月19日午後3時から後楽園野球場で川島(主)、内藤(副)、藤堂(線)、福田（計）の審判で立教のキックオフで試合が挙行された。結果は次の通りであつた。

明治 14 { 2－0 / 0－0 / 12－0 / 0－0 } 0 立教

町田	LE	上田
高本	LT	鈴江
北村	LG	鄭
坂本	C	島
花岡	RG	襄
渡辺	RT	小黒
富山	RE	池上
広川	QB	鈴木
浜崎	LH	細田
吉本	RH	栗林
井上	FB	山田

交代（明治）：黒川、和田、伴、江隅、保田
（立教）：永井、坂口、松田、服部、小池、広沢

この試合、立教は第1クォーター自陣30ヤードからのパントをブロックされ、そのボールがエンドゾーンから外に出てセイフティーを取られたが、第2クォーターでは鈴木から上田への30ヤードのロングパスが成功し明治ゴールライン前2ヤードまで迫つたが、後援続かずタッチダウンを挙げることが出来なかつた。

第3クォーターでは明治の駿足ランナーの吉本に60ヤードのロングランをされて初めてのタッチダウンを許し、続いて自陣5ヤードのスクリメージのボールをハンブルしエンドゾーン内で

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

明治のタックル渡辺に押さえられて決定的なタッチダウンを取られて惜敗した。
第4クォーターは駿足の吉本をよくマークして走らせないで終了したが、強力なラインと駿足の明治バックの和田、吉本を押さえて善戦したのであつた。

翌11月20日、日曜日は同後楽園野球場で東京学生OBと横浜外人倶楽部（YCAC）の試合が午後1時30分からファウラー（主）、福田（副）、坂本（線）、桑原（計）の審判の下に挙行された。

YCAC	6	0－0 0－0 6－0 0－0	0　東京OB

ホルトン	LE	千輪
ウォーデン	LT	三輪
ヒンメン	LG	網蔵
チャイルド	C	唐木
クック	RG	名護
ボロヴィヨフ	RT	井上
Hソルター	RE	佐伯
ラズベリー	QB	松本
ロス	LH	原
ハリス	RH	笠原
ハムシャー	FB	大林

交代（YCAC）：A.ソルター、スミス、ボーイ、ヴォイヴォーデン
（東京OB）：亀井（立教）、仁井（明治）、米須（明治）、大村（法政）、川島（早稲田）、平林、奈古、梶谷（法政）

YCACも東京OBも色々の人間が集つて居て面白いチームであつた。ボロヴィヨフは日本生れのロシア人で体格は非常に大きく、北海道生れで野球の巨人軍に居たスタルヒン投手の後輩の旭川中学を卒業した。旭川中学当時はスキーの選手をやり、早稲田に入学してからは陸上のハンマー投、レスリング等の選手をしたスポーツマンでYCACに参加していたのである。

又ハリスはYCACの主要なメンバーで体格は小さいがガッチリとして居り、日本生れの為に日本語はベラベラで、YCACでラグビー、ホッケー、レスリング等何にでも顔を出して居た。第二次世界大戦頃からJOAKに入り対米放送をやつたり、又終戦後もしばらくNHKに居て音楽番組を担当したこともある人で、ライスボウルの前の日刊スポーツの座談会に出席してもらつたこともある。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

又ロスはYCACの古い選手で第一回東西対抗にも出場している。一方東京OBにはラグビーOBの明治の笠原、立教の網倉等も参加した。試合の結果はYCACが体力に物を云わせてOB軍を押し第3クォーターにロスからハムシャーへのパスが成功してタッチダウンを挙げて快勝した。

後楽園にグラウンドを移してから土曜、日曜と有利な条件もととのつた為か観集の入りも良く、両日共三塁側スタンドはほぼ一杯になる位の入りがあつた。毎回3千人位の観衆を集めることが出来た。一般にもそれだけフットボールへの関心が高まつて来たのである。

これは昭和9年11月日本にフットボールが移入されてから以来、公式戦の場合には必ず試合場には日本医科大学の整形外科の医師が臨席して居て、怪我人が出るとその処置に当たつていた。そしてその医師の判断で急を要する場合には救急車を呼んで日本医科大学に運んだ。後楽園の野球場の中にも時には白い救急車がサイレンを鳴らして入つてきて観衆を驚かすこともあつた。
又練習等で怪我をした場合でも日本医科大学に行つて治療してもらつていた。病院の整形外科かと云う所は色々の患者が来て居り、特に子供が多く、股間接脱臼等の患者と一緒にマッサージを受けたものである。日本医科大学の整形外科部長の斉藤博士は当時日本におけるスポーツ医学の大家で体育協会の医事部長もやつて居たので日本医大に行く者は単にフットボールだけでなく、水泳や体操、ラグビー、サッカー等あらゆるスポーツのプレイヤーが治療に通つて居た。

斉藤博士の弟子で桜井医師が吾々の担当であつたので、試合の場合には、大抵、桜井医師がグラウンドに来て居た。そして処置料は無料であつた。これはスポーツ医学の研究材料となつていたのである。その代わり治療は仲々手洗いもので、足の捻挫などはバンソウコー1枚で治すと云うようなものであつたが、怪我の多いフットボールとしては大変助かつたのである。

11月5日には明治が関西遠征をして関大と甲子園南運動場で試合をした
明治32－0関大

11月27日の日曜日には早慶戦と明法戦の2試合が行われた。例によつて朝日新聞の加納氏の予想記事は次の通りである。

「早慶より力量勝る。明法戦と併せて玩味、あす米式蹴球部」と云う見出しで
「アメリカンフットボールの早慶戦は27日午後2時半から後楽園球場で挙行されるが、早大は残る明大をも一蹴して2年聯覇の意気に燃え、この対慶大戦にもいささかの油断もなく陣容を整備して居る。慶応も亦今季は期待に反かぬ躍進を続け明大には敗れたが、前衛の堅実味とバックの優秀な走力は早大といへども警戒の目を離せぬところだ。
早大はこの対慶大戦にも大まかなプレイを行ふことであらうが、早大が一挙に30数ヤードにも及ぶ前投を狙ひ、又ラインの片翼を援護に前駆させるエンドランを敢行するかと云うと、早大はその堅固さにおいて5大学随一の前衛を持つてゐるので、4ダウンの内、初めの一回の攻撃でラインを突き、5ヤードの前進を得たとすると、その後の3回の攻撃でライン

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

をつけば１回に１ヤード弱の僅かな前身でダウンを改め続いて新しい攻撃権が得られる。

そこで１回のライン突撃で或る程度の前進を得ると早大は俄然長投、長駆を狙つて大胆なしかも非常にアメリカンフットボール特有の魅力を持つプレイを行ひ出す。これは何時でもラインをつけば予定の前進は可能だからと云ふより所をもつ早大にして初めて十分威力を発揮し得る所だ。

慶大は早大と異なりラインは５大学中早大に次ぐ強さを持ち、バックの藤堂、田村両君の走力も100メートル11秒台の実力は持つてゐるが、まだフットボーラーとしての走法が完璧の域までまだ達してゐないので、十分自己の走力を生かす道を掴み出してゐない恨みがあるが、これを熟知する慶大チームは自ら早大チームと異なつた行き方を持ち、ライン突破に当つては片翼強化を行つて突撃路の完全切開を行ひ、確実な数ヤードの前進を反復していく。

前衛翼の迂回突進には後塵で技巧を弄せず対手の前衛の防禦力が真正面に向けられて味方の前衛と交錯してゐる間にこの危険地帯を突破して行こうと云う即戦即決戦法を採つてゐる。

両チームの力量を比較すると早大に６分の強みを認めぬ訳にはいかないが、何れの競技にしろ早慶の名の下に行はれる試合はまた独得の意義、雰囲気をかもし出し、意外の番狂はせを演じないとも知れない。殊に今期の慶大チームは従来と異なり唯漫然と早大には勝味なしと自ら云うのでなく、慶大として早大の攻撃中警戒してゐるのはフルバック内藤君の好走と福田、野村の聯絡で行はれる長巨離の前投のみだ、と云つてゐるからその意気の程も察せられ、或いは思わぬ番狂わせを実現さすかも知れぬ。

尚早慶戦に先立つて零時半から明大対法大の試合が行はれるが、この試合で恐らく早大と優勝戦に顔を合わすこととなるのではないかと思はれる明大の巧緻な戦法を見、続いて早大のプレイをも併せて観戦出来ると云うことは、両チームを比較研究する上に絶好のチャンスと云うことが出来よう」と云うものであつた。

11月27日午後零時半から後楽園野球場で坂口（主）、島（副）、小里（線）、細田（計）の審判で明治対法政の試合が行はれた。

明治74 ｛28－0／20－0／19－0／7－0｝ 0法政

町田	LE	谷田貝
高本	LT	小川
黒川	LG	深江
坂本	C	笹沼
花岡	RG	呉
渡辺	RT	西川

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

富山	RE	河原
保田	QB	中上
和田	LH	中田
吉本	RH	藤田
大熊	FB	六井

交代（明治）：北村、浜崎、井上、布田、一見、江隅、松平、松本、原山、福永
（法政）：小野、南、畑、竹中、大塚、山田

この日は早慶戦もあるのでスタンドは満員の観衆で一杯になつたが、試合の方は明治の一方的な試合で法政は成す術もなく大敗を喫してしまつた。

早稲田対慶応の試合は引続き午後2時40分から坂本（主）、坂口（副）、保田（線）、島（計）の審判で行はれた。

早稲田 33 { 7－0 / 13－0 / 13－7 / 0－0 } 7 慶応

野村	LE	富田
島村	LT	福田
宮本	LG	渡辺
中山	C	光吉
藤岡	RG	根本
中楯	RT	浄土
福島	RE	山片
野口	QB	桑原
西岡	LH	藤堂
梅田	RH	竹村
内藤	FB	田村

交代（早稲田）：梶、張、笹井、崔、神宮、野呂、山田、北村、屋根田、土井
（慶応）：田沢、谷藤、吉田、福田

この試合は慶応は大いに健闘し、このシーズン早稲田が対手に許したタッチダウンは立教に次いで二度目のものであつた。翌日の朝日新聞には加納氏が「慶大近来の快闘、早大に玉砕」と云う見出しで戦評をのせているが“慶大近来の健闘”とは愉快である。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この数日前十一月二十四日のアメリカ感謝祭の日に横浜根岸のYCACのグラウンドで立教対YCACの試合が行はれた。結果は次の通りである。

YCAC26 { 13－0 / 0－6 / 6－0 / 7－0 } 6立教

十二月五日の各新聞の朝刊のスポーツ欄の一隅に次のような記事が小さく出ていた。その内朝日新聞のを記して見ると次のようなものであつた。

「米式蹴球の安藤君」と黒の縦線が引かれた見出しで

「立教大学アメリカンフットボール部の昨年度の主将であつた安藤眉男君は黄疸のため帝大病院に入院加療中のところ、四日午前十一時死去した。同君は昨春米国へ遠征した代表軍のセンターに選ばれ、又今春は東西対抗戦に関東代表軍のガードに選ばれた名手であつた。葬儀は六日午後一時より佛式により行はれるが告別式は同日一時半から二時迄、淀橋区下落合四ノ一六六七の自宅で営まれる」

と云う記事であつた。

即ち立教の前主将の安藤眉男氏が黄疸の為に死亡したのである。同氏はその年の春卒業と同時に日立製作所に就職勤務していたのであるが十一月初旬より黄疸にかかり帝大病院に入院中であつたのであるが薬石効なく死亡したのである。同氏は現役時代にも一度黄疸を患つた事があるが、それの再発と云えないこともないであろう。黄疸は回を重ねる程重くなるものだそうである。

安藤氏の死亡の通知が吾々の処に入つて来たのは、四日の夕刻の練習の終了後であつた。丁度12月3日に行はれる予定であつた立教対慶応の試合がグラウンドの都合で出来なくなり後楽園で行うとすれば12月中旬になつてしまうのでそうなると色々都合が悪くなるので12月6日に慶応の日吉のグラウンドで行うことになり、この試合には是否勝たなければならないと猛練習をしている最中であつた。そしてその試合を明後日にひかえた4日夕刻に安藤氏の訃報が入つて来たのである。それで直ちに幹部は練習の帰りに安藤家に行きおくやみを申し上げ、翌5日には平常通り練習を行つて、その帰り一同揃つてお通夜に参加した。翌日の葬儀の日は対慶応戦があるので葬儀には参加出来ないので、部員全員がお通夜に参加したのである。翌12月6日の立教チームは安藤先輩の葬儀には参加できないので全員ユニフォームの胸に黒色のリボンの喪章を着けて日吉の慶応のグラウンドに臨んだのである。

12月6日立教対慶応戦は午後2時から日吉の慶応のグラウンドで主審松本、副審六井、線審伴、計審楠木の審判の下に挙行された。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

慶応 32 { 7－0 / 12－0 / 6－0 / 7－0 } 0 立教

緒方	LE	上田
福田	LT	鈴江
谷藤	LG	池上
吉田（辰）	C	服部
吉田（明）	RG	鄭
浄土	RT	小黒
山片	RE	岸
田沢	QB	鈴木
竹村	LH	島
藤堂	RH	山田
田村	FB	栗林

交代（慶応）：光吉、桑原、渡辺、遠見、松尾、富田、平田
（立教）：小池、細田、永井、松田、金子

立教は初めて慶応に大敗してしまつた、安藤先輩には誠に申し訳がない結果に終つたが、選手全員は大変に疲労して居て元気がなかつた。

十二月十日の読売新聞のスポーツ欄には例によつて宇野氏の筆になる早稲田対明治の試合の予想記事が掲載された。

「ラインに強味持つ、早の聯覇濃厚、明大との米蹴王座爭ひ」と云う見出しで

「東京学生米式蹴球リーグ戦は愈よ十一日後楽園で行はれる早明戦をもつて全部終了するがこの一戦は今秋の聯覇爭ひでもあり興味も頗る多い、早大が優勝すれば二年聯続で明治とタイとなるが今秋はその可能性が多い。

まづ早大の強味のうちで第一にあげられるのは強化されたラインである。

平均一八貫を超える重量ラインは十七貫前後の明治よりも優勢であり、殊に島村、中楯の両タックルは一頭他を抜いている。かうしてラインに一日の長を持つ早大としてはライン突破に次ぐライン突破を繰り返して明治のラインを疲労させるのは当然の作戦であり、これに対して明治がどう出るかは観物だ。

軽量の明治が眞つ向からラインを爭ふことの損なことは分り切つてゐるから恐らく極力早大のライン突破を警戒して保田、和田、浜崎、および町田、当山等のフォワード・パスで逃げを打つものと思われる。また吉本のエンドランや大前の中央突破も早大がマークする強

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

味であり、また明治の弱点とされるラインも今迄負傷で欠場してゐた福島、石橋、大浜が加はると一段と強化されるから早大も案外手古摺るかも分からない。さうなるとバックの攻撃に主力を置く明治に有利となるが早大にはライン以外に福田、野口のロングパス、野村、福島、内藤のキャッチングも鮮やかで殊に内藤のオフタックルおよびオフガードのライン突破は明治にとつて脅威的である。

かく見ると両軍のバックは殆ど相似た技と突進力をもつてをり、従つて力量も匹敵しているので結局勝敗の分岐点はラインの強弱にあるといふことになる。明治のラインが杞憂を一掃する頑張りを見せればライン突破を主戦武器とする早大の戦法も蹉跌を来すことになつて勝敗的な興味は依然高潮に達するが、若し逆の場合ーつまり早大のラインが猛威を揮ふとすれば明治のラインは防戦に疲れ果ててブロッキングが出来なくなるから優秀なバックの攻撃を生かすことが不能となつて得点的にも可成り開く率が多い。そのほか昨年のごとく早大は多分この試合にとつて置きのトリックプレーを行ふと思はれるから順調なれば早大の聯勝に終るのではなかろうか。

両軍のフォーメーションがアンバランスとシングルウイングの同じものだけにやり難くそれだけに興味も多いわけである」

と云う長文をのせている。

又同日付の朝日新聞には加納氏が長文の予想を次のように書いている。

「聯覇目指す早大、雪辱期す明大、力と業の正面衝突」と云う見出しで

「五大学アメリカンフットボールの爭覇戦明大対早大の試合は11日午後二時半から後楽園球場で行はれる。

明大はこのところ二ヶ年早大に聯続敗れてゐるので今シーズンこそ覇権を早大の手から奪還しなくてはと、対早大戦に備へて合宿練習を行ひ熾烈な斗志の涵養に努めてゐる。

昨年も一昨年も明大は実に鮮やかな聯絡をもつて各種の複雑なプレイを行ふバックメンを持つてゐたが、前衛陣は強力な早大の前衛に試合が進むにつれて蹂りんされバックに複雑な戦法を運用する時間を与へることが出来ず策戦に粗相を来たして後半力の早大に乗り切られてしまつた。

今シーズンもこの状態には相違なく力の早大、業の明大が覇権を賭けてシーズン最後の熱戦を展開することになつたのだつたが、ラグビーの早明が丁度これと反対で力の明大、業の早大の間に爭覇戦が行はれたのも甚だ面白い対照である。

早大は西岡、内藤、野口の諸君が強力な前衛に護られて一歩一歩力の籠つた突進力を行ひ、又福田、野村間に行はれる三十数ヤードに及ぶ長前投球等を主要武器としてゐるが、最も明大側に恐れられてゐるのはラインを片翼に集中強化してこのサイドを攻めるにあたつて、一般には味方の前衛は対手の前衛を圧へるのであるが、早大は強化したサイドの対手前衛を自由に味方の後陣に誘ひ入れる。そして後陣に入つて来た対手の前衛は味方の後陣で防ぎながら素速く球を運ぶプレーヤーをスクラム・ラインの外線にまで進出させ、その後に来たる対手の防禦をスクラム・ラインに待機してゐた前衛軍の強力な体当たりで排除して、ボールキャリヤーを一挙に敵陣深く突

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

入させようといふ逆手である。
　明大は、これ等数々の早大強襲法を警戒すると同時に前衛の耐久力を猛烈な闘志によつて補ひ、早大の絶大な防禦力をいづれかのサイドに引付け、其の逆を衝く戦法に據ることとならうが、明大が複雑なバックの幻惑戦術によつて早大の防禦をいなすことが出来るかどうか、ここに明大の成否の鍵が秘められてゐると云へよう。
　この試合に先立つて午後零時半からは横浜外人対東京オールドボーイズ軍の試合が行はれるが、去る十一月二十日外人軍は東京OB軍と第一回戦を行ひ、第三クォーターに長身を利して前投球戦法を聯続敢行し、遂にラズベリー、ハムシャー君間の前投球をエンドゾーンに極めて一タッチダウンを得て快勝した。
　OB軍も最後のクォーターに入つてから盛んに前投球を投げ出したが、タイムアップの切迫と共に一挙に敵陣を陥れようと長距離の前投球を狙つたため長身の外人軍に横取りされることが多く、失敗に終わつてしまつた。併しOB軍もこの第一回戦の経験で外人軍に対する戦法を新たに案出し復讐を期して猛練習を行つてゐるので早明の決戦とは又別な興味を呼んでゐる。
　二十貫前後の巨漢揃ひの外人軍に対して、稍小型ではあるが五大学時代の名選手とラグビー畑から往年の名フルバック明大の笠原君も参加してゐるOB軍が、外人軍の重量を逆に利用して低い体当たりで転倒させラインに突撃路を開く壮烈さは、試合が国際的な試合であるだけ観衆には力の入る場面の聯続であろう。殊に笠原君は球を持てばラグビーと同じ様なこの競技で、ヘルメットも被らずラグビーで鍛へた巧妙な走法で外人軍の防禦網へ突入して行く様はなかなかの壮観である。」
　と云うような早・明両チームの写真入の長文の予想記事を載せている。

　この文の中で加納氏は“前衛陣”とか“長前投球”とか新しい言葉を作り出しているのが面白い。“前衛陣”と云うのは当然ラインのことであり、“長前投球”とはロング・フォワードパスのことであり、“前投玉”とはフォワードパスのことである。加納氏は時々新語を作り出す名人であつた。ラグビーの記事を書く時も、“ドロップゴール”を“落球快蹴”と云う漢字を作り出したこともあった。横文字即ち英語を日本語即ち漢字になおして記事をかくのもこの時代の世相を表はしているのでる。

　又明治のラグビーのOBで名FBとして有名な笠原恒彦氏のことをくわしく書いているが、当時明治のラグビーは黄金時代でその中でも笠原氏の名FB振りは有名であつた。彼は明治卒業と同時にそのハンサム振りから日活映画に入社しラグビーの映画に出演したりしたので、アマチュア規程にふれラグビーの試合には出場出来なくなり、よくフットボールの試合に出ていたのである。彼は後に日大にフットボール部を創立するのに功献し又一時日大のフットボールのコーチもしたことのある人である。

　さて十二月十一日は昭和十三年度リーグ戦の最終日であると同時にこのシーズンの優勝決定戦の早稲田対明治の決戦の日である。
　この早明戦の前に東京OB対横浜外人戦が午後零時半から後楽園野球場で主審坂口、副審国島、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

線審ファーラー、計審トードの下に行はれた。

横浜外人 25	6－0 13－0 0－6 6－7	13 東京 OB

ワートン	LE	千輪
オルトン	LT	三輪
ヒンネン	LG	網倉
チャイルズ	C	米須
ボロディン	RG	唐木
ボロヴィヨフ	RT	井上
ソルター	RE	佐伯
ロス	QB	松本
ハムシャー	LH	原
ハリス	RH	笠原
ハック	FB	大林

交代（外人）：ソルター、ラズベリー
（OB）：藤家、本田、平沢、仁井、名護、梶谷

引続いて昭和十三年度リーグ戦の最終戦の優勝決定戦である早稲田対明治戦が同後楽園野球場で午後二時半から挙行された。当日は優勝決定戦とあつて三塁側スタンドと左翼スタンドは観衆が満員となり二階席迄一杯の入りで一万以上の大観衆がつめかけると同時に JOAK 即ち現在の NHK ラジオによる実況中継放送を行つてこれを全国に中継放送した。先日の明立戦に続いて日本のフットボールとしては第二回目のラジオ中継であつた。とにかくあらゆる面から見てリーグ戦の最終を飾る決勝戦にふさわしい雰囲気であつた。

さて試合の方は主審ファーラー、副審坂口、線審国島、計審藤堂で午後二時半早稲田のキックオフで開始された。

明治 26	7－0 7－0 12－0 0－0	0 早稲田

町田	LE	野村

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

渡辺	LT	島村
福島	LG	宮本
坂本	C	中山
花岡	RG	藤岡
大浜	RT	中楯
当山	RE	福島
保田	QB	野口
浜崎	LH	福田
吉本	RH	国本
大前	FB	内藤

交替（明治）：黒川、一見、広川、高木、松平、伴、宮本、井上、布田
（早稲田）：西岡、張、三島、北村、木村

この試合は弱勢を予想されていた明治のラインが強力な早稲田のラインを圧倒して好走者の多い明治のバックをよく早稲田に走らせて圧勝した。

これで昭和十三年のリーグ戦は無事終了したのである。その成績は

優勝：明治	四勝零敗
二位：早稲田	三勝一敗
三位：慶応	二勝二敗
四位：法政	一勝三敗
五位：立教	零勝四敗

と終わつたのである。立教はこの年初めて最下位と云う不名誉な成績を残してしまつた。

12 月十五日には東京学生米式蹴球聯盟審判委員長ファーラー氏が例によつてベストチームを次の通り発表して各新聞はそれを掲載した。

第一軍		第二軍
町田（明）	LE	福島（早）
島村（早）	LT	福島（明）
藤岡（早）	LG	大浜（明）
坂本（明）	C	中山（早）
花岡（明）	RG	北村（早）
小黒（立）	RT	福田（慶）
当山（明）	RE	野村（早）
福田（早）	QB	保田（明）

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

和田（明）　LH　中上（法）
吉本（明）　RH　藤堂（慶）
内藤（早）　FB　大前（明）

この年からファーラー氏は第二軍まで選出するサーヴィスをした。丁度この頃日本の新聞にフットボールに関する面白い記事が出ているのでその二三を写してみよう。

“女子のレスリングに断、加州競技委員会で禁止決議”という見出しで、

“最近のアメリカ女性が米式蹴球にまで領域を伸ばしてヤンキー娘のお転婆ぶりを発揮してゐる折柄、これは又逆に男性スポーツから女性を追出す禁止令が出て注目されてゐる。それは最近女性仲間にレスリングが流行し出したので、アメリカ加州の競技委員会はレスリングが女性にとつて不適当であり野卑なものであるといふ理由で、今後女子レスリング試合は罷りならぬことを決議した。この動議は議長ギースラー氏により提案され満場一致で可決されたものである。”

と云うものである。

このレスリングとはプロレスリングのことではなかろうか。それにしてもアメリカの女性が米式蹴球にまで領域を伸ばして来ているとはほんの一部のものであろうが如何にアメリカではフットボールが盛んであるかがうかがえるのである。

次のものは“米国の選抜米蹴団、今冬佛蘭西に遠征”と云う見出しで、

“ニューヨーク発共同

欧州へアメリカンフットボール普及のため今冬米国本場の蹴球団が佛蘭西に遠征することとなつた。一行はコロンビア、ハーバード、エール、プリンストン、ダートマス、フォドハム等の各大学からピックアップされた精鋭二十二名から成り佛蘭西各地で模範試合を行ふ筈”

と云うものである。

このチームが本当にフランスに遠征したかどうかはその後の報道がないので不明であるが、もし行つたとすればアイヴィ・リーグのメンバーを集めた大変豪華なチームであり、先年日本に来日した南加大学を中心にしたオールスターズ・チームに勝るとも劣らぬチームになつたことであろう。その先年来日した西海岸地区のチームに刺激されて今度は東海岸のチームを編成してフランスに遠征したのではなかろうか。

その当時吾々もヨーロッパではフランスの大学の一部がフットボールをやつていると云うことを聞いたことがあるが或はそんな関係でフランス遠征を試みたのかも知れない。然し又一方においてはこれは計画だけであつて実際には行はれなかつたのではないかとも思はれる。それはそれ以降フランスにおいてフットボールが盛んになつたと云うことも、或は又フランスの大学でフ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ットボールを行つていると云うことも聞かないからである。

その後第二次世界大戦が起りアメリカの兵士が多くフランスはもとより英国、イタリー、ドイツ等ヨーロッパ各地に駐留していたのである。アメリカ軍が駐留している処には必ず彼等はフットボールのチームを作り部隊対抗の試合を盛んに行つた筈である。日本においても盛んに行い、ついには一月元旦に本国と同様にライスボウルと名称をつけたボウルゲームを極東地区の軍の間で行つていたので、当然ヨーロッパにおいても彼等は極東地区におけると同様にフットボールの試合を行つたと思はれるが、それが現在ではヨーロッパの各地においてアメリカ駐留軍以外に現地人の間でフットボールの試合が行はれていると云う話は聞いたことがない。

依然としてヨーロッパに古くから伝つたサッカーやラグビーのことは盛んになつて来たと云うことは聞くけれど、フットボールはヨーロッパのスポーツ報道には全然顔を出さない。もしこの時、東海岸の選抜チームが実際にフランスに遠征し少しでもフランスに普及して来たならば、第二次世界大戦以後もう少しフランスを含むヨーロッパ各地でフットボールが行はれていると云うニュースを聞くことがあると思はれるのだが・・・。

又第二次世界大戦後のヨーロッパ各地に駐留していた米軍の関係もあつてヨーロッパでも少しはフットボールが現地人の間にも普及しそうなものであるが、それが一向に行われないで伝統の古いサッカーとかラグビーが益々盛んになつていると云うことは、日本に駐留していた米軍と同じように彼等は彼等だけでプレーを楽しみそれを現地に普及すると云うことを忘れていたのであろう。普及することを忘れていたと云うよりはそんなことは全然念頭になくむしろグラウンドを専用に接収したりして彼等の施設は充実させて現地人のプレイを妨害するようなこともあつた為、ヨーロッパにおいては逆に普及しなかつたのではなかろうか。

この点については英国人とアメリカ人の気持の全く異つたところである。この点については前にも書いたのでこの位で止めておこう。

然し日本においては観衆の数も益々盛んになつて行く様子が現はれて来て新聞にも折々色々とフットボールの記事がのるようになつた。この年の十一月末日の新聞に次のような記事が出ている。“十万大観衆の激戦将軍に凱歌・・・米口の陸軍海軍米蹴”と云う大見出しでフィラデルフィア特電としてアーミー、ネーヴィー戦を報じている。

> 全米フアンの血を湧き沸らせる陸海軍対抗米式蹴球の第三十九回定期戦は去る十一月二十六日フィラデルフィア市営球技場に十万二千二百十人という今年度最大の観衆を集めて戦はれた。この大観衆の中には陸海軍の将軍や名士高官の顔も見られ、それぞれの贔屓チームに声を限りの声援を送つたが、未来の将軍チームは戦前の予想通り十四対七で未来の提督チームを轟沈して聯勝を遂げ、これで陸軍二十二勝、海軍十四勝三分けの成績となつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

陸軍 14 ｛ 7－0 / 0－7 / 7－0 / 0－0 ｝ 7 海軍

この日空は快く晴れ渡つていたが冷い南西の風が競技場を横切り、フィールドは朝来数百名の人夫を動員して除雪作業を行つて綺麗にされていたが、ラインの外にはカチカチに凍てついた雪が雄高く積み上げられてゐた。

試合の最初は芝生が滑るのと両軍敵状偵察戦に出たため、華々しい場面は見られなかつたが、最初のタッチダウンは突如として陸軍のロング選手の快走によつて挙げられた。即ち自陣二十二碼辺で海軍側のパントを捕つたロングは、軌拗なタックルを降り切り押し掃の長駆七十五碼という痛快無比な疾走に一気に海軍根振袖を陥れ、自らのキックにコンヴァートして七—零とリードしたのであつた。

第二節を迎えた提督側は必死の追撃を開始し将軍側の防備の整はぬ隙にラインを利して遮二無二突撃し、陸軍は盛んにパントして逃れんとしたが遂にクークの二十二碼のロングパスを受けたビート・パウエルは脱兎の如き疾走を示して、陸軍ゴール前一碼に突進した。併し陸軍も好防して僅のところで辛くも食い止めたが海軍はこのスクラメージをクークの右オフ・タックルに実を結ばしめてタッチ・ダウンを返し、ウッドのキックで七対七と盛り返した。

第三節は中盤の一進一退を繰り返して相方相譲らず或は引き分けに終わるかと思はれたが時間一杯のところで陸軍はロングとサミエルのフォワード・パス、フロンチャックとサミエルのリヴァース・パス、更にフロンチャックの中央突破等で海軍の三碼線に突入し最後にウィルソンの左オフタックルで遂に敵堅塁を占拠し、フロンチャックのキック成功して決勝点を奪取した。

第四節の陸軍側は海軍側のロング・パスによる追撃を退けリードを死守し、粉雪、宵闇の競技場に凱歌を奏したのであつた。”

と云う仲々詳細に試合経過を記した記事であつた。

これは当然陸軍士官学校と海軍兵学校の対抗戦で、アーミー対ネーヴィー戦と云はれ、1890年に第一回の試合を挙行したアメリカでも最も伝統を持つ大試合で、毎年十一月最後の土曜日にフィラデルフィアの競技場で行はれている。

これは後日談になるが、第二次世界大戦後日本に駐留していたマッカーサー将軍が朝鮮戦争の終結について時の大統領トルーマンと太平洋の孤島ウェーキ島で会談したことがあるが、この日が丁度このアーミー対ネーヴィー戦の当日であり、方や米本土から飛行機で来たトルーマンも一方日本からウェーキ島に飛行機で到着したマッカーサーもウェーキ島に到着するや異口同音にアーミー対ネーヴィー戦の結果がどうなつたか、をウェーキ島守備隊長に先ず第一に聞いたと云

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

うことがその当時の新聞に出ていた。それ程の大試合であるから昭和十三年の日本の新聞にもその結果が大きく報道されたのも不思議ではないかも知れないが、それには日本でフットボールが予想以上に発展して来た為にこのような記事をのせなければならないような状態であつたと云う方が確実であろう。

それにしてもこの記事の中で将軍側とか提督側と云う言葉を使用しているのは面白い。将軍側とは当然アーミー即ち陸軍のことであり、提督側とはネーヴィー即ち海軍兵学校のことであり、陸軍士官学校と云うのは将軍の卵を育てる学校であつて、一方海軍兵学校は提督の卵を養成する所からこのように呼んだのである。

このようにして昭和十三年の日本におけるスケヂュールは終了したと云うよりは関東学生米式蹴球聯盟のリーグ戦は明治大学の優勝で無事終了したのである。残つたのは昨年の第一回は日程の都合で三月に行つた日本米式蹴球協会主催の第二回東西選抜対抗戦を一月元旦に行うだけとなつた。リーグ戦が終了した後朝日新聞に加納氏がリーグ戦の総評を長文で書いた。

“試合を左右した鞏固な団結力　慶大台頭し活気溢れる五大学米蹴総評“と云う見出しで次のようなものであつた。

“五大学アメリカンフットボールリーグ戦も去る十一日の早明決勝で今季の幕を閉ぢたが、今シーズンは慶大の異常な発展によつて活気は横溢しアメリカンフットボールの魅力を遺憾なく発揮する期待をかけられてゐた。早明戦以外に早慶、慶明と慶大の台頭により最高峰を行く試合の数を増し、年と共に倍加する愛好者に多大の満足を与えることの出来たのはこの競技の普及によつて青年の身体精神知能を鍛錬するという主旨と、時局下青少年に対する期待と完全な一致を見せ喜ばしい発展の跡を示している。

アメリカンフットボールは就れの団体競技にもましてチームワークが絶対的に必要である。

一チーム十一名の競技者は球を運ぶ一名の味方を前進させるためプレイの開始と共に各自が予め分担された相手を防圧して球を運ぶ者に走路を開拓してやらなくてはならない。

決断力、機智も勿論個人の要素として欠くべからざるものではあるが、プレイの主体が予め定められた戦法によつて全員の行動分担が決定されてゐるだけ「完全なチームワーク」の遂行が最も要求されるのである。これには気合の合致ということが必須条件でこの気合の合致、団結心の強度が試合の結果を左右した例は実に少くない。

リーグの第一戦であつた早法戦では、法大が強大な早大に対し勝敗を度外視した玉砕的な戦いを挑んだ結果、法政の団結は意識の範囲を超えて旺盛極りないものとなり、前衛は早大前衛の突破を完封してバックメンに複雑なパスによる一挙十数ヤードの前進を容易ならしめて早大の心胆を寒からしめたことがしばしばあつた。又慶大が明大に対して行つたラインの強襲の如き、また早明のリーグ決勝戦において六分の強味を予想されていた早大を無得点に雲破した明大の快斗の如き総ては、鞏固な団結がもたらした輝かしい勝利であつた。

技術的に見ると早大はリーグ中最強の前衛を有しているので、ライン突破を最後の極め手

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

として残し余裕のある豪放なプレイを行い内藤、西岡、野口君等が全試合を通じてみると最も目覚しい突進を遂げてゐた。

これに次ぐものとして慶大は早大に匹敵する重量のある経験を積んだ前衛を有しバックでは藤堂、田村君の水際立つた進歩によつてラインの強襲に長足の躍進を遂げこの極め手を持つという強味がチーム全体に思い切りのよいプレイを決行させる基となつて慶大に第三位を確保させたのであつた。

優勝した明大は初の対慶大戦には斗志も低調であつたし、従つてチームワークも悪く、ただ個人的の感のよさで慶大の前投球をインターセプトしたり、自己の長距離前投球をものにして得点を稼いだのみだつた。その後も対立大戦では、寧ろバラバラといえる明大今期最拙劣なプレイを演じて、傲令早大と決勝に顔を合せるとしても早大の一方的試合に終わるのではないかと懸念させられた。

併し乍ら明大は第一線プレイヤーである福島、大浜、和田君等の負傷恢復と大前君の参加で陣容は強化され、早大に対する雪辱の意気に駆り立てられ志は純化され白熱点に達したチームを早大に叩きつけることが出来て、遂に早大を完封することが出来たのだつた“

と云う長文の記事でチームワークの重要さを強調した文章であつた。

少し前の事になるがこの年の十一月十九日にはエールにおいて行われたエール大学対ハーヴァード大学の試合の結果が日本の新聞に出ていた。

ハーヴァード大学　７－0　エール大学

この年には日本の新聞にもアーミー対ネーヴィー戦とエール大学対ハーヴァード大学戦の記録が出たと云う事は日本においてもフットボールが益々盛んになつて来た影響によるものが多いと思われるがその当時アメリカにおいてもエール・ハーヴァード戦及びアーミー・ネーヴィー戦は最も伝統のある大試合であつたことを証明するものである。現在のようにアメリカの各大学のフットボールがプロ化し、プロの養成所になつて各大学のチームは爭つてハイスクールの優秀なプレイヤーを奨学資金で入学させ強力なチーム作りに力を入れているのとは異り、フットボールは学生のビッグスポーツであり、フットボール・コードに基くアマチュア精神を重要視した頃であるので学生の伝統試合にフアンが集まる時代であつたのである。

東京学生米式蹴球聯盟のリーグ戦が終了すると翌年一月一日に行はれる東西選抜対抗戦の準備にかかり十二月二十二日日本米式蹴球協会からその陣容が発表された。

先づ関東代表チームはLE山片（慶）、町田（明）、LT福島（明）、島村（早）、LG黒川（明）、ボロビヨフ（横浜外人）、C島（立）、坂本（明）、RG花岡（明）、深江（法）、RT小黒（立）、福田（慶）、RE河原（法）、福田（早）、QB鈴木（立）、中上（法）、LHロス（横浜外人）、ハリス（横浜外人）、RH保田（明）、藤堂（慶）、FB千輪（文理大）、大林（早出）、田村（慶）

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

関西代表チームLE小林（関大）、難波（関大出）、ミルスタイン（神戸外人）、LT今村（慶出）、河野（関大）、LG清水（明出）、楠部（関大）、C桶谷（関大）、吉岡（関大）、RG浜本（関大）、ゾロタレフ（神戸外人）、RT岡本（関大）、本山（関大）、RE李（関大）、藤本（関大）、QB畑（明出）、岩井（関大出）、LH山内（関大）、奥野（関大）、RH藤井（関大）、山上（関大）、FB坪井（関大）、ター（神戸外人）

以上が第二回東西対抗戦出場者として発表された。

又後援の朝日新聞には次のような社告を出した。

「昭和十四年度努頭の盛会が予想される、元日神宮球技場で挙行の日本米式蹴球協会主催、本社後援のアメリカン・フットボール第二回東西選抜対抗戦の入場前売は、銀座プレイガイド本店、銀座三越、上野松坂屋、東横デパート、神田三省堂、銀座地下鉄駅前の各プレイガイド及び神田美津濃運動具店の各所と本社受付で二十三日から取り扱ひを開始した。

入場券は一円（指定席）、五十銭（一般席）、三十銭（軍人学生）の三種類である。」

と云うもので軍人、学生は特別に三十銭とあるが学生の三十銭はわかるが軍人も学生並みに三十銭と割引しているのは当時の時代を反映していて面白い。

又別の社告には

「東西対抗米蹴大会」と云う見出しで「本社後援の東西対抗米式蹴球大会は今春三月東京に於て第一回大会を行ひこの競技の最高峰として成果を収めたが明年度より東京、大阪両朝日新聞社後援の下に東西隔年交互に行ふ事になり第二回の大会は明年一月元旦を期して明治神宮外苑球技場で行はれる事になつた。両軍の陣容は東西選抜委員会によつて近く発表される。

於　：明治神宮外苑球技場

主催：日本米式蹴球協会

後援：朝日新聞社

と云う社告であつた。昭和十四年は一月元旦に恒例として行はれる慶応対京大のラグビー戦が関西の花園で行はれる年で東京の明治神宮外苑球技場は使用されないのでフットボールの東西対抗戦を行い、翌昭和十五年の元旦はラグビーが東京で、そしてフットボールが関西にと交互に行うように計画され、その東京においても関西においても東京、大阪朝日新聞の後援で行はれることも決定した。

この東西対抗も経費、宣伝その他において朝日新聞に一切負担をかけるのではあるが、日本協会はあくまでも主催権を持ち、世話になる朝日新聞に主催権もしくは共催権を与えず、後援者の位置しか与えない日本米式蹴球協会の確固たる決断は立派なものであると同時に、日本協会の決意を諒として後援者の立場にあまんじて居る朝日新聞の態度も又立派であると云うべきではなかろうか。

又この日のスポーツ欄にはアメリカ発電で「米口本年度のNo,1集」と云う記事が出ていた。それによれば

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

「本年も愈々押迫つて来たが近着のインターナショナル・ニュース写真によると 1938 年度米国スポーツ界のナンバー・ワンとして左の人々が挙げられている。筆頭はデ杯庭球戦を始めとしてウィンブルドン、全米シングルス選手権と主なる試合に全部優勝した庭球界の王者ドナルド・ハッチ君で、これに対し女子庭球界では 1936 年に全米女子シングルス選手権を獲得し今年再び返り咲いて優勝したアリス・マーブル嬢が第一位、漕艇界ではアナポリス兵学校のネーヴィー・クルーがプーキープシー競漕に優勝した功で全米第一と認められ、水泳では我が国にも来朝してお馴染みのキャサリン・ロール嬢が今年は一哩自由型、八百ヤード自由型、三百米混泳の三種目に全米女子選手権を得、水の王者に選ばれている。

黒人の鉄腕選手ヘンリー・アームストロングはフェザー、ウエルター、ライトの三級の覇権を制して挙斗界の第一人者となり、陸上競技ではカンサスの雄グレン・カニンガムが問題の一哩に未公認ながら 4 分 4 秒 10 の吞界新記録を出して NO.1。又、米国学生スポーツの華アメリカンフットボールではテキサス・クリスチャン・カレッヂのデーヴィー・オブライエン君が全米随一の花形選手に選ばれ、野球ではニューユーク・ヤンキースがワールド・シリーズに三度制覇の輝く記録と共に最強チームとして挙げられている。競馬界では今年度最優秀馬としてシービスケット号が人間なみに顔を出し、アマチュアゴルフではオーク・モント大会の覇者ニューユークのウイリー・ターネサ君が出てゐる。」

と云うもので、この当時はフットボールではまだまだプロ選手の名前は出て来ないで大学のフットボールの選手が選ばれる例が多かつたと云うのもまだプロフットボールの人気が余りなく、野球はプロ、フットボールは学生のものと云う気風がアメリカにも多かつたためであろう。学生フットボールの選手は卒業後はプロフットボールよりプロレスに行く方が多かつた時代であつた。現代のプロ・フットボールの隆盛と比較して見ると隔吞の観がある。

又この日のスポーツ欄の囲み記事の「制覇の苦心を語る」と云う読み物には米式蹴球の巻で明治の松本瀧蔵部長と黒川主将の談話が大きく出ていた。その中で松本部長は次のように云つている。

「技術的なことは黒川主将が語らせうが明大が若し早大に負ることがあるとすれば技術ではない。アメリカンフットボールの実力には三つの要素がある。第一に意気、第二にも意気、第三は団結である。この要素の欠如以外には我がチームが早大に劣るところはない。諸君に愛校心はあるか、あるなら行つて勝つて来い。とまァ試合前に元気をつけたんです。後で聞いたことですがこれが非常にチームの斗志を旺盛にしたと云ふことですが・・・。（中略）

これは米国の話ですが、米国のアナポリス海軍兵学校にはペルリが尊き方から賜つて日本から持ち帰つたといはれる釣鐘がある。丁度陸軍士官学校との対抗戦の折がカレッヂ・スピリットも最高潮に達する時で、海軍が勝つと得点の数だけ正選手から順々にこの名誉の釣鐘を一つづつ打鳴らす栄誉に沿することが出来るのです。それで得点が少い時には全員にこの光栄の一打が廻つて来ないので皆は精魂を盡して一点でも得点の多からんことを希つて奪斗するのです。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この行動は海軍兵学校最大の感激であつて、我が国の釣鐘が計らずも米国海軍上官の士気を鼓舞する老徴となつているのであります。我々明大にもこのやうな若人の意気を象徴することの出来る何かが欲しいと思つて居ります。」

と前にも書いた日本の釣鐘の話をのべている。

さて一月元旦の東西対抗戦に備えて東軍は芝公園球技場で、西軍は関大のグラウンドで各々合同練習を開始した。同時に朝日新聞では新聞紙上で「米式蹴球の見方」を聯載したり、或は合同練習の状況、予想等を聯日掲載して前人気をあおつていた。

この試合の両軍のコーチは東軍は立教の坂口哲夫、西軍は明治OBの畑弘が担当し、特に関西はリーグ戦がない為十一月中旬よりこの試合に備えて合同練習を続けていた。そして西軍は十二月三十一日大晦日に全員揃つて上京し外苑の日本青年館に宿舎をとつた。

昭和十四年一月元旦第二回東西選抜対抗試合は二時から開始されたがそれに先立つて両軍の入場式、それから皇居、明治神官の遥拝、国旗掲揚に続き浅野会長の開会の挨拶等の儀式を行つた。皇居および明治神官遥拝の儀式等は当時どのスポーツの試合においても行はれていたのは非常時下の影響であつた。

当時は曇天であつたが風がなく、その点は良かつたのであるがグラウンドは霜どけのため泥濘状態となり選手は思うように動けないような有様であつた。

主審松本、副審ファーラー、線審原、計時名護の四人の審判の下に午後二時関東のキックオフで試合は開始された。

関東 63 { 21－0
19－0
23－0
0－0 } 0 関西

山岸	LE	幸
島村	LT	岡本
黒川	LG	浜本
坂本	C	福谷
花岡	RG	吉岡
福島	RT	河野
河原	RE	小林
保田	QB	畑
福田	LH	藤井
藤堂	RH	山内
田村	FB	坪井

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

交替（関東）：千輪、大林、ロス、笠原、中上、鈴木、福田、小黒、深江、島、野村、町田

（関西）：藤本、本山、楠部、難波、轟、山上、奥野、上村、清水

試合経過は関東の霜解けグラウンドに不慣れな関西軍は足をとられて動きに制限を受け、先づ関東のキックオフをフアンブルしそれをリカバーされ、関東軍の攻撃となり、第一プレイで関東福田中央を抜けて三十ヤード快走一気にタッチダウンし、試合開始四十秒で早くも得点し、それ以後は関東の一方的試合となつて 63－0 の大差で関東は二聯勝した。

この日曇天ではあつたが明治神宮外苑球技場には初詣で帰りの人も集めて約一万五千の観衆がつめかけて大変な盛況であり、フットボールは益々日本人の中に定着して来る風調をみせていた。この東西選抜戦で昭和十三年度の公式戦は完全に終了をつげて春の練習期間迄はシーズンオフとなつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この年の三月には次のような新聞記事が出ていた。

「本場の米蹴団を引率し、ハンター氏日本訪問を計画」と云う見出しで

「ニューユーク特電十三日発、ニューヨーク・ジャイアンツの選手でしばしば日本へ米国の野球選手団を聯れて行つたハーバード・ハンター氏は近く日本へ米式蹴球選手団を派遣する計画を持つている。同氏は本社記者に対して十三日次の如く語つた。

日本では米式蹴球が次第に普及しフアンも少なくないから自分は近く米国の職業蹴球団又は先年マイアミ、カリフォルニアから渡日した学生蹴球選手団よりも優秀な学生チームを同伴して再び渡日したいと計画している。

東京では前後六回、関西で数回エキジビション・ゲームをやり度いと思つている。日本は支那事変で忙しいが流石は大国民であるだけ事変は事変として平常の如くスポーツに精進して綽々たる余裕を示している。自分が蹴球団を統率して渡日するも決してそしりを受ける様な事はないであらうと確信している」

以上のような記事である。

ハンター氏はプロ野球のチームをつれて日本に来たことのある人で、日本にフットボールが盛んになつたことに目をつけてプロ或は学生のフットボールチームを聯れて日本に来てエキジビション・ゲームを行うと云う計画を持つていたのであろう。これは日本から招待状を送つたものではなくハンター氏が企画したものであつて、ハンター氏は現在で云う一種のプロモーターであつたのであろう。そして一もうけをたくらんでいたのかも知れないが、この計画は日支事変の最中であるのと、余りもうからないとハンター氏が考えたのか遂に実現することはなかつたが、アメリカでも日本のフットボールが盛んになつて来ていることがだんだんと認められて来たことを表現しているものである。

昭和十四年五月二十一日午後六時半から朝日新聞社記念室で東京学生米式蹴球聯盟の役員会を開催し、前年度の会計報告、理事の改選等を協議し、昭和十四年度の理事は

理事長：ポール･ラッシュ

書記長：小川徳次

会計：松本（正）

理事：松本瀧蔵、山東、岩下、元村、宇野、伴、藤堂、田村、中山、神宮、六井、梶谷、細田、島袋、加納

と決定したが、この理事の中には岩下、矢村、宇野等とラグビー畑の人が入つているが、これれは何れも新聞記者であつた。これは一つにはマスコミを上手く利用しようとしたためである。

又この役員会において早稲田及び慶応が帯同して朝鮮に渡り京城で公開試合を行い、又北支、満州に代表チームを派遣する件も協議され

一．早慶両校を京城に派遣する件、二十八日京城に於て朝鮮に於ける初の公開試合を挙行、一行は選手三十名でファラー氏が引卒して行く。

二．北支及び満州国遠征に就ては明年一月或は三・四月の頃、代表軍を派遣する予定で準備を進める。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早稲田、慶応帯同で京城でのエキジビション・ゲームは在京威の早慶の卒業生等の招待で遠征が決定していたのを聯盟で正式に認めたものであつて五月二十四日には東京発と云うことが決定したのである。

その後の新聞には次ぎのようなことが報道されている。

「東京学生米蹴代表明春北支、満州へ」と云う見出しで

「東京学生米式蹴球聯盟の早慶両軍は二十四日東京駅発京城へ遠征、二十七日京城府営球技場で試合後三十一日帰京するが明春は聯盟代表軍が北支、満州へ遠征することに決定、ポール･ラッシュ理事長に折衝を一任した。現在北支では燕京大、北京大にカソリック大学の三校がチームの組織を計画しているが実現不可能の場合は聯盟軍のデモンストレーション・マッチを行ふ筈」

と云うものであつた。

早慶両校の帯同朝鮮遠征は前にも述べたように在朝鮮の早慶両校の卒業生の招待によるものであり、当時はまだ朝鮮にはフットボールを実施しているチームがないので、フットボールの早慶戦京城場所と云うところである。一つにはフットボールの朝鮮普及も兼ねて行はれたものであるが、第二の北支、満州遠征と云うのは、当時に日本で徐々に盛んになつて来たフットボールを北支、満州でもチームを作つてプレイをしようと云う傾向が見られたので計画されたのであつた。まだこの遠征を決定した時期にはチームは無かつたのであるが、燕京大学、北京大学、カソリック大学にフットボールチームを組織するような傾向があつたことは事実であるが、これはその傾向がその時期にあつたと云うだけで現実にはチームは出来なかつたのである。

それは当然のことであると思はれる。当時は日支事変の最中であり、北支、満州一帯は日本軍の占領下にあつたのだが広大な中国大陸のことであるから占領区域内において通常に何所かで戦斗が行はれていた時代である。フットボールのチームを作るどころの騒ぎではなかつたのである。

結局この第二の北支、満州遠征はそのような事情で現地にチームがないと云うことと、翌昭和十五年はますます日支事変は拡大し、日本も非常時に突入し軍国調は益々国内に拡大して、とてものんびりと北支、満州遠征など出来る様相ではなくなつたのでこの計画は取り止めとなり実現しなかつたのである。

この年の五月十三日に立教対関大の第三回定期戦が甲子園南運動場で午後二時十分から主審林、副審畑の審判の下に挙行された。その結果は

関大 27 { 0－0 / 14－0 / 0－0 / 7－0 } 0 立教

藤本　　LE　　吉田

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

河野	LT	安藤
楠部	LG	裴
吉岡	C	永井
村沢	RG	鄭
本山	RT	小黒
幸	RE	小池
坪井	QB	島
藤井	LH	山田
轟	RH	松田
奥野	FB	金子

交替（関大）：山上、古山、小河、中野、深井、貴志、竹内、多賀野、中村、福井、山下、米今
（立教）：岸、小林、貫井、山城

これでこの立教対関大の定期戦は一勝一敗一分と云う五分の成績となつたが、関大としては前年の法政に一勝した同部創立以来の二勝目を立教から得て意気大いに挙つたのである。

一方朝鮮遠征の早慶両チームは五月二十四日午前十時三十分東京駅発の急行列車で出発し二十七日京城市営球技場で早慶対抗戦を行つた。その結果は次のとおりである。

早稲田 16 { 0－0 / 0－0 / 0－2 / 0－0 } 2 慶応

一行は翌二十八日夜京城発列車で帰路についた。なおこの両チームの監督は聯盟理事の梶谷正明氏に引率されていたのである。

この朝鮮遠征の帰路慶応は大阪に下車、甲子園南運動場で関西大学と第五回定期戦を行つた。その結果は

慶応 14 { 0－0 / 7－0 / 0－6 / 7－0 } 6 関大

で慶応が五聯勝した。然し関大の実力は年々成育して来た。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

こうして昭和十四年の春の練習シーズンを各校共終了した。この年の七月には満州のソビエートと満州の国境ノモンハンにおいて日本及び満州軍とソビエート軍が衝突し大激戦を展開した。これが有名なノモンハン事件である。両軍共戦車、飛行機を動員しノモンハンの砂漠の平原に大戦斗が行われたのである。国内においてもそれ迄相手にしていた弱体の中国軍と違つて大国ソビエート相手とあつて一段と緊張したのである。満州に駐留していた日本陸軍の内でも最も精鋭と云はれた関東軍も総力を挙げて応戦したのであるが、敵は世界にも冠たる大陸軍国のソビエートであり、その装備も優れ状況は容易ならざるものがあり、緒戦に苦戦した日本軍は兵力を増強し八月には第二次ノモンハン事件へと進展していつた。

第二次ノモンハン事件のおいてもソビエート軍は頑強に抵抗しその結果は見通しがつかない様相を示し、或は日ソ戦爭に迄発展するのではないかと心配されたが九月十五日に日ソ間に停戦協定が成立し、ノモンハン事件も終結したのであつたが、二年間に亘る日支事変が益々深身にはまつて行くと同時のノモンハン事件と戦爭はいよいよ深刻な状態になり、何時平和が日本に帰るか見当もつかなくなつて来た。

国内においては物資はだんだん不足して来て衣食についても配給制が実施されるような様相になつて来た一方、軍の尻馬に乗る一部官僚の指示により国民の戦意昂揚熱にあほられて、国民の間には国家意識が旺盛になつて来ると共に官憲による圧力も強力なものとなつて来た。一方外国は中国援助の意志を示す国が多くなり、日本に対して中国よりの撤兵を強国に申入れ、日本に対する経済封鎖の行為に出るようになり、日本は孤立状態となつた。

一方ヨーロッパにおいても戦雲は急を告げ、この年即ち昭和十四年九月にはヒットラーのナチスドイツ軍は遂にポーランド進攻を開始し第二次世界大戦の口火は切つて落されたのである。このように地球上の東西の大国がその地域において各々戦斗を展開し世界は混乱状態になつた大変な年であつた。

吾々フットボールの先輩も殆ど兵役の義務について外地に或は内地育にと国民の責務を果す任務について行つた。中には外地ですでに戦死をした先輩も出る位の非常時であつた。

このような物情騒然たる中に九月一日から昭和十四年のフットボールシーズンは開始され、各校は九月一日から各々合宿練習を開始したのである。昭和十四年度東京学生米式蹴球聯盟のリーグ戦日程は九月十七日午後七時から丸ノ内アメリカンクラブで理事会を開催し、スケジュールを決定した。グラウンドは全試合後楽園野球場を使用することも決定した。そのスケジュールは次のようである。

十月三日	慶応対法政	
十月十日	明治対立教	
十月十九日	慶応対立教	
十月二十一日	早稲田対 YCAC	於横浜 YCAC
十月二十六日	明治対慶応	
十月三十一日	早稲田対法政	

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

十一月四日　　明治対 YCAC　　於横浜 YCAC
十一月十四日　　早稲田対立教
十一月十八日　　立教対 YCAC　　於横浜 YCAC
十一月二十三日　　明治対早稲田
十一月二十六日　　法政対立教
十二月二日　　明治対 YCAC　　於横浜 YCAC
十二月九日　　明治対法政
十二月十六日　　慶応対 YCAC　　於横浜 YCAC

以上のように決定したのである。

その他にこのシーズンからは試合中、チャージド・タイムアウトその他のタイムアウトの場合にグラウンドに飲用水を持ち込むことを禁止した。これは今迄はタイムアウトの場合ベンチからバケツに水を入れてグラウンドにウォーターボーイが飲料水を運び、グラウンドの選手がそれを飲んだり、うがいをしたりしていたが、それがスタンドの観衆から見ると何か奇異に感じられたのであろう。事実グラウンド内でタイムアウトの場合に水を呑むと云うようなスポーツは他には余り見当らない。そのことが新聞記者内にも色々と批判があつたので、この際禁止しようと云うことになつたものである。もし水をどうしても呑まなければならないような時には審判の許可を受けてそれが認められた上で呑まなければならないことにした。

もう一つは試合中に審判に抗議を申し込むことの不愉快さを一掃するためにラグビーのように審判は絶対であると云う主義を採用した。これらは多分に当時の時代を反影して、日本化したフットボールを行うことになつたのである。

昭和十四年の春には各校共、日本にフットボールを創設した当時からの功労のある優秀な選手を多く卒業させた。
明治では黒川、花岡、渡辺、坂本、布田、福島、安田等
早稲田では内藤、西岡、野口、島村、北村等
立教では池上、坂口、細田、鈴江、栗林、服部
と何れも日本のフットボール創立の功労者許りであつた。

ただ、法政は一人の卒業者もなく、慶応も光吉一人と云う状態でその点においては後進の法政と慶応は恵まれていた。その為に特に慶応はフットボール部創立の時に樹てた五ヵ年計画の最後の年でもあり卒業生も少なく、実力的に大変有望視されていた。

第一試合の日は十月三日であつたが恒例によりこの日の後楽園野球場で各校の選手はユニホームを着用して、各校の校旗を先頭にして入場式を行い、三塁側スタンドに向つて整列し、宮城を遙拝、明治神宮を遙拝し、戦没兵士の英霊に対して黙祷をささげ、皇軍の特兵の武運長久を祈り、国旗を掲揚し、明治より優勝のトロフィーの返還をし、その後ポール･ラッシュ理事長の開

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

会の挨拶等長時間を要した。これもこの時代を反響し各スポーツ共同じような開会式を行うのを例としていたのである。吞はまさに非常時の真只中にあつたのである。

引続き慶応対法政の試合が午後二時二十五分から開始された。

主審松本、副審ファラー、線審島、計審町田、キックオフ法政

慶応 13	6－0 0－0 7－6 0－0	6 法政

緒方	LE	佐々木
福田	LT	持田
渡辺	LG	宇賀神
吉田（辰）	C	笹沼
吉田（明）	RG	深江
浄土	RT	中島
山片	RE	作前
遠見	QB	六井
田村	LH	国本
竹村	RH	小野
藤堂	FB	藤家

交替（慶応）：富田、辻田、平田、松尾、谷藤、平川、佐藤、田沢、近藤
（法政）：中上、飯塚、中里、坂田

相方実力伯仲しリーグ戦開幕をかざるのにふさわしい好ゲームであつたが結局はラインの強い慶応が勝つた。

十月十日には明治対立教の試合が挙行された。これに先立つて各新聞にはこの試合の予想記事が出た。

東京大学米式蹴球リーグ第二戦は十月十日午後三時から後楽園野球場で行はれた。

主審梶谷、副審沖、線審藤堂、計審中山、キックオフ明治

明治 47	27－0 7－0 13－0 0－0	7 立教

町田	LE	小池

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

伴	LT	広沢
井上	LG	襄
寺田	C	永井
谷	RG	小堀
高木	RT	小暮
当山	RE	岸
浜崎	QB	杉山
吉本	LH	鈴木
坂本	RH	金子
和田	FB	山田

交替（明治）：川島、小浜、福永、高木、平沢、河島、松平、宮田、大浜、泉、山本、李
（立教）：島袋、金、貫井、上田、松田、鄭、安藤、山城、吉田、平

この試合は両チーム共ラインは互格に斗つたがバックに明治は一日の長があり、特に明治の得点の殆どはフォワードパスによるもので明治のバックのフォワードパスの優秀さと立教のバックのパスディフェンスの甘さがこの大量得点となつて現はれた試合であつた。

十月十九日東京学生米式蹴球リーグ戦第三日目慶応対立教の試合は後楽園野球場で午後三時から行はれた。この試合にも多数の観衆が集りフットボールの人気は益々盛んになつて来た。
主審松本、副審黒川、線審伴、計審福田、キックオフ慶応

慶応 15 { 0－0 / 6－7 / 0－0 / 9－0 } 9 立教

富田	LE	小池
福田	LT	小黒
渡辺	LG	襄
吉田（辰）	C	上田
吉田（明）	RG	小堀
浄土	RT	広沢
山片	RE	岸
桑原	QB	鈴木
竹村	LH	山田
田村	RH	金子
藤堂	FB	杉山

交替（慶応）：平川、遠見、緒方、津上、田沢、松尾、近藤、平田、谷藤、藤岡、佐藤（洋）、辻田、永松

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

（立教）：永井、金、鄭、島袋、戸

この試合は立教のラインは強く、強力を誇る慶応のラインを押し気味に試合を進めたがメンバー不足による疲労が徐々に現はれ、遂に慶応に押し切られたのであるが惜しい試合を失つてしまつた。

リーグ戦第四試合は十月二十八日午後一時から後楽園野球場で挙行された。この試合と翌日の早稲田対法政の試合の予想を例によつて加納氏は朝日新聞に長文をのせた。その為か観衆も大勢入り盛況であつた。特に加納氏の文の中の慶応の五ヵ年計画が完成し、慶応の力量について力説したのが効を奏したのかも知れない。

主審マイズナー、副審島袋、線審カーディナー、計審福田、明治キックオフ

明治 26 { 20－0 / 0－0 / 0－0 / 6－0 } 0 慶応

町田	LE	富田
大浜	LT	福田
井上	LG	渡辺
寺田	C	吉田（辰）
谷	RG	吉田（明）
高本	RT	浄土
当山	RE	山片
福永	QB	桑原
和田	LH	竹村
浜崎	RH	田村
畑	FB	藤堂

交替（明治）：富田、泉、河島、李、伴、松平、鈴木、山本、川島、吉本、小花
（慶応）：緒方、辻田、平川、松尾、谷藤、遠見、近藤、佐藤、藤関、平田、津山、田沢、中野

この試合慶応は強力なラインで明治を押す作戦であつたが、明治の方が一枚上で第一クォーターに走力のあるバックを縦横に走らせて二十点と云う大量得点を挙げ一方的に慶応を押し切つた。

続いて十月二十九日にはリーグ戦第五試合目の早稲田対法政の試合が行はれたが、これに先立つて立教と関西大学の試合が行はれた。これはこの年から東京学生米式蹴球聯盟が関西で唯一の

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

チームとして試合相手のない関西大学をリーグ戦開催期間中に二回東京に招待して東京学生米式蹴球聯盟校と試合を行い関西大学の実力の向上と関西地区にフットボールの普及を目的として実施されたもので、第一回戦は立教と対戦し、第二回目は十一月二十六日に慶応との対戦が組込まれていたのである。いわば東京学生米式蹴球聯盟としては関西援助に力を貸す為の努力の現はれであつたと云うことが出来る。

十月二十九日立教対関西大学戦は、午後零時半より後楽園野球場において主審梶谷、副審伴、線審藤堂、計審田村で立教のキックオフで開始された。

立教 7	0－0 7－0 0－0 0－7	7 関大

金	LE	藤本
広沢	LT	本山
襄	LG	村沢
上田	C	吉田
小堀	RG	楠部
安藤	RT	河野
吉田	RE	幸
鈴木	QB	坪井
島袋	LH	藤井
金子	RH	轟
山田	FB	奥野

交替（立教）：小林、小池、鄭、貫井、永井、小黒、山城、岸、杉山、松田
（関大）：福井、古山、中村、深井、中野、竹内、山下、小河、多賀谷、山上、米谷、徳永、庄野

この試合関大を押し気味に試合をしたが遂に引分けに終つた。

続いて、同日午後二時半から東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦第五試合目の早稲田対法政戦が同後楽園野球場で挙行された。
主審松本、副審沖、線審黒川、計審伴、早稲田キックオフ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早稲田 26	7－0 6－0 6－0 7－0	0 法政

笹井	LE	佐々木
金根田	LT	持田
梶	LG	宇賀神
中山	C	深江
雀	RT	富山
山田	RE	作山
宮本	QB	中上
張	LH	国本
土佐谷	RH	藤沢
名桑	FB	六井

交替（早稲田）：津元、福島、藤岡、加藤、相吉、太田、唐沢、福田、今村、村木、神宮、野呂、梅田、中楯、平山、土井
（法政）：藤家、中島、小野、矢吹、飯塚、坂田、相庭、中里

この試合は今シーズン早稲田の初試合であるので早稲田の今シーズンの実力を知る為に非常に興味がもたれる重要な試合であつたが、早稲田は予想外にラインが強く法政のラインを圧倒して各クォーターに得点を挙げ楽勝し本年も早稲田強しの感を持たせた。

十一月四日には明治が YCAC と試合をする予定であつたが、都合により法政が対戦することになり横浜根岸の YCAC のグラウンドで挙行された。その結果は次の通りであつた。

YCAC14	6－0 8－0 0－0 0－0	0 法政

十一月十六日は東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦第五試合目の早稲田対立教の試合が、午後二時四十分から早稲田の東伏見のグラウンドで、主審松本のもとに早稲田のキックオフで行はれた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

早稲田 59 { 6－0 / 33－0 / 6－0 / 14－0 } 0 立教

笹井	LE	金
崔	LT	広沢
梶	LG	襄
中山	C	上田
野呂	RG	小堀
屋根田	RT	小黒
山田	RE	小池
岩本	QB	杉山
今村	LH	金子
村木	RH	戸
神宮	FB	島袋

交替（早稲田）：名桑、土佐谷、野村、津元、福島、中楯、月早、加藤、張、梅田、福田、平山、唐沢、相吉、土井、加賀谷、近藤、中田、小田
（立教）：吉田、安藤、貫井、松田、永井

立教は負傷者が多く交替要員も底をつきメンバーの多い早稲田の下に屈した。早稲田は法政戦以上に好調に試合を進め一方的に大勝した。

十一月二十三日には又もや優勝決定戦とも云うべき明治対早稲田の試合が行はれた。
これに先立つて東京の各新聞にはこの予想記事を大々的に掲載した。その内で加納氏の書いた朝日新聞の予想記事には次のように書いている。

“共に無疵の早明、白眉の爭覇戦へ、光味を唆る米蹴球”と云う大きな見出しでその前文に

「シーズンの始から関東の覇を爭ふものと目されていた早明は予想に違はず共に無疵、明大は対法大、早大は対慶大の一試合を残して二十三日午後一時から後楽園球場で事実上のリーグ戦爭覇戦を挙行することになつた。

この一戦こそは体格の相違こそあれ、精神的にも、技術的にも十万余の観衆を熱狂させる本家米口のビッグ・ゲームに較べるも何等遜色のないものである。」

と少々オーバーな文章で、引続き長文の予想記事を書いている。

「本場の米国では、観衆の好奇心を満足させるため、職業選手間の試合では六十ヤード或は七十ヤードの超前投球を狙ふことが流行となつてアメリカンフットボールの華々しい場

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

面をのみ点綴することに腐心する結果、防御側の前衛に人員を削つて広大なバックの地域に配置し攻撃側の超長前投球に備へることとなつた。

自然この観衆に対する反響は、学生の試合にも無影響ではあり得ず、学生のプレイもこの悪傾向に支配されて、質実剛健の気風を養ふ競技本来の使命を侵される危険を感ずるに至つた。

そこで今シーズンは競技規則に大改革が加へられ、攻撃側前衛は両翼の二名を除いて中間の五名は前投攻撃を行ふ場面に限つてその時のスクラムラインを超えて前進してはならないこととなつた。我国の現状は幸いにもこの種、米国のおける過ひに妨げられるに至つてはいないが明大の行ふ長前投攻法の豪快味は、観る者の目に深く鮮やかな印象焼付けることであらう。」

ここにも書いているようにこの頃から徐々にプロフットボールが盛んになつて来たのである。勿論プロフットボールは学生と同様な規則及び戦法を使用していたのでは伝統のある学生フットボールには太刀打ち出来ないので、規則も学生と変つて変化に富んでそしてもつとラフな見て面白いように変え、又戦法も派手なプレイを多く採用した。

従つて六十ヤード、七十ヤードのロングパスを採用して観衆の関心を集めるように努力しプロの隆盛を計つた。それにつれて学生のフットボールもアメリカでは段々プロの戦法に似たようなものになつて来た。それでこの年からN.C.A.A（米口学生体育協会）では学生フットボールの規則の一部を変更して学生フットボールのプロ戦化を防禦するように改革した。その一例が加納氏の書いているように攻撃側のスクリメージラインに居るラインメンの内両エンド以外のラインメンはフォワードパスの場合は、そのスクリメージライン内に停止していなければならないことに変更された。それ迄はフォワードパスの場合の両エンド以外のスクリメージラインメンは勿論相手側のラインの侵入を防禦してパッサーに充分の時間を与えるべく努力するのが主たる任務であるのは当然であるが、もしその任務が終了すればダウンフィールドして相手側のタックラーのブロックを行つたり、或は又味方のレシーヴァーからのラトラルパスを受けることが出来たがこの年からはそれが出来なくなることが規則で定つたのである。

加納氏はこの点について “我国の現状は幸ひにもこの種米国における禍いに妨げられるに至つてはいないが”と書いているが当然我国にはプロフットボール等はなかつたし、我国のフットボールはNCAAの規則に準拠すると云うことが東京学生米式蹴球聯盟設立頭初から決定されていたので、このNCAAの規則を採用したことは当然のことである。

更に加納氏は続けて筆を運んでる。

「試合はリーグ中最強の前衛陣を誇る早大が戦車のやうな突進力を有するFBの名桑を筆頭に、梅田、土佐谷をかつて前衛陣の突破で漸進四回十ヤード前進の確実な実現を基調として時の経過と共に明大前衛の疲労を深め精神的の重圧をも加へて行かうとするのに対して、明大は前衛陣をもつて正面から早大の前衛に挑戦せず攻撃に際して前衛は複雑な交錯戦を描き、早大前衛甲に対して位置する明大前衛の甲は、必ずしも早大の甲に対して行動を起さず味方の乙或は丙に早大の甲を委ねて、巳は早大の乙或は丙を倒す等、対手の力を逆用する手段によつてバックメンに十分に時間を与へることであらう。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

バック陣は福永、浜崎の護衛によつて、畑、町田の前衛陣突破を計り、或は畑、河島の護衛によつて大前の前衛突破、吉本の翼迂回の長走を狙ふことであらう。フォワードパス（前投球請攻法）では早大に福田、名桑の好投手があるのに対して、明大は長前投に大前、中間巨高の前投には和田、吉本、畑、浜崎、河島の全員何れもが好投者であるといふ人材の豊富さである。

捕球者側では明大が当代随一のペアー当山、町田を両エンドに持つのに対して、早大は長身で確実な野村をエンドに据え最近長足の進歩を遂げた山田を右エンドに持つている。チーム全体としては早大が、依然、前衛陣に強味を持つに対して明大はバックに投走の優れたプレイヤーが豊富である。従つて早大前衛がその突破力を以つて技術的な明大前衛を制圧することが出来れば、走力と機智を誇る明大バックも施す策につきることであらうが、明大前衛が早大前衛を完封出来ないまでも五割を計画通り進めることが出来れば、明大バックは期待に反かぬ進撃効果を挙げることであらう。

三勝二敗明大の一回勝越しとなつているこの爭覇戦、紫白の明大か紅白の早が雪辱するか」

と以上のような長文の予想記事であつたが、この年あたりから又加納氏独特の術語を新作した。即ちフォワードパスを「前投球」と云う日本語に作り変へ、ロングパスを「長前投球」、超ロングパスを「超前投球」と云つている。又ラインメンのことを「前衛」と云い変えたりして時局の厳しさが何かその中ににじみ出て来るような文章である。

他の新聞の予想も殆ど加納氏と同様なものでラインにおいては早大に有利であり、バックは明大が有利との記事が多かつたが、早大がこの年から多く採用したスクリメージライン突破後に行うラトラルパスに注目した記事が意外に多かつた。

十一月二十三日は祭日でもあり、又晴天に恵まれて後楽園野球場は満員になり三塁側スタンドに入り切れないで一部の観衆は遠くライト側のスタンドにも入らなければならない位の盛況であつた。

主審梶谷、副審ファウラー、線審島袋、計審藤当で午後一時早稲田のキックオフで試合は開始された。

早稲田 6	0－0 0－0 0－0 6－0	0 明治

野村	LE	町田
福島	LT	高本
藤岡	LG	坂本

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

中山	C	寺田
月早	RG	伴
中楯	RT	大浜
山田	RE	当山
宮本	QB	福永
張	LH	吉本
土佐谷	RH	浜崎
名桑	FB	畑

交替（早稲田）：福田、津元、梅田、今村、梶、益津
（明治）：大前、和田

この試合の批評を前年まで明治のタックルをやつていた渡辺了助が読売新聞に書いているのでその一部を転記して見よう。

「早大のライン突破たる所謂ジョーンズ・システィムとこれに対する明大のウォーナー・システィムは、日本の米蹴界を二大別するものでこの両軍の対戦は非常に期待されたが、果然早明両チームは互ひにその特徴を発揮して好試合を展開し白熱戦に終始した。

而してこの中にあつて早の斗将福田が六尺豊か二十一貫の満身に斗志を漲らせて自軍を一身に背負って奮斗したのは明の和田が常に味方をリードし志気煥発に努めた敢斗と共に印象に残つた。

併し両軍選手には幾分固くなつた感がありプレーが萎縮して十分攻撃のチャンスがあるに拘らずパントで逃れる消極戦をしばしば行つていたのは首肯出来なかつた。攻撃チャンスのある間はもつと果敢な戦斗を試るべきである。この日唯一のタッチダウンは第四節の五分早大 LH の張が中央線で球を得、明大の猛タックルを巧みにはずして快走長躯五十碼の殊勲を樹てて挙げたものであつた。

かくて結果は明大の惜敗に終つたが明大も軽量のラインがよく早大の重量を破つてチャンスを作り、バックス又大前、和田らの快走に強引をきかせて快斗した。両軍の実力まさに伯仲といふべく閉戦直前明大大前のフアンブルがなかつたら結果はどうなつていたかわからない。明大としては不運の敗戦であるとともに諦めきれぬものがあつたらう。かくて早大はあとに慶応との一戦を残しているが優勝は最早確定的となつた。」

と戦評を書いている。

又朝日新聞には加納氏が次のように書いている。

「事実上の覇権を賭けたこの一戦早大は予想の如く開始後は重量前衛をかつて正面から堂々と明大陣突破を企てたが、明大は早大のこの強襲に対して十分予期していたところがあつたやうで、名桑、宮本の突進も鮮かに食い止めた。そこで早大は明大に対して最も危険性の多い翼迂回戦或は短前投攻法を採るの止むなきに至つたが、意外にも明大はこの二つの攻法に対して前衛陣突破に対するとは雲泥の差をみせ、二三名の援護下に走る張、名桑はしば

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

しば一挙ダウンを改める快走を示した。

遂に第四クォーターに入り早大は自陣三十五ヤード中央の攻撃から福田パントに逃げるとみせて左前方に走る張に短巨離パスを送れば明大側に張をマークするものなく前衛陣の難関を突破最後の守り和田をダヴルすれば張の周囲は早大の援護者のみとなり七十ヤードの快走をつづけて貴重なタッチダウンを挙げた。

明大はその後前衛突破に死力をつくし早大前衛との間に火の出るやうな肉弾戰を敢行。右隅九ヤードにまで肉薄したが、スクラムからの球を大前がフアンブルしてタイム・アップとなり明大最後のチャンスを逸して敗退した。

この一戰は明大が早大が攻撃の根幹とする前衛突破の強襲に対して十分な対策を得、その他の早大攻撃法に対していささか対策に缺けるところがあつたのに対して、早大は試合の初期、早大の正攻法頼りなしとみて、逸早危険を冒して前投攻法に移り、ここに明大の対策不足を見出したことによるもので、この冒険を敢てした早大の頭脳、福田の勇気とその後のプレイ運用法は賞賛を惜しまれぬところである」

と云う試合の批評を書いている。

実際この試合に備えて明治は早稲田の強力な力を持つライン攻撃に対して極度の警戒をはらい、これに対する練習に主力を置いたものと思はれる。即ちライン戰に於て対等に斗い得るならばバックに力のある明治は有利であると見るのは当然のことであろう。その為にラインに自信を持つ早稲田は試合開始と同時にライン戰をいどんで来たがこれは明治の予期していたところであつて、早稲田の強力なライン突破を見事に防御したのである。

両チーム共死力を盡して前半は一進一退をくり返えし勝敗の行衛は見当がつかなかつた。後半に入り早稲田はライン攻撃を切り換えてパス或はエンドラン、リヴァース等の戰法に出た。これは明治にとつては意表外であつたのか早稲田の攻撃は成功しボールは前進し出したが明治も善戰してこれを防いだ。然し第四クォーターの始め早稲田は自陣・三十五ヤードでパントフォーメーションを採用しパンター福田がボールを取ると蹴らないで前方の張にシヨートフォワードパスを成功させ、快速張は味方のインターフェアランスに護られて長駆六十ヤードを快走し、この試合両軍を通じて只一のタッチダウンを挙げて早稲田が快勝したのであつたが、第四クォーター最後の四分位の明治の必勝の力は実に見事なものがあつた。

それは明治は自陣四十ヤード位で攻撃権を得るや聯続のライン攻撃でさすが強力を誇る早稲田のラインをジリジリと押して行き、遂に早稲田のゴールライン五ヤード位迄攻め込んだのである。そしてその勢いで行くならば一つのプレイでタッチダウンが出来る位であつたが、ラストプレイでセンターからのスナップバックを、フルバック切札の大前が中央を突くべくリードした胸にボールを当ててファンブルしてしまったのである。このファンブルと同時にタイムアップのピストルが鳴り試合は早稲だの勝利で終ったのであるが、ここで大前がファンブルしなかつたらそれ迄の明治のラインの意気込みからすればタッチダウンが成功していたのではなかろうか。

明治のスパートが少々遅きに過ぎた感はあつたが、手に汗を握るような好試合であり、歴史に残るようなビッグゲームであつた。私も数多くのフットボール試合を見たがこれ程迫力のある試合を見たのは数へる位しかない、それ程の名勝負であつた。明治としてはさぞ残念であつたろう

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

し、早稲田としては最強の明治の気力には肝を冷やしたことであろう。

この早稲田対明治のリーグ戦が終了後引続いて午後三時十分から横浜外人対関東OB戦が主審島、副審ファウラー、線審国本、計審田村で挙行された。

関東OB	13	6－0 0－0 0－0 7－0	0	YCAC

以上のような結果で関東OBチームは昨年の雪辱を遂げた。十一月二十六日は東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦第八試合の法政対立教戦が行はれたがこの試合に先立ち東京学生米式蹴球聯盟が招待した関西大学が第二戦目の慶応と対戦した。

主審梶谷、副審小川、線審伴、計審町田で後楽園野球場で午後零時半関大のキックオフで試合が行はれた。

慶応	19	0－ 0 0－ 0 6－ 0 13－0	0 関大

富田	LE	藤本
福田	LT	本山
渡辺	LG	村沢
吉田（辰）	C	吉岡
松雄	RG	楠部
浄土	RT	河野
山片	RE	幸
蓮見	QB	坪井
佐藤	LH	轟
竹村	RH	藤井
藤堂	FB	奥野

交替（慶応）：緒方、辻田、平田、平川、近藤、藤関、谷藤、津上、永松
（関大）：福井、中村、石山、多賀山、小河、中野、山上、山内、竹内、山下、徳永

この試合に引続き東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦第八試合法政対立教戦が午後二時三十分か

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ら主審松本、副審沖、線審福田、計審野村の審判員のもとに立教のキックオフで開始された。

法政 13	0－0 0－2 6－0 7－0	2 立教

中里	LE	小池
石井	LT	安藤
宇賀神	LG	鄭
笹沼	C	永井
沢井	RG	貫井
富山	RT	山城
佐々木	RE	小林
中上	QB	杉山
國本	LH	鈴木
飯塚	RH	尹
六井	FB	金子

交替（法政）：中島、藤家、作前、小野、相庭、藤沢、阪田
（立教）：上田、広沢、島、小黒、山田襄、小堀、吉田、岸

立教はシーズン終了近くなつて負傷者が多くなり思うように練習が出来ず不覚にも法政に敗れ昨年に続いてリーグ戦最下位の成績に終った。

十二月二日午後二時半から横浜根岸の YCAC のグラウンドで明治対 YCAC の試合が主審島、副審沖、線審ドニエル、計審当山で明治のキックオフで挙行された

明治 25	0－7 6－0 13－0 6－0	7 YACA

十二月九日は東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦第九試合の明治対法政の試合が後楽園野球場で挙行された。

この試合についても例によって各新聞は大きく予想記事をのせた。その内加納氏が書いた朝日新聞には次のように書いてあつた。

© 2004 日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

「明治は早大との対戦で一敗地にまみれ、制覇の野望は挫折のやむなきに至つたが、明大としては最後の対法政戦には明大の持つ凡巾ゆる複雑巧微なプレイを演じて明大の名誉のため総力を傾倒することであらう。

去る早明戦に於ても明大は不運にも味方のタックラー同士が早大の殊勲者張に飛び付く寸前衝突して張の七十碼に及ぶ快足を許してしまつたのであつた。併しながら明大はその後大前、和田の前衛陣突破で聯続ダウンを更新して進口、タイムアップ十秒前には早大の右隅三ヤードに肉薄、ここのスクラムから明大はまたも前衛陣突破の配置を構成した。明大前衛により、くっさくされる最後の突撃路へ明大随一の強力突破者大前が決死の突進を試みるのだ。球はセンターからスナップされた。明治は強力な早大の進入を阻んで見事な突撃路を開いた。がこの時不運にも大前は何故か貴重なボールを掌中から落しタイムアップのピストルの音で万事休したのであつた。

斯く重なる不運から早大に一敗を失った明大ではあるが、技術的には本家の米国大学チームにも劣らぬ実力を持ってゐるのであつて、対法大戦には大前、和田から町田、当山に送る長前投攻法に、或は吉本の翼迂廻の巧走にアメリカンフットボールの持つ高等戦術の総てを展開して観る者の心を奪ふことであらう」

と書いている。

対法政戦の予想と云うよりはむしろその前に行はれた対早稲田戦の戦評のようであるが、それにしても本家の米国大学チームにも劣らぬ実力を持っていると云うのは少々オーヴァーな表現である。

十二月九日は午後二時から東京学生米式蹴球リーグ戦第九試合の明治対法政の試合が後楽園野球場で法政のキックオフで行はれた。

主審島、副審沖、線審野村、計審小黒

明治 49 { 14－0 / 9－0 / 12－0 / 14－0 } 0 法政

宮田	LE	中里
大浜	LT	石井
谷	LG	宇賀神
寺田	C	笹沼
伴	RG	深江
高木	RT	持田
泉	RE	佐々木
福永	QB	中上
和田	LH	国本

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

浜崎　　RH　　藤家
畑　　FB　　六井

交替（明治）：町田、鈴木、松平、川島和、李、川島信、小花、坂本
（法政）：相庭、作前、坂田、中島

この試合では明治の和田、浜崎、畑が縦横に快足を飛ばして大量点を得、又第二クォーターには法政陣二十ヤードから大浜のフィールド・ゴールを完成させる等、明治の良い面が全般的に表現された試合であつた。

東京学生米式蹴球聯盟昭和十五年のリーグ戦も最後の試合早稲田対慶応の一試合を残すだけとなつた。例によって各新聞はその記事を大きく書いているがその中で読売新聞の宇野庄治記者の書いたものを次に転記してみよう

「早大の強味圧倒的、棹尾を飾る早慶米蹴戦」

と云う大きな見出しに引続き

「約二ヶ月余に亘って後楽園に展開した東京学生米式蹴球リーグ戦も十日の早慶戦をもって幕を閉ぢる。普通ならば覇権爭奪戦たる早明戦を殿りとする所であつたがリーグ戦開幕前布哇から慶応招聘の件があつたため早慶戦が最後に廻されたものである。」

と云うキャッチフレーズに続いて、

「問題の早明戦に首尾よく明大を屠った早大の実力からみればこの一戦ですでに決定した覇権が覆へるとは思はれないから慶応の肉芸に興味を沸かす試合と見てよからう。

早大は今シーズン明法立の三試合を全部零敗せしめる完勝ぶりを発揮してをり、殊にリーグ随一のスピードを誇る明大をもスコンクで退けてゐるので慶応に余程の頑張りがない限り零敗を免れないと見てよい。併しラインのチームたる早大はその名の如くラインの強い点で一頭地を抜いてゐるが攻撃の方ではまだ十分といへない節々があるので慶応の猛烈なラッシュには相当苦戦を演じるに違ひない。

早大が得意とする武器は中央を突破しショートパスからラトラルパスに移るプレイと福田、宮元等の好ブロッキング及び張、名桑、土佐谷等の重量俊足のエンドランにある。これに対する慶応はパスに対する守備に脆い点があるので、確実なマークとタックルで防がない限り大量得点を蒙るおそれがないでもない。

かうした大勢不利の慶応にとって唯一の活路は、田村、藤堂の大童の活躍であり、若し早大が対立教戦同様メンバーを落したりすれば案外得点は接近するかも知れないが、終始第一軍をもって臨むなら四、五十点の点差が出来るものと見られる」

と早大の楽勝を予想している。

又一方朝日新聞には加納氏が次のように書いている。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

「早慶戰ではこれまでの戰績から見ても早大の勝利は恐らく不動のものと云ひたいのであるが、早明に緊迫した実力を持つ慶大が何れの競技でも共通な早慶戰に対する特殊な斗志の奔騰をかつて玉砕的な戰ひを挑む場合にはかに勝敗の予断を許さぬところもある。

殊に慶大は早大に対して今春京城に於ひて公開試合を行ひ接戰の後敗れたとはいへ、他校には得られなかつた早大研究の体験を有してゐる。

そこで慶大が慶大本来の強みとする前衛突破に攻法を集中し乍ら、機を見て藤堂、田村の翼迂廻を試みるか、或は春以来早大戰に備へて秘かに蔵する数種の新戰法を現すか、慶大の攻方は相当の迫力を従来とも持ってはゐたが、対早大戰では慶大とって置きの新戰術出現こそ望ましいものである。

早大は順当にゆけばさまで苦戰とは思はれぬこの試合では気分的にも余裕を持つことが出来れば定石を破った攻法で前投と見せては翼を迂廻し、長前投と見せては俗にいふシャベルパスといふアンダースローの短前投を放って敵の裏をかき、或は自由の女神と称はれてゐる奇術的なプレイも敢行することであらう。

この自由の女神といふのはバックの一人が前投球の構へでボールを握った腕を肩上後方にふりかぶる、いまや前投に移るかといふ瞬間背後を横に走る他のバックがこの構へた球を獲って翼迂廻に出る戰法である。恰度前投に構へたプレイヤーの型が自由の女神が燈火をかざした型に似てゐるところから斯く呼ばれてゐるのである。

果たして早大は楽勝出来るか、この試合は一に慶大の斗志と新戰術に俟つところが大きく、早大とて一瞬たりとも油断の出来ぬ一戰である。」

と書いており宇野氏も加納氏も明治に勝った早稲田の楽勝を予想して書いている。

ここで注目しなければならないことは宇野氏の書いている内で慶応のハワイ遠征の項がある。実際今迄のリーグ戰の組合せは第一試合は前年度第一位と第五位、第二試合は第二位と第四位と云うように組み合はされ、最終戰は前年度一位と二位が試合することになつていたのである。ところがこの年ハワイから慶応を招聘すると云う話がリーグ戰開始前からあつたのでそのリーグ戰のスケジュールを一部変更して異例の措置をとったのである。

これはハワイから招聘を受けたのか、慶応がハワイの有力者に働きかけたかはよく解らないが、後者の方が有力ではないかと見られていた。それは早稲田、明治のチームはハワイ、アメリカの二世がプレイヤーの大部分を占めていたのに対して慶応は殆ど日本生れの部員で構成され二世と云えば竹村位のものであつたから、もしハワイから招聘されるとすれば明治が第一位で次いで早稲田と何れかになる筈である。

しかも前年の優勝校は明治であるから折角招待するとすれば明治であろう。しかも明治のプレイヤーはハワイの二世が多いし又 OB でハワイに帰った者も多いからハワイ側から正式に招待するとすれば当然明治の可能性が多い筈である。

それが慶応が招聘されたと云うことは大変奇異に思はれるところである。それには慶応の卒業生がハワイに多くいて、しかも経済的にも豊な位置にあつたかも知れないので、それらの聯中が招聘したのかも知れないが、特に慶応の卒業生がハワイに多いと云うこともなかつた筈である。それよりはむしろ、東京学生米式蹴球聯盟の加盟校を見てもわかるように慶応は二世選手の最も

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

少ないチームである。それから推測して見てもハワイの一吞は勿論二吞においても慶応の卒業生は少いと思はれる。その少い慶応の卒業生の中にハワイで最も有力者がいたと云うことも聞いたことがない。

それなのに早、明をさしおいて慶応が招聘されると云うことは一寸解せないことである。そこでこれは察するところ各チーム共ハワイもしくはアメリカに遠征したい気持は持っていた筈である。事実片道の船賃を持って渡米してハワイで二試合位すればその入場料で宿泊と帰りの費用が出てしかも余分な金を持って帰ることが可能であることは各チーム共周知のことであつた。然し一チーム分の片道の船賃と云えば最低でも千五百円から二千円位は必要であつた。その当時の千円と云う金額は大金であつた。何しろ葉書が一銭五厘であり、そばのもり、かけが八銭であつた頃である。又家を建築する場合坪当り五十円位であるから二千円と云えば四十坪位の立派な家が出来た頃である。現在の物金になおせば四百万円から六百万円位の金額に相当するのではなかろうか。これだけの大金はとても一チームで集めることは出来ない相談であつた。

その点さすが慶応である。それに相当する金額を集めることが出来たのであろう。そして又慶応の藤堂の父親が日の出汽船と云う船会社を経営していたので、又別の方で援助があつたのかも知れないが、とにかく慶応はハワイ遠征の準備を続けており、その関係でリーグ戦のスケジュルを一部変更までしたのであつたが、結局は当時の日本の情勢の厳しさと海外渡航特に学生の海外渡航に対する制限の関係上、ハワイ遠征は実現することは出来なかつた。

それで昭和十四年度リーグ戦の最終戦早稲田対慶応の試合は十二月十日午後二時から満員の後楽園野球場で行はれた。主審松本、副審島袋、線審浜崎、計審小黒

早稲田 0	0－0	0 慶応
	0－0	
	0－0	
	0－0	

笹井	LE	富田
尾根田	LT	福田
梶	LG	渡辺
中山	C	吉田辰
野呂	RG	吉田明
中楯	RT	浄土
山田	RE	山片
梅田	QB	桑原
今村	LH	竹村
張	RH	佐藤
神宮	FB	藤堂

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

交替（早稲田）：野村、福島、藤岡、加藤、風早、土居、津元、宮本、土佐谷、福田、名桑
（慶応）：緒方、上田、平田、平川、松尾、谷藤、津上、遠見、佐藤匡

予想は強豪明治に勝った早稲田の楽勝と云うことが大勢であつたが、結果は慶応の予想外の健闘と、明治に勝って気分的にゆるみの出た早稲田はメンバーも落し又本年の優勝を確信して慶応組し易しと見て練習にも余り熱の入らなかつた為であろう。チームのコンビネーションも思うようにならず大苦戦の結果やっと引分けと云うことで試合は終了した。早稲田としてはあと味の悪い最后の試合だったことであろうがとにかく昭和十四年度リーグ戦の覇者となつたのである。

これで昭和十四年東京学生米式蹴球聯盟リーグ戦は次の順位で無事終了した。

優勝	早稲田	三勝一引分
第二位	明治	三勝一敗
第三位	慶応	二勝一敗一引分
第四位	法政	一勝三敗
第五位	立教	四敗

立教は二年聯続最下位の不面目にあまんじなければならなかつた。シーズンを終了して朝日新聞は加納氏の総評をのせた。

「米式蹴球リーグの回顧、技の明、力の早、急速度に大衆化」と云う見出しで

「吞界で最も男性的で猛烈な団体ゲームである米式蹴球も我が国に移植されてから六シーズンを終へ、東京における五大学のリーグ戦は去る十日の早慶戦で今季の幕を閉じた。結果は早大の優勝となり昨年の覇者明大に見事雪辱をとげた」

とキャッチフレーズをつけて本文に入っている。

「シーズンを回顧するにあたって今季特に目立った現象の一つとして、フィールド内に起ったことではないが観衆の理解が急速度に高騰して来た一事を挙げたい。これは米式蹴球のゲームそのものが文字通りの肉弾戦でありながらプレイの一駒、一駒は凡て同一の型であるスクラムから開始されるので観衆の飲み込みも早い。

併し乍らその奥行きは益々広く深く一を知って又新たな疑問が起らぬではないが、ゲームを観る度に加速度的に理解を深め得る結果は、遂に次のプレイに対する予想となり、時と場合による作戦頭脳的プレイの変化にまで各自が容易に作戦を予想し得るに到るからであらう。競技そのもの年一年と日本化を企て競技規則からも今季は米国大学競技規則から一歩を踏み出し審判の判定は唯一絶対のものと改正され、フィールド内に飲料水の搬入も禁止される等日本化の実を挙げた。

これ等の改正は精神的鍛錬をもスポーツの重要要素とする以上、我国では当然の改正であつてこのため益々競技は日本色豊かとなり観衆に親しまれるに至つたのは見逃せぬ事実であ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

つた。

競技そのものの上から見ると今季各チームの技術的向上は予想以上で恐らく過去六ヵ年中特筆に価する躍進を遂げていたといふことが出来よう。この証左としては各チームがセンターからのスナップバックに落球が殆ど無かつた一事をもってしても首肯出来るのであつて、昨年迄各チーム共スナップバックのファンブルによって球を相手に奪れ攻撃権を失ふ場合が甚だ多くファンブルを稍々不可抗力的に視てゐたのに較べ隔世の観があつた。殊にバックマンがスタートを切った後にスナップバックされた球に対して正確な協同動作を起し得たといふことは日本における米式蹴球の劃期的進歩といはざるを得ない。

全シーズンを通じて数少いファンブルのうち最も印象的であつたのは早明戦に於いて明大は早大の一タッチダウン先取を追ひ猛烈な追撃戦を試みた。後半タイムアップ十秒前明大は右隅三ヤードに早大を追込み、第四ダウン残り三ヤードを大前の突撃力に頼って突破タッチダウンを酬いて同点確実トライポイントの成否如何で明大の制覇成るか否かと、大前の突破力をもってすればタッチダウンは既定の事実とみられたのであつたが、意外や大前は不覚にもこのスナップバックをポロリとファンブルし明大イレブンは呆然自失のうちにタイムアップのピストルの音を聴いたのであつた。

チームを單位としてみると早明はリーグ中不動の最高地位を保ち、技術の明大に対し力の早大といふ伝統の立場を夫々堅持してゐたが、早大は力の漸進主義に織り混ぜた大胆な術が明大の意表に出る結果となつて明大を降したが、慶大は術の明大に対して飽くまで漸進主義一本槍で対抗した結果、明大の術に苦杯を嘗めた。

併し乍ら慶大は力の早大対しては限りなき斗志を持って恰かも早明戦に於ける早大の如く力の対抗に大胆なプレイを混用して早明戦後多少とも弛緩状態にある早大イレブンの裏をかき遂に引分けの大熱戦を演じたのであつた。

斯上位三チームは各自の特徴を発揮して各試合に死力を盡したのであるが、早大は最も重大な試合に大胆なプレイを敢行せしめるだけの斗志を失はなかつたことにより、明大を降して優勝の栄誉を獲得し慶大は早大に対して限りなき闘志を沸騰させて早大の心胆を寒からしめたのだった」

以上のように加納氏は昭和十四年度リーグ戦の総評を書いている。この文中にもあるように観衆の理解が深まったと云うことは事実であり、各試合共相当数の観衆が後楽園野球場に押しかけて来たのである。そしてープレイ毎に歓声を挙げて自分のひいきするチームを応援しており、この調子ではあと数年も経過すれば六大学野球のリーグ戦にも匹敵する位の人気が出て来るのではないかと思はせる位であつたが、日本の国情は戦爭が益々苛烈となり外来スポーツの禁止と云う所まで進み、やっと日本において芽を吹き出したフットボールもこの辺であえなく中止の気運が高まり、せっかく出て来た人気もダウンせざるを得ないような状態になつた。

又東京学生米式蹴球聯盟でも日本の当時の世情に合うように色々と気をつかい、人気の高揚に努めたのである。その実例の一つとしてそれまでNCAAの規則をそのまま準用していたフットボールのルールも一部日本の国情に合うように改正した。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

例えば審判に対する抗議は一切認めない、即ちラグビー式に審判絶対にするとか、或はタイムアウト時フィールド内に飲用水の搬入を禁止するとか、日本人の気質に合わないような点は日本流に改正したのである。

これは加納氏に云わせれば精神的鍛錬をもスポーツの重要要素とすると云っているが、事実その当時の青少年に対する精神的或は肉体的鍛錬の必要性は世間一般に大きくとなえられておりスポーツは娯楽ではなく鍛錬の為に行はれるものであり、文部省や内務省からも強く要望されていたのである。この要望に従はないものは圧力を受けるのであらゆるスポーツは娯楽の域から修練、鍛錬のものに変わって来たのである。そのためにはNCAAの規則も一部変更して当時の日本の国情に合うようにしなければならないような状態になつて来ていたのである。

加納氏も書いているように優勝決定戦とでも云うべき早明において最後に明治の怒涛のような見事な攻撃により数度のダウンの更新を行い、早大ゴール三ヤード迄迫り最後のプレイでFB大前のファンブルによる失敗は確かにフットボールの歴史に残る名勝負であつたことであるが、これは想像する所勢に乗ってた明治は早稲田のゴールラインを目前にして、しかもラストプレイであるのでスナップバックをする明治のセンター寺田もスナップバックより前面にいる早大のディフェンスラインをチャージすることの方に気をとられ、スタートを早くした為にスナップバックに力が入りすぎ、バックのセンタープランジのシグナルの場合にはスナップバックのボールを軽く浮かせるようにスナップしFB或はHBが前進のスタートをして来るのに合せるようにしなければ成功しないのに、前面の早稲田のディフェンスラインに穴を開ける方に精神が集中しており、従つてスナップにスピードがついたのと同時にFBの大前もラストプレイであると云う意識が強く働き、これで同点或は優勝出来ると云う気がはやり、その為に固くなつてボールを胸に当ててファンブルしてあたらチャンスを逸したのである。非常に高価なファンブルとしてフットボール史上に残るものであると同時に名勝負としても史上に残しておきたい試合であつた。

これで昭和十四年度東京学生米式蹴球聯盟のリーグ戦は終了したのである。それと同時に東京学生米式蹴球聯盟と云う名称もこのシーズンを最後として消え去ったのである。これはまだこの時点では誰もが予想し得なかつたことであつたが、戦爭が激烈になつて来たことにより外来語の排折となり、米式蹴球の米はアメリカであると云うことにより翌年即ち昭和十五年からは東京学生鎧球聯盟と云う名称に変更したのである。勿論日本米式蹴球協会も同時に日本鎧球協会と変更したのは当然のことであつた。

昭和十四年シーズンの最後は恒例の東西対抗戦をもって終了することになつた。この年は第三回目で初めて関西で行はれることになり、一月元日花園競技場で行はれることになつた。前にも書いたように毎年一月元日には古くから慶応と京大のラグビーの定期戦が行はれるのが定例になつており、これが関東では神宮競技場、関西では花園ラグビー場と隔年に挙行されていた。

日本米式蹴球協会の東西対抗はアメリカ本国におけるボウルゲームに匹敵するものだけに、アメリカと同様毎年一月元日に行うことに定められており、慶京ラグビー戦と交互に関東と関西で挙行することになつていたので昭和十五年一月元日の慶京ラグビー戦は東京の神宮外苑で行はれる年であつたので、従つてフットボールの東西対抗戦は関西花園ラグビー場で行はれる順番であ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

つた。

その出場メンバーが十二月下旬発表された、それによると

関東軍監督：島本忠治（慶応コーチ）、マネージャー太田義雄、エンド山片（慶）、富山（明）、野村（早）、作前（法）、タックル小黒（立）、福島（早）、福田（慶）、中楯（早）、ガード伴（明）、藤岡（早）、坂本（明）、風早（早）、センター中山（早）、上田（立）、ハーフ藤堂（慶）、浜崎（明）、張（早）、笠原（明ラグビーO,B）、フルバック名桑（早）、畑（明）、クォーターバック福田（早）、島袋（立）

関西軍コーチ：島盛夫（KRAC）、主将藤本（関大）、エンド藤本（関大）、小林（関大 OB）、河原（法 OB）、幸（関大）、タックル東山（関大）、小山（関大）、河野（関大）、花田（KRAC）、山田（KFC）、花岡（明 OB）、ガード清水（明 OB）、村沢（関大）、楠部（関大）、小河（関大）、センター吉岡（関大）、中野（関大）、林（KRAC）、クォーターバック坪井（関大）、灘波（KFC）、ハーフバック東轟（関大）、山内（関大）、岡村（関大）、荒木（KFC）、フルバック灘波（関大出）、奥野（関大）

第三回東西対抗米式蹴球大会　昭和十五年一月元日　於花園ラグビー場

関東 32 { 0－0 / 7－0 / 6－0 / 19－0 } 0 関西

当山	LE	藤本
福島	LT	本山
坂本	LG	清水
寺田	C	吉岡
風早	RG	楠部
福田	RT	河野
野村	RE	河原
島袋	QB	坪井
浜崎	LH	上島
張	RH	山上
畑	FB	中村

交替（関東）：町田、小黒、伴、中山、藤岡、大浜、山片、福田、和田、藤堂、名桑
（関西）：小林、古山、村沢、中野、小河、花岡、幸、灘波、轟、山内、茨木、魚野、灘波二、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

この試合をもって昭和十四年のフットボールのシーズンは完全に予定通りのスケジュールを終了した。

この年の一月二十一日には東京学生鎧球聯盟のリーグ戦上位三校即ち早稲田、明治、慶応のチームが大阪朝日新聞の招待により関西大学と四校で甲子園南運動場において関西におけるフットボールの認識を深める為<公開試合を挙行した。

早稲田対明治の試合と慶応対関大の試合を行い、東京ではすでに観衆も多数集まって隆盛の情光を示して来ているのに、関西においては関西大学一チームの為もあつてフットボールの人気も殆ど無いような有様であつたので、その啓発の為に行はれたものであつた。

又関西においては同志社大学が関西大学の努力によってチーム編成の傾向にあつたのでこれに対する刺激を与えるのも一つの試みであつた。そしてこの四大学対抗戦は関西に大きな影響を与えて観衆もふえ、又この年の秋には同志社大学が正式にチームを編成し、長い間関西において孤軍奮闘していた関大によき相手が出来て関西においても試合数が益し人気も向上して来た。

一方この昭和十五年には東京においても日本大学がチームを編成した。これは明治のラグビーの OB の笠原恒彦氏が明治を卒業後直ちに日活映画に入った為、ラグビーの試合には出場することが出来なかつたのでフットボールの試合に出場していたが、彼が日大にフットボール部を作ることに専念し、又他の五大学もこれに応援して日大の二舟古谷等を中心にチームを編成して、秋には東京学生鎧球聯盟に加盟した、この為に東京では待望の六大学となり一段と賑やかになり又試合数も当然ふえた。

この昭和十五年は日本においては紀元二千六百年に当り、この年の二月十一日の紀元節には国民的大祝賀会が全国的に盛大に行はれた。一方においては日支事変は益々深みにはまり込み、見透しもつかないような状態になつて来た。日本陸軍は広大な中国大陸に大軍を送り込み国内の軍国調は益々拡大され、毎日のように町には出征兵士を送る歌が流れていた。吾々のフットボールの O.B 聯中も殆ど軍隊に借り出され、兵役の義務について行つた。

なお前述のように東京学生鎧球聯盟の昨年度の上位校早稲田、明治、慶応の三大学は関西にフットボール普及の為に関西に遠征したがその成績は

1 月 21 日甲子園南運動場

慶応 14 { 0－0 / 0－0 / 0－6 / 14－0 } 6 関大

であり早稲田対明治はオープン戦として行はれた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

戦局は益々激烈になり多くの O.B は兵役に狩り出されて行つたことは前述の通りであつて、かく云う私もご多分にもれず甲種合格現役兵として入隊したのである。従つてその間新聞を読むこともラジオを聞くことも出来なくなり、世間一般のことは勿論、フットボールのことなど気にはなつてはいたが知る由もなかつた。それで昭和 15 年から太平洋戦争の終結した昭和 20 年迄記録の持ち合わせがない。何れ時機を見るかしてその間の記録だけでも書かなければならないと思つている。この 4 年間の間断片的な記録が少々あるので、それをとりあえず記することにする。

昭和十五年十一月二十四日の新聞の切り抜きが一片ある。これは朝日新聞の加納氏が書いたもののようである。

「慶大快勝す　早大前衛撹乱さる」と云う見出しで

「東京学生鎧球リーグ早大対慶大の試合は二十三日午後三時から審判梶谷（主）、島（副）、坂口（線）、福田（計時）四君の下に後楽園で挙行、慶大快勝し制覇確実とみられるに至つた。

慶応 13　{ 6－0 / 0－6 / 0－0 / 7－0 }　6 早大

富田	LE	津元
辻田	LT	土井
渡辺	LG	藤岡
吉田（辰）	C	野呂
吉田（明）	RG	風早
谷藤	RT	景山
山片	RE	山田
松雄	QB	安田
田沢	LH	藤本
遠見	RH	土佐谷
佐藤	FB	名桑
2	TD	1
1	STP	0
0	FG	0

交替（慶応）：折笠、岡田、緒方

（早稲田）：福島、野村、加藤、笹井、伊森

ダウン更新　慶 5、早 10、突進距離碼　慶 222、早 178、

前投完成　慶 9（20）、早 4（16）、前投距離　慶 98、早 80、

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

失落球　慶０、早１、反則　慶１、早０、

慶応の快勝は中央線を自陣に越されればパントするといふ堅実な戦法を採つたことに因るが自他共に許す強豪早大の前衛を圧したのみか、この鉄壁を撃破して早大の後陣をも脅かした慶大前衛の快斗は絶賛に値する。

「法日は引分」の見出しで早慶戦に引続いて、「関東学生鎧球法大対日大の試合は二十三日午後零時半から後楽園球場で沖（主）、島（副）、井上（線）、鈴木（計時）四君審判、法大先蹴で行はれ 13－13 の同点で引分けとなつた。

法大 13	0－0 6－7 6－0 7－6	13 日大
田原	LE	黄
黒河内	LT	松島
山田	LG	杉本
佐々木	C	古谷
深江	RG	鈴木
尾崎	RT	小貝
作前	RE	松村
國本	QB	魚住
横井	LH	村本
中上	RH	大川
中島	FB	金
2	TD	2
1	STP	1

交代（法大）：興那原
　　（日大）：梅沢、高野

なお、この昭和十五年からは名称が米式蹴球から鎧球と変つた。これはその後に文部省からの指令によつて例えば”スキー”を雪艇としたりホッケーを枕球と変えたり強制的に変名をさせられたものではない。

この文部省の指令は外来語を排除すると云う目的によつたものであつてその点なら米式蹴球と云うのは立派な日本語である筈であるから文句は無い筈である。この文部省の指令の出る前に協会では自発的と云うと一寸おかしいが、鎧球と名称変更をしたのである。

その理由は米式の”米”は当然にアメリカの意味である。それが気にかかつたのである。それ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

は日本は中國と國交断絶こそしていないが交戦中で、日本陸軍は中國大陸奥深く迄進攻中である。そして更に戦線を拡大せざるを得ないような状態になり、國内では前年大政翼賛会が成立して政治はこの大政翼賛会によつて動かされ、その第一として國家総動員法が制定され挙國一致して対中國戰爭に突進中なのである。そして毎日街には「出征兵を送る歌」が流れ、駅頭には日の丸の旗が振られて多くの若者達は中國大陸の前線へ送られていつた。日本は戰時色一色に塗りつぶされて、新聞、ラジオは戰意昂揚をあほる報道を繰えしていた時代であつた。

然しまだ中國以外の國とは昭和十四年の夏のノモンハン事変でソヴィエートと交戦した以外は戰爭はしていなかつたが、日本に対する諸外國の干渉は激しいものであつた。即ち対中國戰斗は即時停戰し、日本軍は中國大陸から撤兵すべしと云うものであつた。日本は昭和十四年には國際聯盟を対中國戰爭の完遂の理由の下に脱退していたが各國からの干渉は激しいものであり、特にアメリカ、英國は日本に対しての経済封鎖を挙行した。これが即ち ABCD ラインである。A は勿論アメリカで、B はブリティシュ英國であり、C は中國、D はダッチ即ちオランダである。元々資源小國の日本はこの ABCD ラインによる経済封鎖には大きな打撃を受け、これを打破すべく第二次世界大戰へ突入して行くことになつたのであるが、まだこの昭和十五年はその前年であつた。

以上のような状態下にあつて吾國はアメリカに対しては敵対感情が多に生じて来ていた時期である。このような時に”米國式”とは云つていないが”米式”の”米”と云う文字をつけているのは気の引けるものがあつたのであろうと同時にこのような時に逆に勇ましい、戰斗の用具である”鎧”と云う文字を使つた方が一般的にもよいのではないかと云うことから日本協会で”鎧球”と変名したのである。”鎧”とは勿論ユニフォームの下に着けるショールダーパッドを意味したものである。この時”兜球”と名付けた方がもつと面かつたのではなかつたろうか。ヘルメットをかぶるスポーツはその時代他には無かつたのであるから、或は”甲球”としてもよかつたと思はれる。

然し鎧球と云うことに定つたのであるが、これは文字作りの名人である故加納氏の案ではなつたろうか。加納氏はラグビーにもフットボールに多く名語を作つている。例えばラグビーではドロップゴールのことを落球快蹴と云つたり、フットボールのロング・フォワードパスを長前投、エンドランを翼迂迴戰法とか面白い云葉を多く作つた人であつた。

この加納氏の発案によつて鎧球なるユニークな名称がつけられたのであろう。とに角、文部省の指示による外来語廃止以前にフットボールは既に変名していたのである。なおこの年は紀元二千六百年を記念して東京オリンピック開催が決定していたのであるが、日中戰爭の長期化によつて挙行することは不可能となり、前年國際オリンピつク委員会に辞退を申請し、この年のオリンピつクは中止となつた。又ヨーロッパでは第二次世界大戰が拡大しとてもオリンピックなどやつて居られるような情況ではなかつた。

フットボールの O.B も徴兵検査の結果続々と甲種合格となり、兵役に服して行つた。立教でも昭和十四年卒業の O.B は、二世の坂口はアメリカ國籍と日本國籍の二重國籍を持つているので兵役には服さなかつたが、他の細田、鈴江、池上、栗林、服部の 5 名は何れも名誉ある甲種合格であつてそれぞれ兵役に服した。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

私も昭和十五年始めに入隊することになつた。入隊先は札幌にあつた歩兵第二十五聯隊であつた。丁度入隊期日が旭川の歩兵第二十六聯隊に入隊する池上と同日であつたので、二月末の寒い日の夜行で、池上ともう一人陸上競技部 O.B の羽木光三郎（旭川歩兵第二十八聯隊へ入隊）と三人で上野駅発で北海道に向つた。上野駅頭には校旗を先頭にフットボール部と陸上競技部の現役が約 50 名送りに来てくれ、駅で校歌を斉唱して吾々を送つてくれた。

そして翌日夕刻札幌着で皆一応札幌に一泊し、その夜はおそく迄アイスホッケーの小柳と四人で札幌最大のキャバレー「エルム」で飲んでお互いの健康を祈願し合つた。翌朝池上、羽木、小柳の三人は旭川へ向けて札幌を出発して各自所属の部隊に入隊した。その後殆どの者は昭和二十年八月十五日の終戦の日迄兵隊生活を続けたが、幸いにもその年のフットボールの O.B は全員が復員出来て戦死者は一人も居なかつた。

このように吾は特に戦時色一色になり、兵隊に行かない者は男ではないと云うような時代であつた。

それで私の記録も昭和十五年から昭和二十年までは途断えているのである。前述したように一応これを書き終わつてから図書館にでも行つて古い新聞を調べてこの空白の夏を埋めるつもりである。

昭和十五年の優勝校は昨年より力をつけて来た慶応が初めて王座についた。これは慶応が創部当時樹てた五ヵ年計画が実つたことと早稲田、明治の両大学に日米の國際関係で二吾の入学者が少なくなり二吾に頼ることが出来なくなり実力が落ちて来たことに原因があるものと思はれる。

昭和十六年一月元旦には例によつて明治神宮外苑競技場で東西対抗戦が行はれた。

関東 46 ｛ 20－ 0 / 19－ 0 / 0－ 0 / 7－12 ｝ 12 関西

富田	LE	本山
福島	LT	竹内
古関	LG	古山
吉田（辰）	C	吉岡
吉田（明）	RG	小浅
小黒	RT	中村
山片	RE	幸
安田	QB	坪井
土佐谷	LH	轟

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

浜崎　　RH　　山内
佐藤　　FB　　山上

交替（関東）：緒方、谷藤、小堀、風早、ブラインズ、深江、池田、津元、鈴木、遠見、グリーン、國本、福田
（関西）：鈴木、丹治、山下、三浦（和）、山田、岩井、前田、三輪、三浦（清）、米合、伊藤、今西

立教からはこの試合には小黒、小堀、鈴木の三人が出場している。この昭和十五年と云う年はフットボール界においても色々と変化があつた。それは既に前に書いたように名称が”鎧球”と変つたこと、又東京学生鎧球聯盟に新らしく日本大学がチームを組織して加盟し六大学となつたこと、更に昭和十年から関西においては唯一のチームとして相手不足に不満をかこつていた関西大学に新しく同志社大学がチームを編成し、関西も二チームになり、國内においては八大学がフットボールチームを持つことになつたことである。

そしてフットボールも人気を得て来てこれからは益々隆盛になつて行くことが予想されたし、又その気運も見えて来て将来に明るい光が見えて来たのであるが、それとは無関係に社会情勢は益々暗いものになつて来たことも前述の通りであつた。

このような情勢下の昭和十五年六月十五・六の両日には「紀元二千六百年奉祝」と銘打つて明治神宮外苑競技場において六人制フットボール大会が開催された。これはフットボール普及を目的としたものであつて、ラグビーに七人制があるのを眞似して考案されたもので日本独特のものであつた。時間も短かく、ライン三人、バック三人の六人の編成で行うフットボールであつた。その他のルールは正規のフットボールと殆ど同じものであつた。然しこれも翌昭和十六年に行はれてそれ以降は中止となつた。昭和十六年は日米開戦の年である。

この年リーグ戦では慶応が初めて優勝したのである。このリーグ戦の間、早稲田と慶応は関西遠征を行つた。即ち十月二十日に西宮球場で行はれ、早稲田対関大戦と慶応は創立間もない同志社と試合を行つた。結果は

早稲田　29－0　関大
慶応　　55－0　同志社

又十二月二十二日には明治が関西遠征を行い甲子園南運動場で関大と試合を開催したが実力をつけ出した関大に敗北した。

関大 12－7 明治

本山　　LE　　小田
福井　　LT　　奈古
古山　　LG　　松平

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

吉岡	C	寺田
小河	RG	川島
竹内	RT	池田
幸	RE	李
山上	QB	福永
轟	LH	和田
山内	RH	川島
坪井	FB	小花

そして昭和十五年のシーズンの最後の東西対抗戦は、昭和十六年一月元旦に明治神宮外苑競技場で行はれた。

関東 46 { 20－ 0 / 0－ 0 / 19－ 0 / 7－12 } 12 関西

富田	LE	本山
福島	LT	竹内
古関	LG	古山
吉田（辰）	C	吉岡
吉田（明）	RG	小浅
小黒	RT	中村
山片	RE	幸
安田	QB	坪井
土佐谷	LH	轟
浜崎	RH	山内
佐藤	FB	山上

交替（関東）：緒方、谷藤、小堀、風早、ブラインズ、深江、池田、津元、鈴木、遠見、グリーン、國本、福田

（関西）：鈴木、丹治、山下、三浦（利）、山田、若井、前田、三輪、三浦（清）、伊藤、今西、米今

関東軍はこの東西対抗戦には四聯勝したのである。

然しこの東西対抗戦もこの第四回を以つて中止になつた。即ちこの昭和十六年一月元旦の第四回が最後になつたのである。この昭和十六年は十二月八日に日米開戦の年であつた。勿論この第四回開催日の一月元旦にはそのようなことは夢にも想像しなかつたことであるから当然昭和十

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

七年一月元日には関西の花園球技場で第五回東西対抗戦が開催されるものと皆思つていたことであろう。

然し現実にはその年の夏頃から日米の國際関係は険悪の度を増し、遂に十二月八日日本海軍のハワイ島急襲、およびマレイ半島には陸軍の進撃開始等全面的に交戦状態に入り、遂に日米國断絶となり、日本も第二次世界大戦の渦中に巻き込まれていつた。こうなるともう今迄のような対中國戦とは全く様想が変わつて来て、今迄以上に國内には緊張感がみなぎり、”鬼畜米英”の文字は街に氾濫し又”撃てし止まん”の云葉も人の口に出るようになつて来た。國内には完全に國家総動員が施行され、戦時物資はもとより、國民の食料から衣料等日用物資も統制されてしまつた。こうなるともう無用の旅行等も制限されるので遠征等不可能になつてしまつたので東西対抗戦も中止をせざるを得なかつたのである。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

フットボールの創設者であり又協会及び関東学生聯盟の理事長をしていたポール･ラッシュ氏も敵國人として目黒に作られた敵國人収容所に収容され自由を束縛されてしまつた。それでポール･ラッシュ氏の後任として加納氏を理事長に推し、爾後の行事を進行して行くことになつた。

ポール･ラッシュ氏は翌昭和十七年に日米収容者交換の最後の交換船で二十年の年月を過した日本を去つてアメリカに送還されたのである。この時東京学生聯盟の現役および O.B（主として二吞）が金を出し合つてポール･ラッシュ氏に餞別を送つた。このことはポール･ラッシュ氏が終戦後再び聯合軍の将校となつてマニラから日本に来た後に”あの時の餞別金の本当に有難くうれしかつた”と述懐していた。余談ではあるがこの最後の収容者交換船には駐日米國大使のグルー氏も一緒であつて、この船には開戦直前に日本に輸入されスーパーインポーズ迄入れて上映するばかりになつていたが日米開戦となり敵國映画は上映出来なくなつたあの名画”風と共に去りぬ”が積み込まれ、船で上映し旅情をなぐさめたのである。

私が昭和十九年に東京師団司令部にいた頃司令部内では敵國映画も毎週一回上映して司令部内部の者だけに見せていたが、この中に”風と共に去りぬ”が上映されたことがあつたが、これは輸入されたものではなく、軍がフィリッピンを占據した時フィリッピンにあつたフィルムを日本に持つて来たものであつた為、スーパー・インポーズが入つていなかつた。

昭和十六年は吾國にとつて大変な年になつたが、それ以前の二月には関西において関大の努力によつて関西学院大学にフットボールチームが誕生した。対米國との國際関係が緊迫している時期に日本に昨年に引続いて、又アメリカンフットボールのチームが出来たとは何か皮肉めいたものがあるが、然しそれだけフットボールが一般に認識されて来たと云う見方も出来るのではなかろうか。もつともアメリカンフットボールとも米式蹴球と云う名称をも使はず、昨昭和十五年秋のシーズンから改名した鎧球と云う名称で「関西学院大学報國団鎧玉班」と云ういかめしい名前である。戦時中であるので各大学とも運動部は報國団と云う名称に変つていた。

何れにしても関西では昨年の同志社に続いて関西学院と急にチームが創設され三大学となつて何れも関西鎧球聯盟に加盟して大学リーグ戦が出来るようになつたことは、日本のフットボールの隆盛の勢を徐々にではあるが示して来たのである。

関西学院が加盟したことにより日本鎧球協会の加盟大学は関東六大学、関西三大学の計九大学と横浜及び神戸の外人クラブの十一チームとなり、これからと云う構えであつたが、國内情勢は前述の通り益々泥沼状態に落入り、それに対する諸外國の日本に対する干渉も激しくなり特にアメリカとの関係は一触即発の様相を示して来た。

この様な状態は当然学生の活力にも大きく影響を与えずにはいなかつた。そしてそれはスポーツ界にも及びこの年の春に「学生スポーツの同一県以外に亘る対抗試合、並びに合宿遠征等は禁止する」と云う文部次官通達が出され、スポーツは小規模のものに押え込まれてしまつた。もつともこの通達は秋には幾分緩和されて「隣接府県の対外試合のみは許可する」との方針に変つたが、それにしても時局の厳しさはスポーツ界も例外ではなく襲つて来たのである。

然しフットボールは秋のシーズンも無事終了し、関東では明治、関西では関大が優勝してその年を終了した。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

然しこの年即ち昭和十六年十二月八日には遂に日本とアメリカは交戦し「大東亜戰爭」と名付けられた「太平洋戰爭」に突入し第二次世界大戰の一員となつてしまつた。

この昭和十六年の七月立教のフットボール部長をしていた小川徳治先生も「関東軍特別大演習」の要員として満州に召集され、十一月にはすでに南方に転進し「太平洋戰爭」突入に待期していたのである。昭和十六年は未曾有の困難の内に暮れて昭和十七年を迎えたのである。この年の第五回「東西対抗戰」は前にも述べたように戰爭の為中止になつてしまつた。そして戰爭が終る迄再開されることなく終つてしまつたのであるが、この年の一月二十五日にはどうした訳か明治と慶応が関西遠征を行い、甲子園球場で関大、関学と試合を行つている。

明治 39 { 7－ 0 / 0－ 0 / 14－ 0 / 18－ 0 } 0 関大

小田	LE	北尾
小川	LT	丹治
川島	LG	印南
寺田	C	西川
二階堂	RG	山下
池田	RT	福井
若竹	RE	本山
下垣	QB	庄野
元山	LH	今田
山平	RH	伊藤
小花	FB	難波

慶応 20 { 7－0 / 6－0 / 0－0 / 7－0 } 0 関大

そしてこの年は春と秋の二シーズン制を東西ともに採用した。これもチームがふえ一気に隆盛にもつて行こうとしたのか、或は戰爭の為何時中止の運命を迎えるか不安があつたのでこのようなニシーズン制にしたのか解らないが、何れにしても理事長のポール･ラッシュ氏がいたら許可されなかつたことであろう。それと云うのもポール･ラッシュ氏の理想として日本のスポーツ界にはシーズンが不明朗であるのでそれを啓蒙する目的でフットボールの移入に全力をそそいだ

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

人であるからである。

この昭和十七年春のシーズンの試合は主として神宮競技場で行はれたが、四月十八日の試合の最中にアメリカの太平洋機動艦隊から発進したドゥリットル指揮の飛行編隊が東京を空襲し早稲田地区が主として被害を受けた。これが最初の空襲であつた。これに対し日本海軍はアメリカ太平艦隊を撃滅すべくその年の夏ミッドウェー攻撃を行い逆に大損害を受けそれから日本の軍事力は消耗して行き、遂には敗戦の直接の要因となつたのである。とにかく日本國土最初の空襲の日に初めてニシーズン制を採用したフットボールはリーグ戦を行つていたのである。

前年昭和 16 年には総動員下の我國では学生スポーツに対して文部省の次官通達によつて同一県内以外の対抗試合並びに合宿、遠征などの禁止が命令された。夏の全國中等学校野球大会（甲子園）もこの年から中止された。所がこの通達も九月には緩和され「隣接府県の対抗試合のみは認める」と変更されている。

明けて昭和十八年三月二十九日には、文部省体育局は「戦時下学徒体育訓練実施要綱」なるものを通達、戦技を中心とするスポーツの重点種目以外は全て廃止されることになつた。即ち柔道、角力、剣道、銃剣道のようなスポーツは良いが、それ以外の外来スポーツは全て廃止されることになつたのである。野球もラグビーも、そして勿論フットボールも敵性スポーツであると云うことによつて、この通達で廃止される運命になつたのである。

それで日本協会としてもこの通達を受入れなければならなくなり役員会を開催し対策を講ずる必要が生じ、昭和十八年五月二十三日に関東、関西の役員、主将、マネージヤー等を有楽町の東宝地下のパーラーに召集し協議をし、次の六項目の決定を見たのである。

1. アメリカンフットボールと各大学の鎧球部をあくまで存続させるため戦局好転までフットボールは一時休止し、海軍斗球に転向すること。但し全面的に中止すると自然消滅のおそれがあるため、年にニないし三回の試合を行う。
2. 現役学生のみで東西統一ある海軍斗球聯盟を設立する。
3. 海軍斗球研究会を設立（顧問及び幹部に海軍航空隊の佐官級の将校を委任する）すること。
4. 大学海軍斗球部員によつて海軍斗球を中等学校及び実業団に普及させる。
5. 海軍側の依頼により各校ルール改正を研究する。
6. 試合は軍隊式に行う。

以上の項目を決定した。

要するに実体はあくまでもフットボールにあるが外見上は海軍斗球をもつてカモフラージュすると云うことであつた。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ところでこの海軍斗球と云うのはどのようなものであるかと云うと、日本の海軍航空隊が少年航空兵のスポーツとして考案したもので、その発祥は土浦航空隊と云はれている。何故海軍斗球と云うかと云えば、斗球と云う名称は既にラクビー・フットボールが文部省通達により敵性用語の禁止により斗球と名称を変更していたので、それと区別する為に海軍と云う言葉を上につけたのである。要するにこの競技はラクビーとサッカーとフットボールとバスケットボールを混ぜ合せてそれを簡畧化したものと考えればよい。

この海軍斗球の解説を昭和十七年十一月二十一日（土曜日）の朝日新聞に（加納氏と推測される）書いているのでそれを引用して見ると次の様である。

「海鷲創案の闘球航空戦象る必殺競技」と云う見出しで

「無敵海鷲の搖籃、土浦海軍航空隊に豪快奔放、文字通り我が海軍魂を躍如たらしめる新しい球技「斗球」が創案され、十九日同校庭で、やがて大空に羽搏く雛鷲によつて壮烈な競技が行はれた。体操服一枚、紅白の鉢巻に敵味方に分かれた雛鷲がかつての大学ラクビーの名選手、岡倉（立大出）、末弘（東大出）などの予科練習生を交へて赭顔を紅潮させ汗みづくになつて競技場一杯に展開する肉弾戦、捨身の体当りは「総て航空戦を象どつて考案された」といふだけあつて壮型無比、球を抱いて敵陣に殺到するのは、一発必中の爆弾を抱いた爆撃機が敵艦の致命部に必殺の体当たりを決行する気概を現はすものであり、また他の競技員はこれを守る戦斗機であり、身を挺して敵を撃滅する攻撃機の役割を果すもので海鷲魂の育成にうつてつけの競技である。

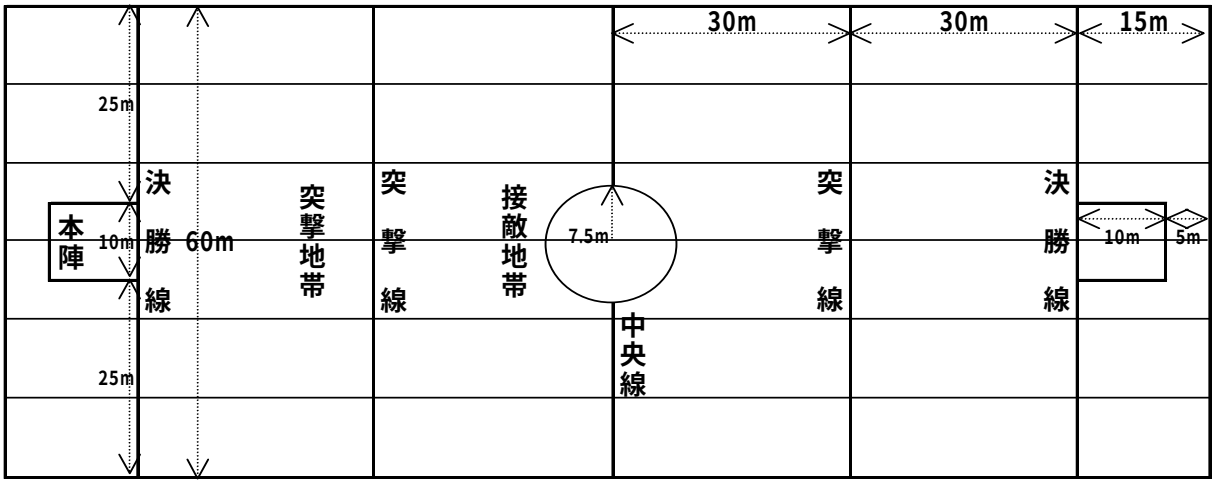
ここに競技の解説を試みる。競技は従来のラクビー、鎧球、蹴球、籠球の長所をとり入れ、これにわが海軍独特の共同聯繋、飽くなき突撃精神を盛つた団体競技である。土浦海軍航空隊体育科がこの斗球を創案した狙ひは、これまでの球技が規則的にも、技術的にもむづかしい点が多く、一般隊員に普及奨励するには幾多の困難が伴ひ、勢い特定のいはゆる選手制にでもよらなければ出来なかつた数点を除き、全隊員が何時でも簡單に試合を楽しみ、逞しき心身練成にいそしむことが出来るやうにといふ集団訓練に重点を置き、更にボール、靴などの革製品の資材難を克服し旺盛な敢斗精神、鉄石の肉体を鍛へ上げようとするにある。

▽競技場=図の如きもので設備は白線で示す。
▽競技員=前衛七名、中衛五名、後衛三名の十五名、増自由。
▽服装=敵味方判ればよい、靴自由。
▽ボール=蹴球用又は送球用を使ふのを例とするがラクビー用でもよい。
▽審判員=主審一、副審（兼線審）二名。
▽競技時間=二十分を標準とする。
▽競技方法=中央円内の中心に球を置き、先蹴側が敵陣に向け「置蹴り」を行ひ試合開始。敵の妨害を排除しつつ首尾よく接敵地帯、突撃地帯を突破し敵側の決勝線上の本陣の地上に手で（両手でも片手でもいい）球をつければ命中球で三点、本陣区割の陣翼地上に球をつければ有効球で一点、得点ごとに再び蹴出しで試合を継続、所定の時間一杯の得点で勝敗を決する。

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

▽競技規則=（イ）接敵地帯では蹴出しと同時に敵味方共球を蹴り、投げ、持つて走ること何れも自由。殊に前方にある味方にもパスすることも出来る。（ロ）相手側の球を持つた者に対し妨害を加へ球を奪ひとることが出来る。妨害は「抱き止め」ることと「体当り」即ち相手側の下肢を両手で抱き倒すラクビーのタックル、または投げ倒してもいい。蹴り、擲り後から押し倒すことだけが出来ない。球を持たぬ相手側の妨害は反則。（ハ）突撃地帯に入ると今度は球を自分より前方の味方に投げ、又は蹴つて渡すことが禁じられる。妨害の範囲が拡大され球を持たぬ相手側に対してでも妨害ができるから一段と活気のある攻防戰が展開される。

競技進行と反則処置=（イ）「置蹴り」の際、相手側は球から七米五〇以内に近づくを許さず。また敵味方とも蹴り出しまで中央線を越えて相手方に侵入できない。反則あれば相手側から蹴り出す。（ロ）混戰状況となるか又は危険を予知される時は、主審は競技を中止、その場で主審投（籠球の開始同様双方一名づつの競技員が、主審が投げ上げた球を叩き落とす）により再開。（ハ）球が側線外に出た時は球を出した相手側が側線外から随意投をする。この場合相手側の決勝線の方向には投げられない。（ニ）接敵地帯は妨害以外に反則はなく、突撃地帯では接敵地帯から進入する際、球を持つて走ることを原則とし、若し接敵地帯で蹴り又は投げた球が突撃線を越えた時は、その場で主審投とする。反則は球を前方の味方に蹴り、投げた場合で、反則は何れも随意投とする。（この場合も前方へ投げることは出来ない）　又側線から出た球は随意投とするが相手側の決勝線の方向には投げられない。大体以上のやうなもので、ひと通り説明を聞けば容易に競技を楽しむことが出来る。この競技がやがて中等学校に、青年学校にそして少し工夫されたら國民学校にも普及され若き青少年の心身練成に役立つ日も遠くはないだらう。”と以上の様に解設をしグラウンドの図面が出でいる、グラウンドは下図の通りである。



要するにラクビー、サッカー、バスケットボール、フットボール等の在来の団体スポーツはルー

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会

ルが困難で仲々初心者には呑み込めないのでこれらを混ぜ合せて簡單なルールを作つて海軍の予科練を主とした若い兵に団体の格斗競技を行はせて心身の鍛練と団結心の養成に役立たせようとしたものであつた。そして土浦を始め海軍の航空隊基地において行はれたのであつた。それ以後民間の大企業においては、20才以下の身体虚弱者に対して、少なくとも徴兵検査時に第二乙種合格兵になるまでの体力作りをする為、健民修練を実施するように政府からの指令があり、各企業は人手の足りない上に製産向上に鞭打たれている時期にこれらの該当者に集合訓練を行はなければならなかつたのであるが、この健民修練の実施課目の中にもこの海軍斗球は他の体操、教練と同様に加えられており、健民修練三ヵ月の合宿訓練の間に数回行はれたのである。

これが終戦と同時に消滅して戦後全々行はれていないのは矢張りスポーツとしての魅力がなかつたことによるものであろう。たしかに戦時中に海軍によつて作られたものであると云う理由もあつて気嫌いされたこともあるのであろうが、それよりはスポーツとしては余りにも單純で面白味に欠けている為に行はれなかつたと見るので正当であろう。スポーツに限らず何でもそうであろうが長い年月をかけ多くの人が実施し、そして改良に改良を重ねて出来たものとそれを眞似て一時的に考案されたものとでは形は似ていてもそれの持つ眞の意義とは全く異質なものであるからである。

この海軍斗球は海軍の一部で行はれたのと一部の民間で行はれたのみであつて陸軍では少年兵の鍛錬用としては全く行はれなかつたのである。海軍と云う名称が付いていたから陸軍では採用しなかつた訳ではないと思うのだが、何か面白い面があるように思はれる。この海軍斗球を行うことを日本鎧球協会において決定したことは前述のような協議の結果であつて、それは表面上のカモフラージュであり各競技者はあくまでフットボールをやりたかつたのであるが、それには外部の圧力もあり又他面には物質欠亡の時代で用具ユニフォーム等も入手出来ないような状態であるので止むを得ず海軍斗球によつて心のうさを晴らしたのである。表面上は海軍斗球の試合をしているように見せていて実際にはフットボールの試合をやつていたこともあるようであつた。

それで各チームは海軍から配布されて来た海軍斗球の規則を研究し又それによつて練習にとりかかつたが、ルールの簡單なこととプレー自体が單純であるので各チーム共簡單にマスターし土浦や津の海軍航空隊の基地に行き海軍との試合を度々行うようになつて海軍との親交が深くなつた。それにはもう一つ食糧不足の時代に海軍の基地に遠征に行くと充分の食物にありつけると云うような利点もあつたからであろう。又海軍の基地に海軍斗球の試合に行つてついでにそこで逆にフットボールのゲームの紹介等も行つたこともあるようである。よく海軍からおこられなかつたものだと思はれるが、海軍と云うところは相当進歩的な所であつて、前にも書いたように昭和九年フットボールが日本に移入される数年前に江田島の海軍兵学校でフットボールを採用すべくアメリカから解説書を取りよせたり、駐米日本大使館武官がアナポリスのアメリカ海軍兵学校に行きフットボールの見学をしたりしていた事実があ

【編集注：服部慎吾氏の記録は、ここで終了している。この後の原稿があったと思われるが、現在、所在不明である。】

以　上

© 2004　日本ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ協会